

京都府遺跡調査概報

第 83 冊

国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

- (1) スガ町古墳群
- (2) 生野内城跡
- (3) 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓
- (4) 浅後谷南遺跡
- (5) 芋野城跡
- (6) 愛宕神社古墳群
- (7) 茶カス古墳群
- (8) 苗代古墳群
- (9) 相之目古墳
- (10) 菩提城跡(菩提東古墳)
- (11) 吉沢城跡
- (12) 天王山古墳群・別荘古墳群・別荘遺跡
- (13) 谷垣古墳群

1 9 9 8

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)愛宕神社1号墳空中写真(北から)



(2)愛宕神社1号墳出土斜縁四獣形鏡

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当調査研究センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、通常の発掘調査成果を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成9年度に実施した発掘調査のうち、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて行った国営農地(スガ町古墳群・生野内城跡・浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓・浅後谷南遺跡・芋野城跡・愛宕神社古墳群・茶カス古墳群・苗代古墳群・相之目古墳・菩提城跡(菩提東古墳)・吉沢城跡・天王山古墳群・別荘古墳群・別荘遺跡・谷垣古墳群)に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、網野町教育委員会・弥栄町教育委員会・峰山町教育委員会・久美浜町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

- | | | |
|-----------------------|-----------|------------------|
| 1. スガ町古墳群 | 2. 生野内城跡 | 3. 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓 |
| 4. 浅後谷南遺跡 | 5. 芋野城跡 | 6. 愛宕神社古墳群 |
| 7. 茶カス古墳群 | 8. 苗代古墳群 | 9. 相之目古墳 |
| 10. 菩提城跡(菩提東古墳) | 11. 吉沢城跡 | |
| 12. 天王山古墳群・別荘古墳群・別荘遺跡 | 13. 谷垣古墳群 | |

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡			農林水産省近畿農政局	
(1) スガ町古墳群	竹野郡網野町生野内	平9.5.12~10.3		村田 和弘
(2) 生野内城跡	竹野郡網野町生野内	平9.11.5~12.17		竹原 一彦
(3) 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓	竹野郡網野町高橋	平9.10.2~平10.2.26		竹原 一彦
(4) 浅後谷南遺跡	竹野郡網野町公庄	平9.10.2~平10.2.26		黒坪 一樹
(5) 芋野城跡	竹野郡弥栄町芋野	平9.5.23~7.1		黒坪 一樹
(6) 愛宕神社古墳群	竹野郡弥栄町堤	平9.4.16~8.6		竹井 治雄
(7) 茶カス古墳群	竹野郡弥栄町吉沢	平9.9.18~平9.12.17		竹井 治雄
(8) 苗代古墳群	中郡峰山町二箇	平9.5.8~8.28		松尾 史子 石尾 政信
(9) 相之目古墳	中郡峰山町二箇	平9.5.8~6.19		石尾 政信
(10) 菩提城跡 (菩提東古墳)	竹野郡弥栄町吉沢	平9.10.13~平10.1.23		村田 和弘
(11) 吉沢城跡	竹野郡弥栄町吉沢	平9.10.27~平10.1.29		石尾 政信
(12) 天王山古墳群・別荘古墳群・別荘遺跡	熊野郡久美浜町鹿野	平9.4.14~10.3 平9.5.1~10.23		増田 孝彦 岡崎 研一
(13) 谷垣古墳群	熊野郡久美浜町永留	平9.7.4~8.26	岡崎 研一	

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

本文目次

国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成9年度発掘調査概要-----	1
はじめに-----	1
位置と環境-----	2
(1) スガ町古墳群-----	4
(2) 生野内城跡-----	29
(3) 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓-----	33
(4) 浅後谷南遺跡-----	41
(5) 芋野城跡-----	45
(6) 愛宕神社古墳群-----	49
(7) 茶カス古墳群-----	64
(8) 苗代古墳群-----	71
(9) 相之目古墳-----	96
(10) 菩提城跡(菩提東古墳)-----	97
(11) 吉沢城跡-----	104
(12) 天王山古墳群・別荘古墳群・別荘遺跡-----	106
(13) 谷垣古墳群-----	159

挿 図 目 次

国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

第1図	調査地点分布図	3
(1) スガ町古墳群		
第2図	調査地周辺遺跡分布図	5
第3図	スガ町古墳群調査区配置図・古墳分布図	6
第4図	B支群内試掘トレンチ平面図	7
第5図	調査第1(左上)・第2(右上)・第3(左下)区地形図	8
第6図	第2区陥穴(左)・第4区炭窯(右)実測図	8
第7図	B-1号墳第1・第2主体部実測図	9
第8図	調査第4区地形図	11
第9図	B-3号墳墳丘断面図	12
第10図	B-3号墳第1(左)・第2(右)主体部実測図	13
第11図	B-3号墳第3主体部実測図	13
第12図	第4区(B-3号墳)炭窯・土坑実測図	14
第13図	調査第5(左)・第6(右)区地形図	15
第14図	B-4号墳墳丘断面図	16
第15図	B-4号墳第1主体部実測図	15
第16図	B-3・4号墳墳頂部断ち割り土層断面図	18
第17図	B-4号墳第2主体部実測図	18
第18図	B-4号墳第3主体部(左)・土坑(右)実測図	19
第19図	C-4号墳墳丘断面図	20
第20図	C-4号墳第1(左上)・第2(右上)・第3主体部(左下)と炭窯1(右下)実測図	21
第21図	丹後半島に存在する断層とスガ町古墳群	23
第22図	郷村断層とスガ町古墳群位置図	24
第23図	断層付近の歪みの楕円体	25
第24図	B-3号墳第2主体部の地震によるズレ	25
第25図	通り古墳群(1)・遠所古墳群(2)位置図	26
第26図	通り2号墳第2主体部	26
第27図	通り3号墳第1・第2主体部	26

(2) 生野内城跡	
第28図	生野内城跡調査地周辺地形図-----29
第29図	調査地点トレンチ配置図-----31
第30図	C-1地点炭窯実測図-----32
(3) 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓	
第31図	弥生遺跡・山城跡分布図-----34
第32図	調査地周辺地形図-----35
第33図	浅後谷南城跡検出遺構平面図-----36
第34図	掘立柱建物跡SB1実測図-----37
第35図	浅後谷南墳墓第1主体部実測図-----38
(4) 浅後谷南遺跡	
第36図	浅後谷南遺跡トレンチ配置図-----41
第37図	流路内出土土器(導水施設より上層)-----42
第38図	導水施設実測図-----43
(5) 芋野城跡	
第39図	芋野城跡調査地位置図-----45
第40図	芋野城跡調査トレンチ配置図-----46
第41図	芋野城跡土師器杯-----47
第42図	第3区トレンチ平面及び土層断面図-----48
(6) 愛宕神社古墳群	
第43図	調査地周辺地形図-----50
第44図	1号・3号墳地形図-----51
第45図	1号墳主体部実測図-----52
第46図	1号墳主体部詳細図-----52
第47図	銅鏡出土状況実測図-----53
第48図	3号墳主体部実測図-----54
第49図	古墳状隆起地点地形図-----55
第50図	中世墓実測図-----55
第51図	1号墳出土鉄刀実測図-----56
第52図	1号墳出土銅鏡実測図(1)-----56
第53図	1号墳出土銅鏡実測図(2)-----57
第54図	出土遺物実測図(1)-----58
第55図	出土遺物実測図(2)-----62
(7) 茶カス古墳群	
第56図	調査地位置図-----64

第57図	9～11号墳地形図	65
第58図	9号墳墳丘断面図	66
第59図	9号墳北・南主体部実測図	67
第60図	10号墳主体部実測図	67
第61図	11号墳主体部実測図	68
第62図	土坑断面実測図	69
第63図	中世墓実測図	69
第64図	出土遺物実測図	70

(8) 苗代古墳群

第65図	調査地及び周辺遺跡分布図	72
第66図	苗代古墳群位置図及びトレンチ配置図	73
第67図	1～5号墳地形測量図	74
第68図	1号墳主体部実測図	75
第69図	S D01断面実測図	75
第70図	S D01出土遺物実測図	76
第71図	2号墳遺構配置図	76
第72図	2号墳第1主体部実測図(1)	77
第73図	2号墳第1主体部実測図(2)	78
第74図	2号墳第2主体部実測図	79
第75図	2号墳第3・第6主体部実測図	80
第76図	2号墳第4主体部実測図	81
第77図	2号墳第5主体部実測図	82
第78図	2号墳第7・第8・第9主体部実測図	84
第79図	3号墳主体部実測図	85
第80図	4号墳・5号墳主体部実測図	86
第81図	6号墳地形測量図	87
第82図	6号墳主体部及びS D02実測図	88
第83図	2号墳第7主体部出土壺棺実測図	89
第84図	2号墳第8・第9主体部出土壺棺実測図	90
第85図	出土遺物実測図(1)	91
第86図	出土遺物実測図(2) 鉄製品・玉類	91
第87図	2号墳主体部主軸別分布図	93
第88図	2号墳出土遺物分布図	94

(9) 相之目古墳

第89図	地形測量・トレンチ配置図	96
------	--------------	----

(10) 菩提城跡(菩提東古墳)	
第90図	調査地及び周辺遺跡分布図-----98
第91図	菩提城跡遺構平面図-----99
第92図	菩提東古墳第1主体部実測図及び出土遺物-----101
(11) 吉沢城跡	
第93図	調査地位置図-----105
(12) 天王山古墳群・別荘古墳群・別荘遺跡	
第94図	調査地及び周辺主要遺跡分布図-----107
第95図	鹿野団地内遺跡分布図-----108
第96図	天王山A支群23号墳測量図-----109
第97図	天王山A支群23号墳主体部実測図-----110
第98図	小型炭窯実測図-----111
第99図	天王山A支群26・27号墳測量図-----111
第100図	土器棺実測図-----112
第101図	天王山A支群27号墳主体部実測図-----113
第102図	天王山A支群27号墳出土遺物実測図-----113
第103図	天王山B支群1・2号墳測量図(調査前)-----114
第104図	天王山B支群1・2号墳測量図(調査後)-----114
第105図	天王山B支群1号墳第1主体部実測図-----115
第106図	天王山B支群1号墳第2主体部実測図-----116
第107図	天王山B支群1号墳墳頂部遺物出土状況-----117
第108図	天王山B支群1号墳出土遺物実測図(1)-----118
第109図	天王山B支群1号墳出土遺物実測図(2)-----119
第110図	天王山B支群1号墳出土遺物実測図(3)-----120
第111図	天王山B支群1号墳出土遺物実測図(4)-----121
第112図	天王山B支群2号墳主体部実測図-----122
第113図	天王山B支群2号墳出土遺物実測図(1)-----122
第114図	天王山B支群2号墳出土遺物実測図(2)-----123
第115図	天王山B支群3・4号墳測量図-----123
第116図	天王山B支群3号墳主体部実測図-----124
第117図	天王山B支群4号墳主体部実測図-----124
第118図	天王山B支群4号墳出土遺物実測図-----125
第119図	天王山B支群8号墳測量図-----125
第120図	天王山B支群8号墳主体部実測図-----126
第121図	天王山B支群8号墳出土遺物実測図-----126

第122図	天王山B支群9・10号墳測量図	127
第123図	別荘古墳群・別荘遺跡主要遺構配置図(1)	129
第124図	別荘古墳群・別荘遺跡主要遺構配置図(2)	130
第125図	別荘古墳群・別荘遺跡主要遺構配置図(3)	131
第126図	別荘古墳群・別荘遺跡主要遺構配置図(4)	132
第127図	別荘1・3号墳測量図	133
第128図	別荘1号墳出土遺物実測図(1)	134
第129図	別荘1号墳出土遺物実測図(2)	135
第130図	別荘2号墳実測図	135
第131図	竪穴式住居跡1・2実測図	137
第132図	竪穴式住居跡1・2出土遺物実測図	138
第133図	掘立柱建物跡1実測図	138
第134図	掘立柱建物跡2・3実測図	139
第135図	掘立柱建物跡4実測図	140
第136図	掘立柱建物跡5実測図	140
第137図	掘立柱建物跡6実測図	141
第138図	鍛冶工房跡内遺構配置図	142
第139図	掘立柱建物跡7・8実測図	143
第140図	掘立柱建物跡9実測図	144
第141図	掘立柱建物跡10実測図	145
第142図	掘立柱建物跡11実測図	146
第143図	掘立柱建物跡12実測図	146
第144図	掘立柱建物跡13実測図	147
第145図	掘立柱建物跡14実測図	148
第146図	鍛冶炉実測図	148
第147図	井戸・溝1実測図	149
第148図	火葬墓実測図	150
第149図	別荘遺跡出土遺物実測図(1)	151
第150図	別荘遺跡出土遺物実測図(2)	152
第151図	別荘遺跡出土遺物実測図(3)	153
第152図	別荘遺跡出土遺物実測図(4)	154
第153図	別荘遺跡出土遺物実測図(5)	156
第154図	蔵骨器実測図	156
(13) 谷垣古墳群		
第155図	調査地及び周辺主要遺跡分布図	159

第156図	古墳配置図-----	160
第157図	谷垣1・2号墳測量図-----	161
第158図	谷垣1号墳主体部実測図-----	162
第159図	経塚実測図-----	162
第160図	出土遺物実測図(1)-----	163
第161図	出土遺物実測図(2)-----	163

付 表 目 次

国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

付表1	平成9年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表-----	1
	(1) スガ町古墳群	
付表2	埋葬施設規模一覧表-----	22
付表3	埋葬施設方位一覧表-----	22
	(3) 浅後谷南城跡	
付表4	浅後谷南墳墓埋葬主体部一覧表-----	40
	(6) 愛宕神社古墳群	
付表5	愛宕神社1号墳出土玉類観察表-----	59
	(8) 苗代古墳群	
付表6	苗代古墳群検出遺構一覧表-----	91
	(12) 天王山古墳群・別荘古墳群・別荘遺跡	
付表7	天王山B支群1号墳第1主体部出土玉製品一覧表-----	121
付表8	天王山古墳群規模一覧表-----	127
付表9	別荘1号墳出土玉製品一覧表-----	134
	(13) 谷垣古墳群	
付表10	谷垣1号墳出土玉製品一覧表-----	163

図 版 目 次

国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

(1) スガ町古墳群

- 図版第1 (1)スガ町古墳群遠景(南から) (2)第2区調査前(北から)
(3)第3区調査前(北から)
- 図版第2 (1)第4区調査前全景(北から)
(2)第4区南側調査前地震痕跡(北から)
(3)第5区調査前地震痕跡(北から)
- 図版第3 (1)第6区調査前全景(北東から) (2)B支群試掘トレンチ(南から)
(3)第4区調査風景(南から)
- 図版第4 (1)第2区調査風景(南から)
(2)第4区南側地割れ内調査風景(北から) (3)第4区北側遠景(南から)
- 図版第5 (1)B-1号墳全景(垂直、右が北)
(2)B-3号墳全景(垂直、右が北)
- 図版第6 (1)B-4号墳全景(垂直、上が北)
(2)C-4号墳全景(垂直、右が北)
- 図版第7 (1)第2区陥穴(東から) (2)第4区北側炭窯(西から)
- 図版第8 (1)B-1号墳第1・第2主体部(東から)
(2)B-3号墳第1主体部(北から)
- 図版第9 (1)B-3号墳第2主体部(東から)
(2)B-3号墳第2主体部と地割れ(南から)
- 図版第10 (1)B-3号墳炭窯1(西から) (2)B-3号墳炭窯2(西から)
- 図版第11 (1)B-3号墳炭窯3(南東から) (2)B-3号墳土坑1(西から)
- 図版第12 (1)B-4号墳第1主体部(東から)
(2)B-4号墳第2主体部(北東から)
- 図版第13 (1)B-4号墳第3主体部(西から) (2)B-4号墳土坑(東から)
- 図版第14 (1)C-4号墳第1主体部(南から)
(2)C-4号墳第2主体部(南から)
- 図版第15 (1)C-4号墳第3主体部(南から) (2)C-4号墳北東斜面炭窯群(北東から)
- 図版第16 (1)B-3号墳墳頂部断ち割り(南から)
(2)B-4号墳墳頂部断ち割り(南東から)

図版第17 (1) B-3号墳断ち割り断面(南から) (2) B-3号墳墳頂部地震痕跡(南から)
(3) B-3号墳第2主体部地震痕跡(南から)

図版第18 (1) B-4号墳断ち割り断面(南から) (2) B-4号墳東側地震痕跡(北から)
(3) B-4号墳西側地震痕跡(北から)

(2) 生野内城跡

図版第19 (1) A地点調査前全景(南東から) (2) A地点調査地全景(南東から)
(3) B地点調査前全景(南西から)

図版第20 (1) B地点調査地全景(南西から) (2) D地点調査前全景(南西から)
(3) D地点調査地全景(北東から)

図版第21 (1) C地点調査前全景(北東から) (2) C地点第1トレンチ全景(南から)
(3) C地点第1トレンチ炭窯(南から)

図版第22 (1) E地点調査前全景(北から) (2) E地点調査地全景(北から)
(3) E地点第5トレンチ地震痕跡(北から)

(3) 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓

図版第23 (1) 調査地遠景(南から) (2) 調査前調査地全景(北東から)
(3) 城跡施設調査風景(北東から)

図版第24 浅後谷南城跡施設全景(右下が北)

図版第25 (1) 弥生時代墳墓第1主体部(北西から)
(2) 第1主体部副葬品出土状況(南西から)
(3) 第1主体部玉類出土状況(南東から)

図版第26 (1) 第1主体部埋土断面(南東から)
(2) 第1主体部木棺痕跡検出状況(南西から)
(3) 第1主体部南東部木棺裏込め土・断ち割り断面(南西から)

図版第27 (1) 第2主体部(南東から) (2) 第2主体部副葬品出土状況(南西から)
(3) 第2主体部東南部埋土断面(南西から)

図版第28 (1) 第4主体部(南西から) (2) 第4主体部ガラス製勾玉出土状況(北西から)
(3) 第9主体部(南西から)

(4) 浅後谷南遺跡

図版第29 (1) 第7トレンチ導水施設検出状況(東から)
(2) 同・堰止め部検出状況(東から)

図版第30 (1) 導水施設本体部分(1)(北東から) (2) 導水施設本体部分(2)(北から)
(3) 導水施設本体部分(3)(北西から)

図版第31 (1) 第3トレンチ流路跡検出状況(北から)
(2) 第3トレンチ流路内・土器溜まり検出状況(北東から)
(3) 第3トレンチ流路内・土器溜まり検出状況(垂直、アップ)

(5) 芋野城跡

- 図版第32 (1) 芋野城跡全景(北から) (2) 第2区調査前(南西から)
(3) 第2区頂部掘削状況(南西から)
- 図版第33 (1) 第1区調査前(東から) (2) 第1区頂部掘削状況(西から)
(3) 第1区尾根部掘削状況(北西から)
- 図版第34 (1) 第3区調査前(北西から) (2) 第3区頂部～裾部掘削状況(北西から)
(3) 第3区土層断面(北から)

(6) 愛宕神社古墳群

- 図版第35 (1) 調査地全景(東から) (2) 調査地全景(北から)
(3) 愛宕神社1号墳全景(北から)
- 図版第36 (1) 1号墳全景(北から) (2) 1号墳主体部(南から)
- 図版第37 (1) 1号墳主体部主室北側(南から)
(2) 1号墳主体部主室南側小口部分(南から)
(3) 1号墳主体部主室内銅鏡出土状況(北から)
- 図版第38 (1) 3号墳主体部(南から) (2) 中世墓(西から)
- 図版第39 (1) 3号墳主体部棺外鉄鏃出土状況(上が北)
(2) 3号墳主体部棺内鉄剣出土状況(南東から)
(3) 3号墳主体部棺内鉄製鋤先・鉤出土状況(下が北)
- 図版第40 (1) 1号墳主体部断面(北から) (2) 3号墳主体部遺物出土状況(南から)
(3) 中世墓遺物出土状況(左が北)
- 図版第41 出土遺物(1) 1号墳四獣形鏡
- 図版第42 出土遺物(2) 玉類(上:勾玉・管玉、下:ガラス小玉)
- 図版第43 出土遺物(3)
- 図版第44 出土遺物(4)

(7) 茶カス古墳群

- 図版第45 (1) 調査地全景(北から) (2) 調査地全景(下が北)
- 図版第46 (1) 9・10号墳調査前(南から) (2) 9号墳主体部(西から)
- 図版第47 (1) 10号墳主体部(東から) (2) 11号墳主体部(北から)
- 図版第48 (1) 中世墓(北から) (2) 10号墳溝内遺物出土状況(下が北)
(3) 11号墳溝内遺物出土状況(下が北)
- 図版第49 (1) 10号墳墳頂部西断面(北から) (2) 9・10号墳間溝断面(西から)
(3) 9号墳南斜面断面(西から)
- 図版第50 (1) 中世墓断面(東から) (2) 9号墳東裾土坑断面(南から)
(3) 出土遺物 上:11号墳溝、下:10号墳溝

(8) 苗代古墳群

- 図版第51 (1) 調査地全景・調査前(北東から) (2) 調査地全景(北東から)
- 図版第52 (1) 1号墳主体部(西から) (2) 1号墳主体部土層断面(南から)
(3) 2号墳全景(遠方に途中ヶ丘遺跡を望む、西から)
- 図版第53 (1) 2号墳第1主体部棺内完掘状況(東から)
(2) 2号墳第1主体部完掘状況(東から) (3) 棺掘形土層断面(西から)
(4) 勾玉出土状況(北から) (5) 鉢出土状況(西小口、東から)
(6) 鉢出土状況(東小口、東から)
- 図版第54 (1) 2号墳第2主体部棺掘形検出状況(東から)
(2) 2号墳第2主体部完掘状況(東から)
(3) 2号墳第2主体部棺掘形土層断面(東から)
- 図版第55 (1) 2号墳第3・第6主体部完掘状況(東から)
(2) 2号墳第3・第6主体部棺掘形検出状況(西から)
(3) 2号墳第3・第6主体部土層断面(東から)
- 図版第56 (1) 2号墳第4主体部検出状況(西から)
(2) 2号墳第4主体部完掘状況(西から)
(3) 2号墳第5主体部棺掘形検出状況(南から)
(4) 2号墳第5主体部完掘状況(南から)
- 図版第57 (1) 2号墳第7主体部検出状況(南から)
(2) 2号墳第7主体部土層断面(北から)
(3) 2号墳第7主体部完掘状況(南から)
- 図版第58 (1) 2号墳第8主体部壺棺(南西から)
(2) 2号墳第8主体部壺棺内部(北東から)
(3) 2号墳第8主体部完掘状況(南西から)
- 図版第59 (1) 2号墳第9主体部壺棺(北から) (2) 2号墳第9主体部壺棺内部(北から)
(3) 2号墳第9主体部完掘状況(北東から)
- 図版第60 (1) 3号墳主体部完掘状況(北から) (2) 4号墳主体部完掘状況(南から)
(3) 5号墳主体部完掘状況(南から)
- 図版第61 (1) C・D地区試掘トレンチ全景(北から)
(2) C・D地区試掘トレンチ近景(南から)
(3) 6号墳主体部完掘状況(南から)
- 図版第62 (1) S D01完掘状況(南東から) (2) S D01土層断面(南東から)
(3) S D02土層断面(西から)
- 図版第63 出土遺物(1)
(1) 鉄製鉢 (2) 玉類 (3) 2号墳第7主体部壺棺

図版第64 出土遺物(2)

(9) 相之目古墳

- 図版第65 (1) 調査前風景(北西から) (2) トレンチ掘削状況(北西から)
(3) トレンチ西壁断面(北東から)

(10) 菩提城跡(菩提東古墳)

- 図版第66 (1) 調査地全景(垂直、右が北) (2) 調査前風景(南から)
(3) 調査風景(南から)
- 図版第67 (1) 遺構検出作業風景(北から) (2) 頂部平坦地全景(南西から)
(3) 菩提東古墳南西斜面第1主体部調査風景(北から)
- 図版第68 (1) 菩提東古墳第1主体部(南から)
(2) 菩提東古墳第1主体部(南から)
(3) 菩提東古墳東側テラス第2・第3主体部(北東から)

(11) 吉沢城跡

- 図版第69 (1) A地区調査前風景(東から) (2) A地区掘切溝(東から)
(3) A地区埋葬主体部検出状況(北東から)
- 図版第70 (1) C地区調査前風景(北西から)
(2) C地区トレンチ掘削状況(北西から)
(3) B地区調査前風景(北西から)

(12) 天王山古墳群・別荘古墳群・別荘遺跡

- 図版第71 (1) A支群23号墳遠景(北東から) (2) A支群23号墳主体部近景(東から)
(3) 小型炭窯近景(東から)
- 図版第72 (1) A支群26・27号墳遠景(東から) (2) A支群26号墳周溝近景(北から)
(3) 土器棺近景(南から)
- 図版第73 (1) A支群27号墳全景(南から) (2) A支群27号墳主体部近景(北東から)
- 図版第74 (1) B支群1・2号墳空中写真(南西から) (2) B支群1号墳近景(南東から)
- 図版第75 (1) B支群1号墳主体部検出状況(南南東から)
(2) B支群1号墳第2主体部近景(南東から)
(3) B支群1号墳第1主体部近景(南東から)
- 図版第76 (1) B支群1号墳主体部全景(南東から)
(2) B支群1号墳主体部全景(南東から)
- 図版第77 (1) B支群1号墳土器群近景(南東から)
(2) B支群1号墳棺上遺物近景(南東から)
(3) B支群1号墳棺内遺物近景(南西から)
- 図版第78 (1) B支群2号墳全景(北西から) (2) B支群2号墳主体部近景(北西から)
(3) B支群2号墳主体部内遺物出土状況(北東から)

- 図版第79 (1) B支群1・2号墳遠景(南西から) (2) B支群3・4号墳遠景(南西から)
- 図版第80 (1) B支群3号墳主体部近景(北東から) (2) B支群4号墳主体部近景(南から)
- 図版第81 (1) B支群8・9・10号墳全景(北東から)
(2) B支群8号墳主体部近景(北西から)
- 図版第82 調査地全景(西から)
- 図版第83 (1) 1・3号墳、竪穴式住居跡付近空中写真(真上から)
(2) 鍛冶工房跡付近空中写真(真上から)
- 図版第84 (1) 1号墳全景(南西から) (2) 1号墳遺物出土状況(北から)
- 図版第85 (1) 2号墳全景(北西から) (2) 五輪塔出土状況(南南西から)
- 図版第86 (1) 3号墳周溝近景(東から)
(2) 3号墳陸橋部及び掘立柱建物跡1近景(南から)
- 図版第87 (1) 3号墳周溝内堆積状況(西から) (2) 4号墳周溝近景(北東から)
- 図版第88 (1) 竪穴式住居跡近景(南西から) (2) 竪穴式住居跡近景(北から)
- 図版第89 (1) 鍛冶工房跡全景(東から) (2) 鍛冶工房跡全景(西から)
- 図版第90 (1) 鍛冶炉近景(北から) (2) 鍛冶炉近景(北から)
(3) 鍛冶炉半掘状況(北から)
- 図版第91 (1) 鍛冶工房跡東側近景(北から) (2) 井戸・溝1近景(北西から)
- 図版第92 (1) 井戸近景(北から) (2) 井戸内堆積状況(北から)
- 図版第93 (1) 掘立柱建物跡6近景(東から) (2) 掘立柱建物跡6近景(南から)
- 図版第94 (1) 掘立柱建物跡5近景(北から) (2) 掘立柱建物跡2・3近景(東から)
- 図版第95 (1) 火葬墓検出状況(北西から) (2) 火葬墓半掘状況(北西から)
(3) 火葬墓完掘状況(西から)
- 図版第96 (1) 竪穴式住居跡内遺物出土状況(西から)
(2) 鍛冶工房跡内遺物出土状況(北から) (3) 土坑1近景(南から)
- 図版第97 出土遺物(1)
- 図版第98 出土遺物(2)
- 図版第99 出土遺物(3)
- 図版第100 出土遺物(4)
- 図版第101 出土遺物(5)
- 図版第102 出土遺物(6)
- 図版第103 出土遺物(7)
- 図版第104 (1) 出土遺物(8) (2) 出土遺物(9)
- 図版第105 出土遺物(10)
- 図版第106 出土遺物(11)
- 図版第107 出土遺物(12)

図版第108 出土遺物(13)

(13)谷垣古墳群

図版第109 (1) 1号墳全景(北東から) (2) 1号墳全景(北東から)

図版第110 (1) 1号墳主体部近景(南から)

(2) 1号墳主体部内遺物出土状況(南から)

図版第111 (1) 1号墳主体部上面土器出土状況(西から)

(2) 経塚検出状況(北東から) (3) 外容器埋納状況(北東から)

図版第112 出土遺物

国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡 平成9年度発掘調査概要

はじめに

本概要報告は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している、丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)に伴い、平成9年度に発掘調査を実施した遺跡の調査概要である。

平成9年度の各遺跡の調査は、農林水産省近畿農政局丹後開拓建設事業所の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。調査した遺跡は、国営東部関係遺跡が竹野郡網野町に所在するスガ町古墳群・生野内城跡・浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓・浅後谷南遺跡と、同郡弥栄町愛宕神社古墳群・芋野城跡・茶カス古墳群・吉沢城跡・菩提城跡(菩提東古墳)、中郡峰山町苗代古墳群・相ノ目古墳である。この内、浅後谷南遺跡、吉沢城跡、菩提城跡については調査途中であり、略報にとどめ、後日概要報告を行う予定である。また、国営西部関係遺跡は、熊野郡久美浜町に所在する天王山古墳群、谷垣古墳群、別荘古墳群、別荘遺跡である。

今年度の国営東部関係遺跡の現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富、同主任調査員竹原一彦、同主査調査員竹井治雄・石尾政信・黒坪一樹、同調査員河野一隆・村田和弘・松尾史子の8名が担当した。また、国営西部関係遺跡の現地調査は、同調査第2係長辻本和美、同主任調査員増田孝彦、同主査調査員岡崎研一の3名が担当した。なお、本概要報告の執筆は、各遺跡の調査担当者がそれぞれ分担した。

調査期間中、猛暑・酷寒の中、地元有志の方がたや学生諸氏には、作業員・補助員・整理員として作業に従事していただいた^(注1)。また、調査にあたっては、京都府教育委員会・網野町教育委員会・弥栄町教育委員会・峰山町教育委員会・久美浜町教育委員会をはじめとする関係諸機関のご協力を得られ、現地でも多くの方がたのご協力とご指導を賜った。改めて感謝の意を表したい。

なお、発掘調査に係る経費は、全額農林水産省近畿農政局が負担した。

(伊野近富)

付表1 平成9年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	面積m ²	調査期間	担当者
1	スガ町古墳群	京都府竹野郡網野町生野内	2,500	平成9年5月12日～平成9年10月3日	調査第1係長 伊野近富 調査員 村田和弘
2	生野内城跡	京都府竹野郡網野町生野内	180	平成9年11月5日～平成9年12月17日	調査第1係長 伊野近富 主任調査員 竹原一彦
3	浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓	京都府竹野郡網野町高橋	350	平成9年10月2日～平成10年2月26日	調査第1係長 伊野近富 主任調査員 竹原一彦
4	浅後谷南遺跡	京都府竹野郡網野町公庄	640	平成9年10月2日～平成10年2月26日	調査第1係長 伊野近富 主査調査員 黒坪一樹
5	芋野城跡	京都府竹野郡弥栄町芋野	1,200	平成9年5月23日～平成9年7月1日	調査第1係長 伊野近富 主査調査員 黒坪一樹

6	愛宕神社古墳群	京都府竹野郡弥栄町堤	2,200	平成9年4月16日～ 平成9年8月6日	調査第1係長 伊野近富 主査調査員 竹井治雄
7	茶カス古墳群	京都府竹野郡弥栄町吉沢	570	平成9年9月18日～ 平成9年12月17日	調査第1係長 伊野近富 主査調査員 竹井治雄 調査員 河野一隆
8	苗代古墳群	京都府中郡峰山町二箇	750	平成9年5月8日～ 平成9年8月28日	調査第1係長 伊野近富 主査調査員 石尾政信 調査員 松尾史子
9	相之目古墳	京都府中郡峰山町二箇	70	平成9年5月8日～ 平成9年6月19日	調査第1係長 伊野近富 主査調査員 石尾政信
10	菩提城跡 (菩提東古墳)	京都府竹野郡弥栄町吉沢	460	平成9年10月13日～ 平成10年1月23日	調査第1係長 伊野近富 調査員 村田和弘
11	吉沢城跡	京都府竹野郡弥栄町吉沢	650	平成9年10月27日～ 平成10年1月29日	調査第1係長 伊野近富 主査調査員 石尾政信 調査員 村田和弘
12	天王山古墳群	京都府熊野郡久美浜町鹿野	1,000	平成9年4月14日～ 平成9年10月3日	調査第2係長 辻本和美 主任調査員 増田孝彦 主査調査員 岡崎研一
13	別荘古墳群・別 荘遺跡	京都府熊野郡久美浜町鹿野	5,000	平成9年5月1日～ 平成9年10月23日	調査第2係長 辻本和美 主任調査員 増田孝彦
14	谷垣古墳群	京都府熊野郡久美浜町永留	500	平成9年7月4日～ 平成9年8月26日	調査第2係長 辻本和美 主査調査員 岡崎研一

位置と環境

国営東部・西部関係の発掘調査は、今年度14遺跡であった。この項では、これらの遺跡に関わる位置と環境について述べてみたい。

今回調査対象になった地点を水系ごとに分けると、福田川水系、竹野川水系、鱒留川水系、佐野谷川水系である。まず、福田川水系は河口近くになると八丁浜や潟湖を擁し、日本海側最大級の前方後円墳である銚子山古墳が築かれている。この水系の中流域に網野町浅後谷南城跡、浅後谷南遺跡、生野内城跡、スガ町古墳群がある。この地での発掘調査は、それほど多くなく、生野内大谷古墳群の調査(古墳3基で木棺跡は4基、出土遺物は須恵器・鉄剣・鎌など。古墳時代中期から後期)や、十王堂遺跡の調査(縄文時代中期末の甕を使用した墓1か所)などがある。

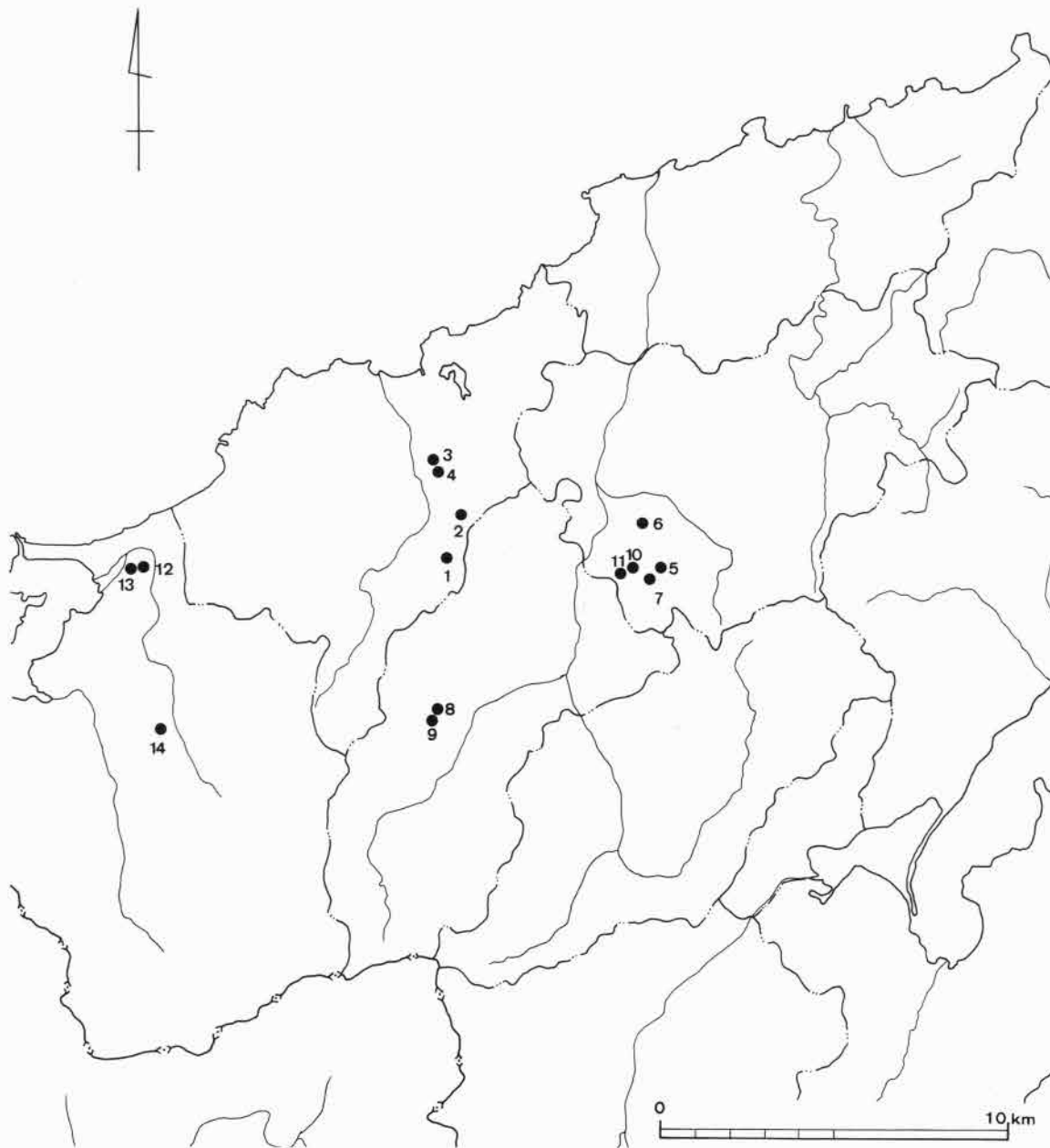
なお、昭和2(1927)年に丹後地方を襲った大地震の際には、郷の地に断層が走り、その跡は昭和4年に国の天然記念物に指定されている。

次に、竹野川水系では、河口に近いところは、かつて潟湖があったとされ、そのほとりに、これも日本海側最大級の前方後円墳である神明山古墳が築かれている。今回の調査地は中流域にあり、遺跡名としては愛宕神社古墳群、芋野城跡、茶カス古墳群、吉沢城跡、菩提城跡である。これらは竹野川の東岸にある遺跡であるが、対岸丘陵地には青龍3(235)年銘の鏡が出土した大田南5号墳や、後漢鏡が出土した同2号墳などがある。また、北方には陶質土器・初期須恵器や銅釘など大陸系の遺物が出土した奈具岡北1号墳、鏡が出土した溝谷古墳などがあり、古墳時代前期から中期にかけて、発掘の資料が増えつつある地である。また、城関係もシミズ谷城跡の調査によって、戦国時代の土豪の城の一端が明らかとなっている。愛宕神社古墳群は、平成8年度に弥栄町教育委員会によって試掘調査され、新たに古墳と確認された遺跡である。調査前は城跡と考えられていた。芋野城跡や吉沢城跡は以前から知られていた城跡の隣接地であり、城の本体

部分の調査ではない。

次に、鱒留川水系は竹野川に注ぐ支流であり、この周辺には乙姫伝説で有名な磯砂山^{いさなご}や真名井の伝承地などがある。今回の調査地は苗代古墳群と相ノ目古墳である。苗代古墳群は調査の結果、古墳時代前期の古墳群であることが判明した。これにやや先行する遺跡の調査としては、金谷1号墳の調査があり、1墳丘に実に17主体部という多数の埋葬施設が検出された。なお、主体部で確認されたものは舟形木棺6、箱形木棺9であり、舟形木棺の多さでも注目すべき遺跡である。

次に、佐野谷川水系では、その中流域で発掘調査が進んできている。古墳時代前期としては北谷1号墳があり、碧玉製紡錘車形石製品などが出土した。河口付近には国史跡函石浜遺跡があり、中国の新しい王莽の貨幣である貨泉が出土している。(伊野近富)



第1図 調査地点分布図(番号は付表1番号に同じ)

(1) スガ町古墳群

1. はじめに

スガ町古墳群は、京都府竹野郡網野町大字生野内小字岸ヶ谷に所在する。ここは、網野町内を南から北へ流れる福田川上流域にあたり、峰山町との境界に位置する生野内集落の北西方向の丘陵上に位置している。また、この古墳群の西方向には郷集落が存在する。この地域は、周辺の丘陵に、多数の中世の山城が築かれているようで、古くから交通の要衝であったと考えられている。現在、網野町の市街地と峰山町の市街地を結ぶ主要地方道網野峰山線と北近畿丹後鉄道宮津線(KTR)が走り、現在も重要な交通の要衝である。今回の調査地は、その道路と線路より南側の丘陵上に位置している。

今回の調査地周辺は、1927(昭和2)年にマグニチュード7.4の丹後大地震によって生じた郷村断層が北西方向に走っている。郷村断層は、生野内地区・郷地区・高橋地区の3地区で保存され、国指定の天然記念物に指定されている。周辺の遺跡として、生野内地内には、国営農地郷3団地の造成に伴って京都府教育委員会が調査した生野内大谷古墳群や生野内古墳・生野内南古墳群がある。北側の丘陵には、竹倉部古墳・目切古墳群・公庄小谷古墳などがある。その他、郷城跡、生野内城跡(A・B・C)、竹倉部城跡などの山城が存在するなど、遺跡が数多く密集する地域である(第2図)。

2. 調査経過

今回の調査地は、周知の遺跡であるスガ町古墳群が所在する丘陵の東隣りの尾根筋にあたるため、網野町教育委員会と協議し、一連の古墳群と判断し、スガ町古墳群の遺跡対象範囲をひろげ、谷筋によって丘陵の尾根をそれぞれの支群に分けた。今回の調査対象地となる二つの尾根の西側の尾根をB支群、東側の尾根をC支群と名付け発掘調査を実施した。

B支群と名付けた調査対象地内には、分布調査によって、9基の古墳状隆起が確認されているため、それらの古墳状隆起を範囲に含めて、調査区を5つの地区(第1～5区)に分けて設定した。また、C支群の調査対象地内には、1基の古墳状隆起が存在している。その古墳状隆起を第6区とし、発掘調査を実施した。設定した調査区は、B支群内では、第1・3区は尾根の先端部にあり、第2区は尾根の中腹の平坦地、第4区は丘陵頂部とそこからのびるゆるやかな傾斜部、第5区は第4区の南側の丘陵頂部に設定した。また、C支群は丘陵頂部に設定した。B支群とC支群をあわせて、調査区を合計6区設定し、調査を開始した(第3・5・8・13図)。

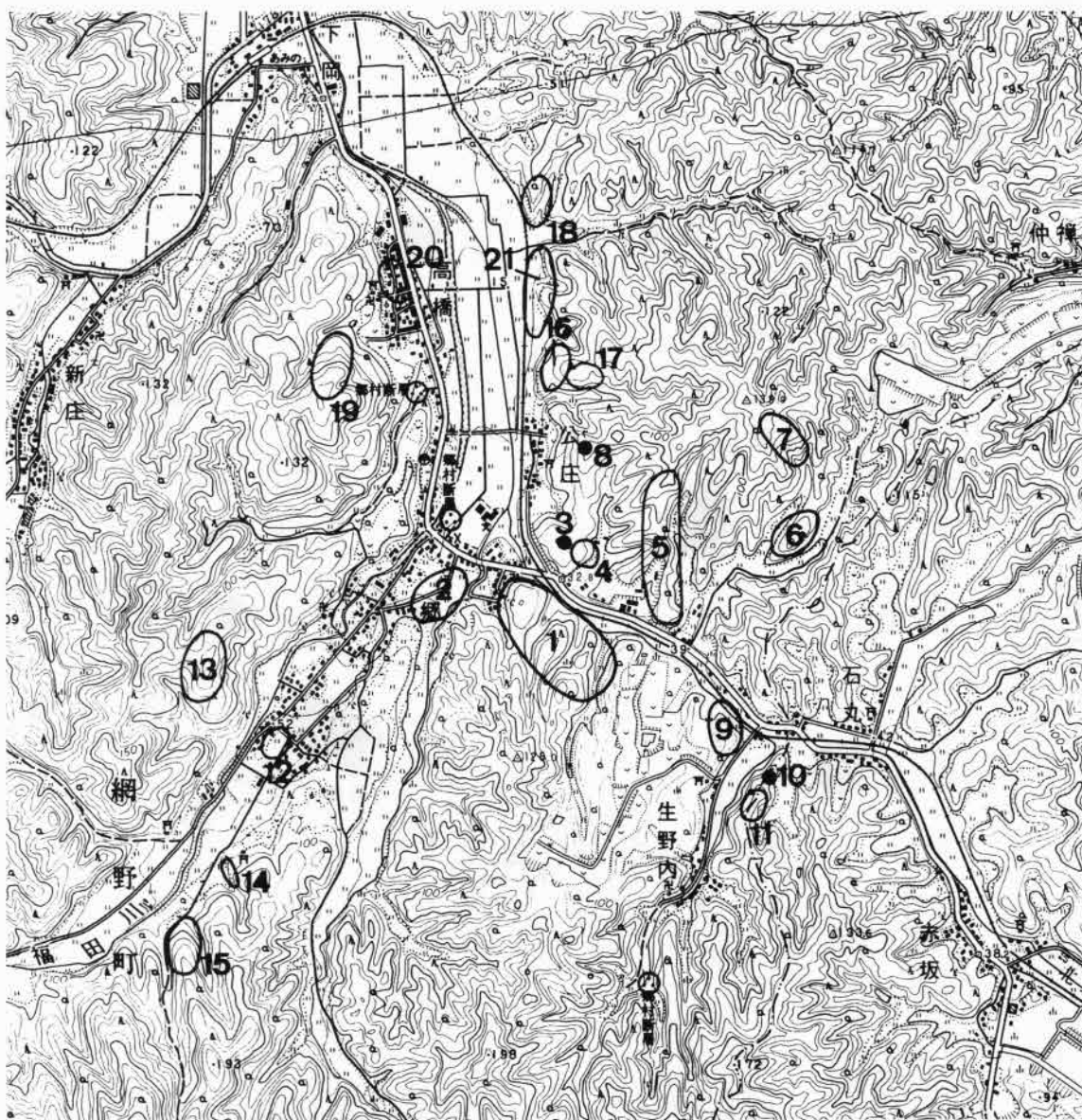
当初、調査対象地内には、合計10基の古墳状隆起が存在すると想定されていた。しかし、表土を剥いで遺構検出などの発掘作業を進めていく段階で、埋葬施設を検出し、古墳と判断したのは、10基のうち4基であった。古墳が確認できなかったその他の調査区では、地点によっては希薄で

はあるが遺構を検出した。そして、古墳と判断したものについて、網野町教育委員会と協議し支群ごとに古墳番号を与え調査を進めた(第3図)。

3. 調査概要

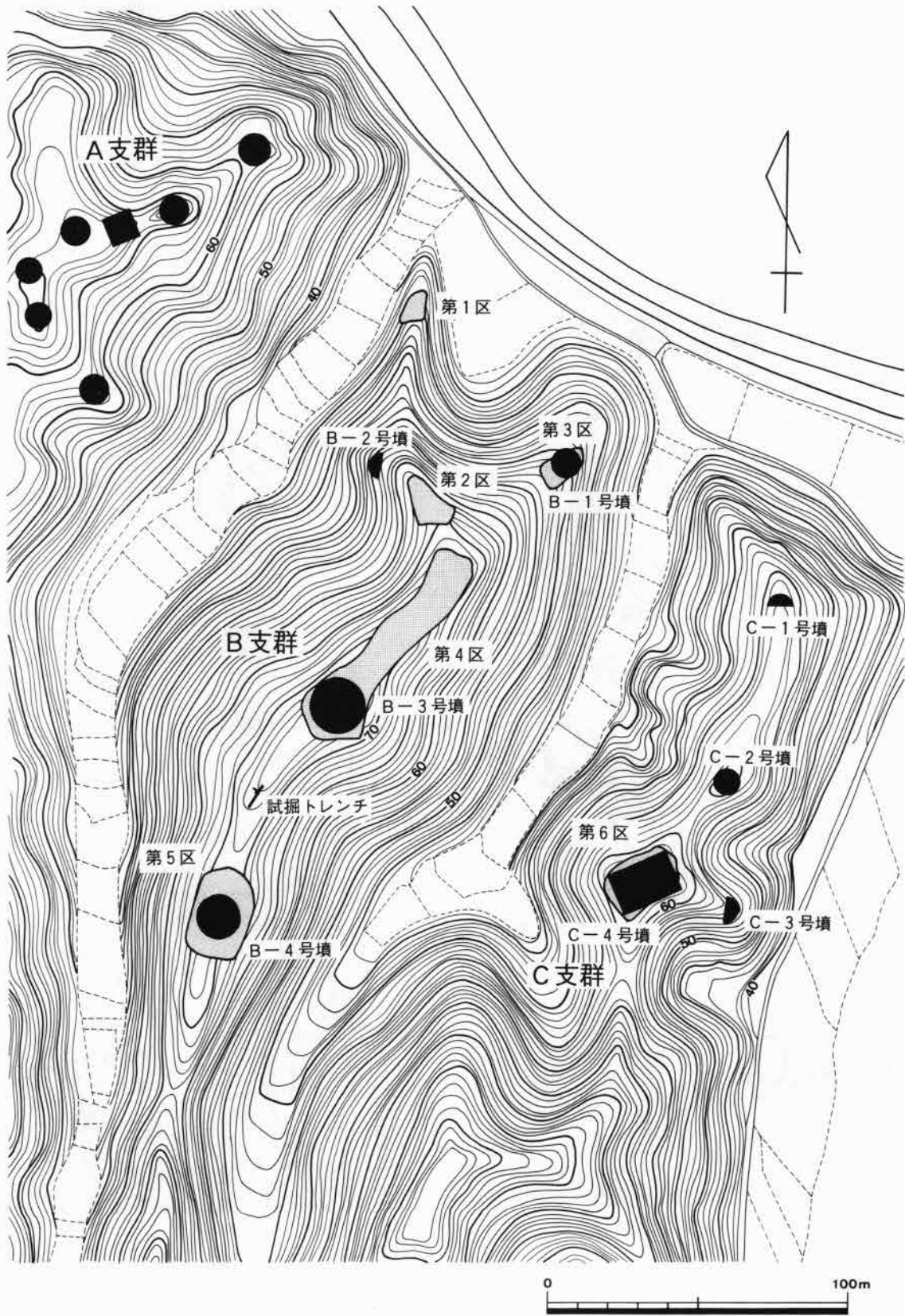
B支群では、第1～5区で調査し、第3～5区で合計3基の古墳を確認した。それぞれ1号墳・3号墳・4号墳と名付け、調査を継続した。なお、2号墳については、古墳状隆起が調査対象外に存在するため、古墳番号を与えたのみで、今回は発掘調査を実施していない。

また、調査が進み、B支群の3号墳と4号墳を古墳であると確認したことから、3号墳と4号



第2図 調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

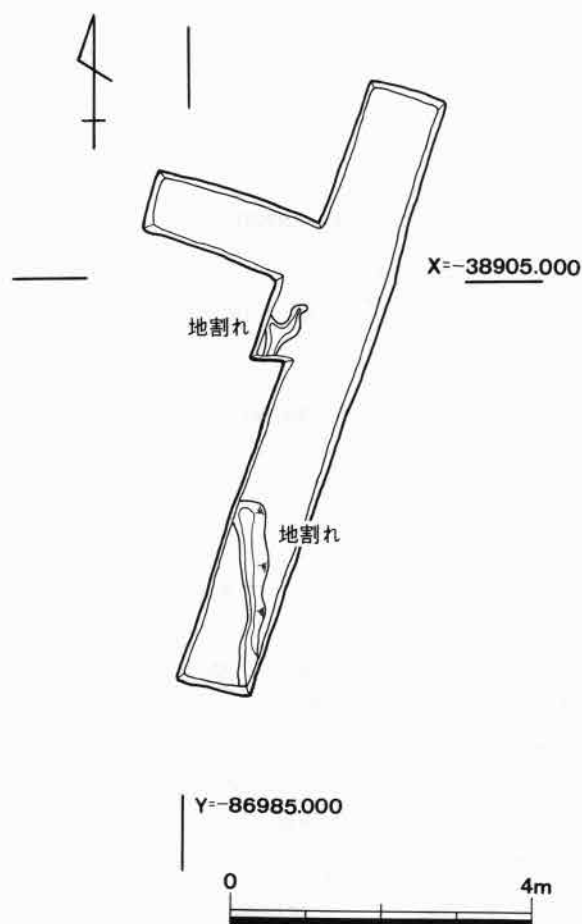
- | | | | | |
|------------|------------|------------|--------------|-----------|
| 1. スガ町古墳群 | 2. 十王堂遺跡 | 3. 竹倉部古墳 | 4. 竹倉部城跡 | 5. 生野内A城跡 |
| 6. 生野内B城跡 | 7. 目切古墳群 | 8. 公庄小谷古墳 | 9. 大谷古墳群 | 10. 生野内古墳 |
| 11. 生野内C城跡 | 12. 永嶋遺跡 | 13. 船山城跡 | 14. 大字賀神社南窯跡 | 15. 立山古墳群 |
| 16. 公庄城跡 | 17. 宮ヶ谷古墳群 | 18. 浅後谷南城跡 | 19. 青谷古墳群 | 20. 高橋遺跡 |
| 21. 浅後谷南遺跡 | | | | |



第3図 スガ町古墳群調査区配置図・古墳分布図

墳との間の丘陵頂部に存在する古墳状隆起に、古墳の可能性がでてきた。そのため、頂部平坦地に小規模な試掘トレンチを設定し、調査を行うこととなった。平坦地に、南北方向に長い試掘トレンチを設定し掘削を行ったが、現地表面から約0.2mで地震による小さな亀裂を1条検出したのみで、墓壙などの古墳に関連する遺構は検出できず、古墳の可能性は低いと判断した(第4図)。

C支群は、B支群の東側にある丘陵にあたる。C支群には4基の古墳状隆起が確認されている。今回は、南側の古墳状隆起1基について調査することとなり第6区とした。また古墳と確認してからは、4基の古墳状隆起に、北側から順に古墳番号を与えた。今回の調査対象の古墳は、4号墳と名付け調査した。



第4図 B支群内試掘トレンチ平面図

次に、第1区～第6区のそれぞれの調査概要と、その調査区で確認した古墳及び検出遺構についての調査概要を報告する。

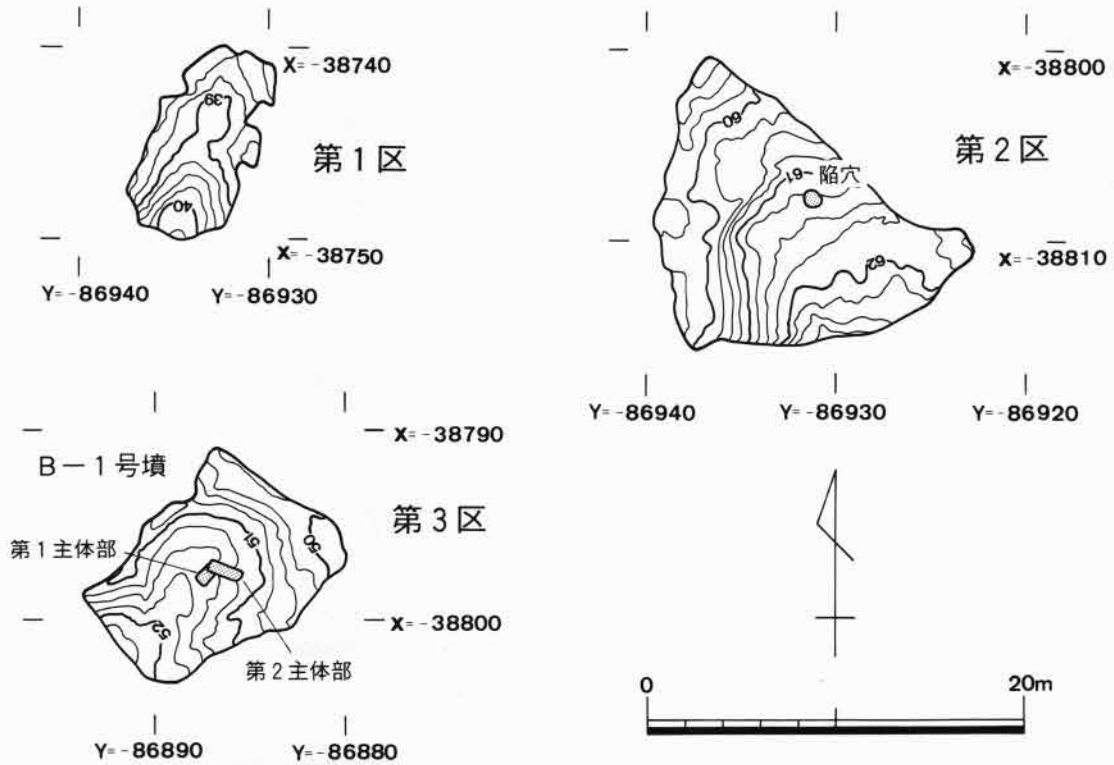
A. 第1区

この調査区は、B支群の北東方向にのびる尾根の先端部に位置している。調査区は細長い尾根の先端部であり、2段の段差のある階段状の地形であった。標高は約39mで、平坦部は最大で東西幅約1.5mしかなく、現地表面から約3cm掘り下げると、地山となる岩盤を検出した。地山面を精査したが、埋葬施設などの遺構は確認できなかった。東西の傾斜も急斜面であり、古墳の可能性は極めて低いと考え、それ以上の調査は行わなかった(第5図左上)。

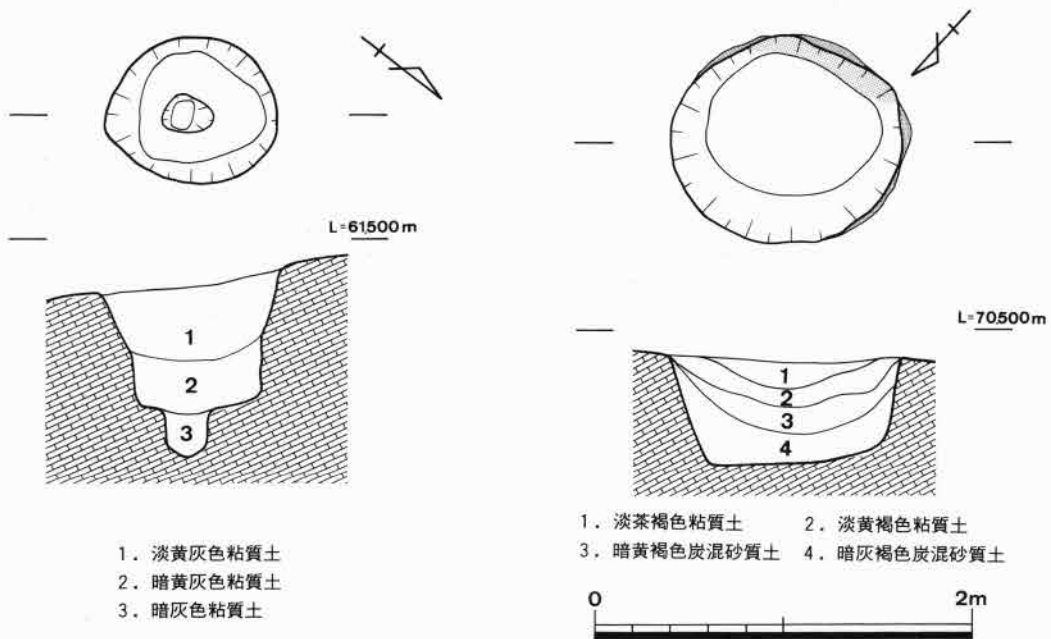
B. 第2区

この調査区は、第1地区の南方に位置する標高約61mの平坦部分に位置している。地形は、北に向かって傾斜し、二段の平坦地からなる階段状地形である。西側の斜面はなだらかな傾斜であるが、東側の斜面は地震による土砂崩れ(地崩れ)によって崩落し、急な傾斜となっている。第2区と第3区は、主尾根から派生した二筋の尾根上にあつて、その間の斜面には、地震の影響で土

砂崩れ(地崩れ)が生じた形跡がある。また、遺構面確認作業の段階で、第2区の調査区東側で地崩れの痕跡(土砂の堆積)を検出した。表土掘削作業を開始し、現地表面から約5cmのところまで遺構面(南側の平坦地)を確認した。検出した遺構は、東西方向の小溝1条と陥穴らしき穴が1基で



第5図 調査第1(左上)・第2(右上)・第3(左下)区地形図



第6図 第2区陥穴(左)・第4区炭窯(右)実測図

ある。

この陥穴は、円形の径約0.9mの穴で、深さは、検出面から底まで約0.7mあった。さらに、その底部中央には径約6cmの小穴があった。小穴は、捕獲用杭が据えられていた痕跡と思われ、小穴の深さは約0.2mであった。この陥穴からは遺物は出土せず、いつの時代のものかは不明である(第6図左)。

C. 第3区

この調査区は、第1区がある丘陵先端部の東隣りに位置している。標高約51mの丘陵の先端部の平坦地に古墳状隆起が存在している。平坦地を現地表面から約5cm掘り下げたところ、平坦部北東寄り付近で埋葬施設と思われる遺構を確認した。この古墳状隆起は、現地形からみて円形を呈する古墳と思われる。この古墳をB支群1号墳(以後、B-1号墳とする)とした。

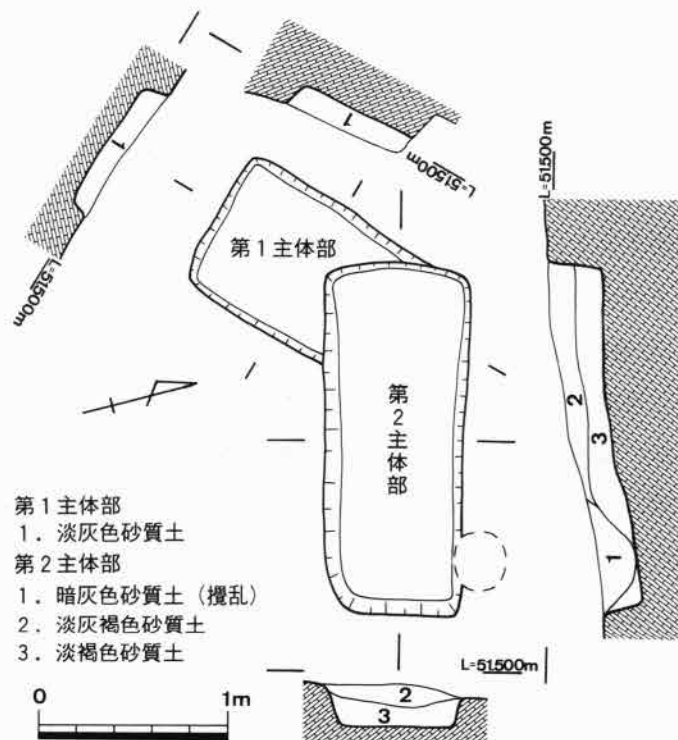
(1) B-1号墳

墳丘は、地山を削り出して整形されていたが、樹木の根などによって北側の一部分が破壊されていた。また、墳頂部も平坦になっているため、後世に削平された可能性がある。したがって、墳丘の高さや南側の尾根との切り離し部分の詳細は不明である。墳形については、西側の墳丘裾が地山を円形に削って整形されているため、円墳であったと想定できる。規模は、直径約10m前後であったと思われる。

墳頂部では、現地表から約3cm掘り下げると地山面となる岩盤を検出した。遺構は、中央より北東寄りで、小規模な埋葬施設2基を検出した。2基の埋葬施設には、重複関係が認められ、古いものを第1主体部、新しいものを第2主体部とした。2基の墓壙は、異なった軸を向いており、埋葬には時期差があると考えられる(第5・7図)。

①第1主体部

この墓壙は、東側に傾いた南北方向に軸をもつ、長方形を呈した墓壙である。長さは、第2主体部によって北側部分を破壊されているため不明である。なお、現存する墓壙の長さは、約1.1mである。幅は約0.8m、深さは約0.1mしか残存していなかった。また、墓壙埋土は単一層であり、棺痕跡は確認できなかった。墓壙内から



第7図 B-1号墳第1・第2主体部実測図

遺物は出土しなかった(第7図)。

②第2主体部

この墓壙は、東西方向に主軸をもつ、長方形を呈した墓壙である。墓壙の西側は第1主体部の北側に重なっている。墓壙の規模は、長さ約1.9m・幅約0.75m・深さ約0.3mと小規模なものであった。また、墓壙の底部が若干ではあるが東側に傾斜している。墓壙埋土は、根によって東側を攪乱されていたが、埋土は単一層で棺痕跡も確認できなかった。この墓壙からも遺物は出土しなかった。

なお、墳丘・墓壙ともに遺物が出土しなかったので、遺物から古墳の築造時期を決めることができない(第7図)。

D. 第4区

この調査区は、主尾根の中心部にあたる標高約68~75m部分(長さ約78m)に位置している。当初、この調査地区内には5基の古墳状隆起が存在すると指摘されていた。しかし、表土掘削作業を進めた結果、その内4基の古墳状隆起が存在すると指摘されていた北側部分の標高約68~70mの細長い尾根の平坦面には、古墳状隆起がなく、北側にゆるやかに傾斜する自然地形と判明した。しかし、この北部の平坦地で、円形の土坑1基と調査区の中央部で円形の炭窯1基を検出した。土坑は、径約1.1m・深さ約0.2mのものであった。炭窯は、径約1.2m・深さ約0.5mであった。この穴の壁面は、焼けて赤く変色しており、硬くなっていた。埋土中には、多量の炭の破片が含まれていた(第6図右)。

調査区南側の標高約75mの平坦地部分では、現地表面から約5cm掘り下げたところで、埋葬施設と思われる遺構を検出したため、古墳と判断した。この地点で確認した古墳をB支群3号墳(以後、B-3号墳とする)とした(第8図)。

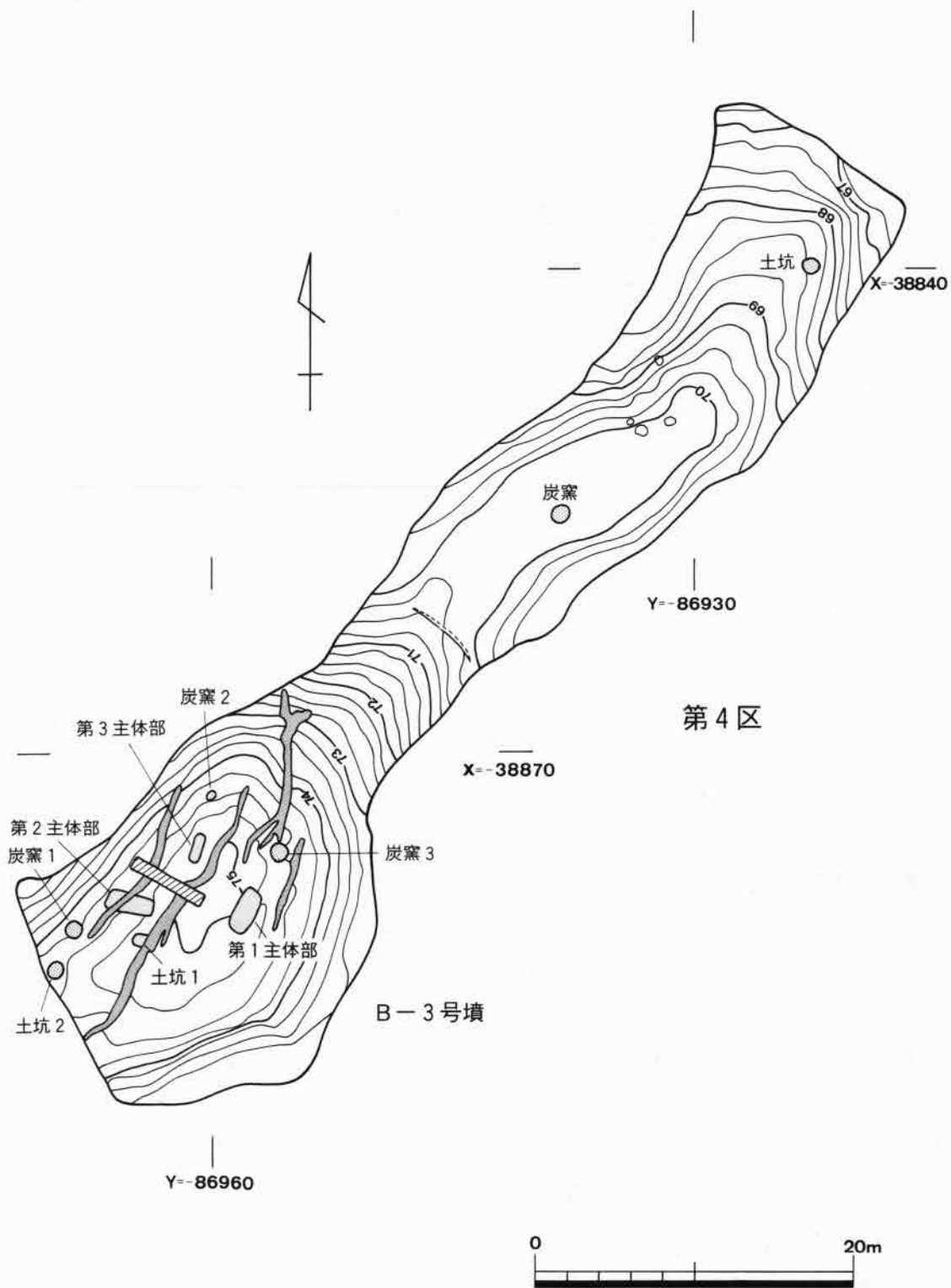
また、墳丘の平坦部では、長短4条の地震による亀裂(地割れ)を検出した。この亀裂は、北東方向に走っている。この亀裂は、丹後地震によって生じた地割れで、地割れ内の埋土及び崩落土を完掘すると、深いところでは遺構を検出した面から約0.8mの深さがあった。

そのほかの遺構として、土坑2基と時期不明の炭窯4基を検出した。

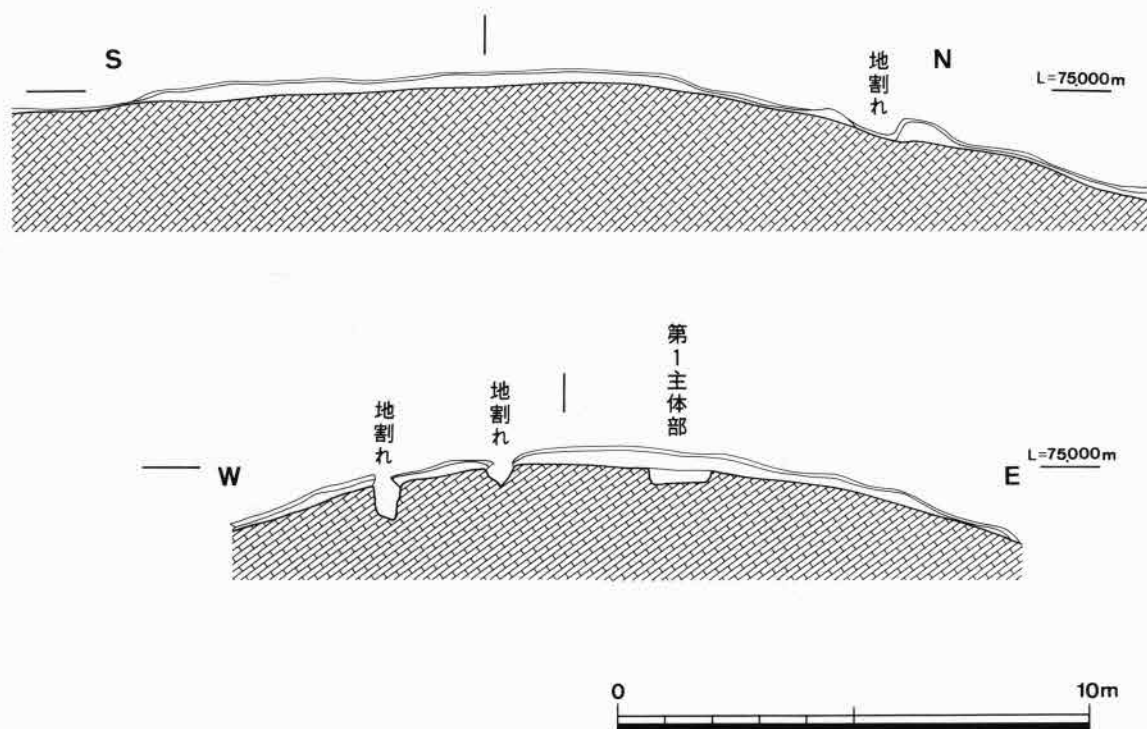
(1) B-3号墳

3号墳は、B支群とした尾根の南側、最も標高の高い地点に位置している。墳形は、南北方向に長い楕円形を呈しているが、地震の亀裂(地割れ)によって墳丘が破壊されているため、正確な古墳の規模は不明である。しかし、現地形から、長軸約24m・短軸約18mの楕円形の古墳であっただろう。また、墳丘の裾については、西側・南側は調査範囲外で、確認することはできなかった。北側の斜面では、明確な墳丘裾は確認できなかった。しかし、墳丘の東側に平坦地があり、その部分を墳丘裾と仮定すると、現存の墳丘の高さは約1.7mを測る(第9図)。

検出した遺構として、墳丘頂部の平坦地で埋葬施設を3基、土坑2基を検出した。検出した3基の埋葬施設は、中央からやや東側の墓壙を第1主体部、中央から西側にある墓壙を第2主体部、



第8図 調査第4区地形図



第9図 B-3号墳墳丘断面図

中央からやや北側にある小規模な墓壙を第3主体部とした。

①第1主体部

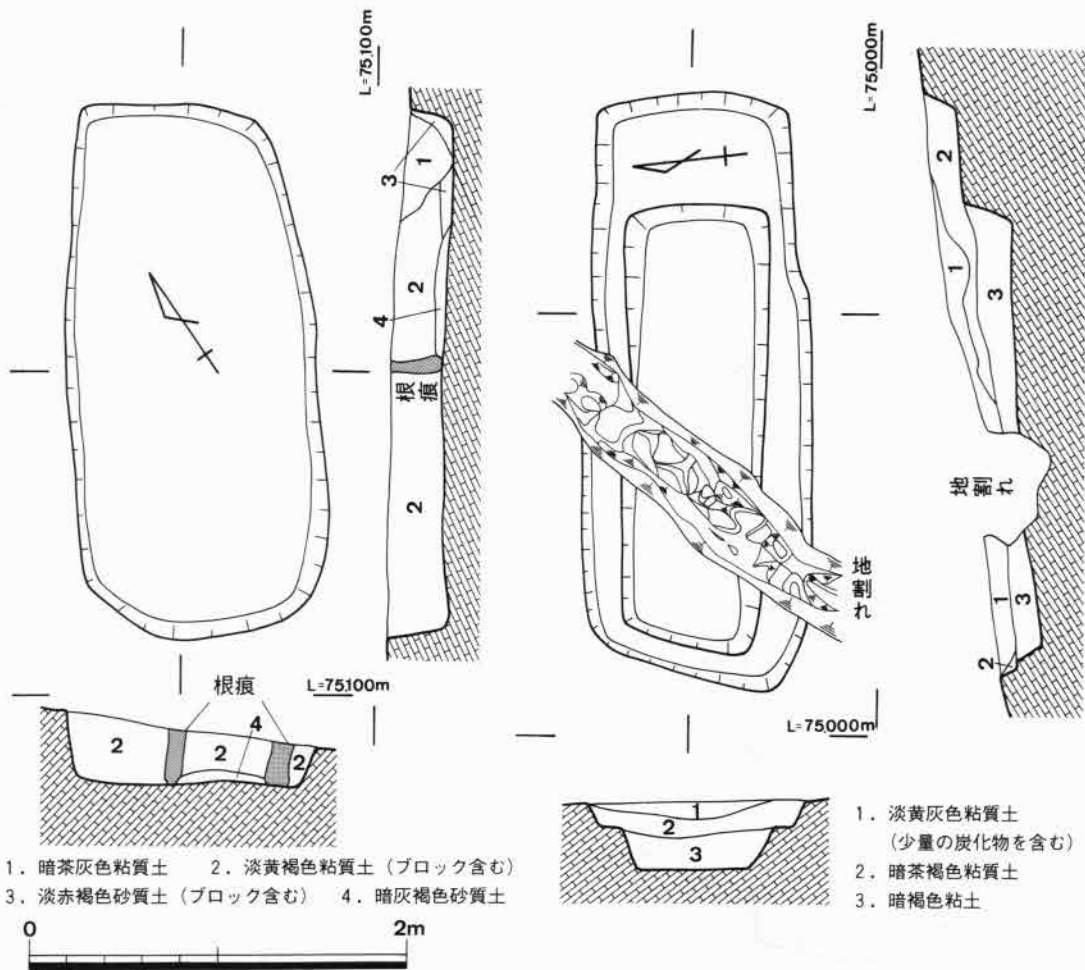
東側に傾いた南北方向に主軸をもつ隅丸の長方形の墓壙である。墓壙は、長さ約2.85m・幅約1.35m・深さ約0.25mの規模であった。棺痕跡については、断面に痕跡らしきものが確認されたが、根の痕跡であることがわかった。さらに、墓壙内の平面精査や断面観察を行ったが土色変化は確認できず、木棺が納められていたかは不明である。また、墓壙から遺物は出土しなかった(第10図左)。

②第2主体部

東西方向に主軸をもつ墓壙は、長方形を呈している。墓壙は、西側を地震の亀裂(地割れ)によって分断されている。この地割れによって亀裂部の東側と西側では、墓壙の検出面に段差が生じていた。

埋葬施設は、二段墓壙で木棺直葬墓であったと思われる。上段の墓壙の規模は、長さ約3.2m・幅約1.2m・深さ約0.16mであった。木棺が納められていたと思われる下段(二段目)の墓壙の規模は、長さ約2.4m・幅約0.8m・深さ約0.3mであった。しかし、納められていた木棺の痕跡は確認できなかった。また、この墓壙についても、出土遺物はなかった。

この第2主体部は、検出した現在の地形からみると斜面につくられたように見える。しかし、それは地震によって平坦面が全体的に西側に傾いたためで、さらに亀裂によって分断され、西側だけが傾斜を変えたため、亀裂部分の東西部で検出面のズレを生じさせたと考える。そのために、第2主体部は、地震によって傾斜が変えられ、当時の地形とは大きく異なってしまったと推測する。



第10図 B-3号墳第1(左)・第2(右)主体部実測図

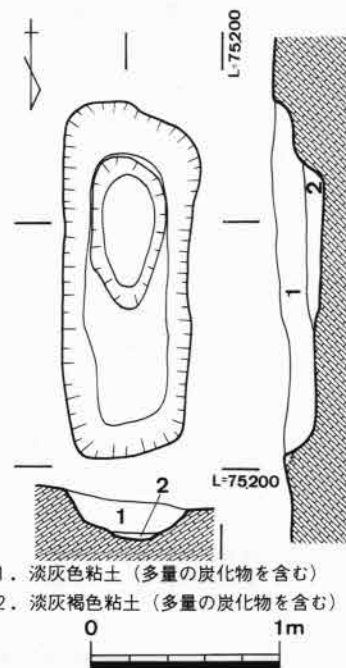
また、棺の深さが約0.3m、墓壙全体の深さでも約0.46mしかないことから、墳丘頂部は後世に削平を受けたと思われる(第10図右)。

③第3主体部

この埋葬施設は、南北方向に主軸をもつ長方形の小規模な墓壙で、木棺を納めない土壙墓であったと思われる。土壙の規模は、長さは約1.9m・最大幅約0.55m・深さ約0.25mである。この土壙墓は、南側の幅が広く、北側の幅が狭くなっていることから、遺体の頭位は南であったと考えられる。墓壙が小規模なことから、幼児などの子供の墓であった可能性がある(第11図)。

(2) その他の遺構

その他、墳頂部で土坑2基と炭窯3基を検出した。



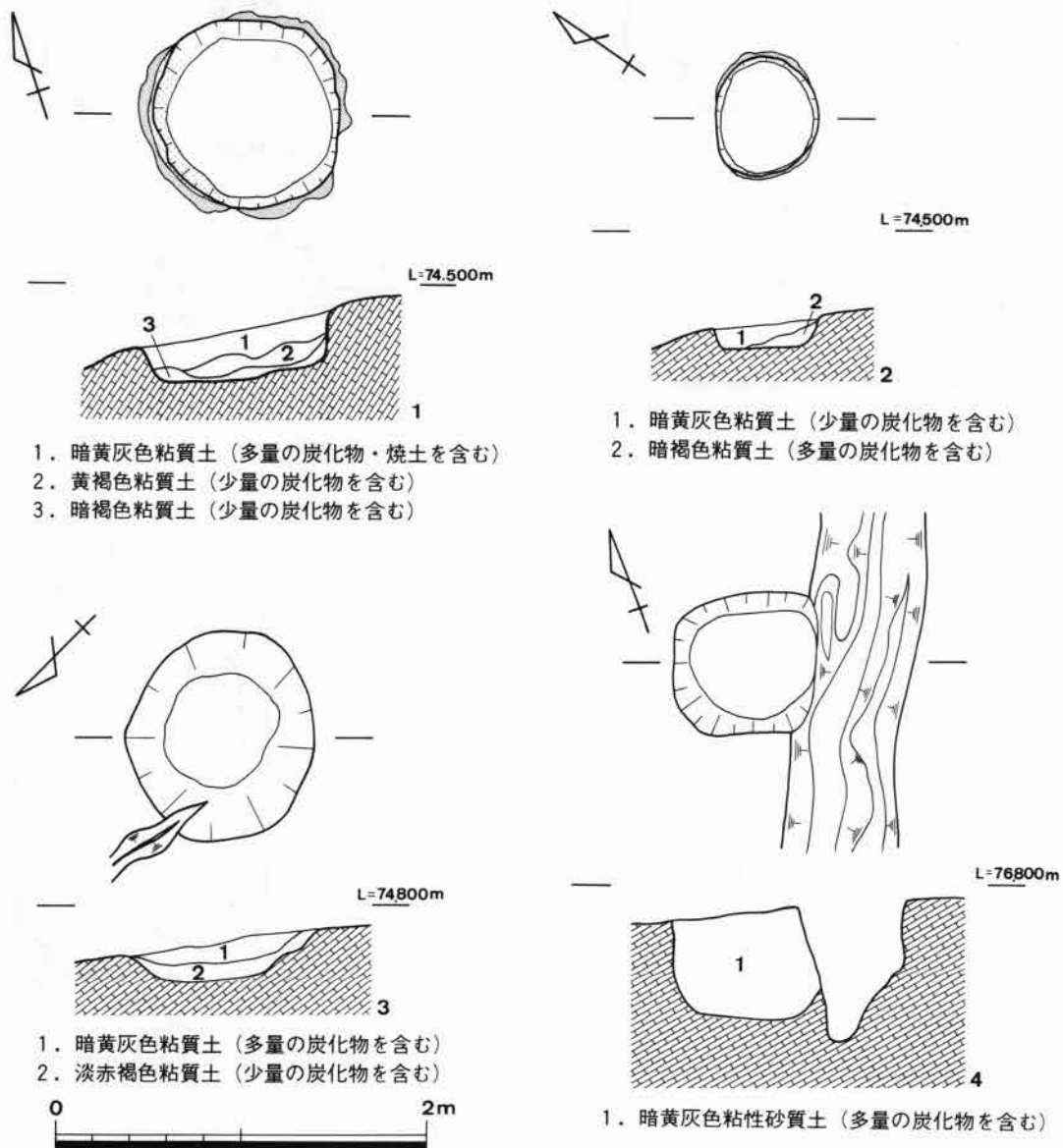
第11図 B-3号墳第3主体部実測図

①土坑

土坑1は、地震による地割れで土坑の東側部分が破壊されているため、正確な規模は不明であるが、最大幅約0.76m・深さ約0.58mであった。この土坑は楕円形を呈している。また、埋土は単一層であった。出土遺物もなく、時期が不明な上、用途も不明な土坑である(第8図・第12図4)。もう1基、炭窯1の南側で、炭窯らしき円形の土坑を検出したが、壁面も焼けておらず、埋土に炭も含まれていなかったため土坑2とした。

②炭窯

炭窯は、墳丘上で3基ある。炭窯1は、第2主体部の南西側に存在し、径約1mの円形を呈しており、深さは約0.26mであった。炭窯の周辺と壁面は焼けて赤く変色し、さらに壁面の一部は高温で焼けたためガラス質に変化し硬くなっていた。埋土中には、多量の炭化した木片が含まれていた。



第12図 第4区(B-3号墳)炭窯・土坑実測図(1.炭窯1 2.炭窯2 3.炭窯3 4.土坑1)

炭窯2は、第3主体部の北側に存在する。径約0.7mの円形で、深さ約0.1mを測る。この炭窯も壁面の一部分が焼けて硬くなっていた。埋土中には、少量の炭片が含まれていた。

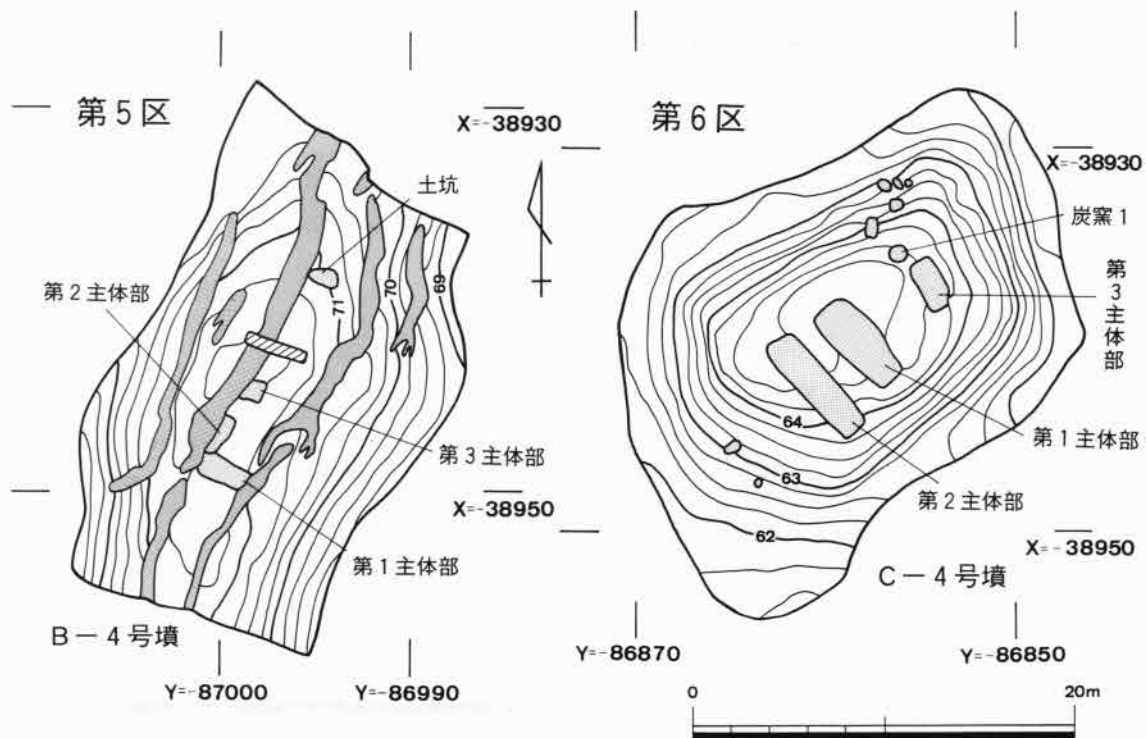
炭窯3は、第1主体部の北東側に存在する。径約1.12mの円形で、深さ約0.21mを測る。これについては、炭窯1・2とは異なり、穴の壁面が焼けていなかった。炭を焼いていたかは不明であるが、埋土に多量の炭片が含まれていたため、炭窯であると判断した。また、北側の一部を細い地割れによって破壊されている。

どの炭窯も、炭の破片は含まれていたが遺物は出土せず、使用された時期は不明である(第12図)。

また、墳丘頂部では、地震による地割れが走る部分で墳丘を断ち割り、断面を観察した(第8図の斜線のスクリーン部分)。断ち割り部は、墳頂部の西側の2条の地割れに設定した。断面を観察すると、大きな地割れのほかにひび割れ状の小さな亀裂が各所で確認できた。小さな亀裂は、開いた部分に上層の土が入り込んでいた。断面観察によって、丹後地震と数多くの余震によって、地盤は大きな損害を受けていたことを確認することができた(第16図上)。

D. 第5区

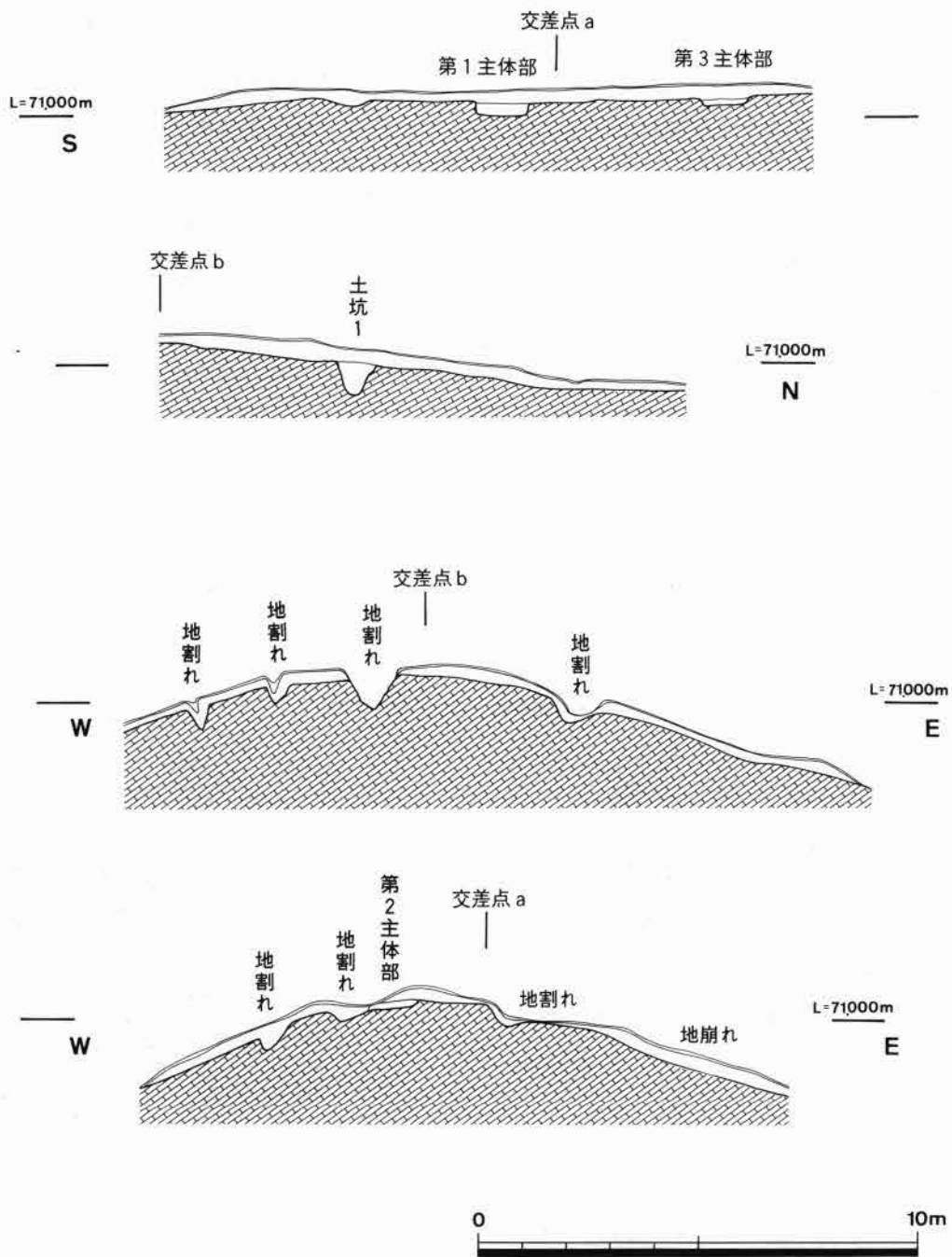
この調査区は、第4区から同じ尾根上に南西方向へ約60m進んだところの、標高約72mの丘陵頂部に位置している。こちらの調査区にも第4区と同じように、地震による亀裂が長短5条南北方向に走っていた。また、南東方向の斜面の一部は地崩れが起こったらしく崩れていた。調査区の頂部平坦地の中央より南側で、埋葬施設と思われる遺構を3基検出した。したがって、この古墳をB支群4号墳(以後、B-4号墳とする)とした(第13図)。



第13図 調査第5(左)・第6(右)区地形図

(1) B-4号墳

4号墳の墳丘には、短いものや途切れているものをつないで、南北方向に5条の地震による亀裂が走っている。さらに、南東側では小規模な地崩れの痕跡が認められた。墳丘は地震による地割れや地崩れによって分断されたり、破壊されているので、当時の墳形を留めていないと思われる。そのため、正確な墳形や規模を明確に推定することが困難である。現地形からは、墳丘の南北方向には、墳丘による高低差が判別できない。東西方向では高低差が約1.5mある。墳丘の規模は、東西で約13mを測る(第13図右・第14図)。



第14図 B-4号墳墳丘断面図

墳丘頂部で、埋葬施設と思われる遺構3基と土坑1基を検出した。しかし、埋葬施設は3基とも地割れによって破壊されていた。地震の亀裂(地割れ)は、B-3号墳よりも規模が大きかった。

埋葬施設の3基は、南側にある東西方向に主軸をもつ墓壙を第1主体部とし、その第1主体部の北側に重なった、南北方向に主軸をもつ墓壙を第2主体部とした。さらに、その北側の東西方向の墓壙を第3主体部とした。それぞれの墓壙は、調査地全体に広がる地震の亀裂(地割れ)によって破壊された状態で検出した(第15・17・18図)。

①第1主体部

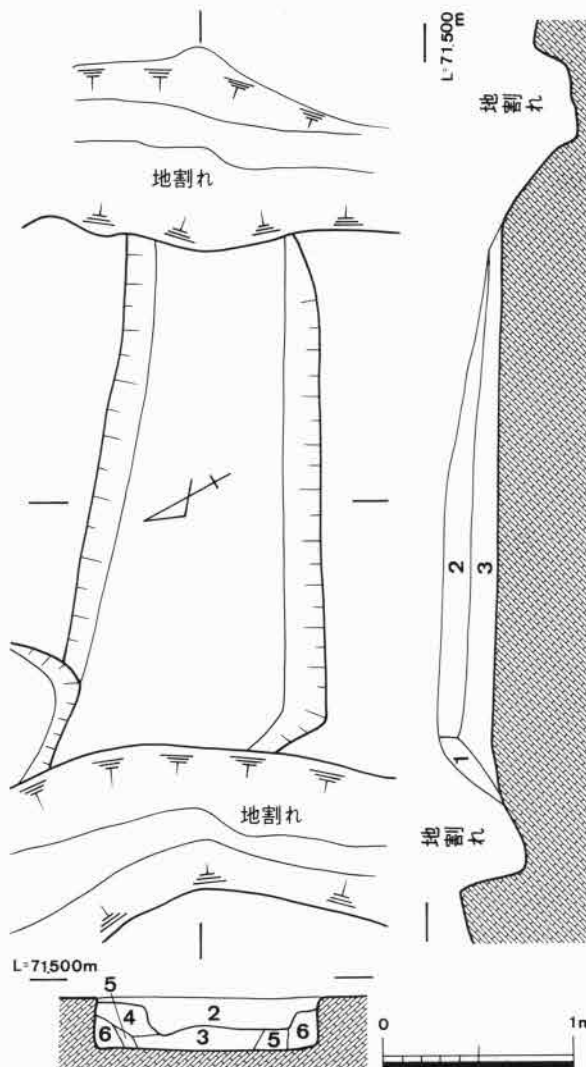
東西方向に主軸をもつ長方形を呈する墓壙である。墓壙の東側と西側が、地割れによって破壊されていた。規模は、長さについては破壊されていて不明で、幅は約1.35m、深さは約0.3mであった。墓壙は浅く、棺痕跡も断面観察ではそれらしき痕跡がみられたが、平面では全体の形を確認することができなかったので、木棺が納められていたかは不明である。また、この墓壙からの出土遺物はなかった(第15図)。

②第2主体部

南北方向に主軸をもつ墓壙で、隅丸方形を呈している。規模は、長さ約2.0m・深さ約0.25mであった。墓壙の幅は、地震の亀裂に西側半分を破壊され不明である。この墓壙も棺痕跡が確認できず、木棺については不明であり、遺物も出土しなかった(第17図)。

③第3主体部

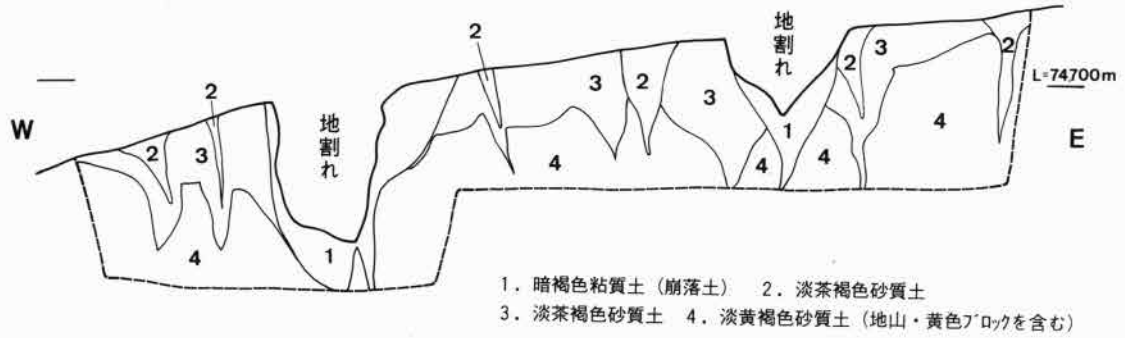
東西方向に主軸をもつ墓壙と思われるが、西側半分が地割れによって破壊され残っていない。そのため、墓壙の長さは不明である。墓壙の幅は約1.02m・深さは約0.16mであった。ここからも遺物は出土しなかった(第18図左)。



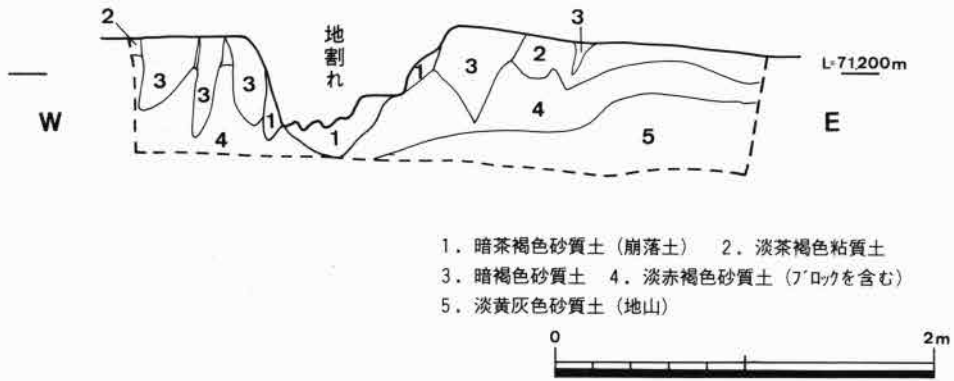
第15図 B-4号墳第1主体部実測図

- 1. 暗黄灰色粘質土(断層埋土)
- 2. 淡黄灰色粘質土(地山ブロックを含む)
- 3. 淡赤褐色砂質土(地山ブロックを含む)
- 4. 赤褐色砂質土(地山ブロックを含む)
- 5. 暗褐色砂質土(棺痕跡か)
- 6. 暗赤褐色砂質土(地山ブロックを含む)

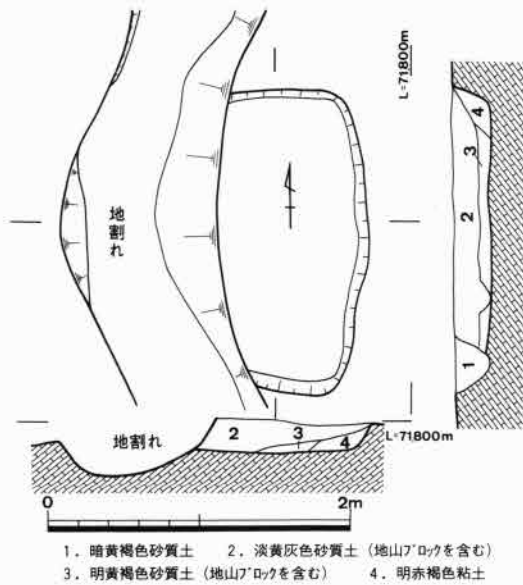
B-3号墳 墳頂部断ち割り



B-4号墳 墳頂部断ち割り



第16図 B-3・4号墳墳頂部断ち割り土層断面図

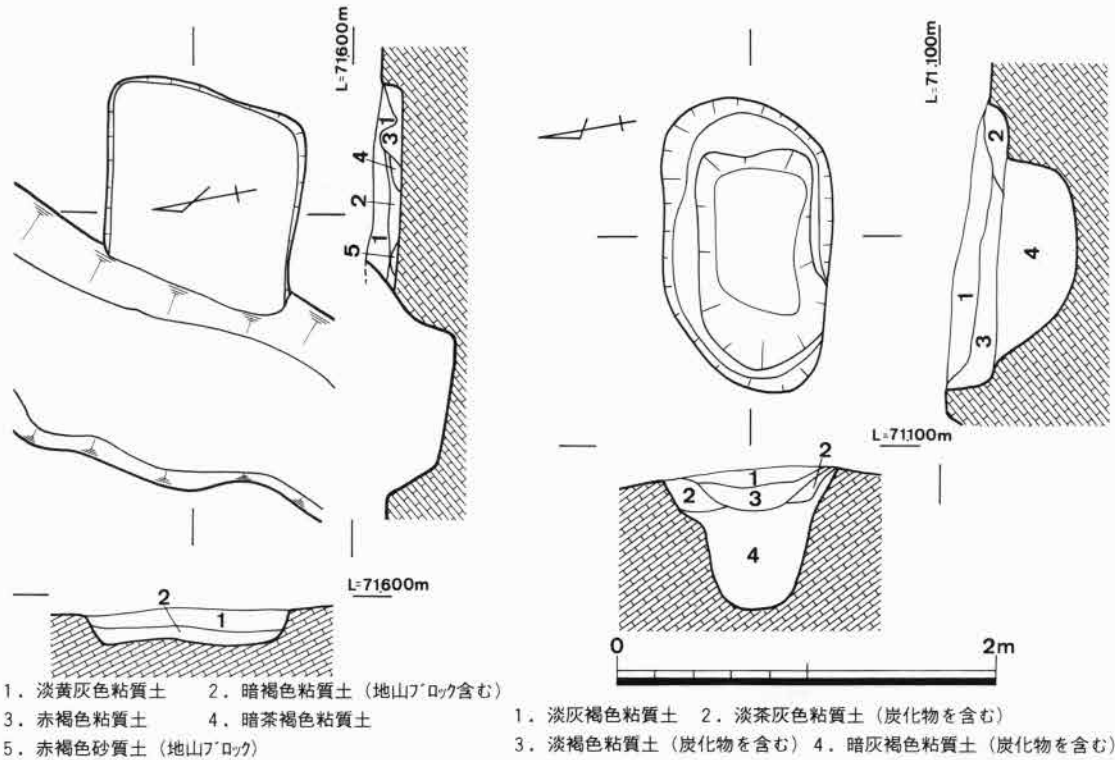


第17図 B-4号墳第2主体部実測図

(2)土坑1

土坑1は、調査区の北側で検出した。土坑は、楕円形を呈し、東西方向に長く、二段に掘られていた。南北の幅が約0.9m、東西の幅が約1.5mあり、深さが約0.7mであった。土坑の埋土には、少量の炭片が含まれていた。しかし、この土坑の用途については不明である(第18図右)。

また、この古墳の墳頂部でも、地震による地割れ部分の断ち割りを行った。断ち割り部は、中央の一番幅の広い地割れに設定し、断面を観察した(第13図左、斜線のスクリーントーン)。ここでもB-3号墳と同様の現象が確認できた。地割れの両側に小さな亀裂が確認された(第16図)。



第18図 B-4号墳第3主体部(左)・土坑(右)実測図

いずれの墓壙からも遺物は出土しなかったが、表土掘削の段階で北西斜面で土師器の甕と思われる破片が3点出土している。しかし、どの破片も体部で、時期について判断できるものではなかった。したがって、古墳の築造時期や墓壙の埋葬時期については、明確な時期を示すことはできない。また、3基の墓壙が30cm未満で非常に浅く、後世に墳丘頂部は削平されたようである。

E. 第6区

第6区は、B支群とした丘陵の東側にある丘陵頂部に存在する東西に長い方形の古墳状隆起に設定した。この長方形の古墳状隆起をC支群4号墳(以後、C-4号墳とする)とし、調査を行った(第3・13図)。

(1) C-4号墳

4号墳の墳形は、東西に長い方墳である。規模は、東西の長さ約22m・南北の長さ約13mを測る。墳丘の高さは現状で約2.5mである。墳丘の南西部分の一部が崩れ、土砂が流出していた(第13図)。

遺構面は、現地表から約20cmで確認した。検出した遺構は、大規模なもので若干北西側に傾いた南北方向に主軸をもつ埋葬施設2基と小規模な埋葬施設1基である。また、墳丘の北東斜面と南西斜面で合計8基の炭窯と思われる遺構を検出した。

検出した3基の埋葬施設は、中央のものを第1主体部、西側を第2主体部とし、小規模な東側のものを第3主体部とした。

①第1主体部

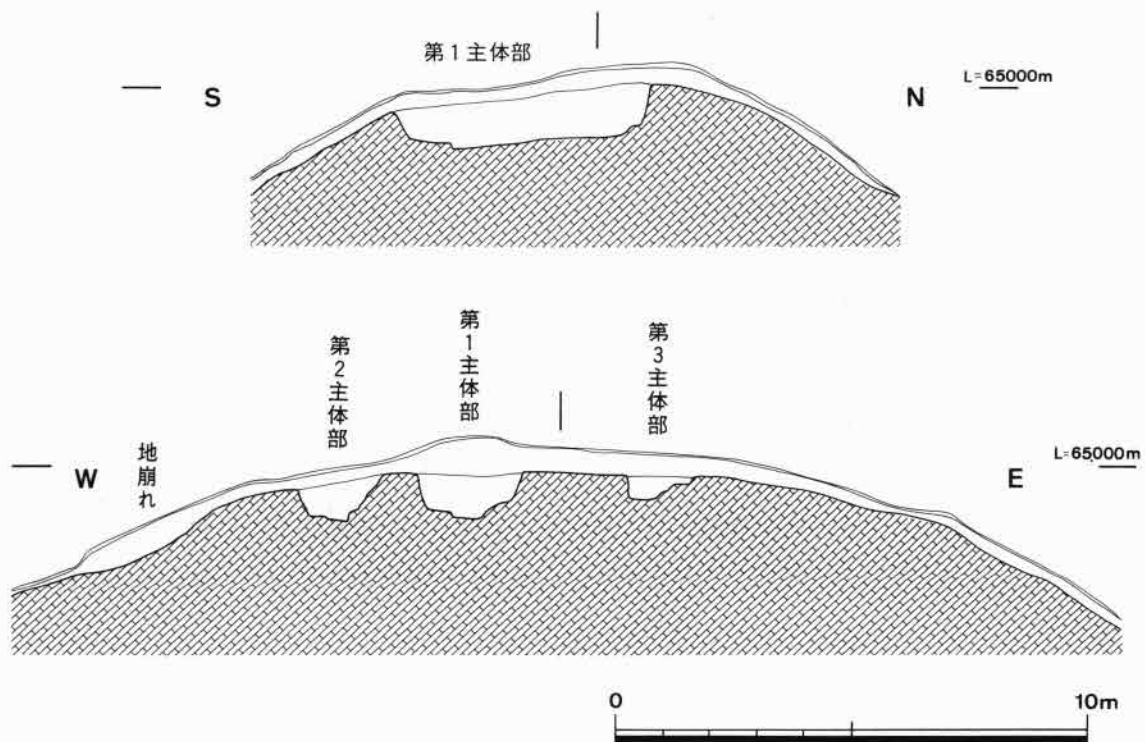
墓壙は、長方形を呈した二段墓壙であり、木棺直葬墓と思われる。規模は、上段の墓壙の長さが約5.35m・幅約2.45m・深さ約0.9mであった。下段(二段目)の墓壙の長さは約3.95m・幅約0.8m・深さ約0.15mで上段の墓壙の北側に寄っていた。木棺が納められていたと思われる二段目の墓壙が浅く、墓壙内の埋土の断面を観察したが、棺痕跡は確認することができなかった。下段の墓壙の北側の幅が若干広くなっており、埋葬された遺体はおそらく北枕であったと考えられる。この墓壙からも、遺物は出土しなかった(第20図左上)。

②第2主体部

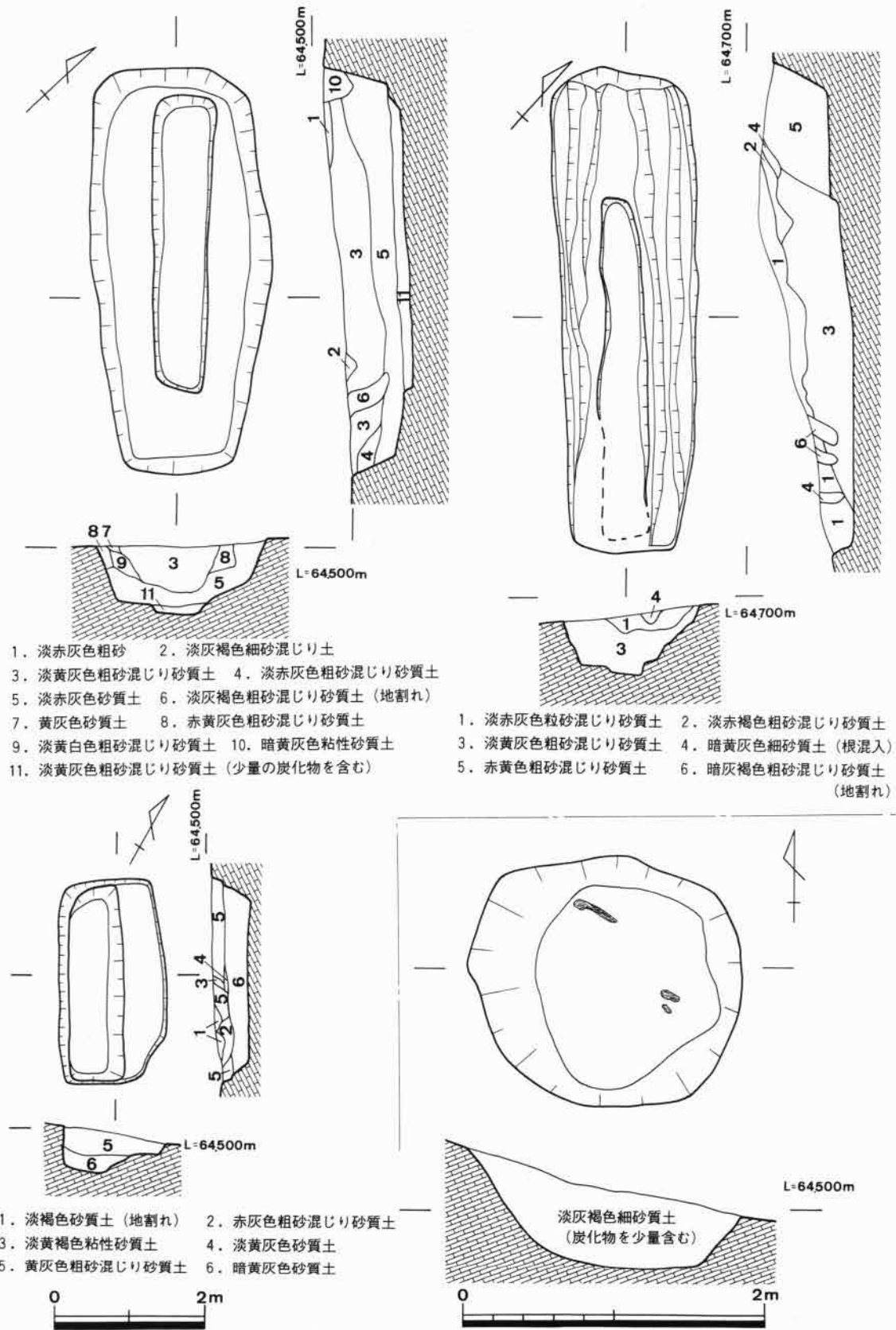
墓壙は、長方形を呈した二段墓壙であり、木棺直葬墓と思われる。しかし、墓壙内の壁面は、複雑な段差がある。規模は、上段が長さ約6.4m・幅約1.9m・深さ約0.7mであった。この第2主体部は、第1主体部と比べると墓壙の幅が狭いが、若干ではあるが第1主体部より南北に長い墓壙である。また、下段の墓壙の南側については、墓壙の立ち上がりが明確に確認できなかった。墓壙の下段の規模は、推定で長さ約6.5m・幅約0.65m・深さが約0.12mであった。また、この墓壙についても、棺痕跡が確認できず、遺物も出土しなかった(第20図左上)。

③第3主体部

この墓壙は、小規模ながら二段になっており、二段目は西側に寄っている。規模は、長さ約2.7m・幅約1.4m・深さ約0.2mで、二段目は長さ約2.5m・幅約0.9m・深さ約0.25mであった。この墓壙においても、木棺の痕跡は、確認できなかった。この墓壙は、第1・第2主体部の墓壙と比べると小規模なもので、木棺直葬墓であるかは不明である。ここからも、遺物は出土しなかつ



第19図 C-4号墳丘断面図



第20図 C-4号墳第1(左上)・第2(右上)・第3主体部(左下)と炭窯1(右下)実測図

付表2 埋葬施設規模一覧表

古墳番号	墳形	主体部	墓壇(上段)		木棺(下段)		備考
			形態	規模 (m)	形態	規模 (m)	
B-1	円形	第1	墓壇のみ	長 不明 幅 0.8 深 0.13	不明	不明	第2主体部によって一部破壊
		第2	墓壇のみ	長 1.9 幅 0.75 深 0.3	不明	不明	
B-3	不明	第1	墓壇のみ	長 2.85 幅 1.35 深 0.25	不明	不明	亀裂により一部破壊
		第2	二段	長 3.2 幅 1.2 深 0.15	箱形	長 2.4 幅 0.8 深 0.3	
		第3	土壇	長 2.0 幅 0.55 深 0.25	なし		
B-4	不明	第1	墓壇のみ	長 不明 幅 1.35 深 0.3	不明	不明	亀裂により一部破壊
		第2	墓壇のみ	長 2.0 幅 不明 長 0.25	不明	不明	亀裂により一部破壊
		第3	墓壇のみ	長 不明 幅 1.0 深 0.15	不明	不明	亀裂により一部破壊
C-4	方形	第1	二段	長 5.35 幅 2.45 深 0.9	箱形	長 3.95 幅 0.8 深 0.15	
		第2	二段	長 6.4 幅 1.9 深 0.7	箱形	長 6.5 幅 0.65 深 0.12	
		第3	墓壇のみ	長 2.7 幅 1.4 深 0.45	不明	不明	

付表3 埋葬施設方位一覧表

古墳番号	主体部	方位	頭位
B-1	第1	N45° E	不明
	第2	N70° W	西か
B-3	第1	N30° E	不明
	第2	N75° W	東
	第3	N15° E	南
B-4	第1	N65° W	不明
	第2	N30~35° E	不明
	第3	N100° E	不明
C-4	第1	N40° W	北
	第2	N40° W	北
	第3	N25° W	北

った(第20図左下)。

C-4号墳の埋葬施設は、B支群の古墳の埋葬施設とは異なり、3基の主体部は同一方向を向いている。また、墳丘も不定形なものではなく方墳で、墳丘は高さ約2.5mもある。明らかに、B支群とC支群の古墳の埋葬形態が異なっており、丘陵(支群)によって墓壇の規模や方位の統一性などの違いが認められる。このことをふまえて、まとめてこの古墳群を考える一つの方向性を提示したい。

(2)炭窯

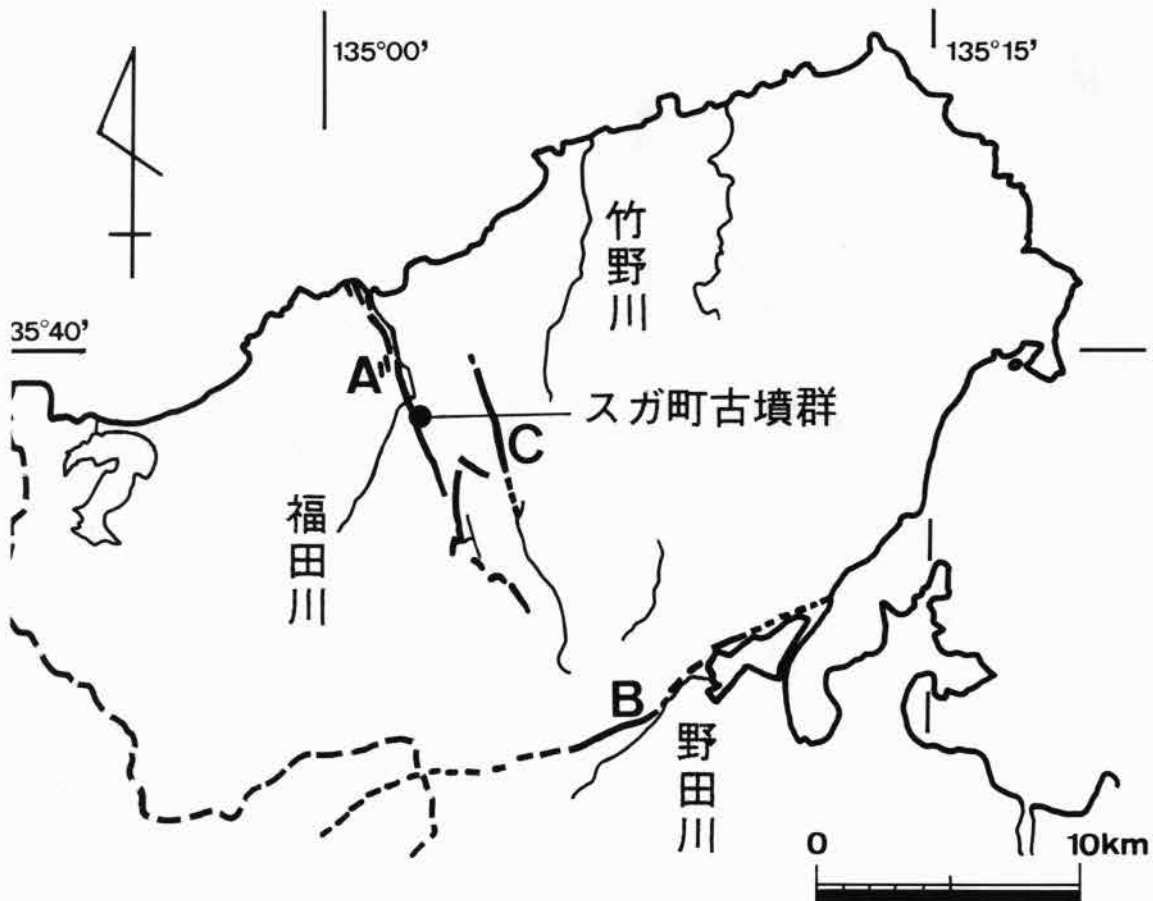
墳丘の南西斜面で2基、北東斜面で6基の、合計8基の炭窯を検出した。南西斜面の炭窯は、小規模なもので埋土には微量の炭の破片が含まれていた。北東斜面の炭窯では、そのうちの1基が墳頂部にあり、第3主体部の北側にあたる。斜面の炭窯は不定形であり、埋土中には、10cm前後の炭化木が少量、炭の破片が多量に含まれていた。これらの炭窯は、古墳築造以後のものと思われるが、正確な時期については遺物が出土していないため不明である(第20図右下)。

4. 丹後地震と地震痕跡

今回の調査成果をまとめる前に、地震について触れておきたい。今回の調査で、地震によって数多くの遺構が破壊された状態で検出された。この地域で遺跡を調査するには、郷村断層や地割れなどの地震痕跡との関係を考慮しなければならない。ここで、丹後地震と今回検出した地震痕跡について考察したい。

(1)丹後地震と断層

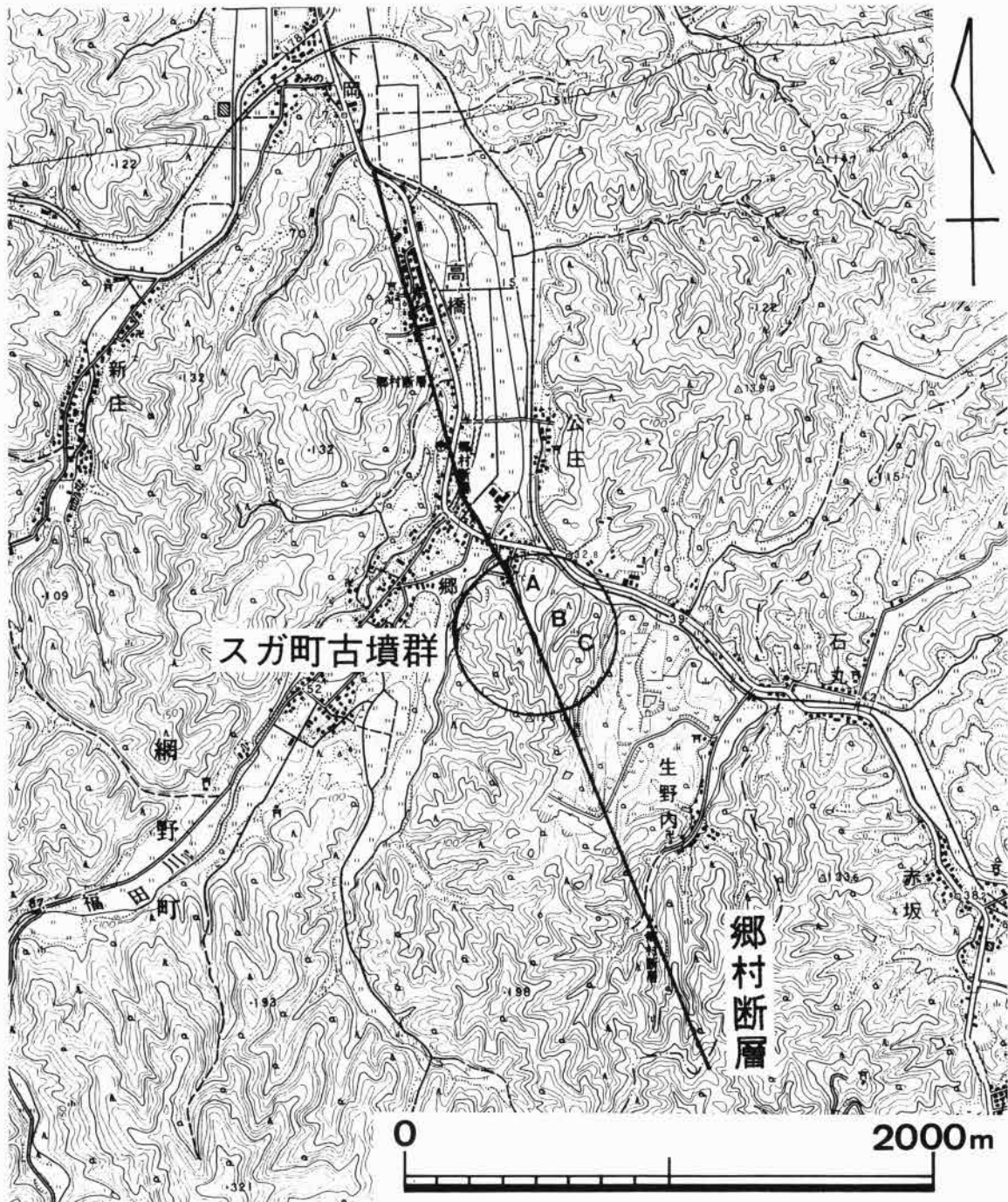
スガ町古墳群が所在する丘陵の南方には、1927(昭和2)年3月7日の北丹後地震の際に活動し、大きな災害をもたらした郷村断層が存在している。この丹後地震は、同日の午後6時27分に起こ



第21図 丹後半島に存在する断層とスガ町古墳群
 A. 郷村断層 B. 山田断層 C. 仲禅寺断層

った。震源は、東経135度15分、北緯35度53分で震央は郷付近で、最大マグニチュード7.4であった。被害は、建物の倒壊に加えて火災が起こり大きなものであった。20世紀の地震のうちでは、関東地震(大正12年)・福井地震(昭和23年)・三陸沖地震(昭和8年)に次ぐ大きな被害であった。この地震では、網野町浅茂川から大宮町三重まで約18kmの断層(郷村断層)とその東側の約11kmの断層(仲禅寺断層)、野田川町岩屋から宮津市府中までの約7kmの断層(山田断層)が生じ、被害はこの三つの断層に沿っていた(第21図)。

郷村断層は、垂直転位0.6m、水平転位2.75mの断層で、垂直及び水平のズレが顕著であるだ



第22図 郷村断層とスガ町古墳群位置図

けでなく、地層運動によって花崗岩を切断して、岩盤に鏡肌や擦痕がつくられるという地質学上大変めずらしく、学問的にも貴重なものである。^(注2) そのことから、生野内地区(生野内断層)・郷地区(小池断層)・高橋地区(樋口断層)の3地区で学術研究資料として保存され、昭和4(1929)年に国指定の天然記念物となった。

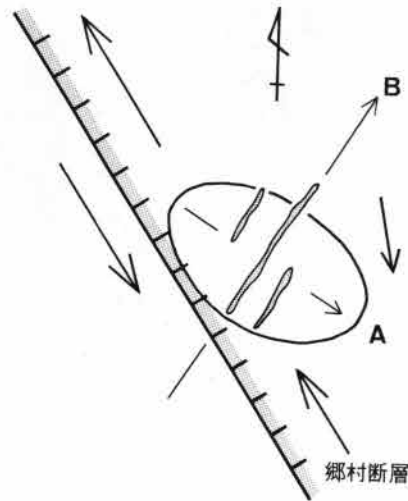
(2)地震痕跡について

今回の調査地は、郷地区と生野内地区を結ぶ線上よりやや北側に位置し、検出した地震痕跡(地割れ・地崩れ)も丹後地震の影響によるもので、断層と北30~40度東の方向に地割れ・地崩れが起こっている。このことについて、当調査研究センターの中澤圭二副理事長から、

「郷村断層は北西方向に走っているのに、地割れは北30~40度東の方向で一定している。それは、断層の向きとはかなり斜行している。しかも、断層は水平のズレを伴う左横ズレのせん断性の断層であるのに、地割れは開口しており引っ張り性の運動をしている。おそらく、第23図のように断層に沿って東側が北向きに動いたとき、瞬間的に逆向きの動きが岩盤の中に生じ、引っ張りの割れ目ができたものであろう」とのご教示をいただいた(第22・23図)。

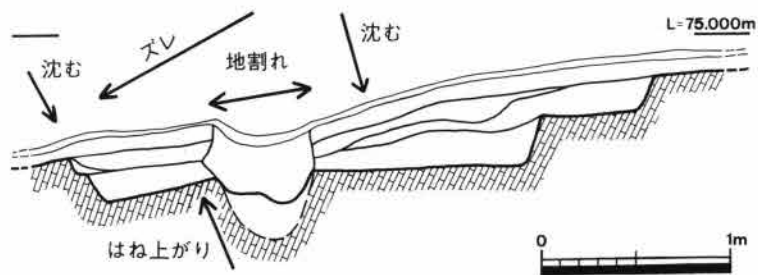
B-3号墳の墳頂部には地割れが4条あり、遺構を破壊している。第2主体部では、地割れによって墓壙が分断された状況で検出した。断面を観察すると、分断された墓壙の西側が若干ではあるが隆起しているのが確認できた。また、主体部全体が西側に傾いており、本来なら斜面上に墓壙はつくられないが、地震によって地山の傾斜自体が変えられてしまったと考えられる。また、第24図に示したB-3号墳第2主体部のズレの過程や丹後地震との関連について、通産省地質調査所大阪地域地質センターの寒川 旭氏にご教示いただいた。寒川氏は、B-3号墳第2主体部のズレについて、「この丘陵上の亀裂は、尾根筋に沿って標高の高い部分でのみ存在する。これらの亀裂は左右の振動によって、縦方向に亀裂が生じたものである。亀裂は、北東方向に走っており、尾根の頂部で振動が大きくなるものである。このような震動による地形効果を『杉型雁行亀裂』という。また、B-3

号墳の第2主体部のズレの現象は、地震の振動によって古墳の頂部に亀裂を生じさせ、亀裂によって分断された地面ははね上がり現象と沈み現象がおこって段差をつくった。



A: 岩盤の伸び方向
B: 岩盤の引っ張り方向(地割れ)

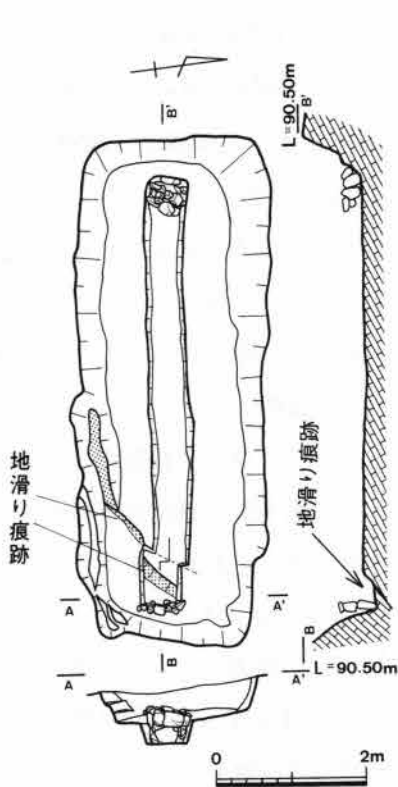
第23図 断層付近の歪みの楕円体



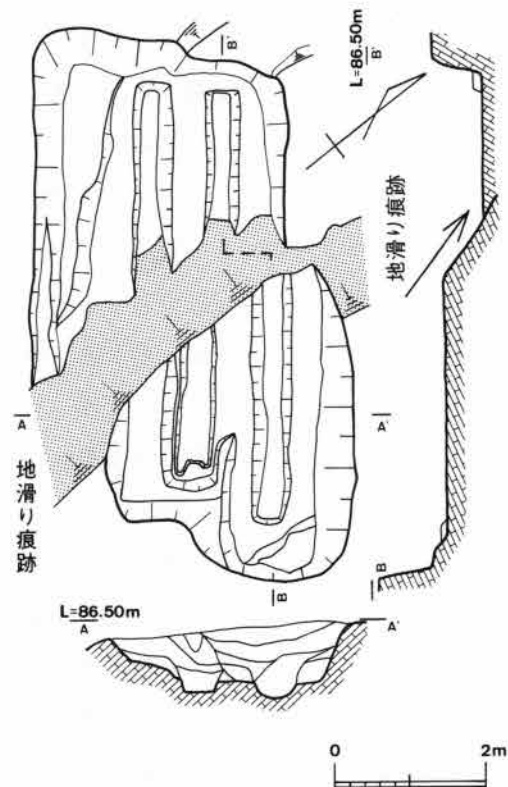
第24図 B-3号墳第2主体部の地震によるズレ



第25図 通り古墳群(1)・遠所古墳群(2)位置図(1/25,000)



第26図 通り2号墳第2主体部



第27図 通り3号墳第1・第2主体部

墓壇の西側は丘陵斜面に見えるが、これは分断されたことによる西側部分の沈み現象とズレ現象によって傾いたと判断できる。分断されたことによって、個々の地震の振動の伝わり方が異なったためと考えられる。」とご教示いただいた(第24図)。

B-4号墳でも、4条の地割れが北30~40度東の方向に走っている。古墳の頂部中央の地割れは、最大で幅約1.4mを測る。墳丘は、3条の地割れによって破壊され、複雑なズレと隆起が各所で起こっている。3基の主体部も破壊され、規模が確認できない状況であった。

また、C-4号墳でも、墳丘の南西側が一部地崩れを起こしている。また、表土掘削段階で浅い地割れの痕跡を1条確認している。その痕跡は、第2主体部の墓壇埋土の断面観察の際にも確

認している。このことから、C支群でも地震の影響を受けていたことが判明した(第20図)。

発掘調査によって、地割れや地滑り・地崩れなどの地震痕跡が確認された丹後地域の遺跡は、^(注3)通り古墳群・阿婆田窠跡群(大宮町)・遠所古墳群(弥栄町)などがある(第25図)。

大宮町の通り古墳群は、1991(平成3)年に当センターが1～3号墳を調査した。3基の古墳の墳丘頂部や墓壇内で地震痕跡を検出している。地震の亀裂は北東方向を向いて走っていた。1号墳の主体部は軽度の破壊であったが、2号墳の第2主体部では、東側に地滑りの跡と南側への若干のズレが確認された(第26図)。また、3号墳の第1・2主体部では、地滑りの痕跡が顕著に現われていた。主体部は東西方向に分断され、西側部分が地滑りを起こしていた。地滑りによる段差は約0.6mもあった。ここでは、地割れだけではなく、地滑りの痕跡が確認され、スガ町古墳群よりも地震の被害が大きかったことを物語っている。この遺跡も郷村断層の南の延長にあり、さらに山田断層にも近いところに存在していた(第27図)。

弥栄町の遠所古墳群は、当調査研究センターが1987(昭和62)年に調査したが、9号墳の墳頂部で北東方向に走る地割れと地滑りの痕跡を確認している。この地域は、仲禅寺断層がとおっているところである。

また、今年度に調査を実施した網野町の浅後谷南城跡(浅後谷南墳墓)でも、第1主体部の墓壇内に地崩れの痕跡が確認されている。この遺跡は、郷村断層の線上の東側の丘陵上に存在している(第35図)。

今回の調査で確認された地震痕跡は、今まで確認された遺跡よりも最も震源に近いところでの検出である。そのため、地震による遺構の破壊は、過去に検出した地震痕跡よりも被害が大ききものであった。今後、震源地周辺の遺跡での発掘調査では、地震痕跡との関係が重要となってくるであろう。

5. まとめ

今回の調査では、周知の遺跡であったスガ町古墳群の東隣りにある二つの尾根をB支群・C支群とし、調査を実施した。その尾根上に点在している古墳状隆起10基に調査区を設定し調査した。その結果、調査対象地内においてB支群で3基、C支群で1基の古墳を確認した。

B支群は、丹後地震で生じた地割れや地崩れによって墳丘や遺構が破壊されており、墳丘の規模や埋葬施設の規模が判明しない遺構が多かった。B支群で検出した埋葬施設は、どの古墳についても小規模なものであった。B-1号墳は、小規模の埋葬施設が重複した状態で検出した。第1主体部の墓壇は、小規模なもので、成人が埋葬できる大きさではなく、おそらく子供の墓であったと考える。B-3号墳では、墳丘の規模から考えると、埋葬施設はすべて小規模なものであった。第1主体部は3基の中では最大であるが、木棺痕跡が確認できなかった。第2主体部も二段墓壇ではあるが、小規模なものであった。第3主体部も小規模で簡素な土壇墓であった。また、第2主体部は、地割れによって墓壇が破壊されていた。B-4号墳では、墳丘は地震の影響で破壊され、墳形・規模も推定しづらいものであった。また、3基の埋葬施設にしても、地割れによ

って墓壙が破壊され、規模が確定できなかつた。B支群の古墳は、いずれも地震の影響でひどく破壊され、当時の形を保っていなかつた。

B-3・4号墳については、中心となるような大規模な埋葬施設は存在せず、それぞれの埋葬施設は小規模で墳頂部の中心には位置せず、方位のなどの統一性もなかつた。おそらく、首長墓的なものではなく、集団墓地的な古墳であつたと考えられる。

C支群は、B支群と比較すると地震の被害も軽かつた。C-4号墳で検出した埋葬施設も3基のうち、2基が比較的大きな埋葬施設であつた。中心となる墓壙(第1主体部)が中央に築かれている。さらに、西側には第1主体部よりも若干規模が大きい墓壙(第2主体部)が存在する。東側の埋葬施設の第3主体部は、小規模なものであつた。この古墳は、B支群の古墳のような不定形な墳形ではなく、方墳であり、3基の埋葬施設も規則的に同一方向を向いている。そのことから、B支群とは異なる埋葬形態をもつものであるといえる。

B支群・C支群の古墳の築造年代は、異なる時期であると考えられるが、すべての古墳から遺物が出土しておらず、遺物から埋葬時期を想定することはできない。しかしながら、これまでの丹後地域での調査例から、不定形な墳丘と小規模な埋葬施設をもつB支群1・3・4号墳は古墳時代前期後半頃、定形化した方墳で、大規模な埋葬施設をもち、規則性をもつたC支群4号墳は古墳時代前期末～中期初頭頃の築造であると考えられる。このことから、スガ町古墳群としたこの一帯は、時期によって墓域を移していったことがうかがえる。

スガ町古墳群があるこの地域では、時期は異なるが、十王堂遺跡などの集落遺跡も確認されている。古墳も丘陵上に多数確認されており、古くから生活が営まれていたことが考えられる。また、福田川流域には各地に遺跡があり、この辺りは当時は多くの集落があつたと思われる。スガ町古墳群もそれらの集落に伴う墓域であつたと思われる。この古墳群の位置は、北側の谷筋が一望できることから、南側の峰山町にぬけるこの谷筋の管理をしていた人々の墓域であつた可能性も考えられる。

今後の課題として、遺物(副葬品)を伴わない古墳の築造時期やその性格づけを明確に解明しなければならない。さらに、この古墳群がどのような集団によって築かれたのか、どのような人々が葬られているのか、周辺の集落との関係についても考えなければならない。

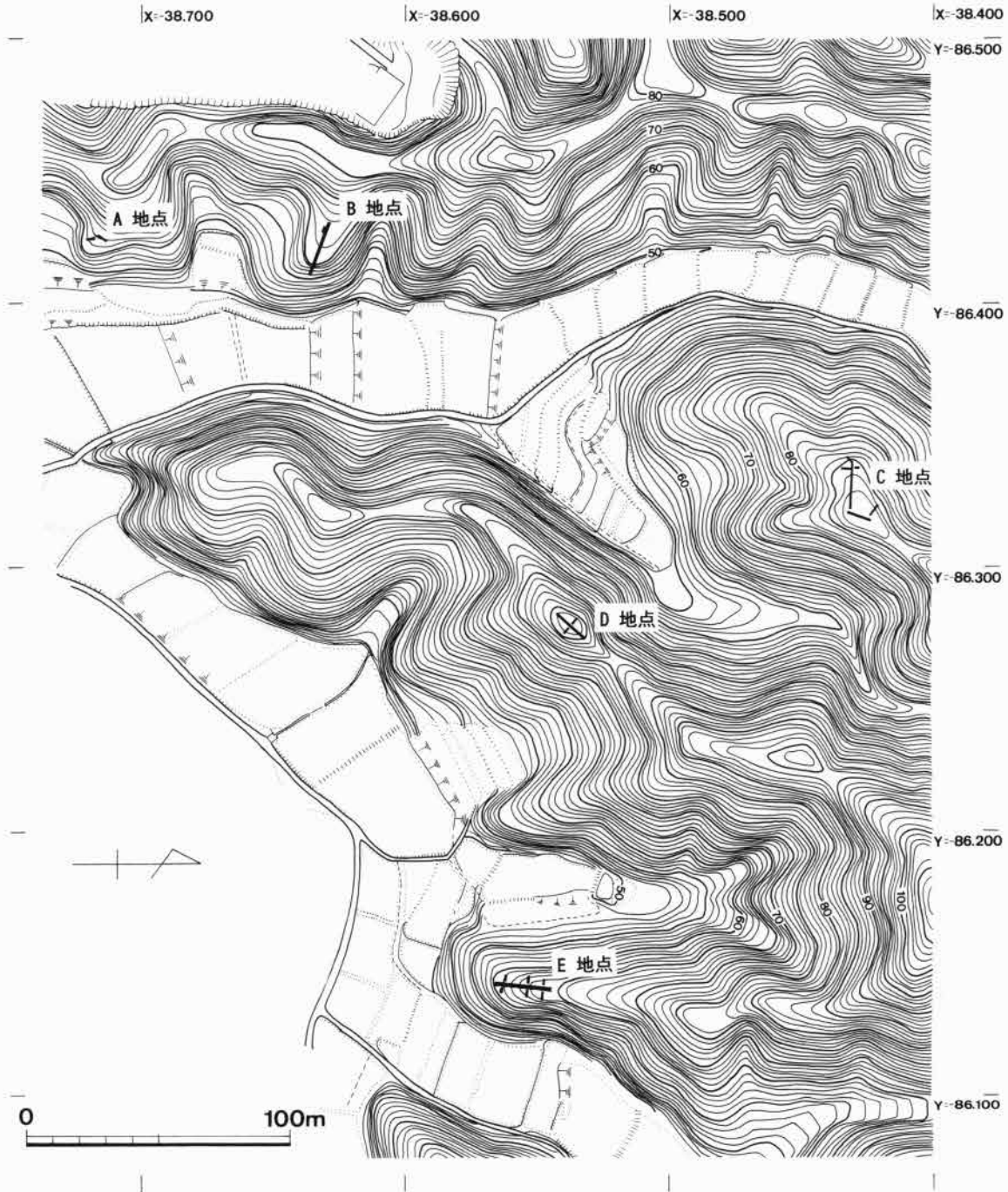
また、今回のように、古墳が後世に地震によって破壊された例が、これからこの地域でさらに確認されることが予想される。また、平地においても同様なことがいえるであろう。地震によって、遺構がどのように破壊されていったかなど注意して観察し、その過程を把握する必要がある。そのためには、地質学などの他分野からの分析も重要になってくるであろう。今後、この地域では地震痕跡についても注意して、調査する必要がある。

(村田和弘)

(2) 生野内城跡

1. はじめに

今回、発掘調査を実施した生野内城跡は、京都府竹野郡網野町生野内小字目切に所在する。生野内城跡は、『京都府遺跡地図』所収の遺跡であり、中郡峰山町と竹野郡網野町を結ぶ府道網野



第28図 生野内城跡調査地周辺地形図

峰山線沿いの山間地丘陵上に所在する。A・B・Cの3城跡が点在するが、発掘調査などが実施されていないことから、城跡の詳細は不明である。調査地点は、生野内集落の北約500m付近、西と東に分かれる生野内A城跡と同B城跡の中間部に位置する。最近の分布調査によって、4本の尾根部に郭状平坦面・古墳状隆起などが確認された。その内、5か所が調査対象となり、生野内城跡関連の遺構などの遺存状況を把握すべく調査を実施した。

2. 調査概要

調査地点は、北から南方向に張り出す4本の主尾根の稜線上や、小規模な支尾根上に分散している。調査の便宜上、5か所の調査対象地を西側から順にA～E地点とし、試掘トレンチによる調査を実施した。

(1) A地点

比較的大きな南北尾根の東側腹部に位置し、わずかに東側に張り出す小さな尾根筋に小規模な階段状の平坦面が存在した。2本のトレンチを設定し調査を行ったが、遺構・遺物とも確認できなかった。地表面で確認した階段状地形は、トレンチ内の地山面でも明瞭に確認することができた。地表部の階段状地形はほぼ水平に山腹をめぐる状況にあり、現況は植林地であることから、階段状地形は植林に伴うものと判断される。

(2) B地点

A地点の北約80m付近にあり、東にのびる支尾根上に小規模な平坦地2面が存在した。平坦地を縦断するトレンチを設定し、遺構検出を目指したが、遺構・遺物とも確認できなかった。この地点もA地点と同様に植林に伴う地形改変と判断される。

(3) C地点

標高約90mの尾根頂部に比較的緩斜面となる平坦部が認められた。頂部と緩斜面部に5本のトレンチを設けた。頂部に設けた第1トレンチでは、地表下約30～50cmで地山とみられる軟質岩盤(風化花崗岩)面を確認した。精査の結果、南側緩斜面から小型の炭窯1基を検出した。なお、他のトレンチでも精査を行ったが、先述の炭窯以外の遺構は検出できなかった。

この炭窯(第30図)は、円形を呈し、直径約0.7m・深さ約0.13mを測る。底面はほぼ水平であり、遺存している壁面で見える限り、壁面は外上方に立ち上がる。一部の壁面には焼成に伴う焼土が確認できた。また、窯の埋土中には細かい炭・灰の混入が認められた。

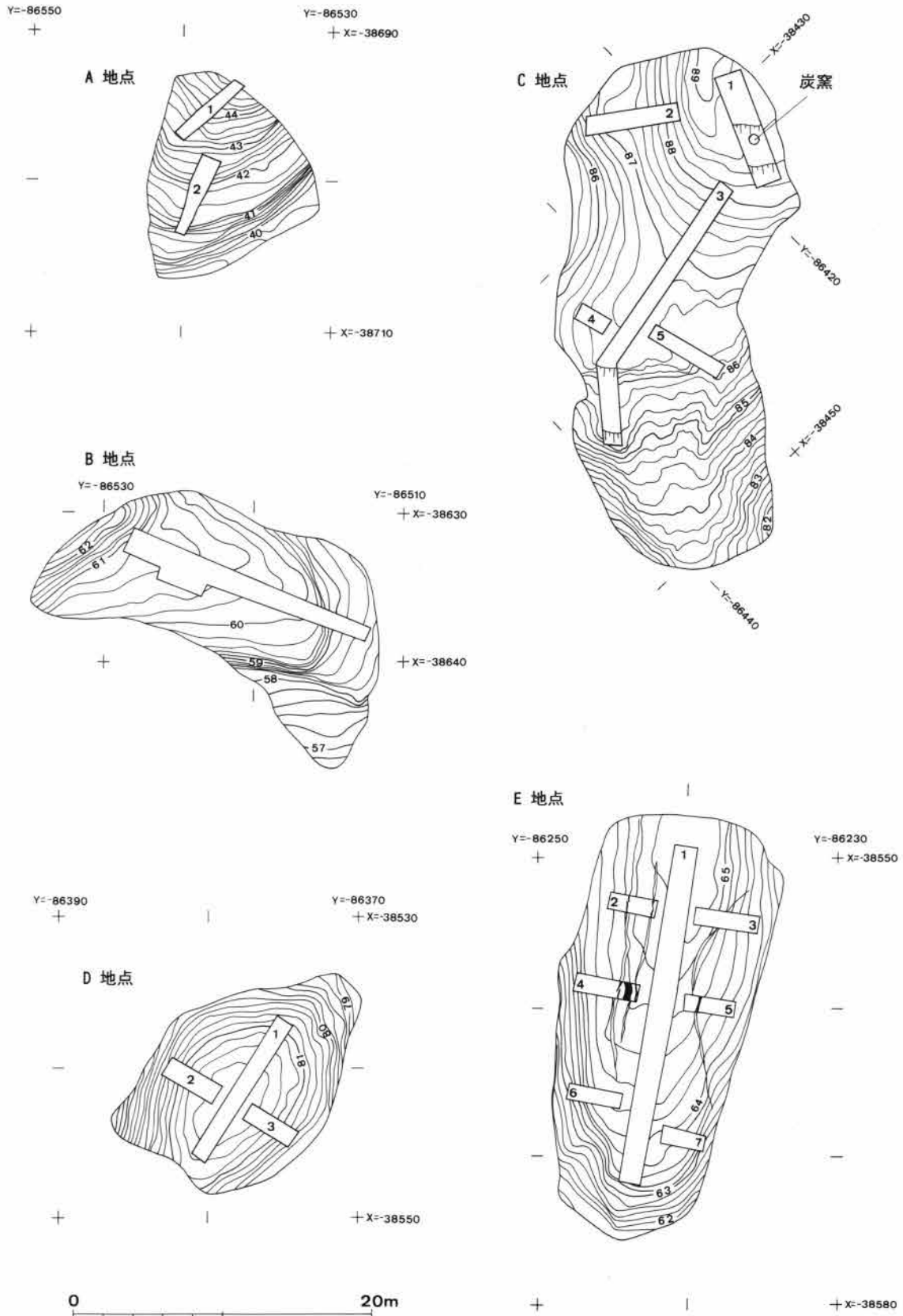
炭窯・各トレンチとも遺物の出土はみられない。

(4) D地点

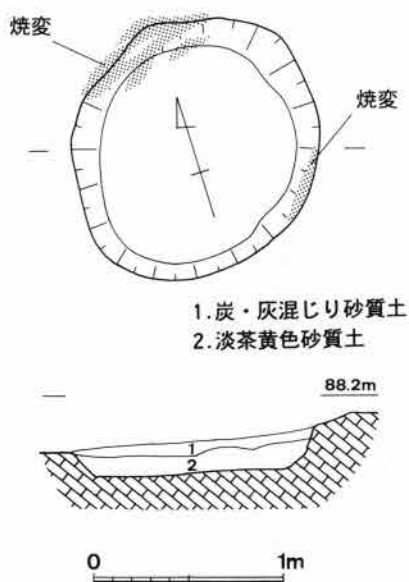
C地点の東隣りの尾根頂部に位置する。調査地点は、標高約82m付近にあり、駱駝のコブ状に高まる地形は古墳ともみられていた。十文字に配置したトレンチで調査を行ったが、遺構・遺物とも確認されなかった。

(5) E地点

今回、調査の中で最も東に位置する調査地点であり、狭小な谷を隔てた東側丘陵上は生野内B



第29図 調査地点トレンチ配置図



第30図 C-1 地点炭窯実測図

城跡が存在する。北から南にのびる尾根稜線の先端部付近に、比較的幅広な平坦部が存在した。平坦面中央を縦断する基軸トレンチを設定するとともに、斜面部には6本の副トレンチを設けた。調査の結果、城跡に関連する遺構・遺物は確認されなかった。

このE地点の調査では、地震に伴う地割れと地滑りの痕跡を確認することができた。地割れと地滑り痕跡は尾根筋と併走状態にあり、その検出位置は尾根の平坦面から斜面に変わる傾斜変換線とほぼ同一地点である。第2・第4トレンチでは、地割れ痕跡数本を確認した。

第5トレンチでは、上下方向約60cm程度の地滑り痕跡を確認した。この地割れと地滑りの痕跡は、現地表面にもその痕跡をとどめている。

3. まとめ

今回の調査では、生野内城跡関連の遺構検出を目指した。時期不明の炭窯1基を遺構として検出したが、城跡に関連する遺構・遺物は皆無であり、各調査地点を城跡とする根拠を得られなかった。炭窯が検出されたことから、この丘陵部に散発的に人の出入りがあったことは事実として認識される。各調査地点は、後世の地形改変や自然地形であることが判明した。

E地点で確認した地震痕跡は、昭和2(1927)年3月の丹後地震に起因するものとみられ、調査地の南西約400m付近を南東から北西に走る郷村断層の影響を強く受けたと判断される。

(竹原一彦)

(3) 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓

1. はじめに

浅後谷南城跡は、竹野郡網野町高橋地先の丘陵尾根上に所在し、国営農地郷1団地造成に先立って尾根先端部で発掘調査を実施した。調査によって城跡関連遺構を検出するとともに、下層から新たに弥生時代の墳墓も併せて検出した。新規に弥生時代墳墓を検出したことから、網野町教育委員会の指導の元、墳墓に関しては浅後谷南墳墓の遺跡名称を与えることとなった。

浅後谷南城跡は、日本海に注ぐ福田川の河口から約2km上流の右岸丘陵上にある。城跡からの眺望はよく、西側眼下に狭長な平地が広がっている。調査地点は、城跡が存在する尾根の先端部、標高約28m付近の平坦部が対象となった。

現在、調査によって検出・出土した遺構・遺物について、整理作業を進めているところである。今回の報告は、主要遺構の概略報告にとどめ、詳細な報告は今後の整理作業の終了を待って行いたい。

2. 調査概要

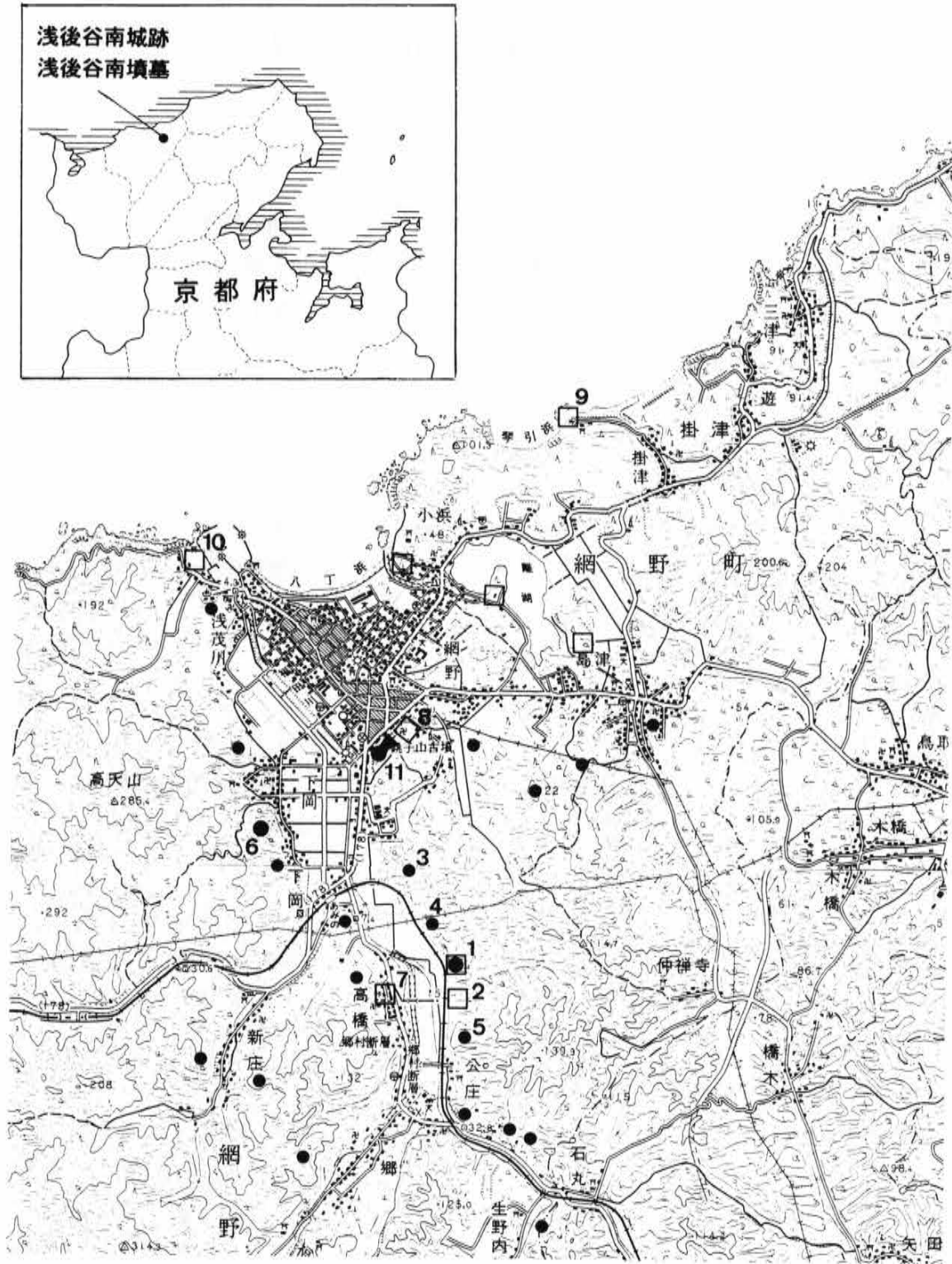
調査開始に際し、平坦部にトレンチを設定し、試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表下約40cmで風化花崗岩層の地山面を確認するとともに、それほど古くない耕作溝群と柱穴を検出した。検出した柱穴を城跡関連遺構と判断したことから、その後は試掘トレンチを拡張して平坦面のほぼ全面と斜面の一部を調査対象とした。

調査の結果、城跡関連遺構として、尾根上の平坦面から掘立柱建物跡1棟と建物を囲む柵列を検出した。また、近世頃と判断する墓1基(SX1)を検出した。城跡関連遺構の精査を実施したところ、建物跡の周辺に土色・土質の変化が確認できた。さらに、周辺の精査を進めた結果、平坦面からあらたに弥生時代の埋葬施設9基を検出した。

(1) 浅後谷南城跡関連遺構

①建物跡SB1(第34図) 平坦面のほぼ中央付近で検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。建物跡は、軸線を尾根筋に合わせ、東西約2.7m×南北約2.4mの規模を測る。建物跡の主軸は座標北から西に約28°振っている。柱穴掘形は方形を呈し、一辺は50~60cm、深さは検出面(地山面)から35~40cmを測る。柱穴埋土の精査によって、建物には直径20cm前後の柱が使用されていたことが判明した。出土遺物として、建物跡の北東隅柱穴(P1)の埋土中から鉄製庖丁1点が出土した。

②柵列跡SA1 尾根平坦面の中央からやや西側に片寄って、建物跡の3方向を取り巻く状況で検出した柵列である。柵列は、平地や谷部に面する3面に配置されている。平坦地の北側は尾根筋の上部方向となるが、調査対象範囲外となるため柵列の延長については確認できない。柵列

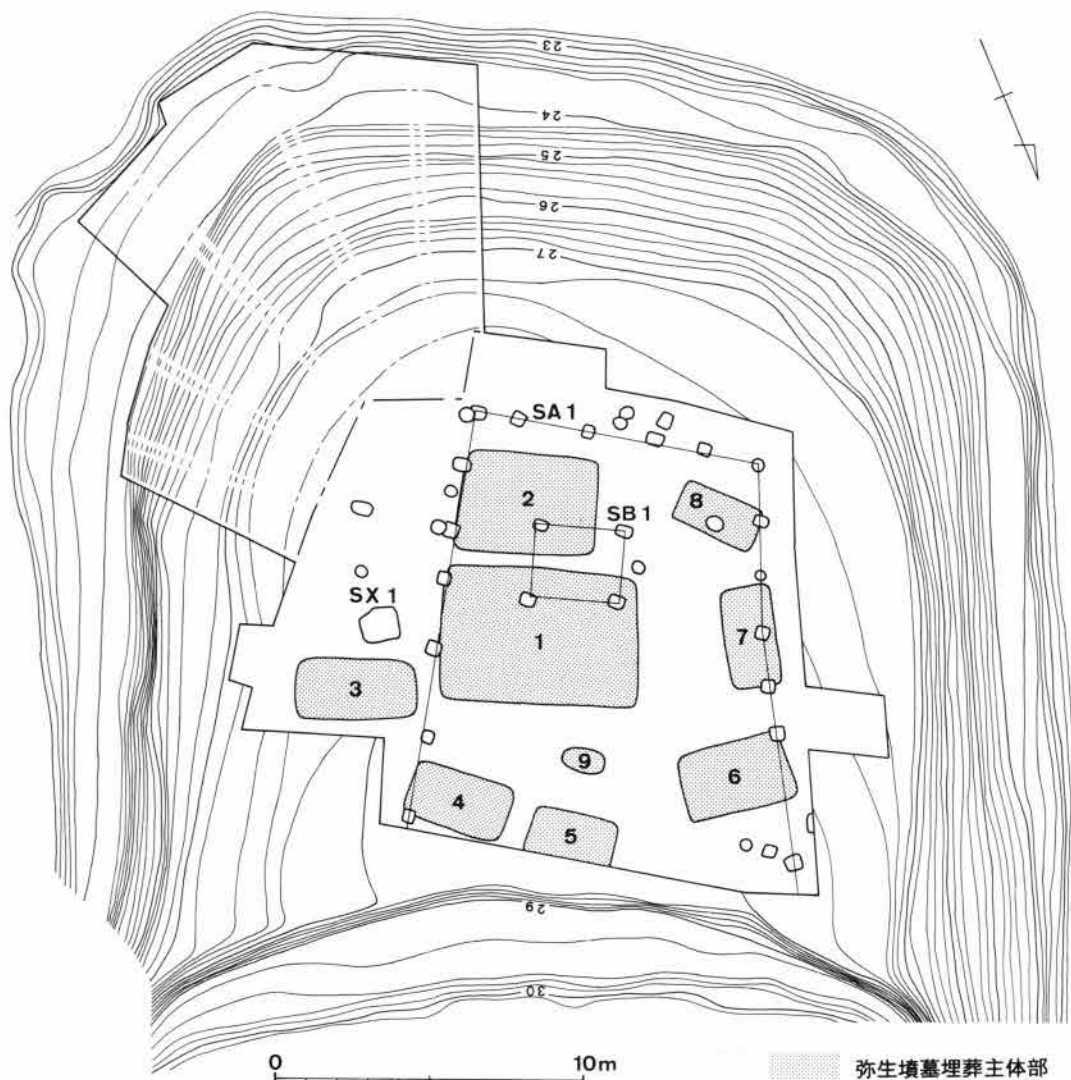


第31図 弥生遺跡・山城跡分布図(1/50,000)

- | | | | |
|------------------|-----------|-------------|-----------|
| 1. 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓 | 2. 浅後谷南遺跡 | 3. 勝山城跡 | 4. 浅後谷北城跡 |
| 5. 公庄城跡 | 6. 下岡城跡 | 7. 高橋遺跡 | 8. 林遺跡 |
| 9. 琴引浜遺跡 | 10. 浅茂川遺跡 | 11. 網野銚子山古墳 | |
| □. 弥生時代遺跡 | ●. 山城跡 | | |



第32図 調査地周辺地形図



第33図 浅後谷南城跡検出遺構平面図

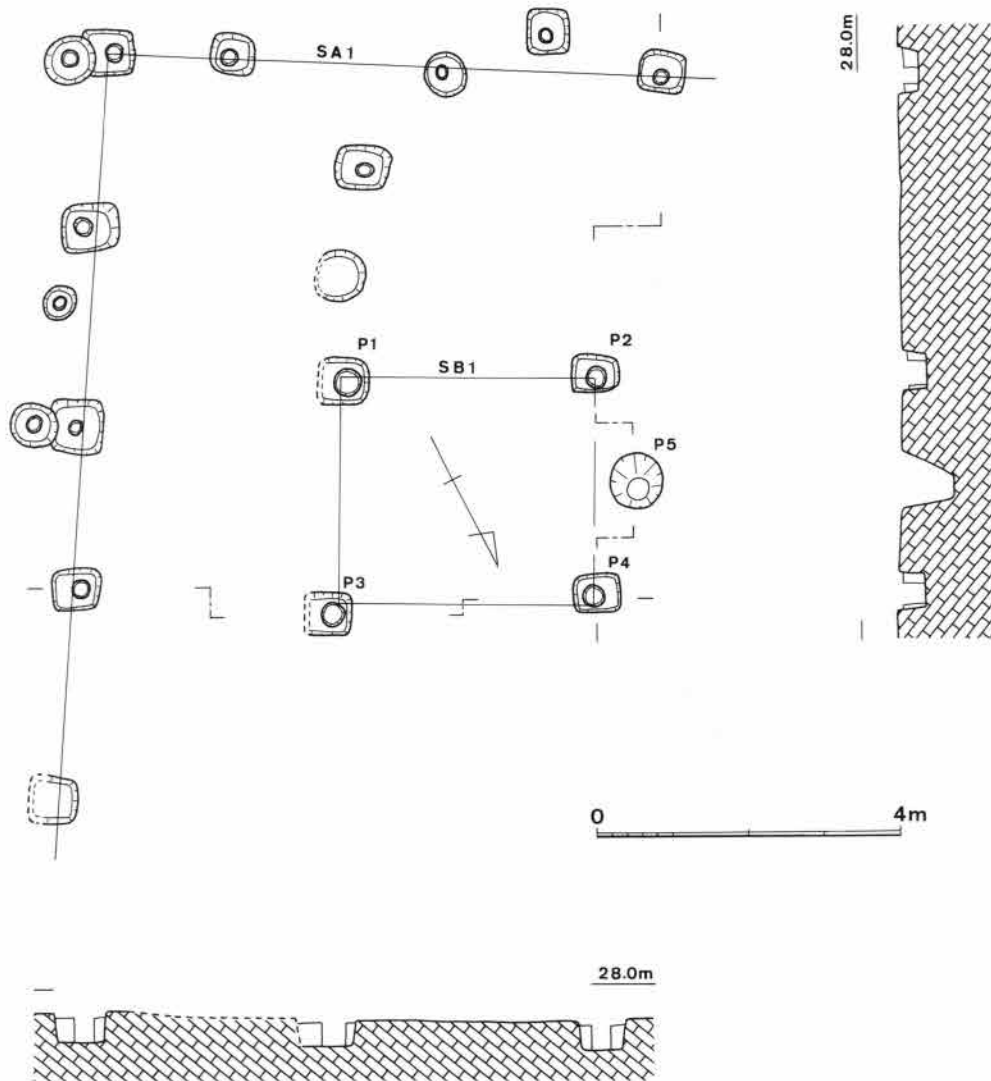
の柱穴掘形の大多数は方形掘形であるが、一部の柱穴に円形掘形が認められる。掘形規模は、建物跡の柱穴掘形に比べやや小規模となる。掘形の埋土に残る柱痕跡は、直径約15cm前後の規模であった。柵に伴う柱穴は一部に重複する事例があり、部分補修が行われたと判断される。

(2) 浅後谷南墳墓関連遺構

平坦地の中央から、墳墓の中心埋葬主体部と判断される第1主体部を検出した。さらに、第1主体部を取り巻く状況で、8基の埋葬主体部(第2～第9主体部)を検出した。このうち、第9主体部は墓壇の規模・形状から無棺の土壇墓と判断される。他の第1～第8主体部については、木棺が使用されている。

墳墓は、尾根筋の上部側を大規模に削り、一辺約20mの方形で平坦な墓域を削り出している。限られた範囲の調査であったため墳墓の全容に不明な点が多いが、確認した限り墳墓斜面も地山削り出しによる整形を行っている。

今回の報告では、墳墓の中心主体部である第1主体部の遺構について述べる。



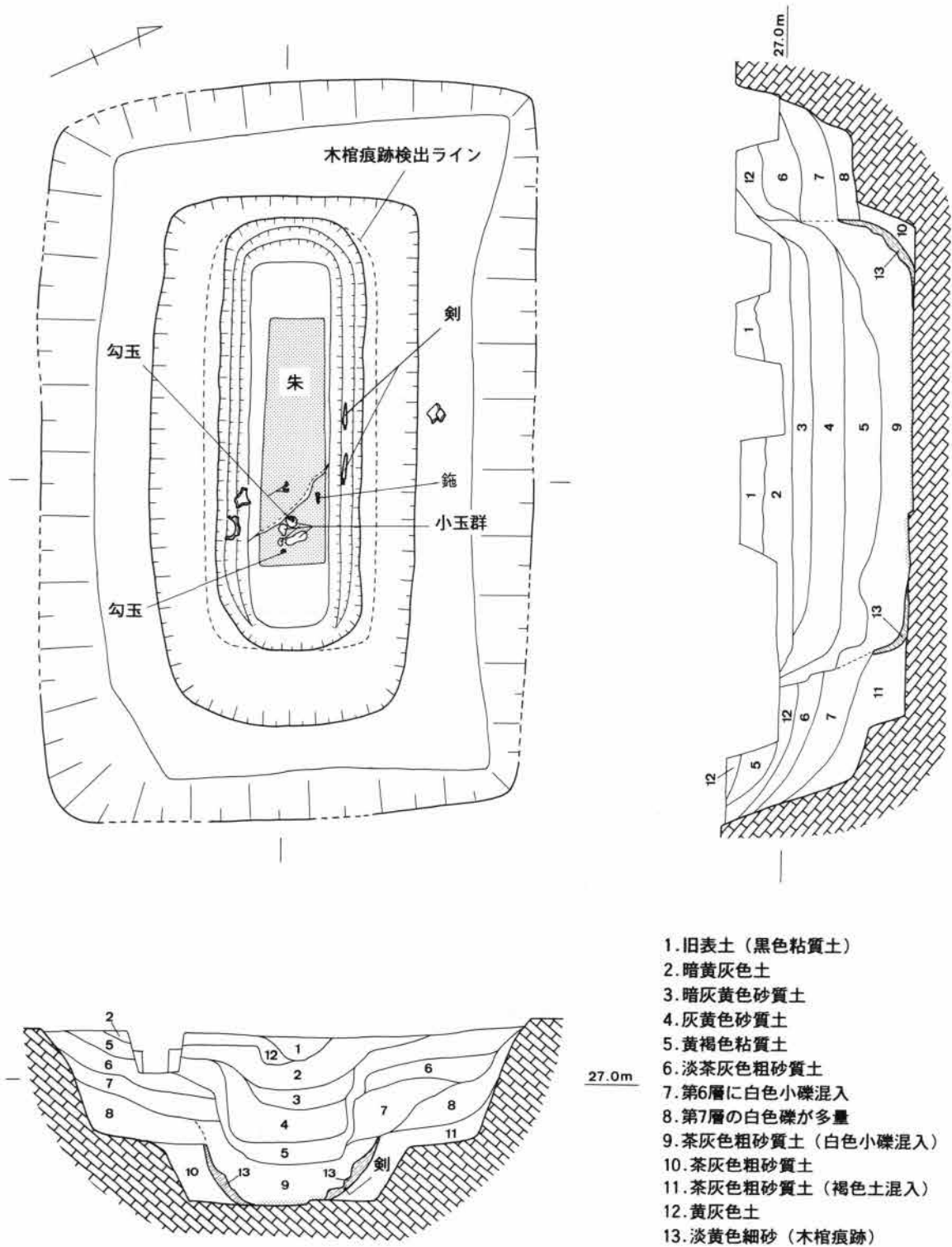
第34図 掘立柱建物跡SB1実測図

第1主体部(第35図)は、墳墓の中央部に設けられた大型の埋葬施設である。墓壙の主軸は尾根筋に直交する。墓壙は、比較的幅広な長方形を呈し、地山を二段に掘り下げた二段墓壙と称される掘形をもつ。墓壙規模は全長約6.5m×幅約4.3mで、一段目墓壙底までの深さは約1.2mを測る。墓壙壁面の立ち上がりはきつく、立ち上がり角は約71°である。壁面の四隅の仕上げは、地山の岩礫脈が露出する南西隅を除き、残る3方の隅部は比較的角立って仕上げられている。

一段目の墓壙底の中央には、木棺据付けの墓壙がさらに掘り下げられている。この二段目の墓壙は、木棺より一回り大きく掘り下げられ、木棺外部は裏込めを行っている。二段目の墓壙規模は、全長約4.6m×幅約2.3m×深さ約0.5mを測る。墓壙底は水平で平坦に仕上げている。墓壙底の東部には斜行する地震のズレ(上下約3cm)が認められた。

二段目の墓壙検出時点の精査によって木棺痕跡を確認した。木棺痕跡は裏込め土や棺内の崩落土とは明瞭に異なり、淡黄色系の細かい砂粒として3～5cmの厚み幅をもって検出できた。木棺

痕跡にみる平面形は隅丸長方形であり、全長約4.0m×幅約1.55mを測る。墓壙埋土の断面によって確認した木棺痕跡の形状から、この主体部には舟形木棺が使用されたことが判明した。木棺痕跡の上端から棺底面までの深さは約70cmを測る。棺内底面には鮮やかな発色をもつ朱が、全長



1. 旧表土 (黒色粘質土)
2. 暗黄灰色土
3. 暗灰黄色砂質土
4. 灰黄色砂質土
5. 黄褐色粘質土
6. 淡茶灰色粗砂質土
7. 第6層に白色小礫混入
8. 第7層の白色礫が多量
9. 茶灰色粗砂質土 (白色小礫混入)
10. 茶灰色粗砂質土
11. 茶灰色粗砂質土 (褐色土混入)
12. 黄灰色土
13. 淡黄色細砂 (木棺痕跡)

第35図 浅後谷南墳墓第1主体部実測図

約2.2m×幅40～60cmの範囲に散布されている。特に、被葬者の頭部とみる東側の朱は発色も鮮やかで、厚みをもっている。一方、足元側とみる棺内西部の朱は薄く、散布された範囲(幅)も頭部側に比べ40cmとその幅を減じている。

副葬品として、棺内の頭部付近に多量のガラス製玉類と鉄製鈍1点が認められる。玉類としては勾玉5点、小玉は200～300点にのぼる。勾玉の内2点は、小玉群から30cm程度西に離れている。小玉出土地点は、朱散布範囲の東端に近く、近接しながらもおおよそ3～4群に分かれる。勾玉3点はこの小玉群に混じって出土した。特に、小玉群の内、東端の1群は整然と並ぶ小玉列で構成されている。小玉の周辺及び直上に薄い木質痕跡が存在したことから、3点の勾玉を含む小玉群は束ねられた状態で、木箱などに納められていた可能性が高い。なお、先述の2点の勾玉は被葬者の胸元付近に位置すると判断される。

棺外遺物と判断するものに鉄剣2点と甕の破片がある。鉄剣2点は、木棺北側側面の木棺痕跡(淡黄色系砂)中から出土した。2点の鉄剣は、棺内底面から約10cm上部に位置している。このような出土状況から、鉄剣は木棺腐朽に伴って棺外の上部から落ち込んだ可能性が高い。鉄剣の元の位置は、棺身上端付近であったと判断される。鉄剣は、それぞれ切っ先を西に向け、約20cmの間隔を保って出土している。なお、個々の鉄剣の出土レベル高はほぼ同一であった。

棺内の崩落土及び一段目墓壙底面から、弥生時代後期の甕の破片が出土した。出土した甕は同一個体であり、いわゆる破碎土器供献と認識されるものである。また、墓上でも土器供献があったとみられ、旧表土と判断する黒色粘質土中から高杯破片が出土している。

3. まとめ

浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓の調査は、当初目的とした城跡施設を検出するとともに、新たに弥生時代の墳墓の存在を確認し、多くの成果を得ることができた。

城跡関連施設としては柵列・建物跡を検出し、遺構の状況・立地などから物見櫓と判断されるものである。建物跡などに伴う遺物がほとんどなく時期確定にいたらないが、中世山城の一施設と判断される。周辺の山城として調査地の北約200mに浅後谷北城跡(城主不明)、同方向約700mには勝山城跡(城主：高屋治部左衛門)、南約500mには公庄城跡(城主：森忠左衛門)などの山城跡が丘陵上に点在する。今回検出した城跡施設も、これらの中世山城と密接な関係にあったとみられる。

弥生時代墳墓は、同時に範囲確認を主眼に調査を実施した浅後谷南遺跡(調査地の南約100～200m)と、特に密接な関係であったと判断される。両遺跡の位置関係、同時期の遺構・遺物の存在・内容などから、浅後谷南遺跡は集落であり、集落内の指導者層の墓が調査を実施した丘陵部に葬られたと判断される。今回検出した第1主体部は、同時期の丹後地域の墳墓の中でも墓壙規模が傑出したものである。副葬品・多量の朱の散布などの内容から、第1主体部の被葬者は眼下の福田川流域を統括した指導者層の一人と判断してよからう。

なお、調査地点の尾根上部側には、調査地とほぼ同規模な平坦面が階段状に存在する(第32図)。

また、同丘陵の最高所には浅後谷南古墳群が存在する。今回の調査成果を考えると、この丘陵部には弥生時代墳墓・古墳・中世山城施設が複合しながら、さらに幾つか存在する可能性が高い。

今後、継続中の整理作業を進めることにより、さらに遺跡の性格を明らかにしていきたい。

(竹原一彦)

付表4 浅後谷南墳墓埋葬主体部一覧表

番号	墓 墳		木 棺		出 土 遺 物	備 考
	形態	規模(m)	形態	規模(m)		
1	二段	長 6.5 幅 4.4 深 1.7	舟形	長 4.0 幅 1.55 深 0.7	棺内；勾玉5 小玉200~300 鉢1 棺外；鉄剣2 甕破片 墓上；高杯破片	棺内底面に朱玉はガラス製 破碎土器供献
2	二段	長 4.6 幅 3.1 深 1.5	舟形	長 3.9 幅 1.4 深 0.7	棺内；鉄剣2 棺外；甕破片 墓上；	棺内底面に朱 破碎土器供献
3	二段	長 3.6 幅 2.0 深 0.6	割竹	長 2.6 幅 0.85 深 0.45	棺内； 棺外；甕破片 墓上；	破碎土器供献
4	二段	長 3.2 幅 1.8 深 0.8	箱形	長 2.0 幅 0.5 深 0.4	棺内；勾玉1 棺外；甕破片 墓上；	玉はガラス製 破碎土器供献
5	二段	長 2.8 幅 (1.6) 深 0.7	割竹	長 2.0 幅 0.65 深 0.35	棺内； 棺外；甕破片 墓上；	一部調査地外 破碎土器供献
6	二段	長 3.7 幅 2.5 深 0.9	舟形	長 2.3 幅 0.65 深 0.5	棺内； 棺外；壺・蓋・甕破片 墓上；	破碎土器供献
7	一段	長 3.1 幅 1.8 深 0.9	割竹	長 2.1 幅 0.65 深 0.45	棺内； 棺外；高杯破片 墓上；	破碎土器供献
8	一段	長 2.8 幅 1.4 深 0.8	割竹	長 2.0 幅 0.5 深 ?	棺内； 棺外；甕破片 墓上；	破碎土器供献
9	一段	長 1.4 幅 0.8 深 0.5	なし			楕円形土墳墓

(4) 浅後谷南遺跡

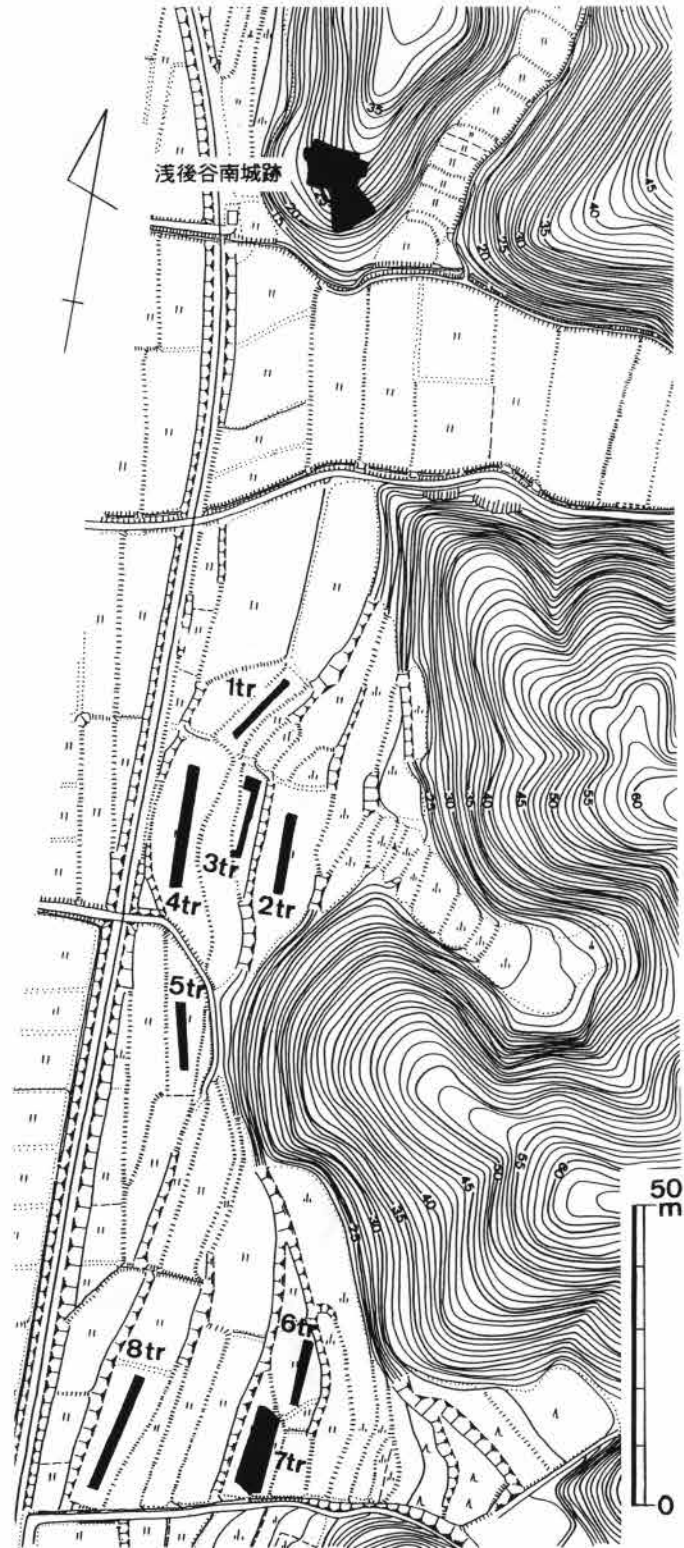
1. はじめに

浅後谷南遺跡は、京都府竹野郡網野町字公庄に位置する。先述の浅後谷南城跡から南方向に見下ろす水田地に当たっている。標高は約15~25mを測る。国営農地郷1団地造成工事に先立って、遺跡の範囲確認を主目的とする発掘調査を実施した。調査の結果、主に弥生時代後期・古墳時代前期・平安時代の遺構・遺物を数多く検出することができた。調査対象地は南北約300m・東西約100mを測る広大なものであるが、ほ場整備により深く掘削される水田部についてトレンチを設定した(第36図)。掘削トレンチは、主として幅2~3m・長さ20~30mの細長いもので、合計8本(1~8トレンチ)とした。

現在、遺構・遺物について整理作業を進めている。今回は、特に遺構と遺物の存在が顕著であった7トレンチの、古墳時代前期の導水施設を中心に報告する。その他のトレンチにおける成果は、全体の整理作業後に行う予定である。

2. 調査の経過

掘削は、10月15日より各トレンチ端の2m四方を人力で掘り下げることから始めた。そこからの出土遺物や土層断面の観察を実施した後、重



第36図 浅後谷南遺跡トレンチ配置図

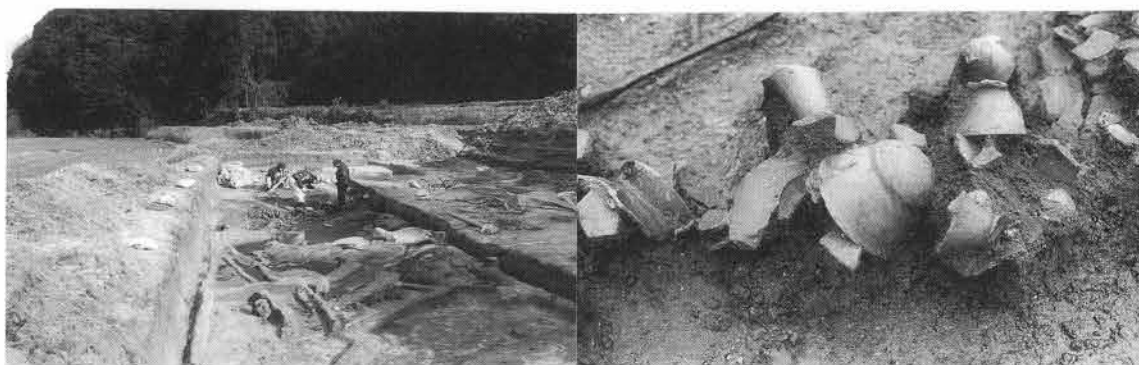
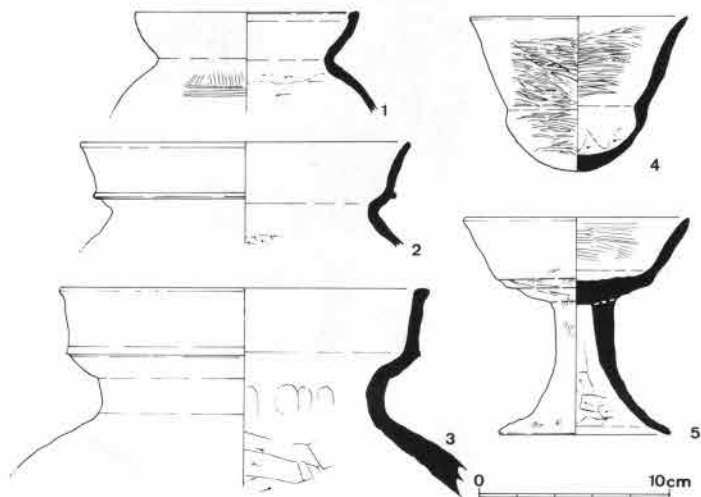


写真1 土器溜まり実測風景

写真2 小型丸底壺(4)出土状況(流路1)

機により遺構・遺物の多くみとめられた層位まで、ていねいに掘り下げていった。重機掘削の終了したトレンチから、再び人力で遺構検出作業にはいった。重機掘削の時点から大量の土器が出土した7トレンチと3トレンチの精査は、たいへん難渋し、最終日である翌年の2月26日までかかった。3トレンチからは、自然流路内で弥生土器及び古墳時代前期かけての土師器が多量に出土した。7トレンチからは、遺構では平安時代～古墳時代の柱穴痕や、古墳時代前期の流路跡が検出され、遺物では主に弥生時代～古墳時代前期の土器が多量に出土している(第37図、写真1・2)。3・7両トレンチの土器溜まりの精査をほぼ終え、かつ他のトレンチの状況も明らかになった1月29日に、浅後谷南城跡とあわせて現地説明会(参加者約50名)を開催した。さらに、2月5日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影及び図化作業を業者委託により実施した。調査も終盤となった2月9日、7トレンチの流路跡(土器溜まり)の下層から新たな流路跡を検出し、その流路底から梯子や板状木製品が出土した。また、その東側を掘削した結果、大がかりな導水施設を検出するに至った。2月19日ようやく導水施設の全体を出し切り、写真撮影や実測などの最終的な記録作業をすすめた。2月25日に導水施設一式の取り上げ作業を行った後、2月26日にすべての作業を終了した。



第37図 流路内出土土器(導水施設より上層)

4は、写真2

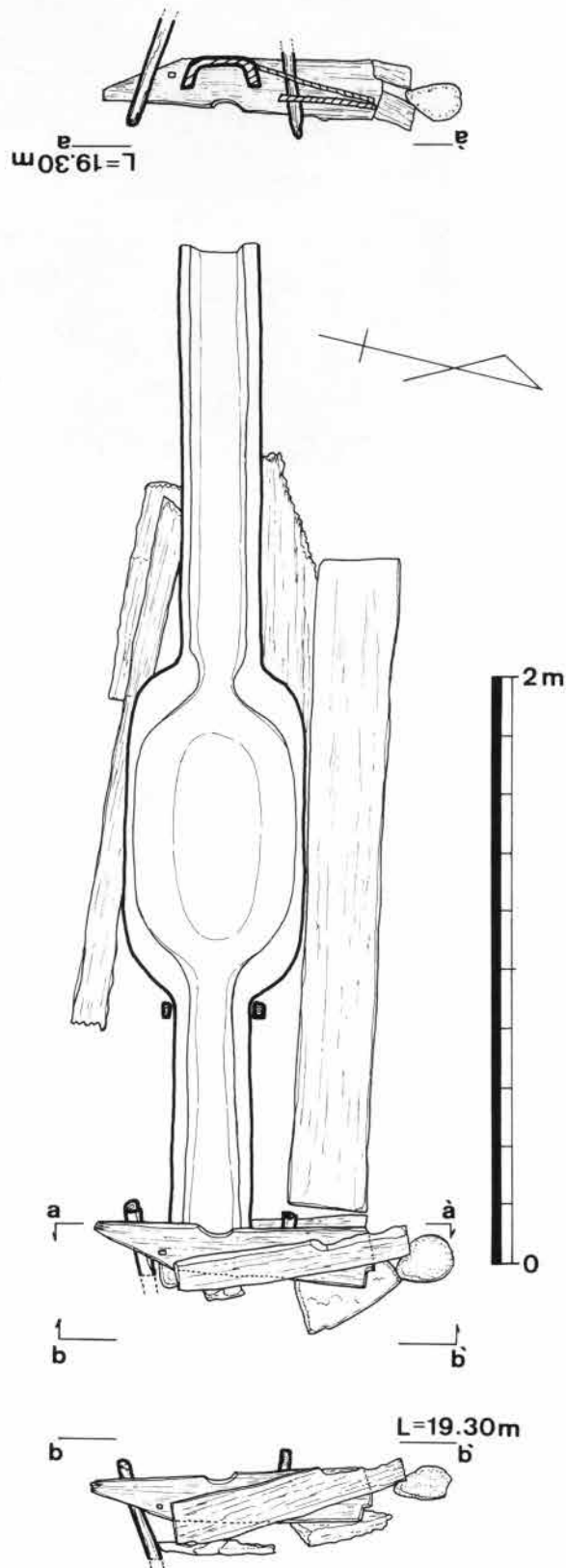
3. 調査概要

ほとんどのトレンチで水田耕作土、さらに灰褐色砂質土(10cm前後)の直下で平安時代の遺構・遺物を含む暗灰褐色系の細砂質土の堆積が認められた。7トレンチでは、この面で直径20～25cmの多数の円形柱穴痕や、溝状遺構を検出した。さらに下層では、赤味がかった暗黒褐色系粘質土を埋土とする柱穴痕や、自然流路跡・溝状遺

構などが検出され、共伴する遺物から古墳時代前期のものであることがわかった。この時期の掘立柱建物跡が存在するかは検討中である。数本の自然流路の切りあう暗黒褐色土層の下は、暗青灰色砂粒の広がり認められ、扇状地内における氾濫原を形成しているようである。暗青灰色砂粒には、弥生時代後期の土器を多量に含んでいる。以上のことから、浅後谷南遺跡が少なくとも弥生時代後期・古墳時代前期・平安時代の遺構・遺物を包蔵する複合遺跡であることが明らかとなった。以下、調査の最終段階、7トレンチから検出した導水施設(第38図・写真3)について記しておきたい。

導水施設は、トレンチを北東から南西方向に流れる小規模な流路跡の北岸に接岸した状態で検出した。流路跡の現存する規模は、長さ約13m分・幅2～3m・深さ約0.3mを測る。

導水施設の本体は一木造りで、全長約3.5mを測る。中間部に水貯め用の槽(約1.1m×約0.6m)を、その前後に樋(幅約0.29m)をもつ特異な形態である。下流側の出水口のか所は、上流側の入水口とは異なり、内側に滑らかな絞込みの造作が認められる。約0.1m前後の深さをもつ槽も滑らかな仕上がりである。また、上流側の端部は横板と杭を用いて簡便なせき止めを行っている。横板の上辺は、樋に水が落ちるようにほぼ半円形に抉られている。この横板は、何らかの転用部材と思われる。さらに、この本体の北側に密接して足場用の板が設置されている。出土遺物は、古墳時代前期の土師器(布留式)や桃の果核が出土している。所属時期は4世紀前半といえる。



第38図 導水施設実測図



写真3 7トレンチ導水施設検出状況(東から)

この導水施設から下流約4 mのところで、梯子と板状木製品が出土している。これらは原位置をとどめない。

4. まとめ

今回の調査では、8か所のトレンチを設定し掘削を開始したが、すべてのトレンチで、遺構・遺物を検出した。主に、弥生時代後期・古墳時代前期～平安時代の自然流路、溝状遺構、柱穴痕(掘立柱建物跡)である。平安時代及び古墳時代の掘立柱建物跡の広がり、各トレンチの柱穴痕の存在状況からわかる。さらに、古墳時代前期の流路跡の検出は著しく、土師器を大量に投棄しているもの、木製品(杭・導水施設)を据え付けているものなどがある。投棄された土器は、小型丸底壺と高杯が高割合を占め、体部に穿孔をもつものが含まれていることや、多くの桃の果核が出土していることから、祭祀的な性格がうかがえる。1993年までのデータであるが、京都府内には、溝・河川を対象とした祭祀遺跡(遺構を含む)はおよそ10か所で知られている^(注4)。さらに、古墳時代前期(布留式期)の導水施設は、形態的に前例がなく、貴重な資料となろう。古墳時代の導水施設は、奈良県南郷大東遺跡^(注5)・三重県城之越遺跡^(注6)・長野県屋代遺跡群^(注7)などで報告されている。多くの事例が、導水施設の農耕儀礼に伴う流水・湧水祭祀的な側面と、水利・灌漑などの実用的な側面から記述されている。本例も、複数の性格をもつといえる。

今回の調査では、多くの遺構・遺物を検出したことから、この遺跡の周辺は古くから集落の拓けた地域であることが明らかとなった。3トレンチからは、浅後谷南城跡の下層から検出された弥生時代後期後半の墳墓と同時期の遺物も多量に出土している。ある時期、墓と集落の関係を築いていたのであろう。さらに、流路跡に伴い、多量の古式土師器(布留式)や、木製品・導水施設が出土した7トレンチは、浅後谷南遺跡全体の性格を考える上で多くの問題を提起したといえる。

(黒坪一樹)

(5) 芋野城跡

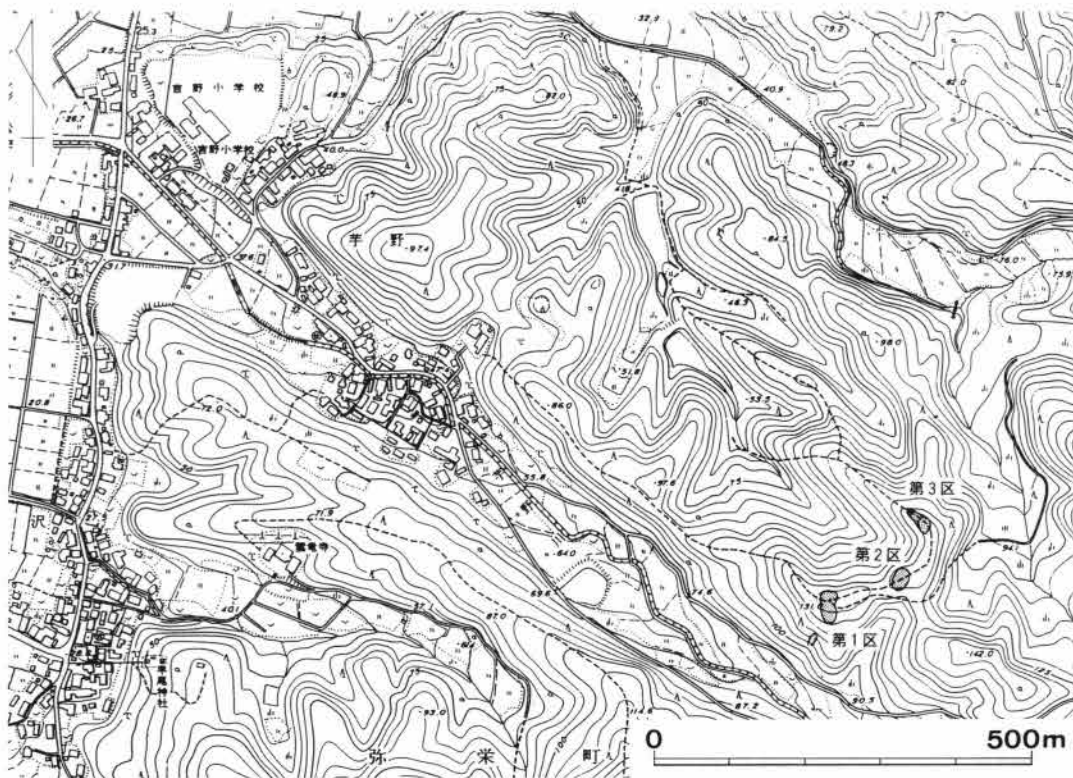
1. はじめに

芋野城跡は、京都府竹野郡弥栄町字芋野に所在する。この芋野という地名は、「丹後国竹野郡芋野郷採部古与曾赤春米五斗」と墨書された奈良時代の木簡が平城京から出土したことで著名である。奈良の平城京と丹後地方が、赤米を通じて交流していたことを具体的に示す資料である。

時代は下って、芋野城跡は中世の丹後地方を広く治めていた一色氏の居城の一つと考えられ、調査地周辺にはシミズ谷城・堤城・吉沢城・菩提城など、一村落一城といわれるほど多くの中世の山城が知られている。芋野城跡は、『京都府遺跡地図』によると、平野部に向かって東西にのびる尾根上にその範囲が推定されている。また、『竹野郡誌』によると、山城の本体(本丸)はよく残存し、石垣・土手・馬場・通路などを有しているようである。しかし、全体の規模や構造はまだ不明な点が多い。今回の調査地は、芋野城跡のなかでも、平野部からかなり奥に入ったところにある(第39図)。標高120~130mを測る3か所の尾根上の調査地(第1区~第3区)にトレンチを設け、山城関連の遺構検出をめざし調査を開始した(第40図・空中写真)。

2. 調査概要

トレンチは、古墳状隆起の頂部から斜面及び裾部にかけて広く設定した(第40図)。

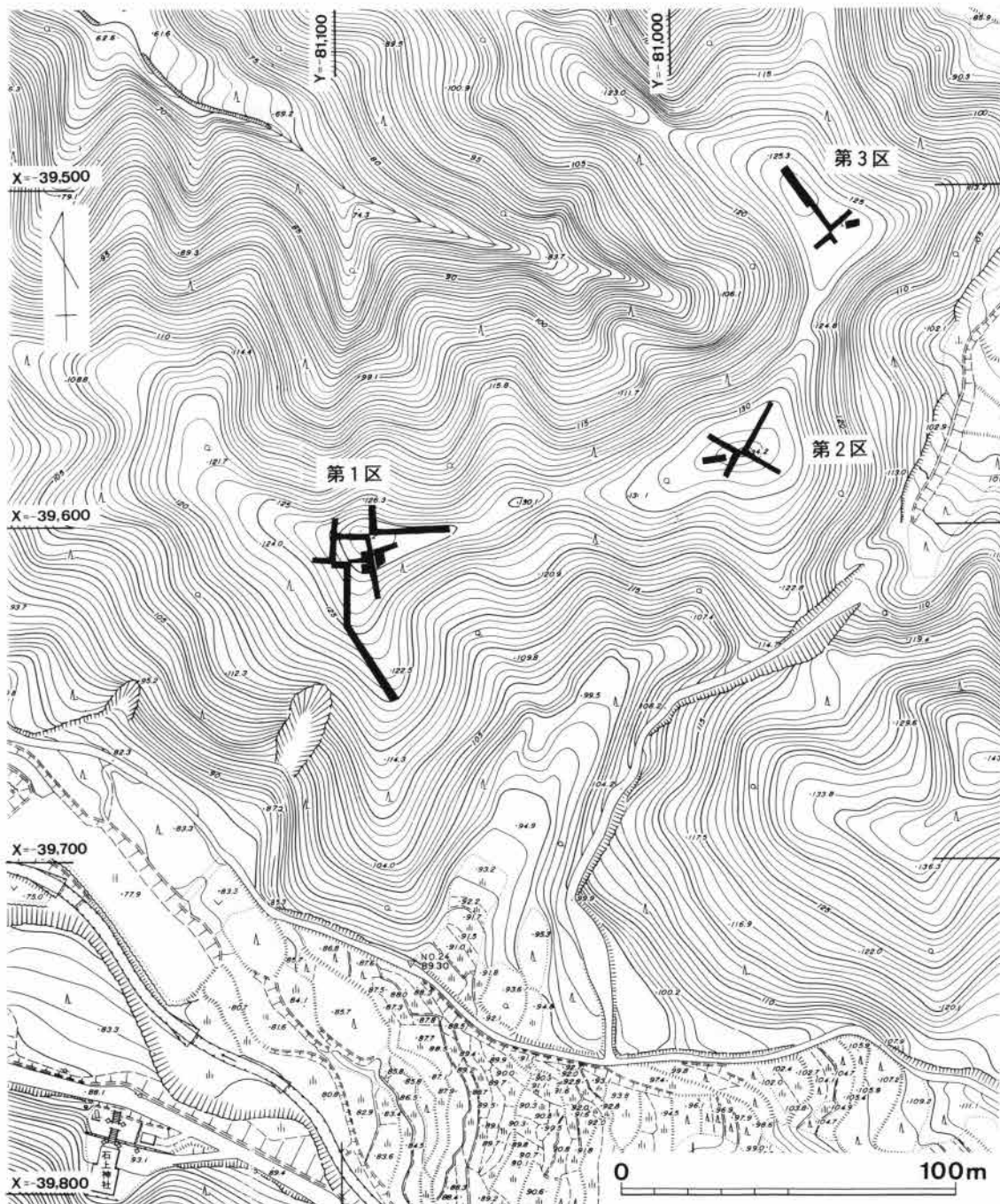


第39図 芋野城跡調査地位置図

第1区は、尾根の頂部(ピーク)が細い切り通しの道で二分される。その東側の頂部で赤褐色粘質土の堆積が約60cmの厚さで認められた。これは、切り通しの道をつける際に廃土が盛り上げられたものと考えられる。遺物は、表土直下で底部糸切りの土師器杯が1点出土した(第41図)。時期は、平安時代のものである。このことから、山城に関する何らかの遺構や、経塚や古墓などが存在した可能性を指摘できるが、今ではその痕跡は完全に失われている。

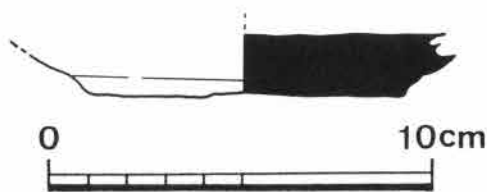
第2区は、浅い表土直下で堅い地山(岩盤)面となり、遺構の存在は認められなかった。四分法で設定したトレンチの中央部で、人頭大の円礫を確認したほかは、遺物の出土もみられない。

第3区は、最高位の古墳状隆起と思われたところは、表土直下で地山(岩盤)が露出し遺構・遺



第40図 芋野城跡調査トレンチ配置図

物は検出されなかった。これに続く尾根の裾部で、礫層や暗赤褐色粘質土層の厚い堆積を確認した(第42図)。岩盤までの堆積の深さは、深いところで約70cmを測る。出土遺物はなく、人為的な遺構の痕跡も認められないことから、トレンチを斜めに縦断する自然堆積層と考えられる。



第41図 芋野城跡土師器杯

3. まとめ

今回は、第1～3区でトレンチを設定して掘削した。その結果、第1区で土師器の断片が出土したほかは、芋野城跡に関する遺構・遺物は検出されなかった。山城跡に関する形跡がないことから、芋野城跡の範囲を再考する一つの材料を提供したといえる。しかし、広範囲にわたる芋野城跡の限られた部分の調査であるため、今後とも慎重な検討が必要である。

(黒坪一樹)



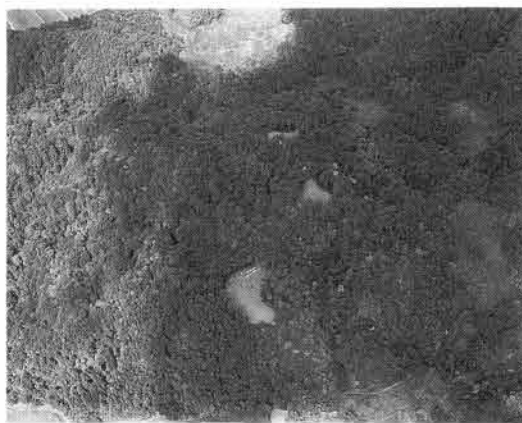
1



3

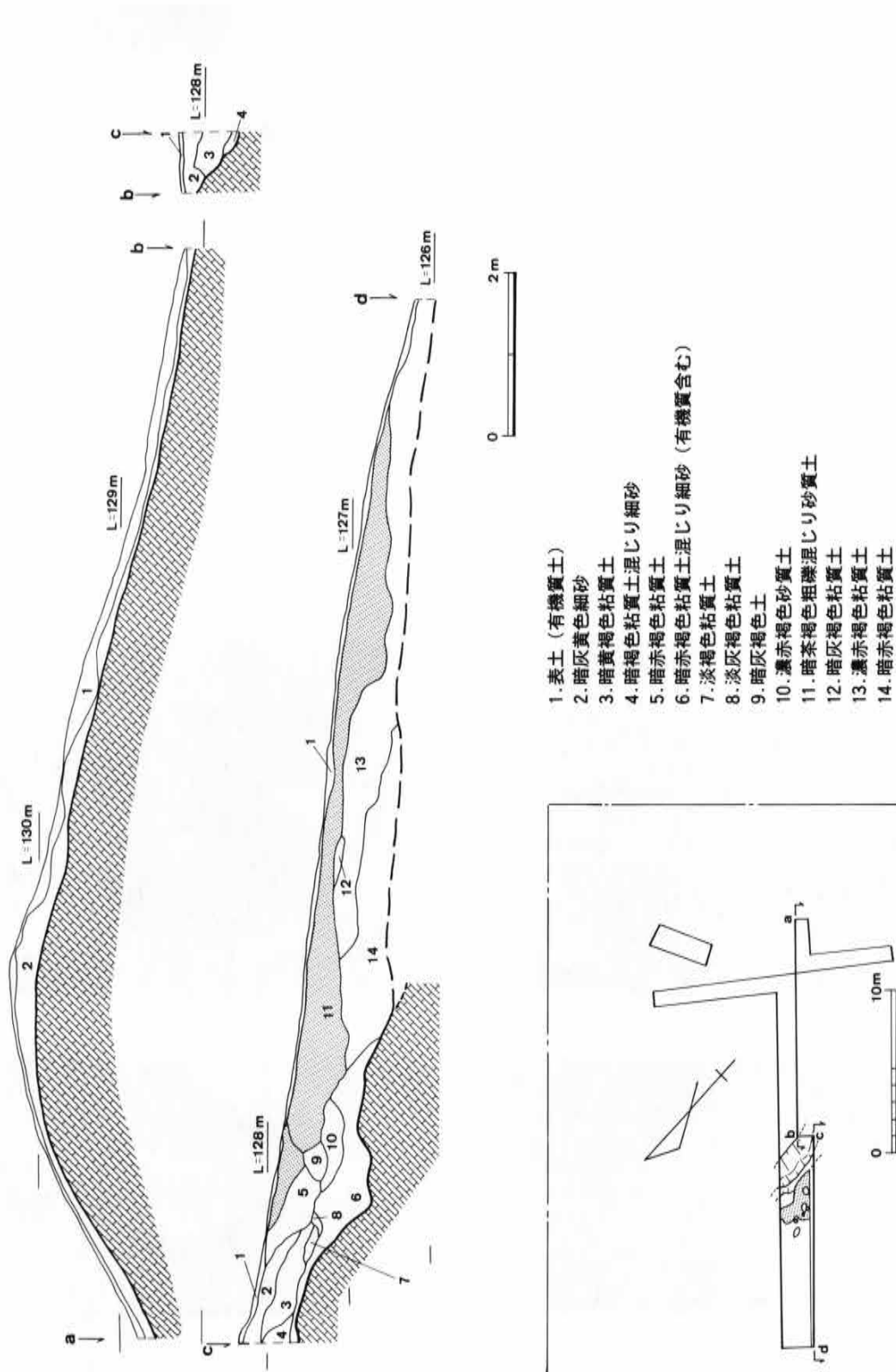


2



4

空中写真 芋野城跡(1・2)、調査地全景(3・4)



第42図 第3区トレンチ平面及び土層断面図

(6) 愛宕神社古墳群

1. はじめに

愛宕神社古墳群は、竹野川右岸の大成山から派生する丘陵上に位置する。調査地は標高78～80mの丘陵尾根上で、周辺は山林であった。なお、調査直前まで愛宕神社の社殿があった。西方眼下には堤の集落、水田が広がり、北方の溝谷地区の丘陵上には前期古墳の溝谷2号墳がある。さらに、竹野川を挟んだ対岸の丘陵には「青龍三年」銘鏡が出土した大田南5号墳など、大田南古墳群が眺望できる。

今回の調査地は、中世の城館跡に比定され、昨年度は調査地の南の丘陵上ではシミズ谷城跡を確認している。そして、この地は、当初は堤城跡とされ、昨年度、弥栄町教育委員会が試掘調査した結果、神社の境内が1号墳であることが判明した。これらの成果を踏まえて、今年度、当調査研究センターが1号墳及びその周辺の遺構を詳細に調査するに至った。

2. 調査概要

調査対象地は、1号墳・3号墳のほか、南方の尾根上に古墳状の隆起が見られたことから、対象面積を広げ、最終的に1,800㎡とした。1号墳は、前年の調査では表面の観察から方墳、主体部は木棺直葬墓、時期不祥であった。3号墳は、1号墳の北側で新たに発見したものである。調査の結果、前述の古墳状隆起には古墳に関連する遺構・遺物などは全くなかったが、中世末期の古墓、時期不明の小形炭窯を検出した。

(1) 1号墳(第43・44図、図版第35～37)

①墳丘(第44図)

愛宕神社の社殿が建立された時期(近世)に削平され、特に西斜面に石の階段が取り付けられた時期に開削が著しく、墳形がわかりにくい。しかし、墳丘基底部の北辺と南辺については、それほどの変更が見られず、南辺と北辺の一部は尾根筋に直交して削り出し、墳丘を整えている。墳丘上の盛り土は神社の造成に伴うものである。墳形は、一辺約20m・残存高約1.3mを測る方墳である。葺石・埴輪などの外表施設は認められない。

盛り土以下の層序は、(1)木痕が残存する淡緑灰色を呈する腐植土を多く含む砂質土(旧表土)。墳丘上の西半部に厚く堆積し、時期については不明である。(2)遺物を含まない地山である淡黄褐色土(主体部の基盤層)の層順である。

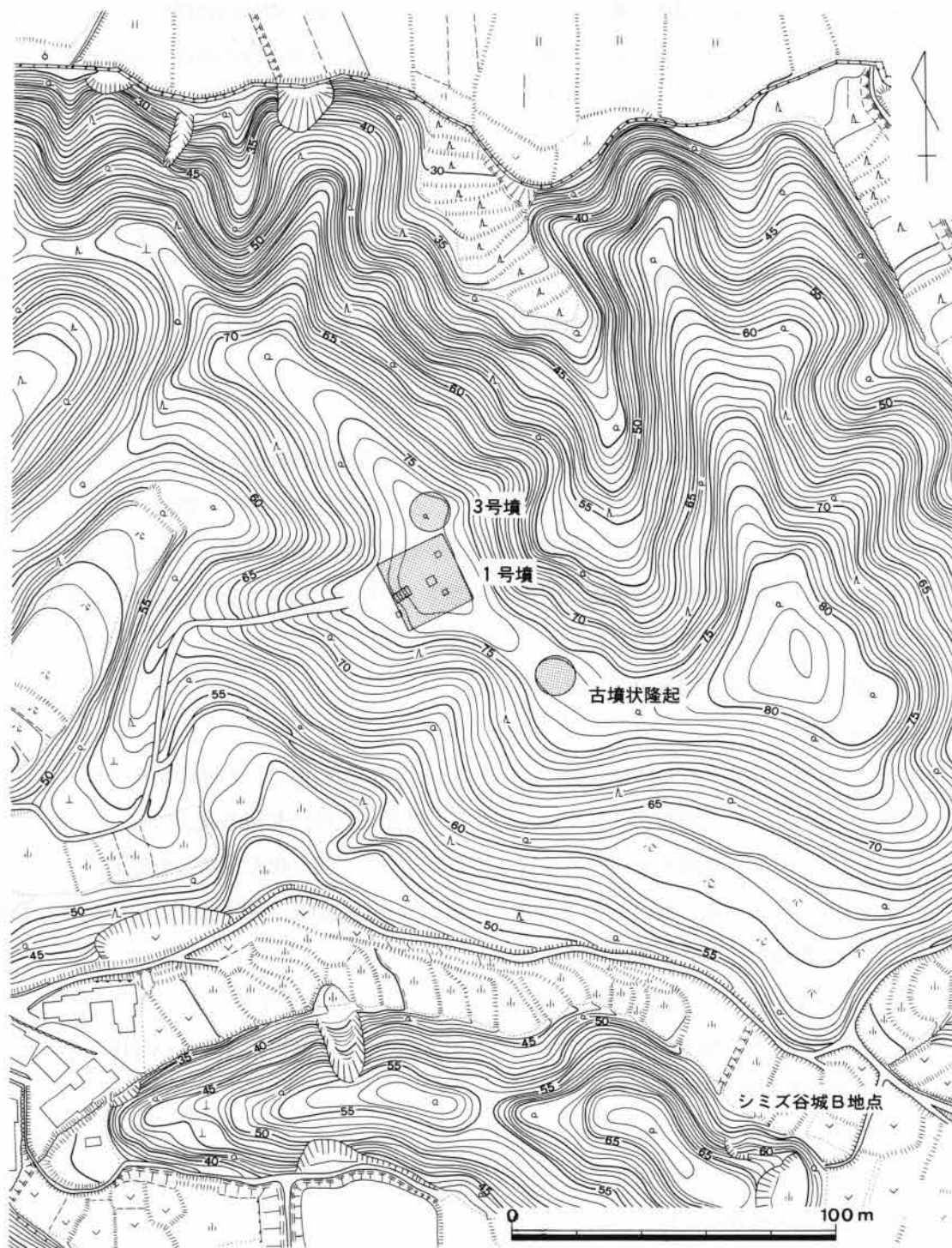
②主体部(第45図)

墳丘の中央部からやや東側で南北に主軸を持つ主体部を一基検出した。主体部は、二段に穿かれた墓壇に組合式木棺が据え付けられた、木棺直葬である。

墓壇の規模は、長辺約7m・短辺約2.6m・深さ約1mを測り、2段目直上までは約0.7mであ

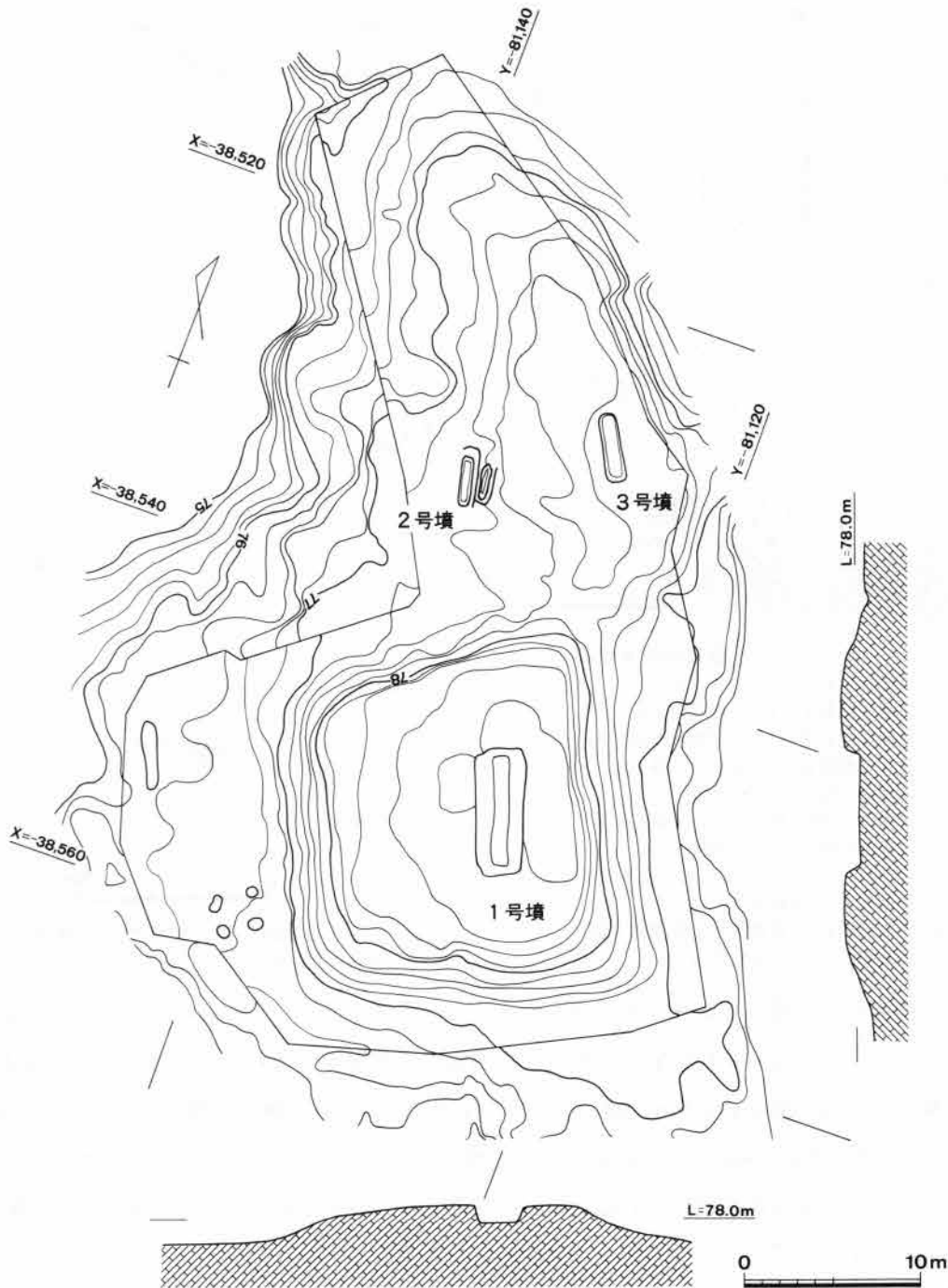
る。2段目の規模は長辺約6.5m・短辺約0.8m・深さ約0.3mを測り、木棺の大きさとほぼ同じであることから、木棺を設置するための土壇である。墓壇の底面の高低差は南側で3～4cm低い。

木棺の形態は、「H」型と呼ぶ組合式箱形木棺である。2枚の仕切り板と南端の白色シルトを積み上げて(ここにも仕切り板があった)、棺を大きく3室に分ける構造である。木棺の規模は、長さ約6.1m・幅(内法)は0.6～0.7mを測り、北側に行くに従って幅広になる。棺の側板痕跡は、厚さ5～7cm・残存高45cm、仕切り板の厚さは8～10cmを測る。

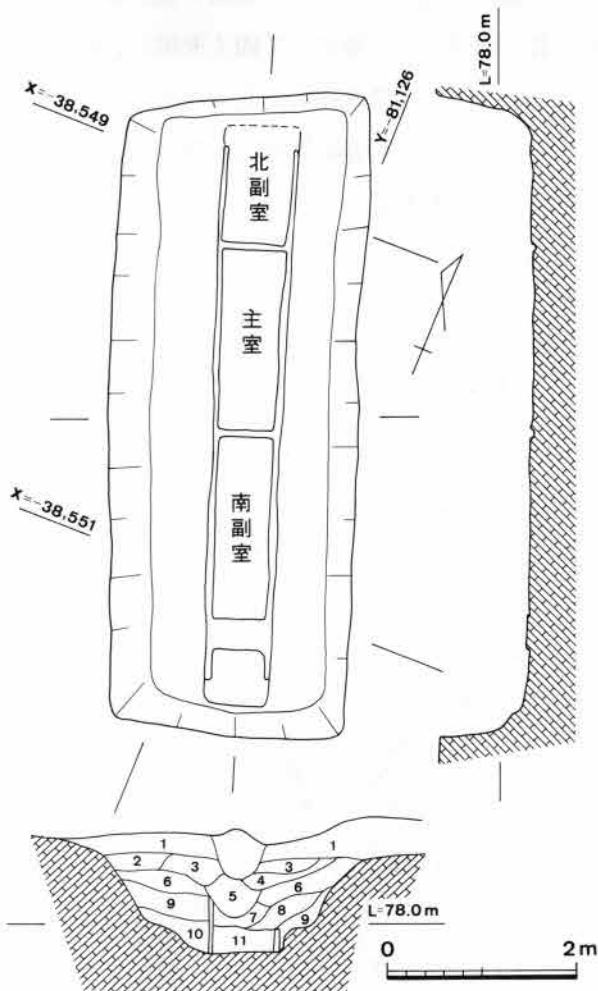


第43図 調査地周辺地形図(1/2,000)

木棺の埋設方法は、2段目の墓壇の底を棺底として東西に長側板を置き、仕切り板、白色シルトをはめ込む。それと同時に、側板の外側には粘土質、砂質土を互層にして固く充填し、棺の設置が完了する。棺底は南半が若干低いため、淡赤褐色土(地山)を敷き詰めて北の棺底と同一レベルにそろえている。棺底の板材は用いられなかったと思われる。棺蓋の有無は不明であるが、土層断面の観察から、ある一定期間に空間が保たれていたと思われる。

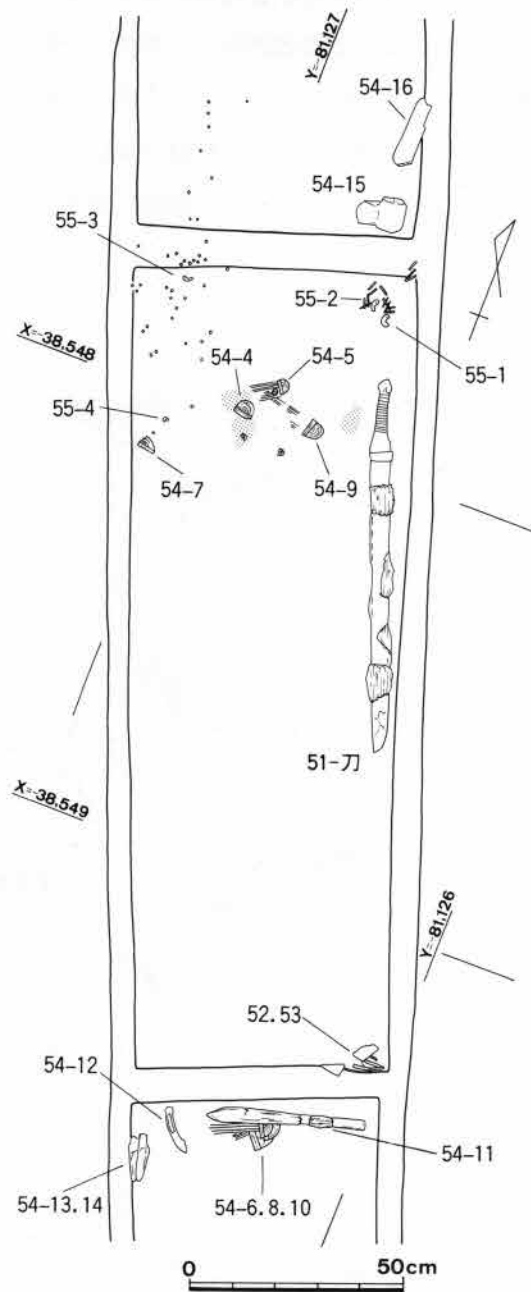


第44図 1号・3号墳地形図



第45図 1号墳主体部実測図

1. 黄褐色粘質土(白色シルト混)
2. 黄褐色粘質土(白色・赤褐色土混)
3. 黄褐色粘質土(白色・赤褐色土混)
4. 黄褐色粘砂質土(白色シルト多く混)
5. 淡黄褐色粘質土(白色土混)
6. 黄褐色土(灰色粘質土混土：崩落土)
7. 黄褐色粘砂質土(炭化物混)
8. 6に同じ(白色シルト多く含：崩落土)
9. 黄褐色土(灰色粘砂質土混土)
10. 灰色粘砂質土(黄褐色土・赤褐色土混)
11. 淡茶褐色粘質土(炭化物含)



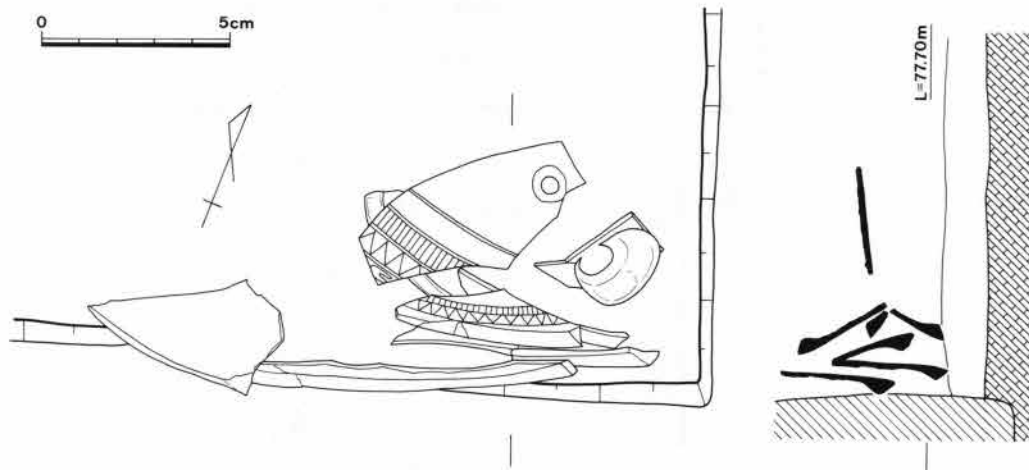
第46図 1号墳主体部詳細図
(番号は遺物実測図の番号、トーン部は朱)

木棺内の空間は前述のとおり3室に分かれる。この空間を北から「北副室」、「主室」、「南副室」と呼ぶことにする。各室の呼称名は、後述する遺物出土状況から便宜的につけたものである。各室の規模は、主室の長さ約1.9m・幅0.65~0.7m(北側が広い)を測り、棺底はほぼ水平である。南副室の長さ約1.9m・幅0.6~0.65mを測り、棺底は主室より2~3cm低いほぼ水平である。北副室の長さは、北端が崩壊しているため不明であるが、側板の長さは1m・幅0.7mを測る。

主室と南副室が同型、同規模であることが注目される。

③遺物出土状況(第46図、図版第37)

遺物は、ほとんど棺底から出土したもので、銅鏡、豎櫛1点以外はほぼ水平に保たれ、人為的



第47図 銅鏡出土状況実測図

に埋設されたものである。しかし、これらがすべて原位置にあるとは限らず、二次的に「移動」した状況もみられた。この観点から、各遺物の出土状況を検討し記述する。

主室 銅鏡2面(2型式：斜縁四獣形鏡、斜縁?)、鉄刀1口、玉類(勾玉4点、管玉18点、ガラス玉196点)、竪櫛大4点、小3点、水銀朱などが出土した。

銅鏡は、2枚とも棺の南東隅で、鏡片は8片が故意に分割され重ねられており、仕切り板に立て掛けられていた。鏡面はほとんど内側(被葬者)を向いている。鈕の残る破片鏡は、二次的に倒れたものである。鏡の破片は土圧によるものでなく、人為的な、いわゆる破碎鏡である。

鉄刀は、棺の東側板に沿い、刃部は外側に、切先を南に向け、ほぼ水平に置かれている。全長は87cmを測る。把には極細の糸がキメ細かく巻かれている。把頭は腐蝕が著しく、形態は不明である。刀身には鞘の木質があり、鞘口部分には黒漆が残存する。

竪櫛は、管内の北側中央部で中形3枚と小形3枚、西側板沿いで大形1枚を検出した。大小の櫛各1枚がセットとなり、3セットが半円状に櫛先を西、南西に向け配される。竪櫛の上面及び周辺には水銀朱が分布しており、被葬者の頭位にあたるものと推察される。西側板の櫛は、歯先を下方に向いており、側板に立て掛けていた。

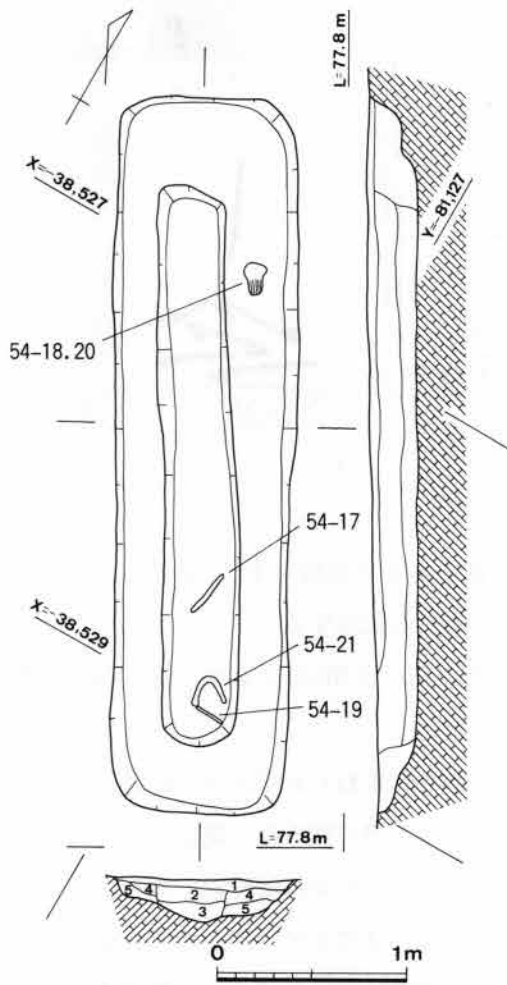
玉類は、棺の北部に集中し、おおきく東西に分かれる。東側は、勾玉2点と管玉18点が横並びする。管玉は糸で接続している。一方、西側は勾玉1点とガラス小玉の組み合わせが広く分布する。さらに、仕切り板痕跡にも小玉が点在する。側板の竪櫛付近でガラス小玉に混じって小さいガラス製の勾玉が1点あった。

北副室 直刀鎌1点、有肩鉄斧1点の農工具類、ガラス小玉が出土した。

鉄製鎌は、東の長側板に接し刃部は外側に向き、刃先は北に少し傾く。

鉄斧は、仕切り板の東側に沿って、刃先を棺底につけ側板に向ける。若干移動しているようで、もともと側板に立て掛けていたものであろう。

ガラス小玉は、主室から連続して分布しており、ばらまかれたものか、或いは棺上から落下したものである。



第48図 3号墳主体部実測図

- 1. 褐灰色粘砂質土
- 2. 黄褐色粘質土
- 3. 淡黄褐色粘砂質土
- 4. 黄褐色粘砂質土
- 5. 暗黄褐色粘砂質土

土は、腐植土混じりの黄灰色砂質土で、かなり砂質が強いことから、棺内はある期間空間が保持されていたと思われる。

③遺物出土状況

棺内から鉄剣、鉄製鋤先、鉈各1点、棺外から鉄鏃14点が出土した。これらは土層、棺底の形態などから原位置が保たれているとはいいがたい。鉄剣は、棺の中央、主軸よりかなり振れるが、ほぼ棺底に近い。切先は、南に向き水平を保つ。

鋤先は、棺の南端、歯先は北を向き東へ傾く。この下には鉈があり、刃部を北に向け、ほぼ水平に近い。

鉄鏃は、棺外東側よりの鏃先を北に向け束ねられている。鏃身と矢柄が一体になって残存しており、原位置からあまり動いていないと思われる。

(3) 中世末の古墓(第50図、図版第40)

古墓は、1号墳の南約20m、丘陵頂部で検出した。墓壙は長方形を呈し、その規模は長辺約

南副室 鉄剣1点、竪櫛3点、刀子3点が出土し、ほぼ原位置を保つ。

鉄剣は、仕切り板にほぼ平行、切先を西に向け水平に置かれる。柄、刃部に木質が残る。

竪櫛は、櫛歯の残りがよく、鉄剣の刀身の下から少しはずれているが3枚重なり合っていた。歯先は、いずれも西方向である。

刀子は、側板に沿って切先を南に向ける。3本のうち、東側の刀子は蕨手刀子で刃部を外側に向ける。他の2本は側板に接して刃部を内側に向けている。

(2) 3号墳(第48図、図版第38・39)

①墳丘

1号墳の北方約10m、主体部が木棺直葬の古墳である。墳丘は、後世の削平のため認められず、墳形及び規模は不明である。表土下30cmほどは1号墳の近世盛り土に似た土層であることから、愛宕神社の造営時に改変され、植林時の耕作跡とも考えられる。

②主体部

墓壙は、南北に主軸を持つ長方形を呈し、その規模は長辺約3.8m・短辺約0.9m・深さ約0.3mを測る。棺の形態は、小口が丸みを帯び、棺底が湾曲していることから、舟形木棺である。棺の規模は長辺約3.3m・短辺約0.4m・深さ約0.3mを測る。堆積

0.9m・短辺約0.6m・深さ約0.5mを測る。堆積土は主に淡黄灰色の砂で、一部棺側の朽ちた痕跡があった。出土遺物は、鉄製釘、小刀、土器などがある。釘は、棺底と側板の中段で出土した。小刀は棺底で、土器は土壌の上面で出土した。

3. 出土遺物

a. 1号墳出土遺物

①鉄刀(第51図、図版第43)

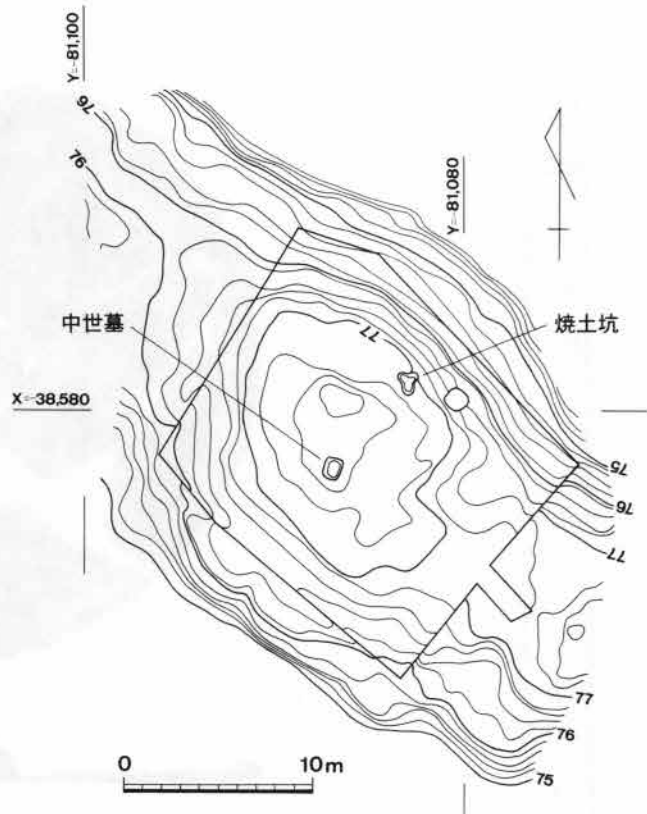
刀身87cm、反りのない直刀である。刀身の長さ67cm・幅4.0cmを測る。刀身には鞘の木質が残り、鞘口部分は黒漆が残る。関部の形状は斜角の切り込みがある。把は刀身より関を境にして少し屈曲する。柄間は柄木を目釘で固定し、極細の糸を密に巻き黒漆が塗布される。柄頭は木質が少し残るが、腐朽が著しいため不明である。

②鉄剣(第54図11、図版第43)

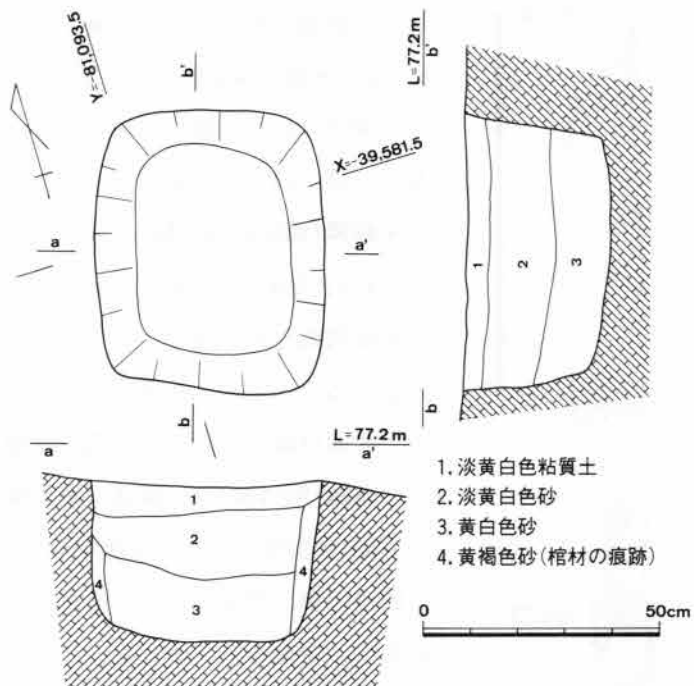
全長38cm・刃部長28cmを測る。刃部は、関部から5cmの位置が最大幅で、3.0cmとなり、切先近くで2.0cmと若干狭くなる。刃部中軸線の稜線は明瞭でなく、刃の断面は凸レンズ状を呈する。刃部には鞘の木質が残る。関部は片側のみ撫角で、浅い切り込みが見られる。把の幅は鞘口2.0cm・把尻1.6cmで徐々に幅狭になる。断面は細長い長方形を呈し、厚さ4mmである。

③刀子(第54図12~14、図版第43)

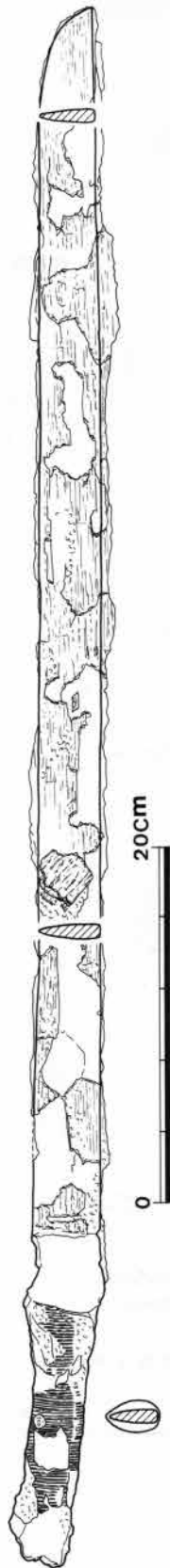
12は、全長12.1cm・刃部幅1.2cmを測る。刀身は刃部、背とも内反りで、断面は平棟平造りである。関部は撫角で段差がなく、曲線的な柄が取り付け。この湾曲した柄には目釘孔はなく、柄



第49図 古墳状隆起地点地形図



第50図 中世墓実測図



第51図 1号墳出土
鉄刀実測図



第52図 1号墳出土銅鏡実測図(1)

頭は平坦面を持つ。これは蕨手刀子の類である。13・14は、全長10.9cm・9.0cm・刃幅1.5cmを測る。刀身の脊は直線的で、刃部は少し反りを持つ。13の関部は、刃部側に斜角をなし、脊側には段差がない。一方、14は関がない。13・14とも目釘孔はない。

④鉄斧(第54図15、図版第43)

全長11.6cm・刃部幅8.2cmを測り、中形の有袋式有肩鉄斧である。袋部は断面隅丸方形を呈し、刃部まで筒状にふくらむ。袋部の接合面は中央部で綴じる。刃部は肩の張り出しが直角に近い。刃部の厚さは基部で2.2cmで、断面は鋭角で鋭い。鍛造の縦斧である。

⑤鉄鎌(第54図16) 鍛造の直刃鎌である。

⑥櫛(第54図1~10、図版第44)

櫛は竹製、黒漆が全体に塗布された縦櫛。製作方法は竹ヒゴを10数本密に並べ、中央を糸で綴じる。これを曲げて半円状の頭部と歯との境に糸を幅1.6cmの帯状に巻き固定する。黒漆は頭部、歯に至るまで塗り固める。

櫛は大型、中型、小型に大別できる。大型(6・8・10)は、全長約14cm(推定)・頭部長3.9~4.6cm・幅4.6~5.2cm、頭部の帯状の幅は1.6cmを測る。中型(4・5・9)は、頭部長3.2~3.8cm・幅3.8~4.0cmを測る。

帯状の幅1.0cmを測る。小型(1～3)は、頭部長1.5～1.6cm・幅1.7cm・帯状の幅0.6cmを測る。頭部の厚さは大型と中型は変わらないが、小型は明らかに薄い。大型と中型の違いは頭部幅、帯の幅の大きさによって区分できる。小型は、機能的側面より装飾的な櫛である。

⑦銅鏡(第52・53図)

斜縁四獣形鏡と型式不明鏡の2面がある。

斜縁四獣形鏡(第52図、図版第41) 全面を復原的に見ると、深い緑色と風化の進んだ緑青色が大半を占めるが、全体の鑄上がりはよい。直径12.8cm(推定)、面の反り0.2cmを測る。偏平な半球の鈕を中心に周辺に乳を4個配した内区を設け、銘帯、櫛歯文帯、鋸歯文帯、仮称「U」字形文帯からなる外区を設ける。その間に三重の圏線で内外区を画する。鈕は高さ0.9cmを測り、半球状の断面を呈する。鈕孔の断面は偏平な長円形を呈し、下位の鈕座に接する。鈕座は直径2.7cmの低い正円形である。



第53図 1号墳出土銅鏡実測図(2) S=3/5

内区地文部は、4乳に分画されている地にそれぞれ半肉彫の獣形を描くが、1分画で完結する。主文様として虎の顔、胴、尾などが観察できるが、その他は同獣形かは不明である。しかし、似た文様が乳付近で曲線文、列点文などが見られることから四獣形鏡と思われる。乳は頂上が丸みを持ち、直径1cmの乳座におさまる。各乳の間隔は等しくなく、正方形の位置にはない。

外区は、銘帯、文様帯、素文の斜縁からなる。各文様帯は圏線を介して少しずつ段差があり、全体に反りをもつ。

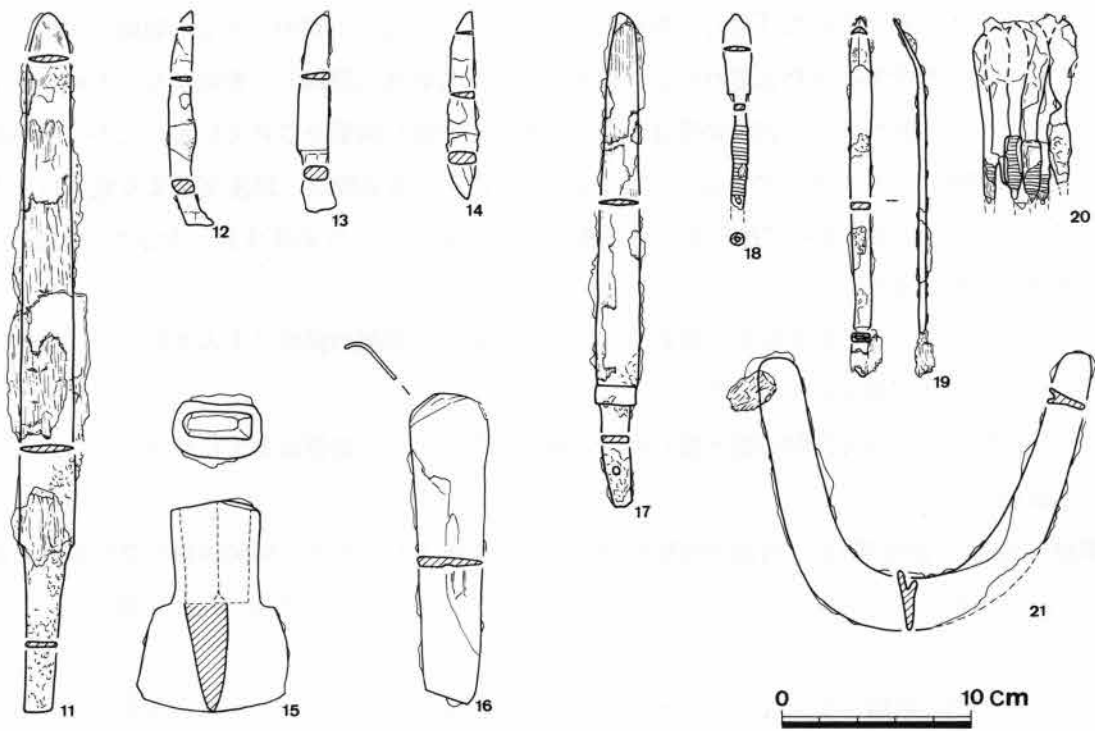
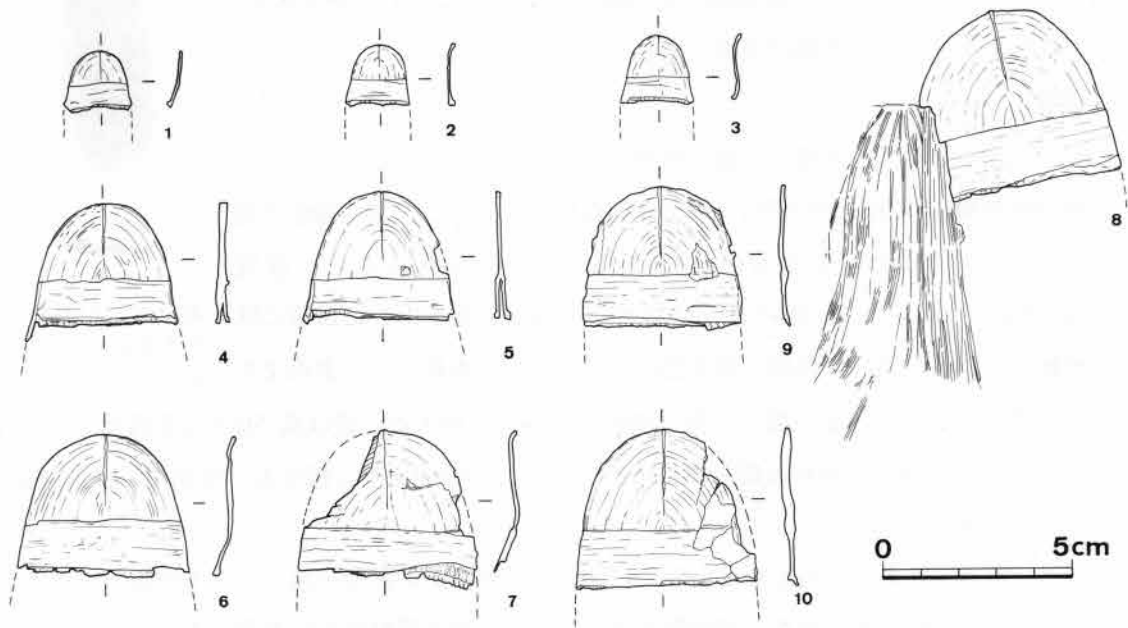
銘帯は、低く肉彫りされた「自」、「有」、「而」、「□」の4文字が判別できる。間隔からいえば、かつては6文字程度であったと思われる。櫛歯文帯は、放射状に展開し、界線がないため鋸歯文帯と接続して一体感がある。鋸歯文帯は、外向鋸歯文が明瞭に肉彫りされている。しかし、鋸歯文の頂点は界線によって潰れているところがある。「U」字形文帯は、鋸歯文帯より低い段にある。「U」字形文は半肉彫りで横向きに一周配しているが、各々の文様は形、大きさが異なり、その間隔も微妙に違う。

縁は、無文で「U」字形文帯から斜め上方に立ち上がる。頂部の稜線は丸みを帯びる。縁外側は斜め下方に向き、端は丸くおさめる。

この鏡の型式は、斜縁四獣形鏡と思われる。外区の「U」字形文帯は非常にめずらしい。この鏡は舶載鏡である。

銅鏡(第53図、図版第44) 前述の四獣形鏡と混在して出土しており、外区鋸歯文帯と斜縁の破片のため詳細は不明である。鏡の鑄上がりは1と同程度である。直径13cm(推定)を測る。

鋸歯文帯は、半肉彫りで外向鋸歯文である。スリムな二等辺三角形を呈し、頂点は縁に接し、あるいは縁の内側斜面に至るところもある。縁は、鋸歯文帯から膨らむように立ち上がり、頂点は大きく丸みを帯び、斜め下方に向き端部を丸くおさめる。全体に1より鋭さはないが、おそらく舶載鏡であろう。



第54図 出土遺物実測図(1)

⑧玉類(第55図、図版第42、付表5)

勾玉・管玉・ガラス小玉などがみられる。

勾玉(1~4) 4以外は翡翠らしい硬玉、軟玉である。1・2は、淡い緑がかった乳白色の色調で、表面は光沢をもつ。頭部の穿孔は直径1mm、両面から穿つ。3は、薄い黄色味を帯びた白濁した乳白色の色調を呈し、光沢がない。頭部の穿孔は、両面からであるが、新たに半ば重複する片面穿孔があった。この孔にガラス小玉が装填されていた。4は、滑石に近い石材であろう。色調は、緑青色を呈し、頭部片面穿孔である。

管玉(5~19) 全長2.0~2.9cm・直径0.3~0.4cmを測り、大きさのばらつきがある。内孔は両端穿孔で、端部はていねいに整えられ、その横断面は正円形である。色調は、少し風化が進んだ淡緑灰色を呈し、石材は緑色凝灰岩である。

小玉(20~200) 全長2~5mm・直径3~6mmを測る。小玉の横断面はほぼ正円形、側面は水平、斜線状の2種類があることから、型造り、切り割り造りの両技法が用いられた。色調は黄緑色、紺色、スカイブルーなど、さまざまである。一部茶褐色を呈する小玉は、石製品(滑石系統か?)のものが含まれる。

付表5 愛宕神社1号墳出土玉類観察表(単位はmm)

番号	種類	長	幅	孔径	色調	備考
1	勾玉	30.0	9.9	1.7	淡乳緑色	
2	〃	29.6	9.4	1.8	〃	
3	〃	24.9	8.0	3.8	淡乳黄色	厚さ1.75
4	〃	8.8	2.4	1.4	乳緑色	
5	管玉	19.6	3.8	1.9	淡緑色	
6	〃	20.5	3.9	1.9	〃	
7	〃	23.6	3.7	2.0	〃	
8	〃	24.7	4.0	2.2	〃	
9	〃	25.1	4.1	2.0	〃	
10	〃	25.5	4.1	2.3	〃	
11	〃	24.7	4.1	1.8	〃	
12	〃	26.0	4.0	2.0	〃	
13	〃	26.1	4.2	2.1	〃	
14	〃	27.2	4.1	1.9	〃	
15	〃	27.4	4.1	1.9	〃	
16	〃	27.5	4.0	2.3	〃	
17	〃	28.9	4.1	2.2	〃	
18	〃	29.9	4.1	2.5	〃	
19	ガラス管玉	12.0	4.9	1.5	淡青色	
20	ガラス小玉	3.9	4.8	1.9	濃紺色	
21	〃	3.2	5.1	1.5	淡青色	
22	〃	3.3	4.5	2.0	〃	
23	〃	3.9	4.5	2.0	〃	
24	〃	3.4	4.6	1.9	〃	
25	〃	2.3	3.7	1.8	紺色	
26	ガラス小玉	2.7	5.9	2.1	淡青色	
27	〃	3.9	3.8	1.3	〃	
28	〃	3.7	4.0	1.9	〃	
29	〃	3.2	4.7	1.8	濃紺色	
30	〃	3.9	3.4	1.0	淡青色	
31	〃	3.6	3.7	1.7	〃	
32	〃	2.9	4.5	1.7	〃	
33	〃	3.1	4.3	1.2	〃	
34	〃	4.0	5.3	1.7	〃	
35	〃	4.2	6.5	1.9	濃紺色	
36	〃	2.9	5.3	1.9	紺色	
37	〃	3.7	5.3	1.9	淡青色	
38	〃	3.8	4.0	1.5	〃	
39	〃	3.3	3.9	1.7	〃	
40	〃	2.4	4.4	1.4	紺色	
41	〃	3.6	4.6	1.8	淡青色	
42	〃	2.7	5.1	1.9	紺色	
43	〃	3.3	6.2	2.8	〃	
44	〃	1.8	4.2	2.0	淡青色	
45	〃	2.7	4.3	1.7	〃	
46	石製小玉	3.2	5.1	2.1	茶褐色	
47	ガラス小玉	4.1	4.1	1.3	淡青色	
48	〃	4.5	5.4	1.8	〃	
49	〃	4.4	5.1	1.4	〃	
50	〃	3.1	3.4	1.2	〃	
51	〃	3.9	4.5	1.7	〃	
52	〃	3.5	4.1	1.5	紺色	

53	ガラス小玉	3.0	4.1	1.7	紺色		102	ガラス小玉	3.3	3.6	1.2	淡青色	
54	〃	4.4	5.9	2.6	淡青色		103	〃	3.3	4.0	1.7	〃	
55	〃	4.0	5.4	2.2	紺色		104	〃	3.0	4.4	1.7	〃	
56	〃	4.4	4.6	1.6	〃		105	〃	3.5	4.6	1.6	紺色	
57	〃	2.7	4.8	1.7	淡青色		106	〃	3.2	4.0	1.5	淡青色	
58	〃	3.1	4.7	1.3	紺色		107	〃	2.7	3.7	1.1	〃	
59	〃	3.9	4.9	2.9	淡青色		108	〃	2.0	5.8	1.9	〃	
60	〃	3.8	4.7	1.9	紺色		109	石製小玉	2.5	4.9	1.9	茶褐色	
61	〃	2.2	4.9	1.9	〃		110	ガラス小玉	2.6	4.2	1.7	紺色	
62	〃	3.9	4.3	1.7	淡青色		111	〃	4.4	6.4	1.9	濃紺色	
63	〃	4.8	4.6	1.4	〃		112	〃	2.9	5.3	2.0	紺色	
64	石製小玉	3.1	5.4	2.3	茶褐色		113	〃	5.5	7.8	2.3	〃	
65	ガラス小玉	3.0	4.2	1.3	淡青色		114	〃	2.2	4.1	1.9	淡青色	
66	〃	2.5	4.8	1.8	〃		115	〃	2.3	4.3	2.0	〃	
67	〃	3.5	5.0	2.7	紺色		116	〃	2.4	3.8	1.3	〃	
68	〃	3.5	4.0	2.0	淡青色		117	〃	2.5	4.7	2.5	〃	
69	〃	3.4	4.5	1.7	濃紺色		118	〃	2.4	4.2	1.9	紺色	
70	〃	2.5	3.7	1.4	紺色		119	〃	2.4	4.2	1.3	淡青色	
71	〃	3.7	4.1	2.0	淡青色		120	〃	3.2	3.9	1.2	〃	
72	〃	3.3	4.9	2.0	紺色		121	〃	2.3	5.5	1.7	〃	
73	〃	5.1	5.4	1.9	〃		122	〃	2.2	4.2	1.9	紺色	
74	〃	3.3	4.4	1.5	淡青色		123	〃	3.9	4.0	1.5	〃	
75	〃	1.3	4.4	1.6	〃		124	〃	3.8	6.4	2.1	淡青色	
76	〃	3.5	4.1	1.7	紺色		125	〃	3.4	4.7	1.8	〃	
77	〃	1.9	5.2	1.9	淡青色		126	〃	3.8	3.9	1.7	〃	
78	〃	4.2	3.5	1.5	〃		127	〃	3.2	5.5	2.2	紺色	
79	〃	4.9	3.8	1.7	〃		128	〃	2.6	4.3	1.4	淡青色	
80	〃	4.4	3.5	1.2	〃		129	〃	2.5	5.5	1.6	〃	
81	〃	3.0	4.9	2.0	〃		130	〃	2.8	4.2	1.3	〃	
82	〃	4.6	4.4	1.0	〃		131	〃	2.7	4.1	1.6	〃	
83	〃	3.4	5.4	1.9	紺色		132	〃	2.8	4.8	1.8	紺色	
84	〃	4.8	5.1	1.7	淡青色		133	〃	3.4	5.6	2.1	〃	
85	〃	2.9	4.2	1.7	〃		134	〃	2.6	4.8	1.8	淡青色	
86	〃	2.7	4.1	1.2	〃		135	石製小玉	2.2	4.7	1.8	茶褐色	
87	〃	5.0	4.7	1.6	紺色		136	ガラス小玉	2.6	4.5	1.4	淡青色	
88	〃	2.8	4.3	1.8	〃		137	〃	3.2	3.7	1.7	〃	
89	〃	3.9	4.7	1.8	〃		138	石製小玉	2.5	4.6	1.3	茶褐色	
90	〃	2.7	4.6	1.4	淡青色		139	〃	2.6	4.7	1.5	〃	
91	〃	3.4	4.1	1.3	〃		140	〃	2.2	4.1	1.4	〃	
92	〃	3.9	3.5	2.1	〃		141	ガラス小玉	2.3	4.2	1.7	淡青色	
93	〃	2.8	4.0	1.6	〃		142	〃	3.6	4.1	1.4	〃	
94	〃	3.4	4.5	1.8	紺色		143	〃	2.8	4.1	1.8	紺色	
95	〃	3.0	4.5	1.7	〃		144	〃	4.5	4.4	1.3	〃	
96	〃	2.4	4.0	1.8	〃		145	〃	3.4	4.0	1.5	淡青色	
97	〃	2.5	3.8	1.3	淡青色		146	〃	2.9	4.5	1.5	紺色	
98	〃	3.9	5.0	2.0	〃		147	〃	4.6	4.2	1.7	黄緑色	
99	〃	3.2	4.8	1.7	〃		148	〃	2.3	4.1	1.6	淡青色	
100	〃	2.5	3.8	1.6	紺色		149	〃	3.3	4.9	1.5	〃	
101	〃	2.7	4.0	1.3	〃		150	〃	2.6	4.0	1.2	紺色	

151	ガラス小玉	3.3	4.3	1.7	淡青色		177	ガラス小玉	3.0	4.2	1.9	淡青色	
152	〃	2.9	5.3	2.3	紺色		178	〃	2.9	4.1	1.9	〃	
153	〃	2.3	4.5	2.0	淡青色		179	〃	2.9	4.4	1.7	紺色	
154	〃	2.4	4.3	2.0	〃		180	〃	2.6	4.0	1.8	〃	
155	〃	2.5	4.1	1.8	〃		181	〃	2.6	4.2	2.1	〃	
156	〃	3.8	4.8	1.7	〃		182	〃	2.4	4.9	1.8	淡青色	
157	〃	4.0	4.7	1.5	〃		183	〃	3.2	5.0	1.5	紺色	
158	〃	2.5	4.5	1.8	紺色		184	〃	1.5	5.2	1.9	〃	
159	〃	2.9	4.2	1.3	淡青色		185	〃	2.5	4.1	1.8	淡青色	
160	〃	2.7	4.8	1.6	〃		186	〃	1.9	4.3	1.7	〃	
161	〃	2.2	3.6	1.3	〃		187	〃	1.8	3.9	2.1	淡灰色	
162	〃	2.1	3.9	1.7	紺色		188	〃	2.3	3.1	1.3	紺色	
163	〃	2.0	3.8	1.3	淡青色		189	〃	3.2	4.2	1.6	淡青色	
164	〃	2.4	4.3	1.2	〃		190	〃	2.0	4.0	1.6	紺色	
165	〃	2.8	4.5	1.7	〃		191	〃	1.8	3.8	1.6	〃	
166	〃	3.2	3.4	1.3	紺色		192	〃	2.0	3.8	1.4	〃	
167	〃	2.0	4.0	1.8	〃		193	〃	2.4	3.3	1.8	〃	
168	〃	3.9	4.6	1.4	〃		194	〃	3.7	4.1	1.9	淡青色	
169	〃	3.5	6.4	1.5	淡青色		195	石製小玉	2.5	4.8	1.8	茶褐色	
170	〃	4.2	4.2	1.8	〃		196	ガラス小玉	2.0	3.9	1.6	淡青色	半分欠損
171	〃	3.5	4.2	2.3	〃		197	〃	3.9	5.3	2.5	〃	〃
172	〃	4.4	4.5	2.2	〃		198	〃	2.9	—	—	紺色	〃
173	〃	3.2	4.7	1.6	〃		199	〃	2.1	—	—	淡青色	〃
174	〃	3.3	4.3	1.7	〃		200	〃	2.3	—	—	紺色	〃
175	石製小玉	2.3	3.8	1.6	茶褐色								
176	ガラス小玉	3.1	3.1	1.8	紺色								

b. 3号墳出土遺物(第54図、図版第43)

①鉄剣(17)

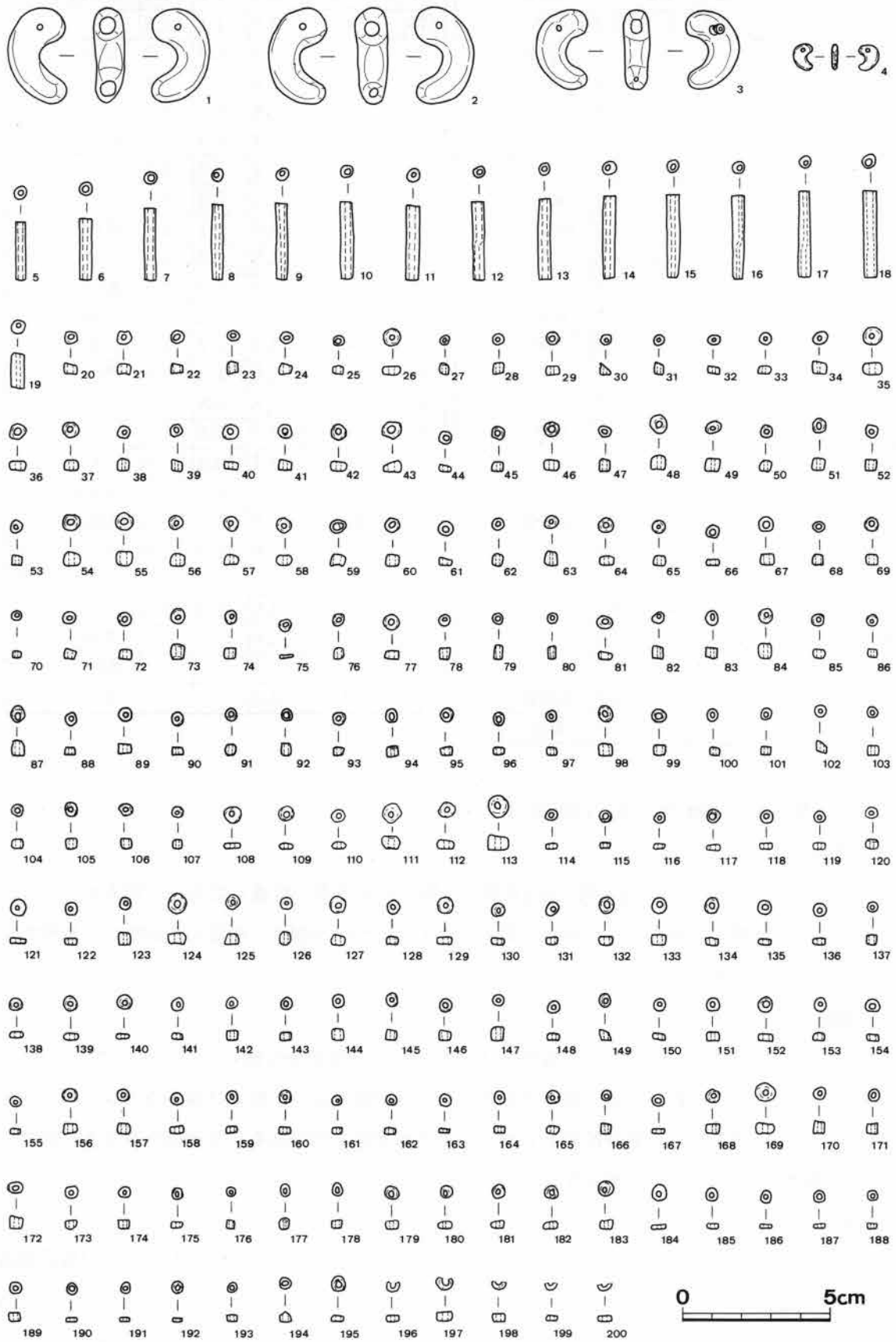
全長26.0cm・刃部長20.7cm・幅2.3cmを測る。鞘の木質が多く付着しており、切先がわかりにくい。関部は両側とも直角にくびれる。柄の幅は0.7~1.0cmを測り、柄尻の方が狭い。柄間の中央部には目釘孔がある。

②鉄鏃(18・20)

全長12cm・鏃身長8.0cmを測る。茎部には矢柄が残る。鏃先から膨らみながら中央部に至り、直線的に関に向いて幅狭になる。身の中軸線の稜線は明瞭でなく、断面は偏平な凸レンズ状を呈する。関部は、両側とも直角の段差をもち、茎部の断面は方形である。矢柄は竹製を茎に装着し、桜の皮(幅4mm)を巻き付けて固定する。

③鉈(19)

全長17.6cm・刃部幅1.1cmを測る。刃部は両刃で、大きく関部から反り返る。刃部内側の稜線は峰と茎(関部)の両端に至り、三叉鉈を作り出す。刃部は裏面が平坦面であり、断面は低い三角形形状である。柄の幅は刃部近くで0.9cm、柄尻で0.7cmを測り、柄尻に向かってわずかに狭まる。断面は長方形である。柄には木質が残存する。



第55図 出土遺物実測図(2)

④鋤(21)

全長14.8cm・幅18.0cmを測る大型の鉄製「U」字形鋤先である。鋤木の装着部分は、「V」字形を呈し、中央部分が最も深い。

4. まとめ

愛宕神社古墳は、1号墳～3号墳からなる。1号墳は一辺約20mの方墳、主体部は木棺直葬で、古墳時代前期(4世紀後半)の古墳である。3号墳は主体部が木棺直葬墓で、1号墳よりやや後出(5世紀前半)する古墳である。1号墳の特徴としては、(1)主体部の木棺が長大で、大きく3室に分かれる棺構造である、(2)棺内の副葬品が豊富である、この2点が挙げられる。以下に、埋葬方法や喪葬儀礼の特色を記述する。

1号墳の木棺は、埋設方法(技法)から見れば長い側板を固定、維持するために3枚の仕切り板を必要とする。しかし、必ずしも仕切り板だけでなく、例えば横棧木、棺蓋で維持できるとすれば、3枚の仕切り板が等距離にあるこの形態は不必要なものと思われる。したがって、主室と副室の同規模の空間は、埋葬方法の意図する設定にはほかならない。この両室が、副葬品とその出土状況から、主室のみに被葬者が葬られたと考えられる空間であることは、前述したとおりである。

主室の副葬品には、鉄刀・玉類・竖櫛・銅鏡などがあり、被葬者の四辺に配されている。玉類は、勾玉と管玉とを組み合わせ、ていねいに置かれ、一方、ガラス小玉はばらまかれていることから、単なる装身具ではなく、埋葬儀礼の所産であろう。

竖櫛は、被葬者の頭位に位置し、「コ」の字状の配置から、装身具あるいは魔除けのためだけに副葬されたのではない。この竖櫛は、箱形面罩(漆塗りの一方が開いた箱形で、内面の3面に鏡が貼り付けられ、これを死者の頭にかぶせる)、あるいは大阪府黄金塚古墳の東槨では、鏡を顔面にかぶせるなどの飾りから、この鏡に代わる櫛であると思われる。

銅鏡は、埋葬時に、人為的に割られた破碎鏡であり、一部欠損していることから、欠損鏡である。弥生時代後期の「破鏡」とは性格を異にしたものかもしれない。この銅鏡は、被葬者の頭位に置かれることが多い中で、被葬者の足元に置かれた意味がわかりにくい。そして、この銅鏡が単独で出土している状況は、本来、頭位にあるものとするれば、対峙しうる副葬品を考えると、前述の竖櫛が想起される。

南副室の副葬品は、鉄剣・刀子、3枚重ねの竖櫛などがある。この竖櫛は、主室の櫛とは異なり、「辟邪」の呪術性を持つものかもしれない。

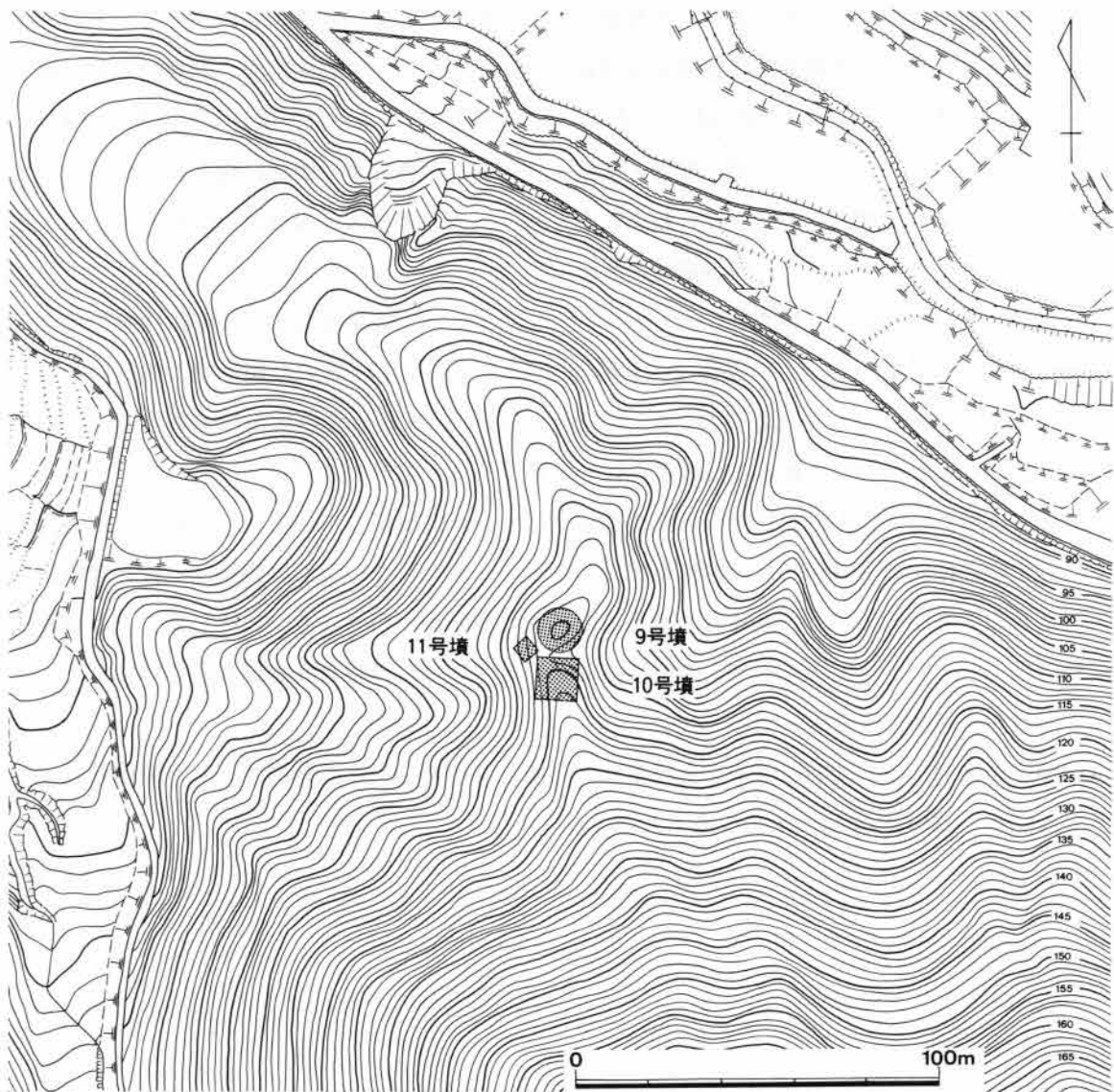
(竹井治雄)

(7) 茶カス古墳群

1. はじめに

茶カス古墳群は、吉沢地区の小丘陵に群在し、分布調査では10基程度確認されている。調査地周辺の遺跡は、竹野川右岸では堤地区の愛宕神社古墳群、さらに北側の溝谷古墳群などがある。右岸では、当調査地の真西1kmの丘陵上に「青龍三年」銘鏡が出土した大田南5号墳(大田南古墳群)がある。これらの古墳群は、みな小規模の古墳で丘陵上に立地し、古墳時代前期に属する。

今回の調査の茶カス9・10号墳は、標高120m前後の丘陵尾根上にあたり、地表の高まり、墳丘の規模、形状などが観察されている。調査の結果、9・10号墳のほか新たに1基(11号墳)を発見した。また、古墳に関連する土坑1基のほか、中世墓を検出した。



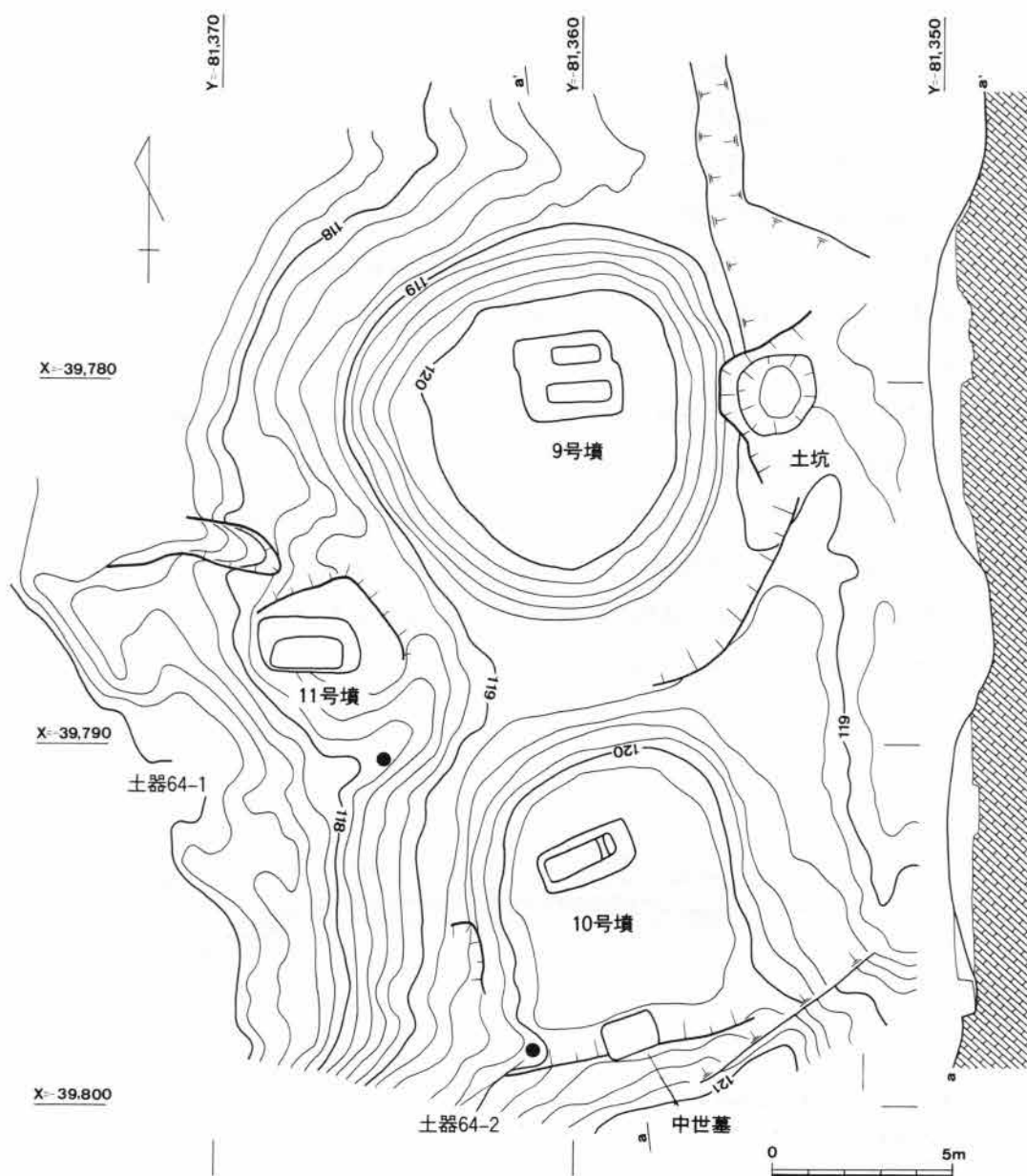
第56図 調査地位置図

2. 調査概要

(1) 遺構の概観(第57図)

墳丘測量の結果、北側に位置する9号墳は、直径約10m・高さ約1.4mの不整形な円墳、南側に位置する10号墳は、一辺径約6m・高さ約1.3mの方墳であることが判明した。これらの古墳は、地山を削り出した後に盛り土によって墳形を整えていることが確認できた。一方、11号墳の墳丘は、南・西辺の傾斜変換線が不明瞭であるものの、北・東辺の状況から、一辺約6m・高さ約0.5mの方墳として復原できた。

調査は、墳丘上に十字の畦を設定し、墳頂部から掘削を開始した。また、同時並行して畦沿いに断ち割りを入れ、墳丘の盛り土、裾部、周溝の状況を観察した。9・10号墳の墳丘では、先述



第57図 9～11号墳地形図

したように、盛り土を確認したが、墳丘内での主体部の検出は困難であった。断面観察から、盛り土の下位には旧表土(暗黒褐色土)が堆積しているが、十分な検証をなし得なかったものの、旧表土の一部を切り込んで主体部が掘り込まれている可能性が高い。盛り土中からは、土器が出土しているが、これらの土器は、本来、埋葬主体部に伴う遺物であった可能性も指摘できる。おそらく、墳丘築造後の盛り土の崩壊と木棺の腐蝕による墓壙埋土の落ち込みによって、断面観察においても明確な墓壙を検出できなかつた可能性もある。

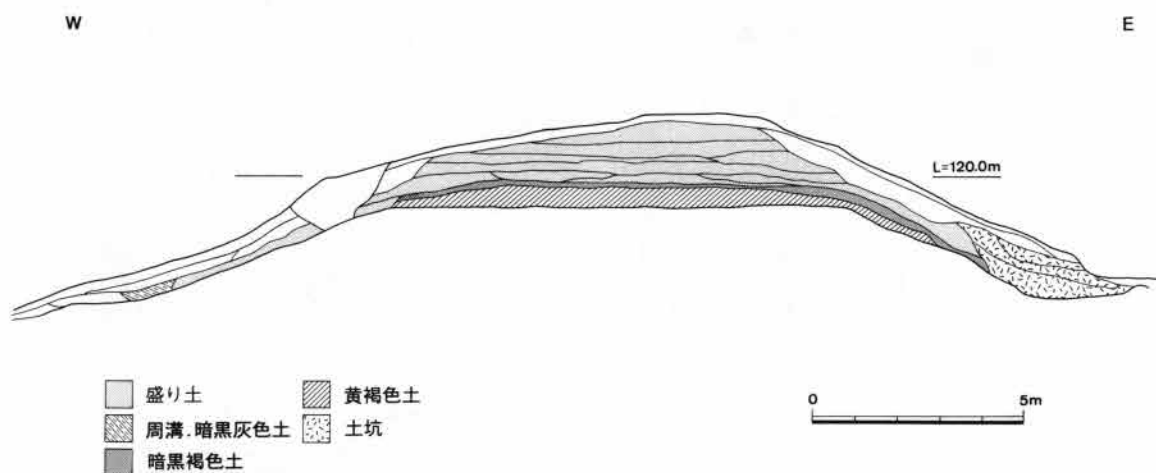
第59図に図示した埋葬主体部の実測図は、明瞭に確認できた段階の輪郭を図示しており、墳丘内の墓壙プランについては省略した。

(2) 9号墳(第58・59図、図版第46)

9号墳は、直径約11m・高さ約1.7mを測る円墳である。墳頂の標高は約120.4mである。墳丘全周は、地山を削り出し、裾部、斜面を成形する。削り出しは、北側・西側では裾部よりさらに下方まで行われている。墳丘の盛り土は厚さ0.7mを測り、旧表土層から上位には灰色土、赤褐色土、黄色土などを5～15cm単位で互層に積み上げる。盛り土は、墳丘斜面にまで及ぶが、人為的なものか自然の崩落かは不明である。出土遺物は皆無であった。

旧表土層は、暗黒褐色を呈する腐植土が主であるが、粘土質が混在する土層も確認でき、厳密には均一な土層ではない。この土層は、墳丘平坦面に5～20cmの厚みをもち、注目すべきは、東側のみ墳丘斜面から裾部に至り、土坑の底まで連続して広がることである。布留式土器の破片がまとまって出土した。

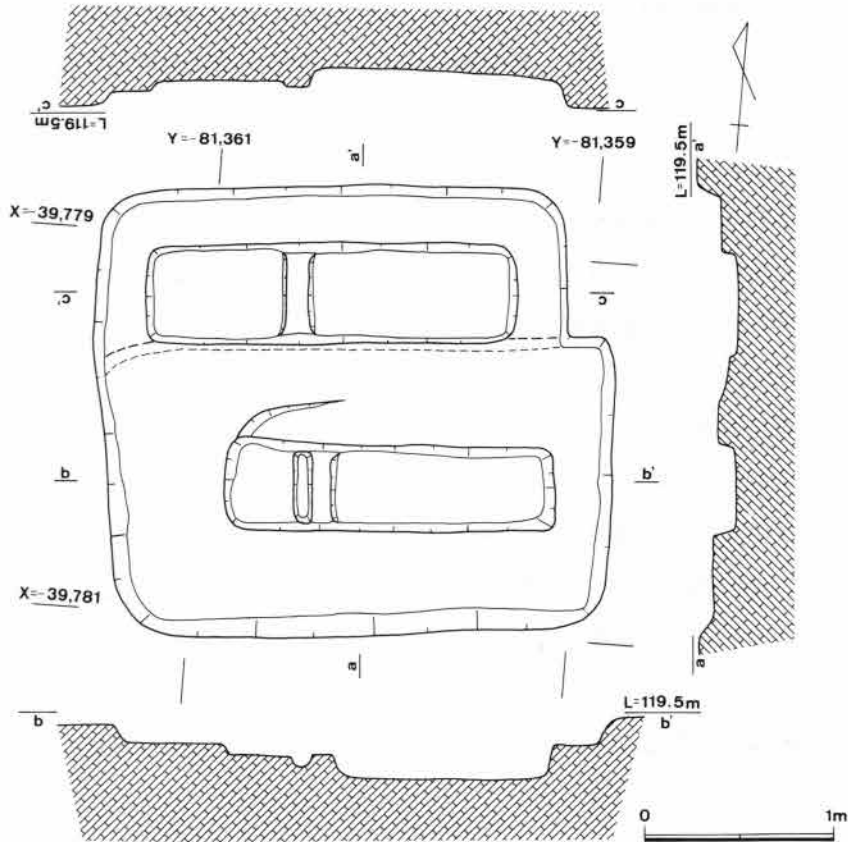
主体部は、墳丘やや北側寄りに墓壙2基を検出した。2基とも東西方向に主軸を持つ木棺直葬である。北の主体部は、墓壙長約2.6m・木棺長約2.4m・幅約0.4mを測る。棺の東側には地山を掘り残して仕切り板を設けている。棺は、組合式箱形木棺である。堆積土は、淡赤褐色粘質土と淡黄色砂質土が混在する。出土遺物はない。南の主体部は、墓壙長約2.7m・木棺長約2.4m・幅約0.5mを測る。棺内には、北主体部と同様の仕切りの痕跡があり、箱形木棺である。出土遺物はなく、土層の観察結果から南の主体部が新しいと判断される。



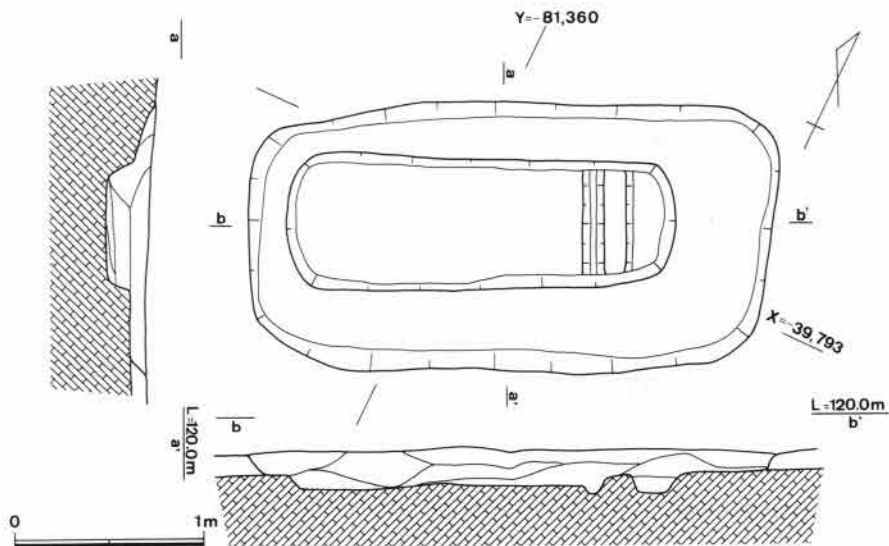
第58図 9号墳墳丘断面図

(3)10号墳(第60図、図版第47)

10号墳は、一辺約9m・高さ約1.2mを測る方墳である。墳頂の標高は約120.45mである。墳丘の四辺は、地山を削り出し、裾部、斜面を成形するが、とりわけ西・南辺では明瞭に裾部が溝や傾斜変換線として残る。南西隅の溝の底から布留式土器が出土した。墳丘の盛り土は厚さ0.5



第59図 9号墳北・南主体部実測図



第60図 10号墳主体部実測図

mを測り、9号墳ほどていねいな互層をなしていない。腐植質の層が多く、褐色土が少ない。表土層から近世の遺物が出土した。

旧表土層は、暗黒褐色腐植土が均一に堆積しており、9号墳とは随分異なることから自然の堆積土(旧表土)と思われる。この層の分布は、墳丘上から南側の高所に広がる。出土遺物はない。

主体部は、墳丘やや北寄りで墓壇1基を検出した。墓壇は、東西方向に主軸を持つ木棺直葬墓である。主体部は、墓壇長約2.7m・幅約1.3m、木棺長約2.0m・幅約0.5mを測る。棺内の東側には地山を掘り残した木口跡があり、箱形木棺である。堆積土は淡黄褐色砂質土で、出土遺物は全くない。

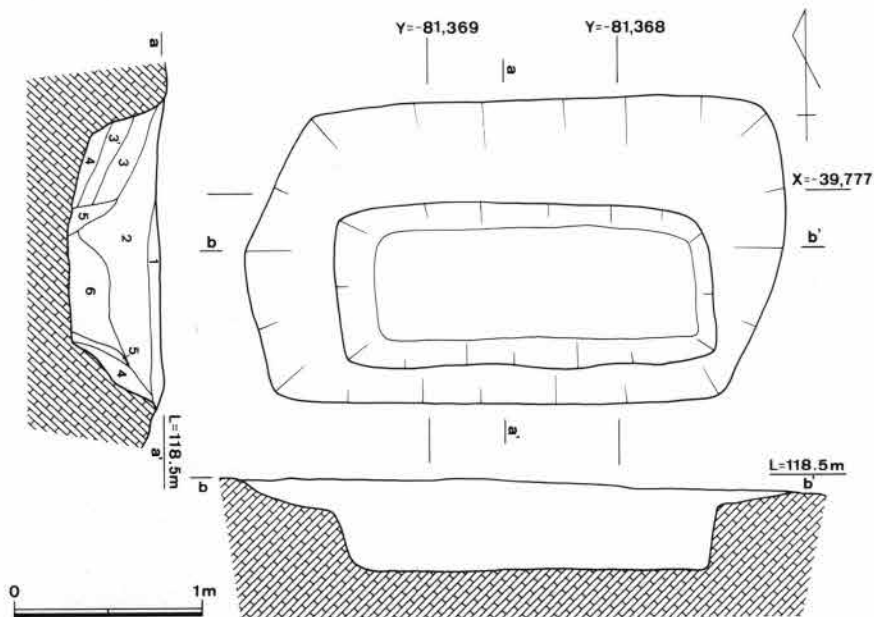
(4)11号墳(第61図、図版第47)

11号墳は、一辺約6m・高さ約0.5m、墳頂部の標高約117.5mを測る方墳である。南斜面は、地山を削り出して成形される。南辺には、幅約1.8m・深さ約0.8mを測る断面「U」字形の深い溝がある。溝底から布留式土器が出土した。東辺は、9号墳の墳丘の一部を掘り崩し、幅約1.2m・深さ約0.4mを測る溝があり、土器の細片があった。北・西辺は削平、崩落が著しく、裾部は不明である。墳丘の盛り土は、後世の植樹による開墾のため残存せず、出土遺物もない。また、ここでは旧表土は全く見られない。

主体部は、墳丘の北寄りで墓壇1基を検出した。墓壇は、東西方向に主軸をもつ木棺直葬墓である。墓壇長約3.0m・幅約1.4m、木棺長約1.8m・幅約0.7mを測る。木痕、陥没による腐植土が、棺中央部に集中する。墓壇埋土は、淡黄白色砂である。出土遺物はない。

(5)土坑(第57・62図)

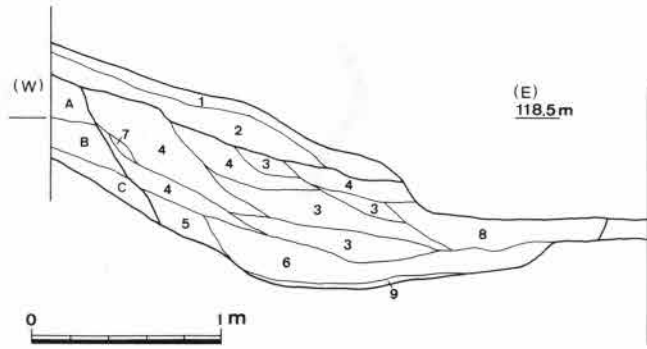
9号墳の東側裾部に接するように検出した円形の土坑である。土坑は直径1.7m・深さ0.3mを



第61図 11号墳主体部実測図

1. 赤褐色土 2. 暗黒灰色腐植土 3. 灰黄色粘砂質土 4. 暗黒褐色腐植土 5. 暗灰黄色腐植土 6. 明黄白色砂粘質土

測り、裾部を切る。堆積土は、上位から順に、(1)9号墳の盛り土(灰色土、赤褐色土、黄色土)、(2)旧表土層(暗黒褐色土)、(3)黒色炭化層、(4)赤色焼土層である。(1)は崩落したものか、人為的な盛り土かは判定できない。(2)は厚さ10cm、腐植質を多く含む土壌で、带状に墳丘斜面から連続して堆積する。土師器の細片が出土したが、時期は不明である。(3)・(4)は焼土坑特有の堆積状況である。以上のことから、土坑の時期は9号墳とほぼ同時期であると思われる。

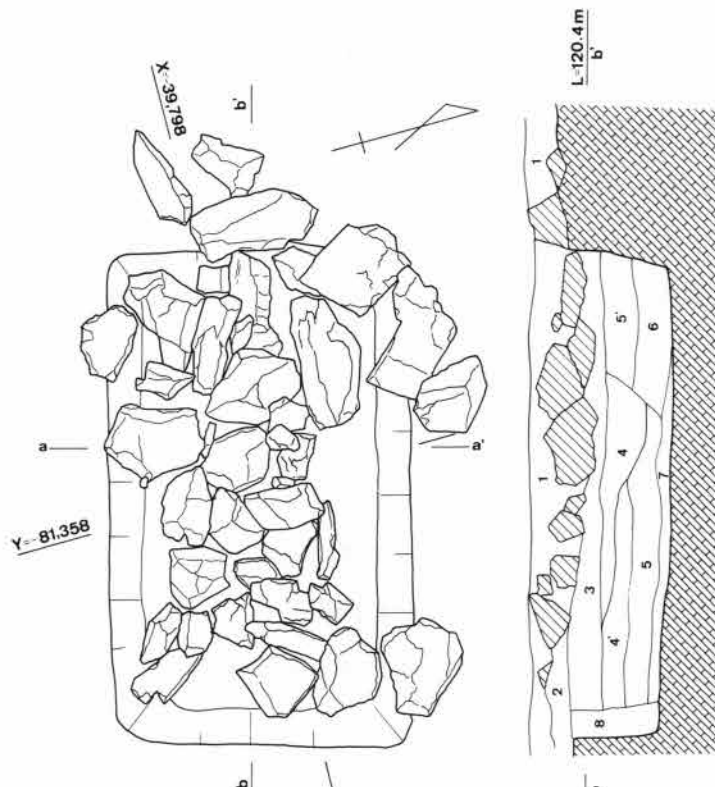


第62図 土坑断面実測図

- | | | |
|-----------------|--------------|------------|
| A. 暗褐色腐植土 | B. 暗褐色土混黄褐色土 | C. 暗灰色土 |
| 1. 表土 | 2. 淡灰黄色砂礫混土 | 3. 暗茶褐色腐植土 |
| 4. 暗褐色土混黄褐色土 | 5. 暗黒灰色腐植土 | 7. 暗黄褐色土 |
| 6. 黄褐色土混暗黒灰色腐植土 | 8. 暗灰褐色泥土 | 9. 赤色焼土痕 |

(6) 中世墓(第63図、図版第50)

10号墳の南辺溝で検出した、墓壙上に集石を伴う方形古墓である。集石は人頭大に割られ、中央部はやや陥没するが水平に敷かれている。集石の規模は長辺約1.5m・短辺約1.0mを測る。墓壙は、東西に主軸をもち長辺約1.3m・短辺約0.9m・深さ約0.5mを測る。ほぼ集石の規模と一致する。堆積土は、暗茶褐色腐植土で炭化物が含まれる。出土遺物はない。

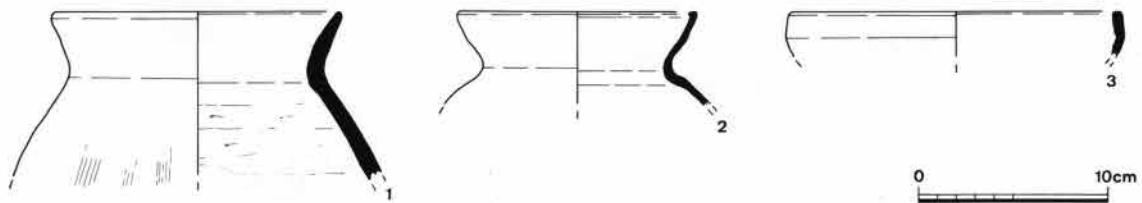


第63図 中世墓実測図

- | | | | |
|------------|--------------|-------------------|-----------|
| 1. 表土 | 2. 褐灰色泥土 | 3. 褐灰色腐植土 | 4. 褐灰色泥砂土 |
| 4'. 褐灰色砂質土 | 5. 褐色含黒灰色腐植土 | 6. 黒灰色腐植土 | |
| 5'. 黒灰色砂質土 | 7. 小礫混黒灰色腐植土 | 8. 暗黒褐色砂質土(棺材の痕跡) | |

3. 出土遺物(第64図、図版第50)

出土した遺物は、図示した3点の土器のほか、表土層から不明鉄製品、陶磁器などがある。この3点の土器については、1・3は溝底、2は9号墳の暗



第64図 出土遺物実測図

黒褐色腐植土から出土したが、原位置を保たない。しかし、1・3は破損が著しいがまとまって検出していることから、墳頂部から滑り落ちたものと推察される。

1は、口径15.4cmを測る甕と思われる。口縁部は外反しながら斜め上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。頸部はゆるやかに「く」の字形を呈し、肩部は直線的に斜め下方にのび、肩の張りが無い。器壁は8mmを測り、厚みがある。口縁部内外面は横ナデ、肩部外面は幅2cmの縦ハケ、内面はケズリ調整を施す。胎土は砂粒を含み、やや粗い。色調は茶褐色を呈する。

2は、口径12.6cmを測る布留式土器の甕である。口縁部はやや内湾ぎみに斜め上方に立ち上がり、端部は内側に肥厚しておさまる。頸部は深く丸みを帯び、肩部は内湾ぎみに斜め下向きに下り、少し肩が張る。口縁部内外面は横ナデ調整を施す。肩部は不明である。器壁は3・4mmを測る。胎土は緻密、色調は淡茶褐色を呈する。

3は、口径16.5cmを測る高杯と思われる。口縁部は、内湾しながら直上して立ち上がる。口縁端部は、平坦面を有しておさまる。口縁部内外面は横ナデ、内面にやや凹状の強いナデ調整を施す。胎土はやや粗く、色調は淡褐白色を呈する。

4. まとめ

茶カス9・10号墳は尾根を削り出し、裾部、斜面を成形し、盛り土を施した古墳である。今回の調査の結果、3基の木棺直葬墳を確認した。主体部は、いずれも東西に主軸をとるものである。時期は、出土遺物や古墳の重複関係から、9・10号墳は古墳時代前期、11号墳は中期に築かれたと考えられる。このほか、中世墓1基も確認した。

(竹井治雄)

(8) 苗代古墳群

1. はじめに

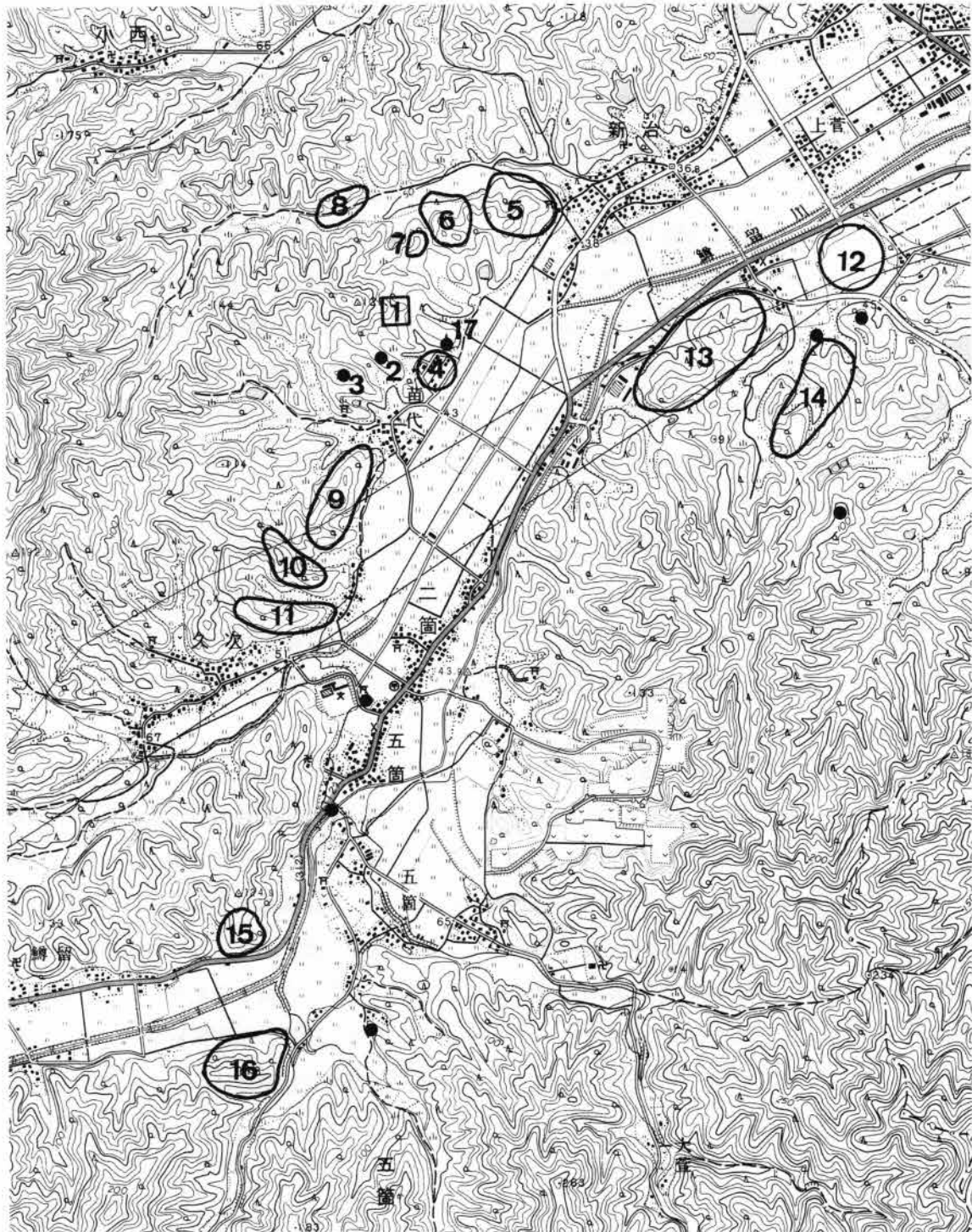
苗代古墳群は、京都府中郡峰山町二箇小字相之目に所在する。今回の調査は、二箇団地造成に伴って実施した。調査地は、竹野川の支流である鱒留川の左岸にある丘陵の一部に立地し、調査開始前は山林であった。鱒留川流域は、峰山町から久美浜町にぬける谷筋にあたり、久美浜町との境の比治山峠には『丹後国風土記逸文』にみられる羽衣伝説がある。古墳群の所在する丘陵の最頂部には曲輪状の平坦面があり、そこから派生する4つの尾根にも堀切や曲輪状平坦面が存在することから、苗代城跡A地区という名称が与えられている。調査地は東側の尾根筋にあたり、堀切2か所と曲輪状平坦面4か所が存在したことから、苗代城跡B地区と仮称して調査を実施した。調査の結果、古墳時代の埋葬施設を検出したことから、関係機関と協議の上、苗代古墳群と名称を改めた。眼下には鱒留川によって形成された沖積低地が広がり、苗代の集落とは場整備の終了した水田地帯が続く。

周辺遺跡について時代ごとに概観していくと、北東方向には途中ヶ丘遺跡を望むことができる^(注9)。途中ヶ丘遺跡は、鱒留川右岸の標高約40mの丘陵上に展開しており、その範囲は南北約340m・東西約260mの広範囲に及ぶ。1972年から1975年にかけて峰山町教育委員会により4次にわたって発掘調査が行われた。調査の結果、弥生時代全期にわたる大環濠集落であることが明らかになった。注目される遺物に鉄斧や陶埴などがある。

古墳時代の遺跡には、相之目古墳(当調査研究センター調査^(注10))や笹ヶ谷古墳(平成8年度峰山町教育委員会・平成9年度京都府教育委員会調査)があり、南西へ約2.5kmのところ^(注11)に弥生時代終末から古墳時代にかけての墳墓である金谷1号墓がある。笹ヶ谷古墳は、直径約40m・高さ約5mを測る巨大円墳で、平成8年度の峰山町教育委員会の調査により10基を数える主体部の存在が確認された。平成9年度は、京都府教育委員会によって周辺埋葬の調査が行われた。金谷1号墓は、複数の埋葬施設をもつ弥生時代後期の墳丘墓であり、平成6年度に当調査研究センターで調査を実施した。調査では、木棺の痕跡が明瞭に確認され、舟形木棺、箱形木棺が採用されていたことが明らかになった。その他、現在土取り場になっている南東の独立丘陵にはかつて船山横穴がある。『丹後国中郡誌稿』によると、横穴は明治36年に発見され、人骨・土師器・銅鏃などが採集されたようである。

古墳時代の集落については、調査例がないが、現在の苗代の集落の辺りに弥生時代から古墳時代の遺物散布地である苗代遺跡が広がっており、苗代古墳群の造墓集団の居住地の可能性がある。平安時代の遺跡には、青谷窯跡や名地谷遺跡などの遺物散布地がある。今年度、笹ヶ谷古墳の西側丘陵斜面で須恵器窯跡が1基発見された^(注13)。そこに続く青谷窯跡の東側の谷筋では、底部糸切りの須恵器片が数点採取されており^(注14)、さらに数基の窯跡が分布していると思われる。

中世になると、山城が多く造られる。笹ヶ谷古墳の立地する尾根の先端には二箇城跡があり、大きな曲輪状の平坦面とそれを取り囲む土塁及び堀切がよく残っている。



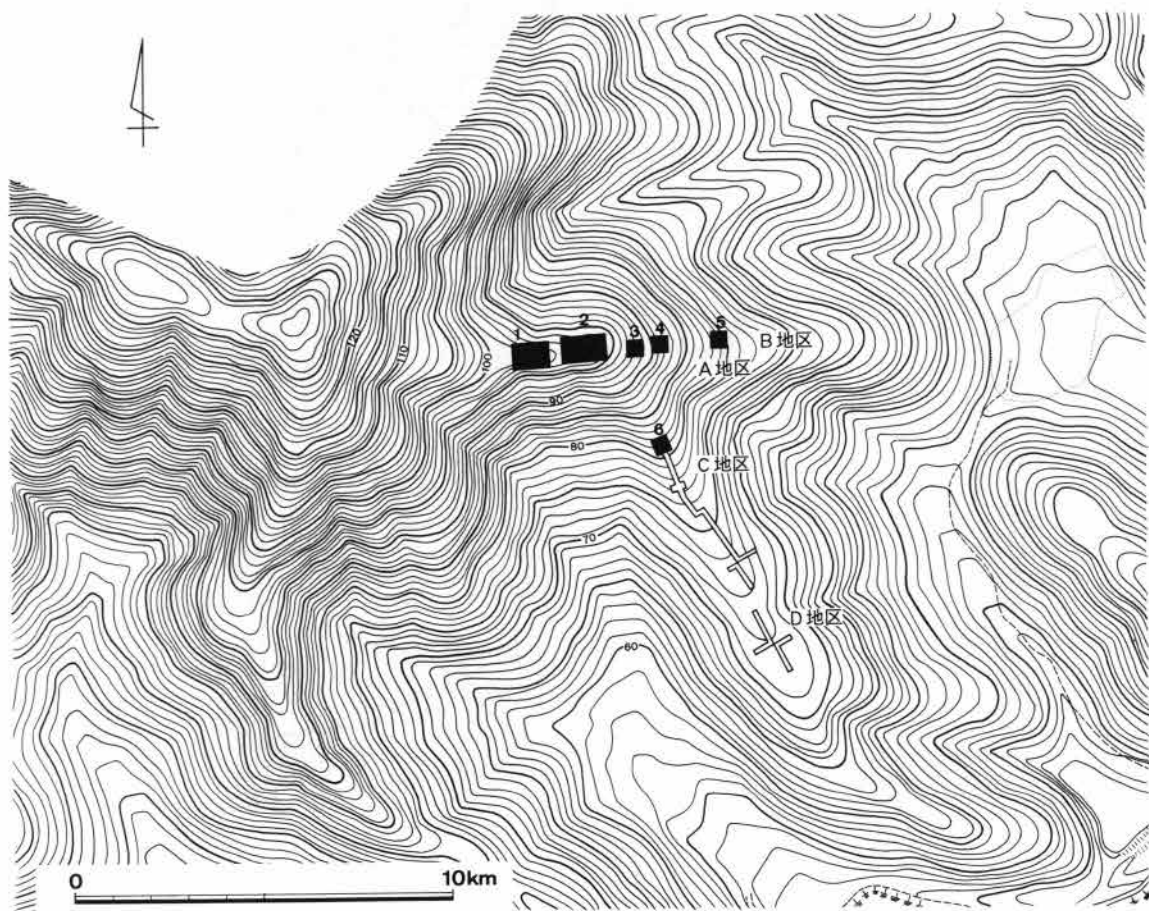
第65図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-----------|--------------|
| 1. 苗代古墳群 | 2. 相之目古墳 | 3. 笹ヶ谷古墳 | 4. 苗代遺跡 | 5. 下和田古墳群 |
| 6. 焼山古墳群 | 7. 薪谷古墳群 | 8. 桃谷古墳群 | 9. 荒神古墳群 | 10. タルメ谷北古墳群 |
| 11. タルメ谷古墳群 | 12. 途中ヶ丘遺跡 | 13. 大芝原古墳群 | 14. 穴虫古墳群 | 15. 金谷古墳群 |
| 16. 夏焼古墳群 | 17. 船山横穴 | | | |

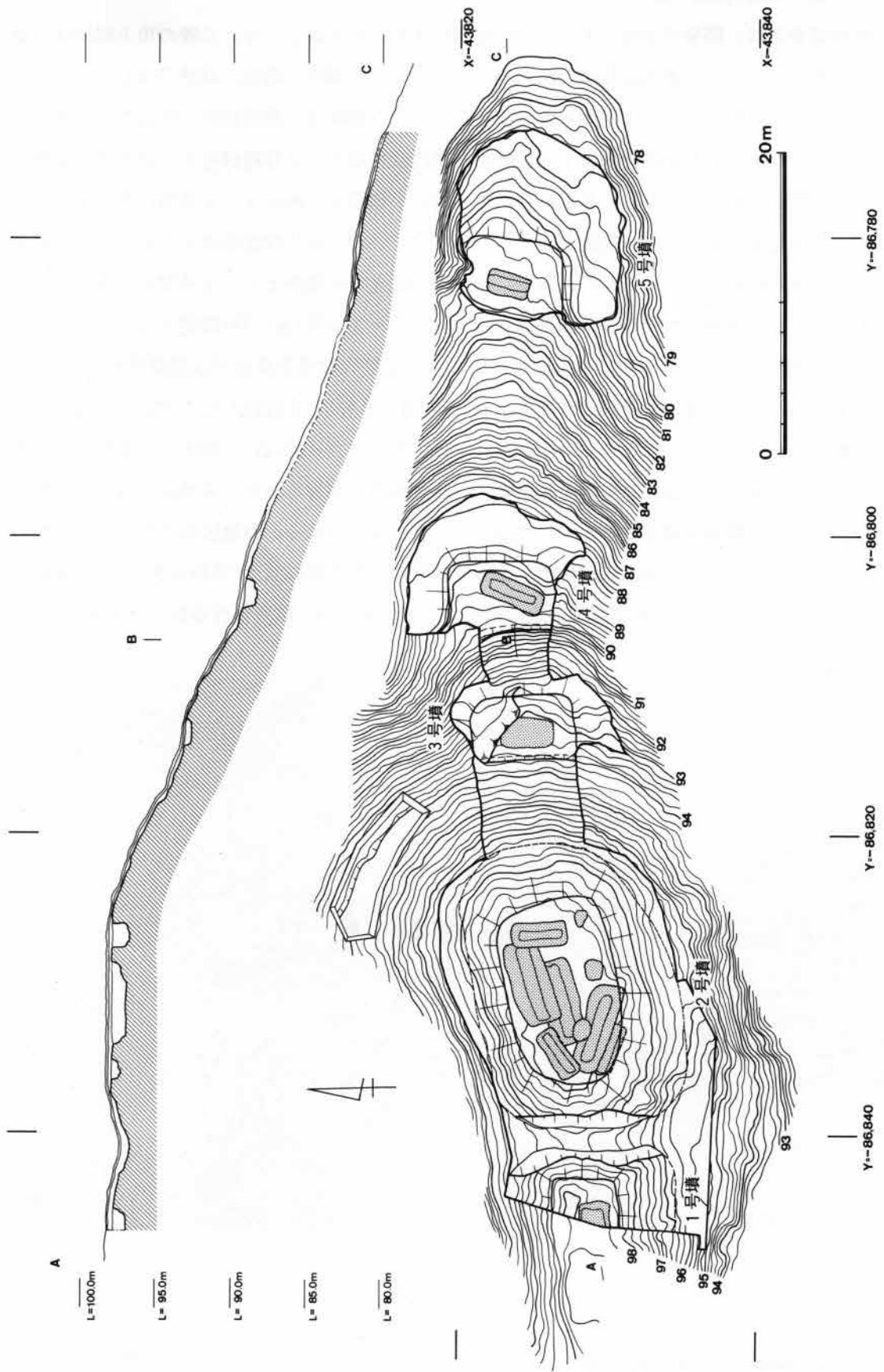
2. 調査の概要(第66・67図)

今回の調査では、開発予定地である2つの尾根にトレンチを設定した。丘陵の頂上部には、城跡が想定されており、調査地はその一部と推定されていた。調査の結果、城跡ではなく、6基の古墳からなる古墳群であることが明らかになった。苗代古墳群は、標高約80~98mのところに位置する。西から東へ降りる尾根筋に1~5号墳が階段状に並び、2号墳付近から派生する尾根の基部に6号墳が立地する。なお、当初みられた曲輪状平坦面4か所は1~4号墳に相当する。

また、農地造成対象地では、発掘調査と並行して事業に伴う樹木伐採が進められていた。樹木伐採の後、地表観察を行ったところ、新たに4号墳の続きの尾根筋と1・2号墳から南にのびる尾根筋に平坦面が認められたので、試掘調査のトレンチを4か所(A~D)設定することになった。A・C・D地区は当センターが、B地区については、京都府教育委員会が試掘調査を担当した。その結果、A地区とC地区でそれぞれ埋葬施設(5号墳・6号墳)を確認したことから、両地区についても調査を実施することとなった。B地区では、表土下10~20cmに「地山」と判断できる黄色砂礫質土が確認されたが、無遺物・無遺構という試掘結果が得られた。B地区では、古墳が造られなかったか、埋葬施設などがすでに流出していたと推定される。D地区のやや広い2か所の平坦面では、表土下10~20cmで赤褐色土・黄褐色粘質土や黄色砂礫質土(花崗岩風化土)が堆積し「地山」と判断された。下位の平坦面の東斜面では、表土直下から須恵器杯身が1点出土した(第

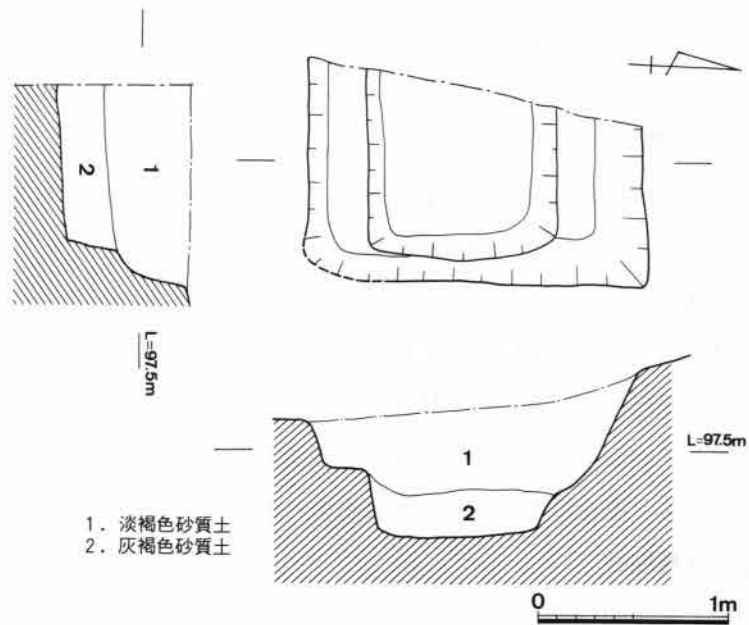


第66図 苗代古墳群位置図及びトレンチ配置図(1/5,000)



第67図 1～5号墳地形測量図

85図10)。古墳の墳丘は、いずれも地山を削り出して整形しており、1・2・6号墳は、区画溝をもつ。古墳の墳丘上では、表土と地山の間10~20cmに自然堆積土があり、埋葬施設はすべて地山面から掘り込まれている。6基の古墳のうち、墳丘規模が最大である2号墳は複数埋葬墳で、その他の古墳は単独埋葬墳である。地山層は、赤褐色砂質土または黄白色砂質土(花崗岩風化土)である。



第68図 1号墳主体部実測図

(石尾政信・松尾史子)

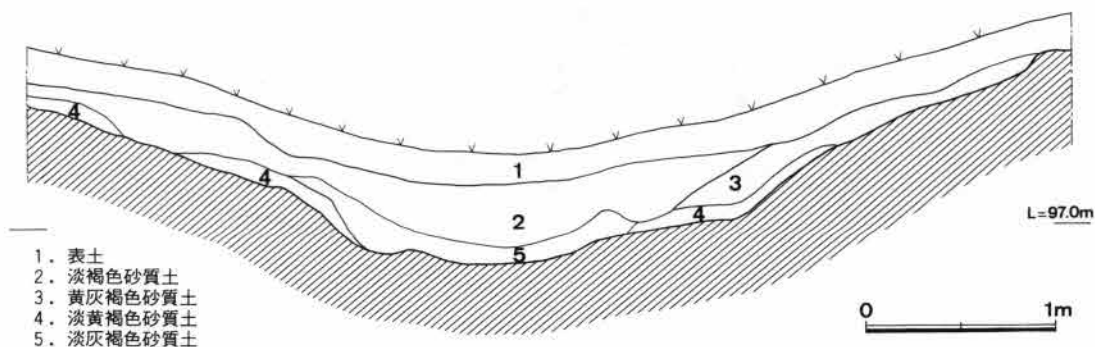
3. 検出遺構

(1) 1号墳(第68図)

尾根の最西端に位置する古墳で、農地開発の境界が古墳の中央部を南北に横断することから、調査対象地は、古墳の南半部分に限定された。調査対象地内では、埋葬施設1基分を確認した。

方墳で、墳丘の規模は東西約11m×南北約9mを測る。今回は、その1/4が調査対象となった。墳丘は、地山を削り出して整形しており、尾根の基部(西側)と2号墳との間(東側)に区画溝を設けている。今回は、東側の区画溝(SD01)のみが調査範囲に含まれた。溝は幅約3.0m・深さ約0.4mを測り、断面が逆台形を呈する(第69図)。底から壺の底部が出土した(第70図1)。

埋葬施設(第68図)は、墳丘の東端に位置する東西方向の主体部である。主軸は北で87.5°東に傾く。墓壙は二段墓壙で、幅約1.2m・長さ約2.2m分を確認し、さらに調査地外に続く。検出面



第69図 SD01断面実測図

から墓壙底までの深さは約0.85mを測り、棺掘形の深さは約0.35mである。木棺の棺痕跡は確認できなかったが、墓壙の形状から箱形木棺であったと考えられる。副葬品などの出土遺物はなかった。墳丘の規模から、1号墳にはこのほかにも数基の主体部が存在すると考えられる。

(2) 2号墳(第71～78図)

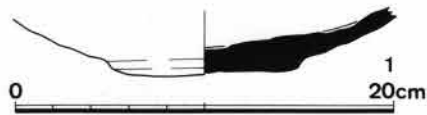
古墳群の中で最大規模の古墳である。1号墳の東側に位置し、区画溝(SD01)を共有する。墳丘平坦面で9基の埋葬施設を検出した(第71図)。

a. 墳丘

方墳で、墳丘の規模は東西約19m×南北約14mを測る。墳丘は、地山を削り出して整形している。墳丘平坦面には9基の主体部があり、第1主体部を中心にそれを取り囲むように他の主体部が重複している。第1～6主体部の6基が木棺直葬で、第7～9主体部の3基は壺棺を埋葬したものである。墳丘の南西部分と南東隅の一部は、自然崩壊により墳丘が流出している。

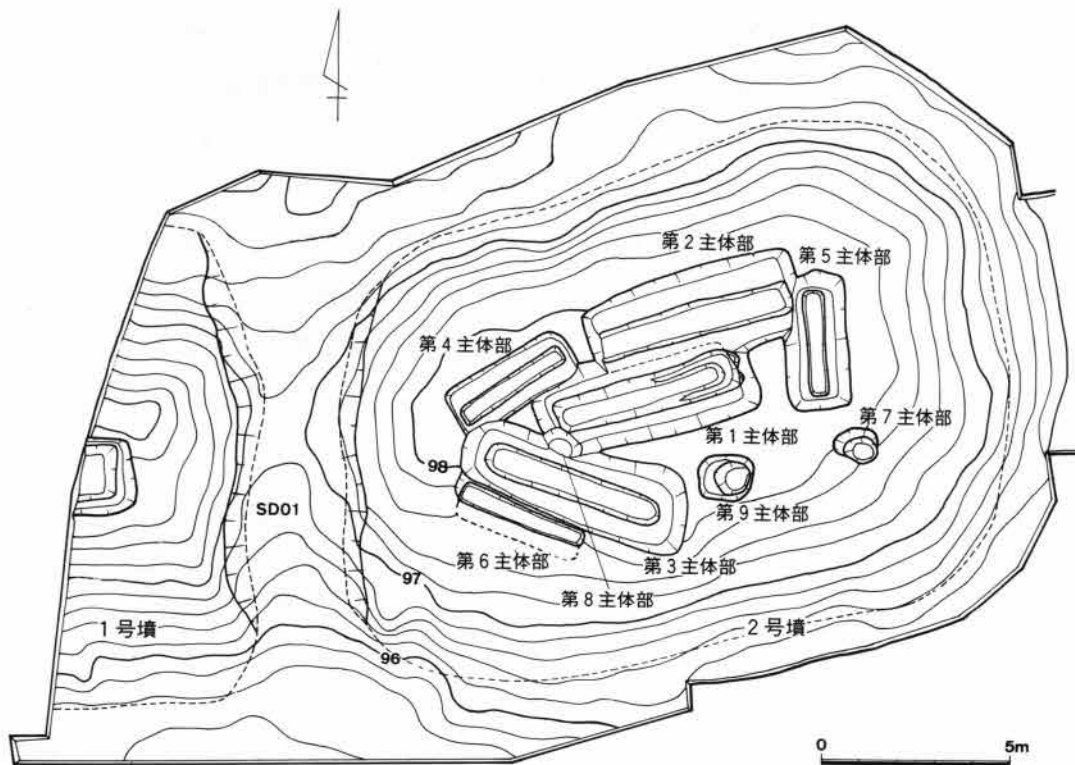
b. 埋葬施設

① 第1主体部(第72・73図)

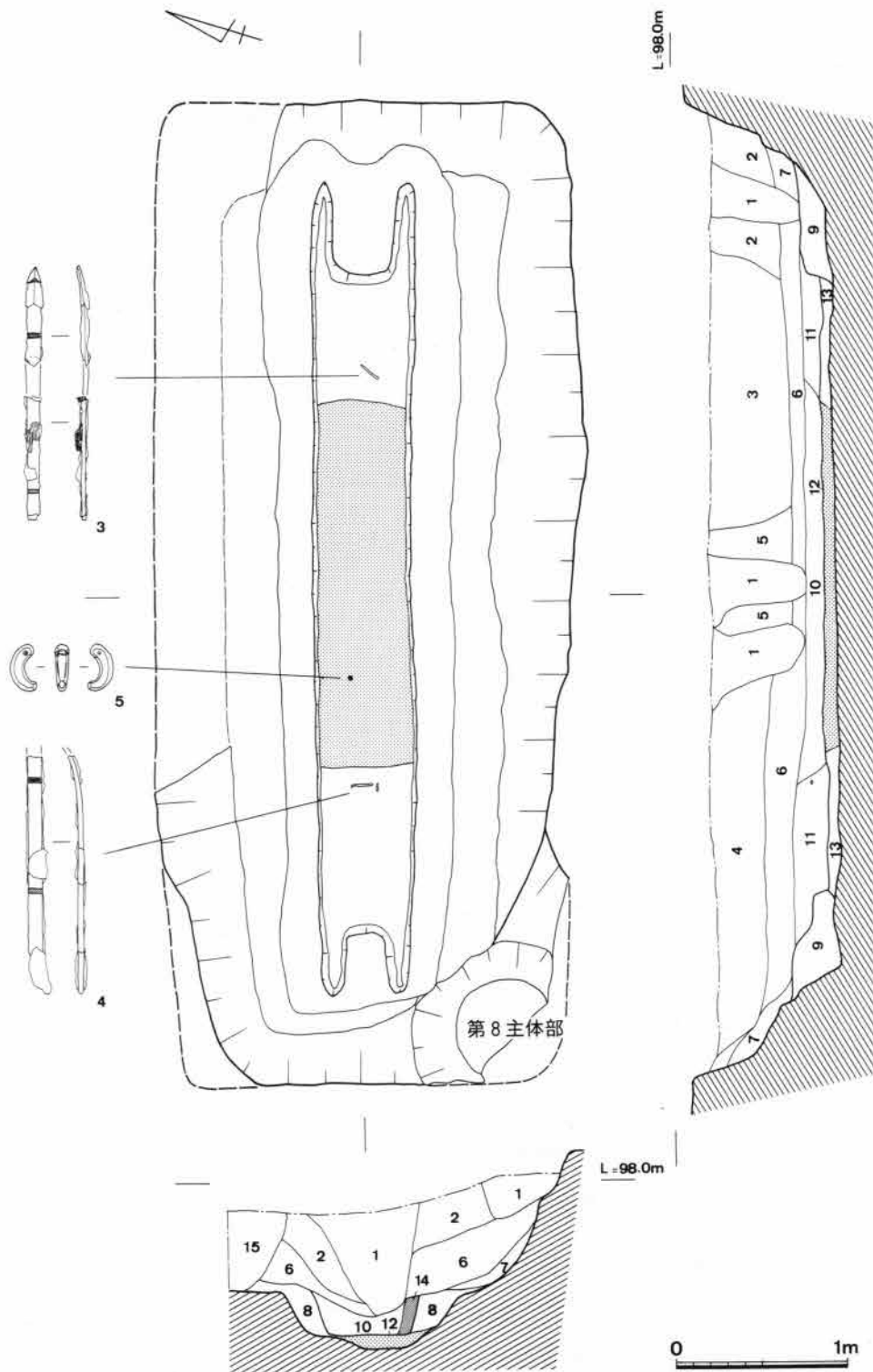


第70図 SD01出土遺物実測図

墳丘の中央部で検出した東西方向の主体部で、中心主体部にあたる。9基のうち、最も古い時期に位置づけられる。主軸は、北で73.5°東に傾く。墓壙は二段墓壙で、上段は

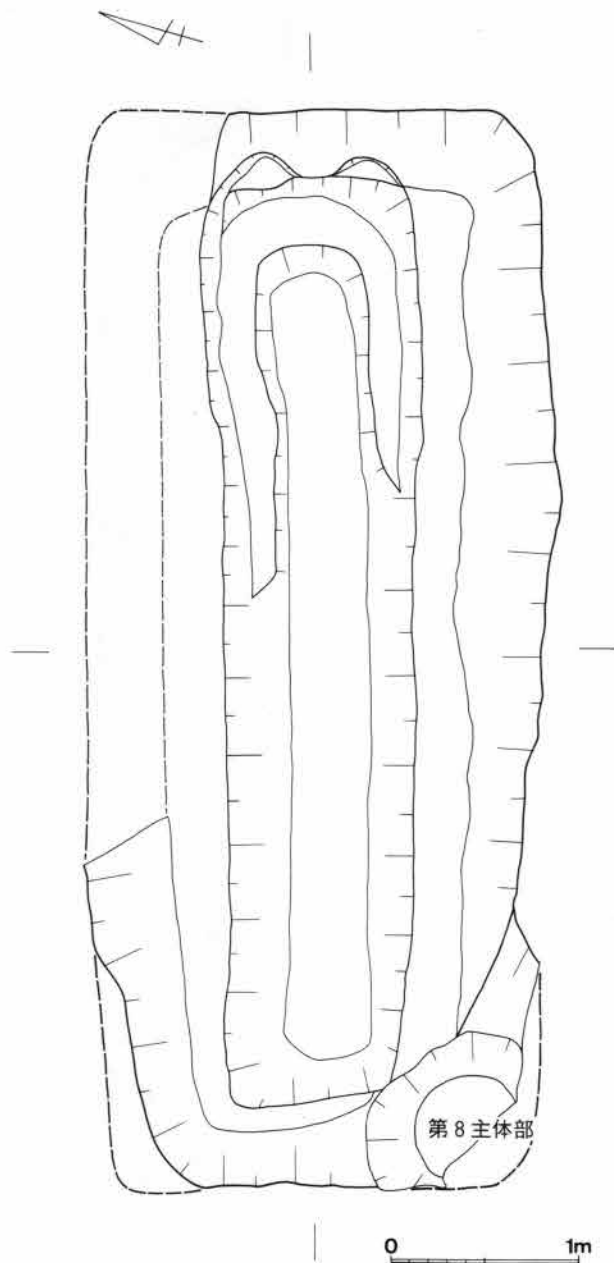


第71図 2号墳遺構配置図



第72図 2号墳第1主体部実測図(1)

- | | | |
|----------------------|---------------------|------------------------|
| 1. 淡灰褐色砂質土 | 2. 淡黄灰褐色砂質土 | 3. 淡橙褐色砂質土 |
| 4. 淡黄灰褐色砂質土(地山ブロック混) | 5. 淡橙褐色砂質土(地山ブロック混) | 6. 淡褐色砂質土 |
| 7. 淡黄褐色砂質土 | 8. 淡赤橙色砂質土 | 9. 茶褐色土(地山ブロック・小口裏込め土) |
| 10. 淡灰褐色砂質土(棺埋土) | 11. 黄褐色砂質土(棺埋土) | 12. 淡黄褐色砂質土(置き土) |
| 13. 淡赤橙色砂質土(置き土) | 14. 淡赤褐色砂質土(棺材) | 15. 淡灰褐色砂質土 |



第73図 2号墳第1主体部実測図(2)

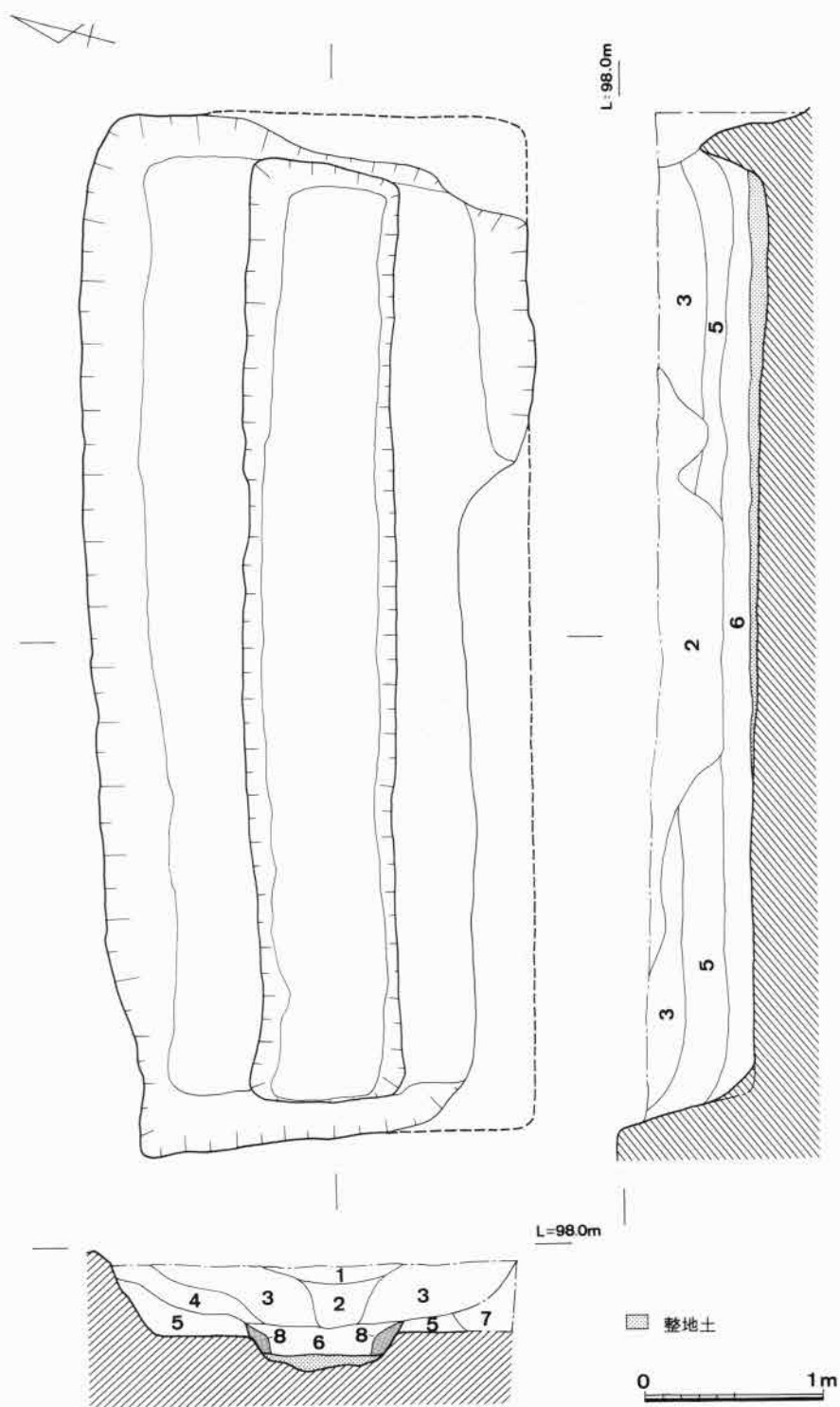
棺底で出土した。鉈は、両小口板から約1mの地点で折れた状態で出土しており、出土層位から棺上に置かれたものが木棺が陥没した際に転落したものである。これらの遺物の出土状況から、被葬者の頭位は西側であったと考えたい。

②第2主体部(第74図)

第1主体部の北側に位置する東西方向の主体部で、墓壙の重複関係から第1主体部より新しく、第5主体部より古い。主軸は北で76°東に傾く。墓壙は二段墓壙であるが、下段の小口部分は両方とも上段と接しており、縦断面は二段にならない。規模は、上段が長さ約5.7m・幅約2.5m、

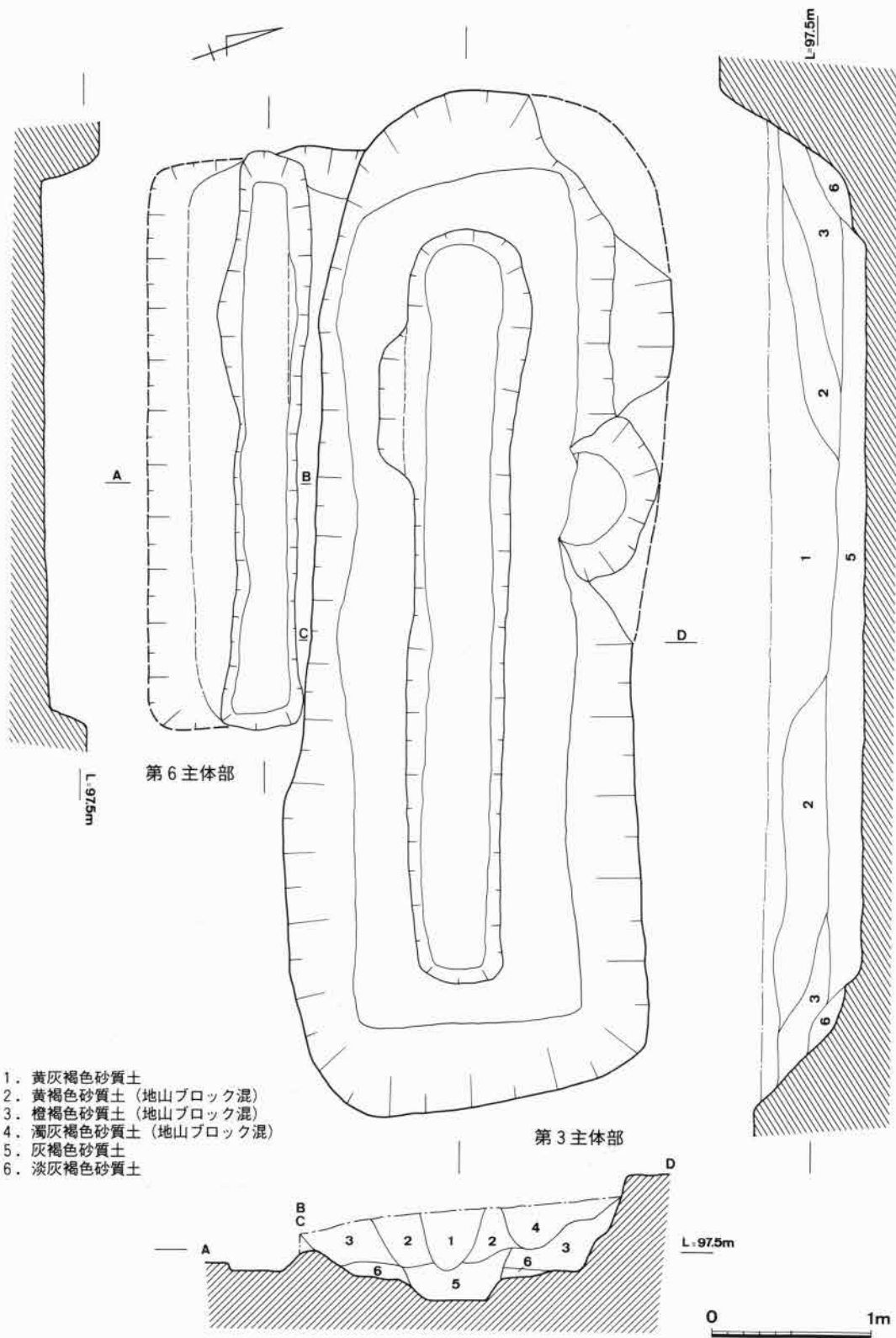
長さ約5.7m・幅約2.5m、下段(棺の掘形)は長さ約5.0m・幅約1.2mを測る。上段と下段は東側の小口部分が接しており、木棺の両側板が当たる部分が掘りくぼめられていた。検出面から墓壙底までの深さは約1.2mで、墓壙底から約0.3mで棺痕跡を確認した。木棺は「H」形の組合式木棺で、内法で長さ約3.7m・幅約0.5mを測る。木棺は、棺の掘形の底に厚さ5cmほどの置き土をして整地した後におさめられている。ここで注目されることは、整地の際、中央の約2m分だけ赤色の土が使用されていることである。遺体を埋葬する場所を明示するための意図的な行為と考えられる。棺の外側には、淡赤褐色砂質土(第8層)を棺材の裏込め土として入れており、小口板の裏込め土には別に地山ブロック混じりの茶褐色土(第9層)を入れて補強している。棺底のレベルは、西側が若干低い。

副葬品には、勾玉1点(第86図5)と鉈2点(第86図2・4)がある。勾玉は、翡翠製で両面穿孔である。棺の中央部よりやや西側の



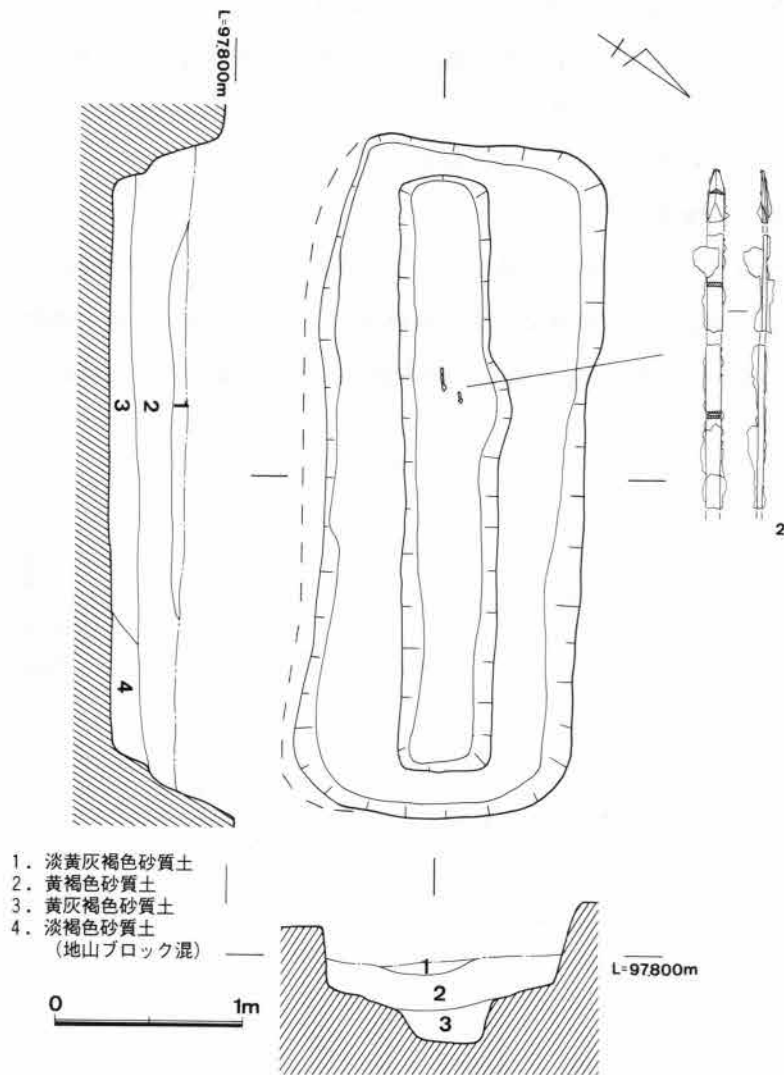
第74図 2号墳第2主体部実測図

- | | |
|------------------------------|------------|
| 1. 淡黄灰褐色砂質土 | 2. 黄灰褐色砂質土 |
| 3. 橙褐色砂質土(地山ブロック混) | 4. 黄褐色砂質土 |
| 5. 黄橙褐色砂質土 | 6. 淡褐色砂質土 |
| 7. 淡橙褐色砂質土(地山ブロック混)——第1主体部埋土 | |
| 8. 淡赤褐色砂質土(棺材) | |



第75図 2号墳第3・第6主体部実測図

下段(棺の掘形)が長さ約5.2m・幅約0.85mを測る。検出面から墓壙底までの深さは約0.8mである。墓壙底から約0.3mで棺痕跡を確認したが、小口部分については不明瞭であった。棺掘形の東半分には地山を削った土で整地した後に木棺をおさめている。棺掘形の底は、東側の方が低く掘られているが、整地することによって棺底の東西のレベルはほぼ同じになっている。掘形の西側小口部分の木棺の片方の側板が当たる部分がくぼんでおり、木棺は箱形もしくは「H」形の組合式木棺であったと推定する。副葬品などの出土遺物はなかった。



第76図 2号墳第4主体部実測図

③第3主体部(第75図)

墳丘西南部に位置する東西方向の主体部である。重複関係から第1・第6主体部より新しく、第8主体部より古い。主軸は北で70°西に傾く。墓壙は二段墓壙で、上段は長さ約6.4m・幅約2.2m、下段(棺の掘形)は長さ約4.7m・幅約0.6mを測る。墓壙規模は最も大きい。検出面から墓壙底までの深さは約0.8mを測る。棺掘形の深さは約0.15mである。棺底のレベルは、東側の方が若干高い。棺掘形の形状は、小口部分が丸みを帯びており、舟形木棺が埋納されていたと推定される。副葬品などの出土遺物はなかった。

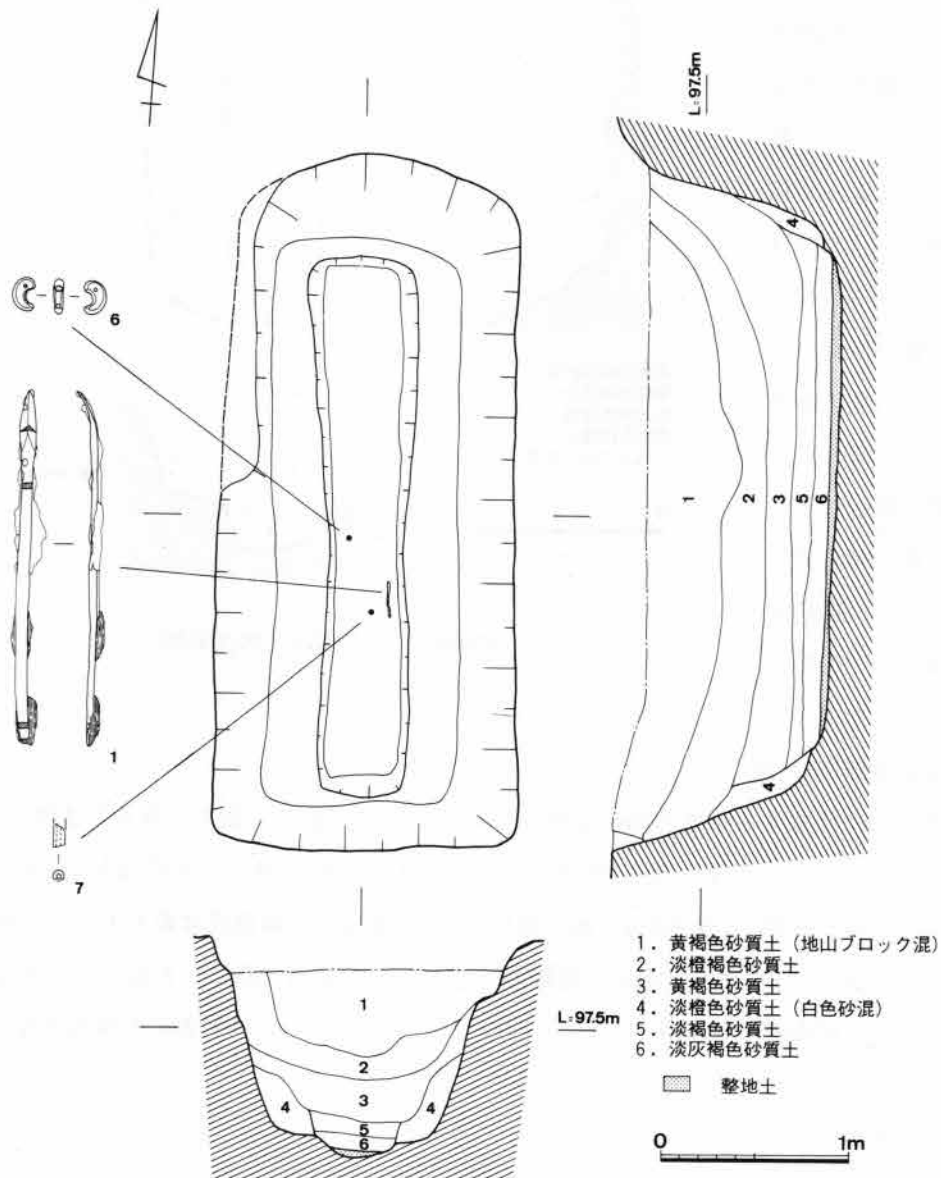
④第4主体部(第76図)

墳丘北西部に位置する東西方向の主体部である。重複関係から第1・第3主体部より新しい。主軸は北で50°東に傾く。墓壙は二段墓壙で、上段は長さ約3.6m・幅約1.5m、下段(棺の掘形)

は長さ約3.15m・幅約0.5mを測る。検出面から墓壙底までの深さは約0.6mを測り、棺掘形の深さは約0.2mである。棺底のレベルは、東側の方が若干高い。木棺は、棺掘形断面の形状が湾曲していることから割竹形木棺と推定する。棺内の中央部より西側から鉤(第86図3)が二つに折れて出土した。出土状況及び層位から、第1主体部と同じく棺上に置かれていたものが、木棺が陥没した際に転落したものである。

⑤第5主体部(第77図)

墳丘東端の南北方向の主体部である。重複関係から第2主体部より新しい。主軸は北で9.5°西に傾く。墓壙は二段墓壙で、その規模は、上段が長さ約3.7m・幅約1.2m、下段(棺の掘形)が長さ約2.85m・幅約0.5mを測る。検出面から墓壙底までの深さは約1.2mで、調査した主体部の中



第77図 2号墳第5主体部実測図

では第1主体部と同様最も深いものになる。棺掘形の深さは約0.1mである。棺掘形の底は、地山と同じ土を入れて整地している。棺底のレベルは、南側の方が若干高い。棺掘形の形状から木棺は箱形木棺と考えられる。副葬品には勾玉1点(第86図6)、管玉1点(第86図7)、鉈1点(第86図1)があり、内容としては最も豊富である。いずれも、棺底からの出土である。勾玉は、棺の中央部から出土した。淡緑灰色で、材質は凝灰岩と考えられる。管玉と鉈は、棺の南側部分で出土した。鉈は二つに折って棺の主軸と平行に置かれていた。刃先ともう片方の折れ口を合わせ、さらに刃の先端を下に向けて置いてあった。棺底のレベルと副葬品の出土状況から、南側が頭位であると考えられる。

⑥第6主体部(第75図)

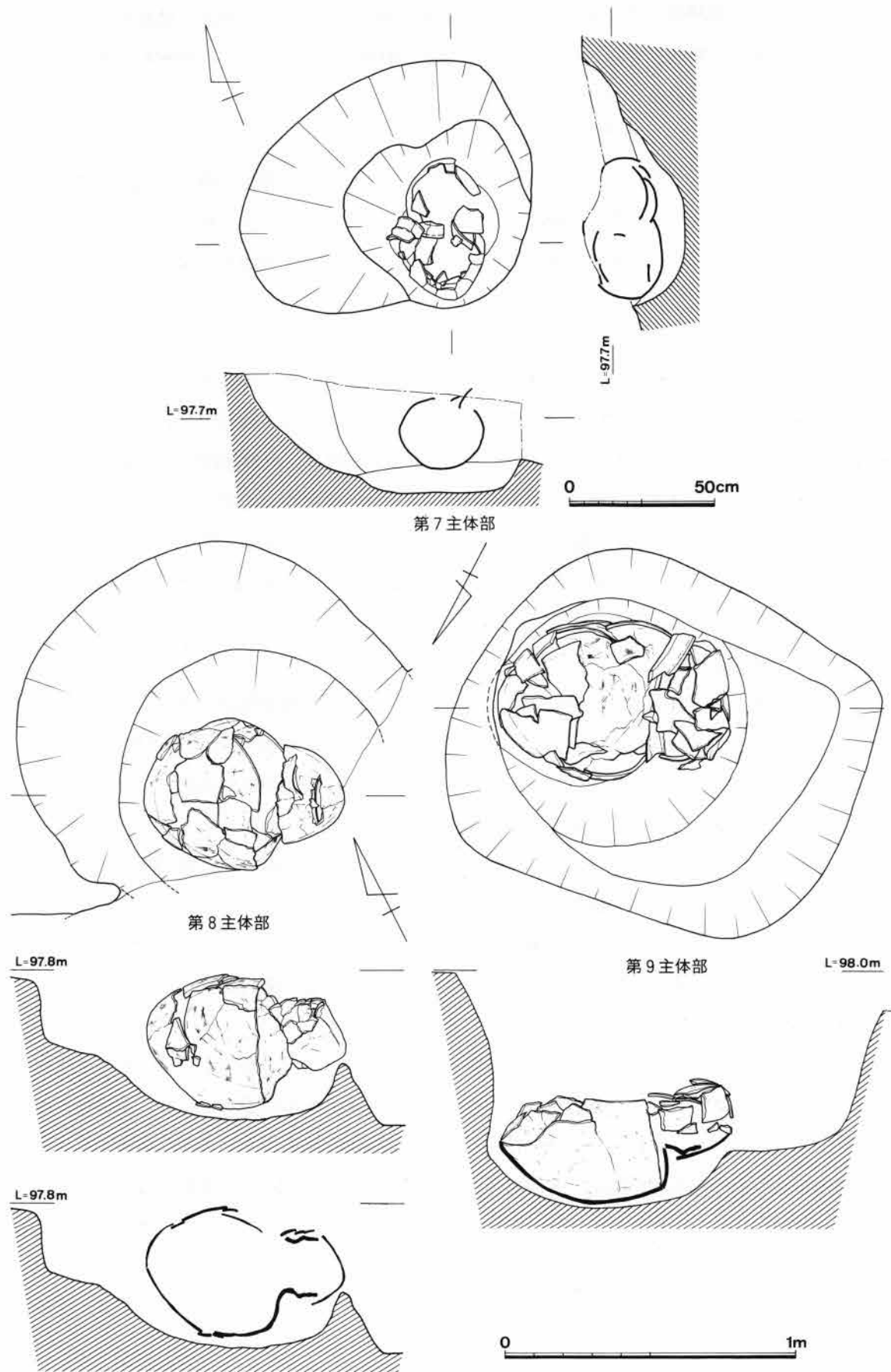
墳丘西南部に位置する東西方向の主体部である。重複関係から第3主体部より古い。主軸は北で70°西に傾く。墓壙は二段墓壙で、その規模は上段が長さ約3.6m・幅約1.3m以上、下段(棺の掘形)が長さ約3.6m・幅約0.4mを測る。墓壙上段の南側長辺は、自然崩壊のため確認できなかった。また、下段の小口部分は両方とも上段と接しており、縦断面は二段にならない。検出面から墓壙底までの深さは約0.4mを測り、棺掘形の深さは約0.05mである。棺底のレベルは、東側の方が若干高い。木棺は、棺掘形の形状から箱形木棺と推定する。棺の中央部で鉄製品が出土したが、損傷が激しく形態は不明である。

⑦第7主体部(第78図)

墳丘の南東隅、墳丘平坦面からやや下がった斜面部に位置する埋葬施設(壺棺)である。棺の主軸(壺棺の口縁部と底部を結んだライン)は北で20°東に傾く。墓壙掘形の平面形は楕円形を呈し、全長約1.0m・幅約0.85m・検出面からの深さは約0.4mを測る。墳丘が自然崩壊しており、表土直下で壺棺を検出した。墓壙は、中央より東側を一段深く掘り込み、地山とよく似た淡褐色砂質土を5~10cm敷いた上に、壺棺を横にして埋納する。壺棺には、土師器の壺2個(第83図2・3)を転用している。壺は、口縁部を打ち欠いた後、合わせ口にしており、合わせ目の上に口縁部の破片をかぶせている。壺は、いずれも二重口縁壺である。壺の大きさから乳幼児用の棺と考えられる。壺棺の内部には土砂が堆積していた。骨・歯牙や副葬品などの遺物はなかった。

⑧第8主体部(第78図)

墳丘平坦面の中央部やや西よりに位置する埋葬施設である。第1主体部、第3主体部と重複関係を持ち、最も新しい。棺の主軸は北で63°西に傾き、墓壙の主軸は不明である。墓壙掘形の平面形はほぼ円形を呈し、径約1.3m、検出面からの深さは約0.5mを測る。墓壙の中央よりやや西側に壺棺をおさめる。墓壙の底は、壺の部分だけ一段掘りくぼめている。壺棺には大小2個の土師器壺(第84図6・7)を使用している。大型の壺を横たえて棺本体とし、小型の壺を蓋としてかぶせている。大型の壺は、丸底の二重口縁壺で、頸部が細くくびれ、口縁部は内傾する。体部には穿孔がある。小型の壺は、口縁部を打ち欠いている。壺の大きさから小児用の棺と考えられる。壺棺の内部には土砂が堆積しており、骨・歯牙や副葬品などの遺物はなかった。



第78図 2号墳第7・第8・第9主体部実測図

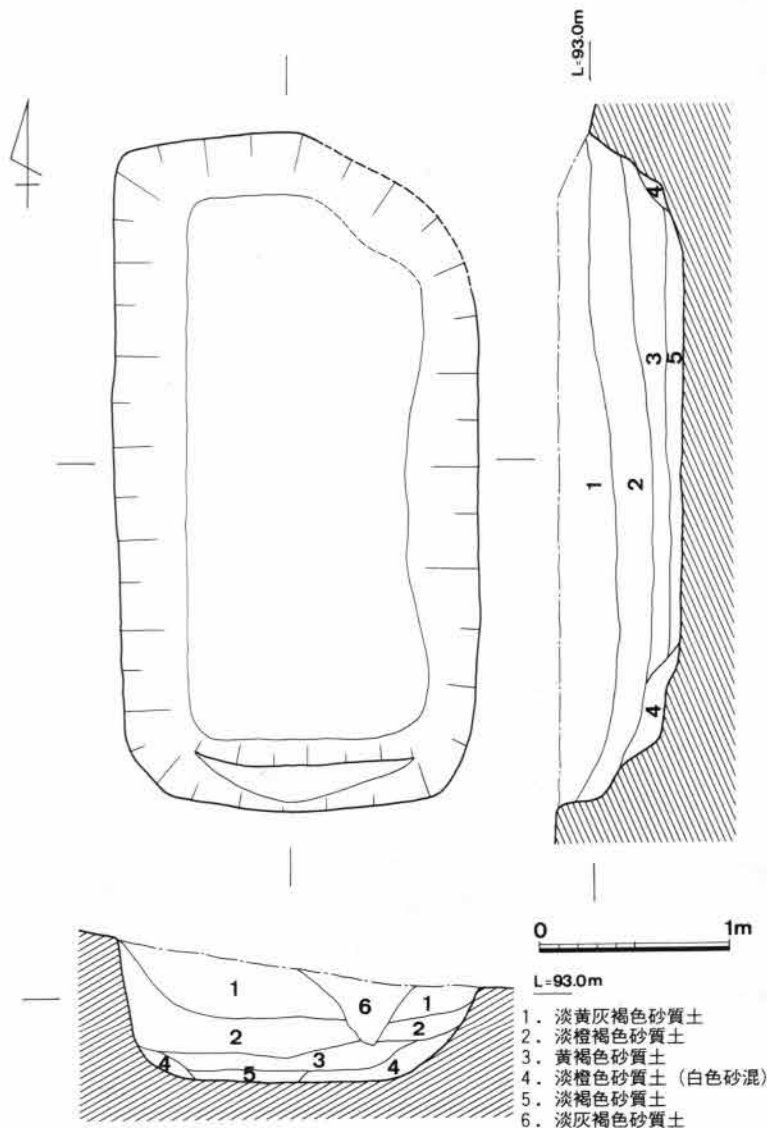
⑨第9主体部(第78図)

第1主体部の南、第3主体部の東側に位置する埋葬施設(壺棺)で、墓壙掘形の平面形は隅丸方形である。墓壙の主軸は北で85°東に傾き、棺の主軸は北で約63°東に傾く。墓壙の規模は、全長約1.4m・幅約1.15m・検出面からの深さ約0.8mを測る。墓壙掘形は、ほぼ垂直に掘り込まれており、墓壙底の東南隅に直接壺棺をおさめる。墓壙の底は壺の部分だけ一段掘りくぼめ、壺のすわりをよくしている。第8主体部と同じく大小2個の土師器壺(第84図4・5)を棺として使用している。大型の壺を横たえて棺本体とし、小型の壺を半分に割り、その破片を蓋としてかぶせている。大型の壺は二重口縁壺である。尖り気味の丸底で、口縁部が内湾している。類例として、久美浜町権現山古墳^(注15)や福知山市宝蔵山古墳^(注16)、峰山町七尾南古墳群^(注17)、弥栄町スクモ塚古墳出土の壺棺^(注18)があげられよう。壺棺は、土圧のため上半分が押しつぶされており、内部には半分近く土砂が堆積していた。壺の大きさから小児用の棺と考えられる。骨・歯牙や副葬品などの遺物はなかった。

(3) 3号墳(第79図)

2号墳の東隣りの下段に位置する階段状古墳である。墳丘は、尾根筋を削り出して平坦面を造り出しており、盛り土はない。墳丘の北側が一部自然崩壊しているため、墳形は明らかではないが、他の古墳が方形であることから、3号墳も方墳であったと考えたい。墳丘の規模は東西約5.5m・南北約8mを測る。平坦面の標高は約93m付近にある。平坦面中央部で木棺直葬の主体部を1基検出した。

埋葬施設(第79図)は、南北方向の主軸で、尾根に直交する。主軸は北で西に約1°傾いている。墓壙は、他の墓壙がすべて二段墓壙であるのに対し、唯一一段墓壙で、規模は長さ約3.6m・幅約1.9mを測る。検出面から墓壙底までの深さは約0.8mである。墓



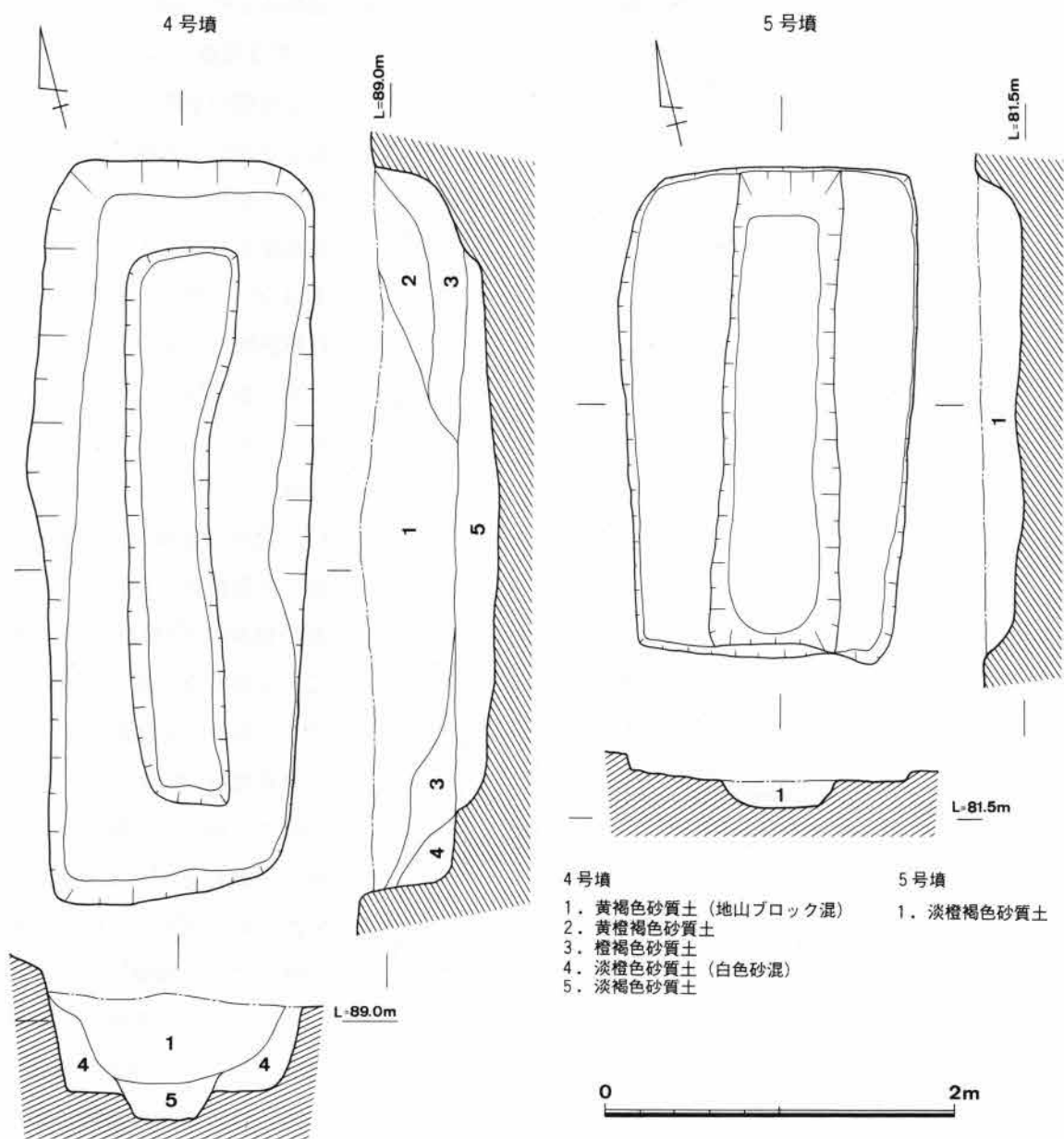
第79図 3号墳主体部実測図

墳底のレベルは、南側の方が若干高い。木棺の痕跡は確認できなかったが、墓墳の底に棺を置いた跡と考えられる窪みがある。副葬品などの出土遺物はなかった。

(4) 4号墳(第80図)

3号墳の東隣りの下段に位置する階段状古墳である。墳丘は、尾根筋を垂直に切り落とし、平坦面を方形に削り出して整形している。墳丘の規模は、東西約6m・南北約9mを測る。平坦面の標高は約89m付近にある。墳丘の表土直下から土師器の高杯が1点出土した(第85図8)。平坦面中央部で木棺直葬の主体部を1基検出した。

埋葬施設(第80図)は、南北方向に主軸をとり、尾根に直交する。主軸は、北で東に約14°傾いている。墓墳は二段墓墳で、その規模は上段が長さ約4.2m・幅約1.6mを測り、下段が長さ約3.2m・幅約0.5mを測る。検出面から墓墳底までの深さは約0.9mで、棺掘形の深さは約0.15m



第80図 4号墳・5号墳主体部実測図

である。棺底のレベルは、北側の方が若干高い。墓壙底は、中央部が低くなっているが、第1主体部や第2主体部のように整地していた可能性がある。木棺は、棺掘形の形状から箱形木棺と考えられる。棺内の北側部分で鉄製品が出土したが、損傷が激しく形態は不明である。その他の副葬品はなかった。
(松尾史子)

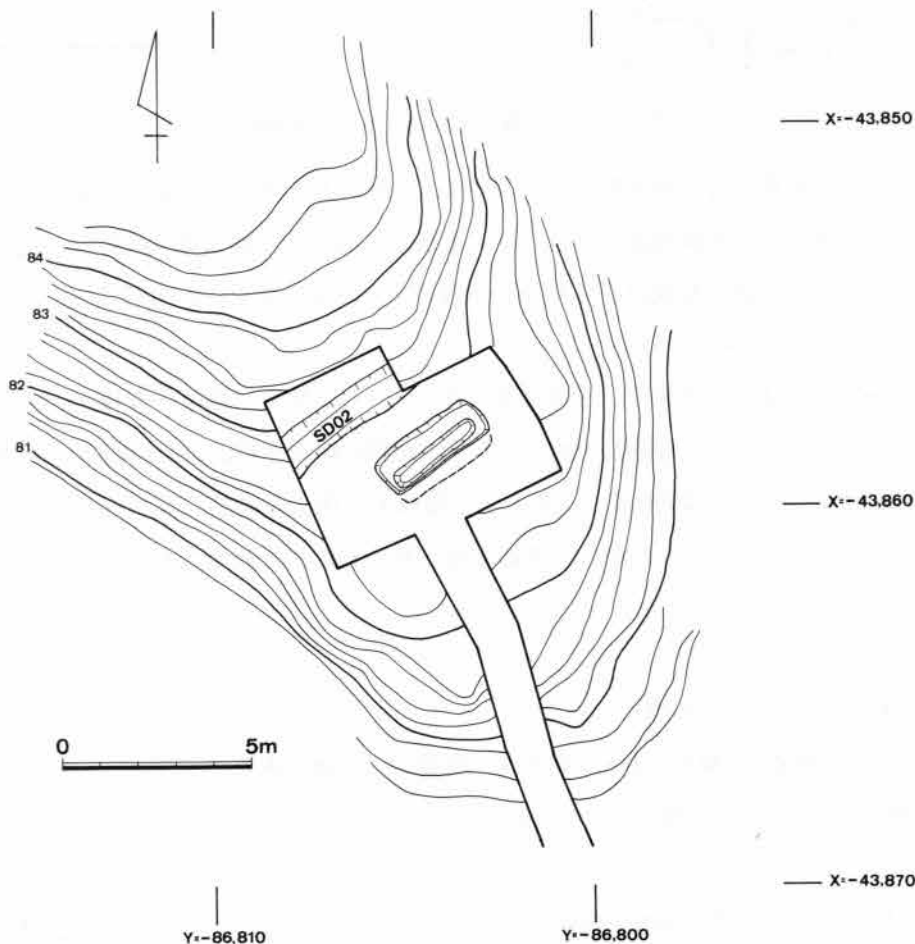
(5) 5号墳(第80図)

尾根の稜線部を階段状に削り出し、方形状の平坦部を造る。墳丘平坦面は、標高約81.6m付近に位置し、平坦面規模は、南北約6.5m・東西約7mを測る。墳丘の表土直下から須恵器壺(第85図9)が出土した。平坦面のほぼ中央付近で、尾根筋に直交する南北方向の埋葬施設を検出した。

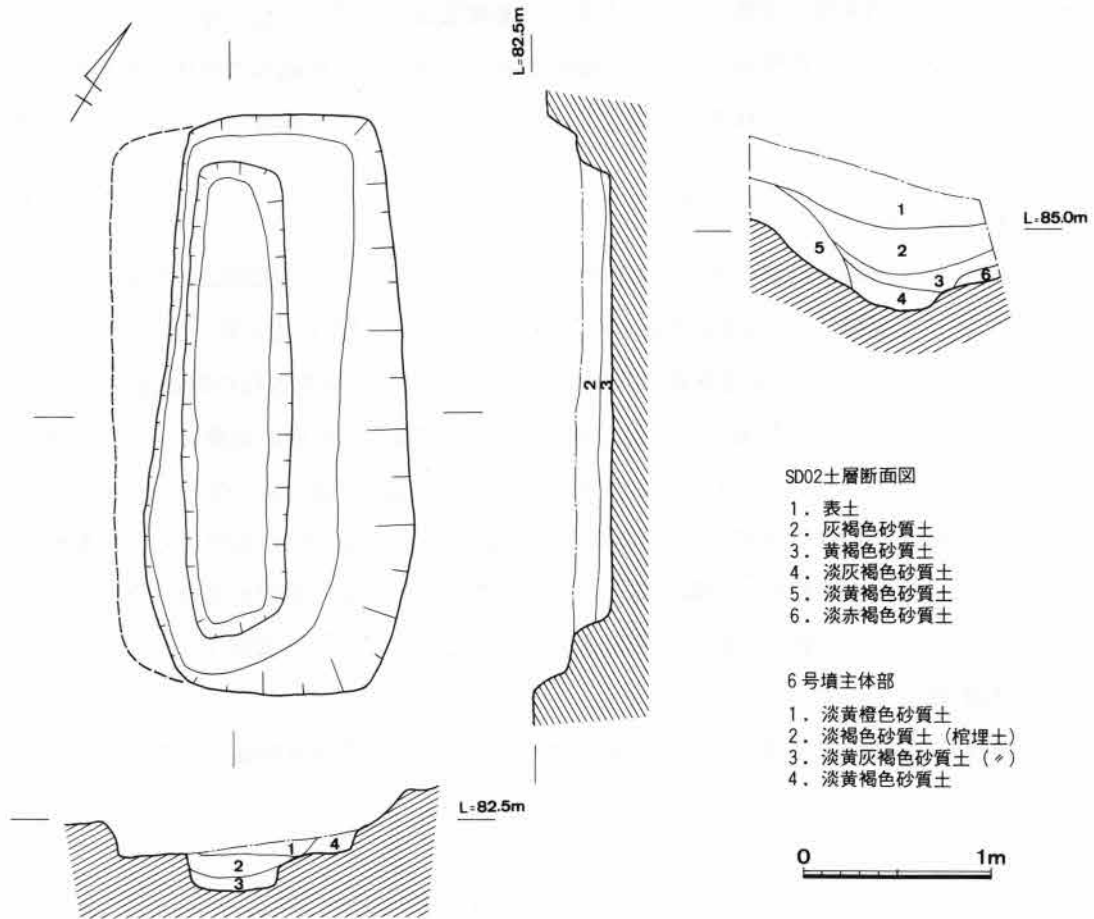
埋葬施設(第80図)は二段墓壙で、主軸は北で約13°東に傾く。墓壙の規模は、上段が残存状況がよくないが長さ約2.8m・幅約1.7m、下段(棺の掘形)が長さ約2.7m・幅約0.55mを測る。検出面から墓壙底までの深さは約0.2mである。下段の小口部分は上段の墓壙に接し、縦断面は二段にならない。棺掘形の断面形が弧を描く形に掘り下げられ、小口部分が垂直に近い形状となることから、割竹形木棺が納められたと推定される。副葬品などの出土遺物はなかった。

(6) 6号墳(第81・82図)

尾根の稜線部を階段状に削り出し、方形状の平坦部を造る。墳丘平坦面は、標高が82.5m付近



第81図 6号墳地形測量図



第82図 6号墳主体部及びSD02実測図

に位置する。平坦面規模は、南北約6m・東西約6.5m以上を測る。平坦面の北部よりに、尾根筋に直交する東西方向の埋葬施設を検出した。尾根の基部に切り離し溝(区画溝：SD02)を設けている(第81・82図)。溝の規模は、幅約1m・深さ約0.2mを測り、断面形は浅い「U」字形である。長さ約3.5m分を検出した。

埋葬施設(第82図)は二段墓壙で、主軸は北で約32.5°西に傾く。墓壙の規模は、上段は残存状況がよくないが長さ約3m・幅約1.5m、下段(棺の掘形)は長さ約2.5m・幅約0.6mを測る。検出面から墓壙底までの深さは約0.4mである。下段はやや南よりに造られている。棺掘形の両断面形が垂直に近い形状であることから、箱形木棺が納められたと推定される。副葬品などの出土遺物はなかった。

(石尾政信)

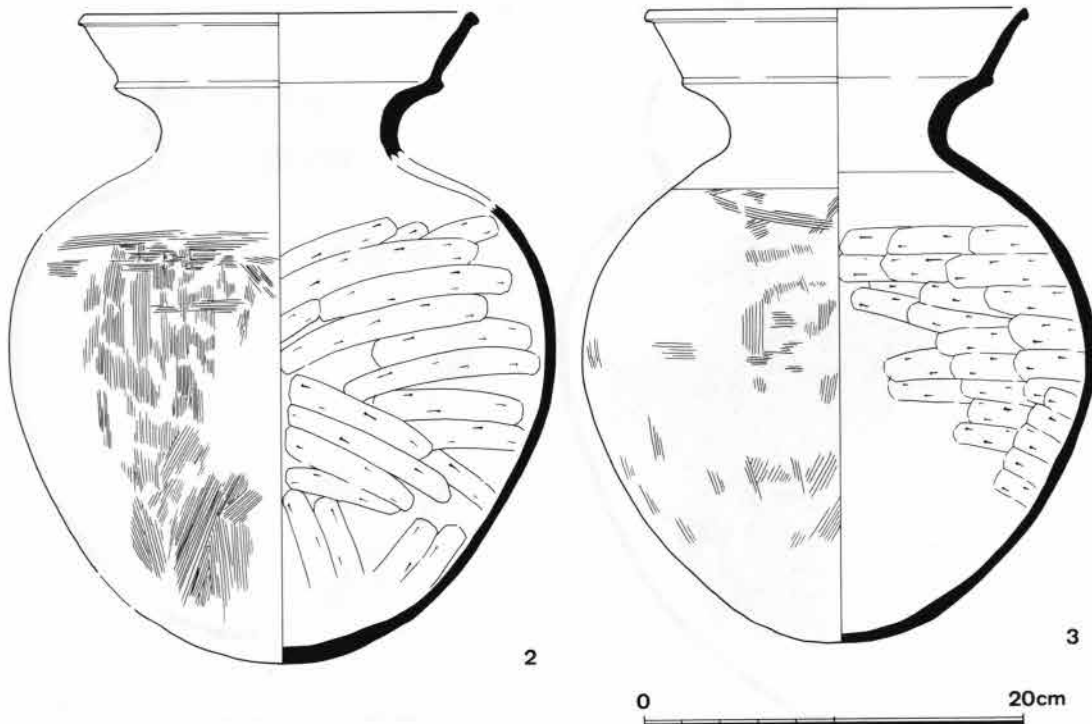
4. 出土遺物(第70・83~86図)

出土遺物には土師器(壺棺を含む)、須恵器、鉄製品、玉類がある。

(1)土師器(第70図1、第83図2・3、第84図4~7)

1は壺の底部で、SD01で出土した。底部は平底で、わずかに突出する。2・3は、第7主体部の壺棺である。2は口径20.6cm・復原高34.4cm、3は口径20.0cm・器高33.5cmを測る。いずれも丸底で、外反する二重口縁をもつ。口縁部はヨコナデで調整し、口縁端部は外側に面をもつ。

体部外面はハケメ調整をし、内面はヘラケズリを施す。4・5は、第9主体部の壺棺である。4は、口径26.2cm・残存高36.5cmを測る。口縁部は直線的に外反し口縁端部は丸くおさめる。体部内面はヨコナデ調整し、外面には緻密なヘラミガキを施す。半截して棺の蓋に転用されていた。5は、口径35.4cm・器高68.0cmを測る大型の二重口縁壺である。最大径を肩部に有する体部から、「く」の字に屈曲した後、内湾しながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は内側に面をもつ。底部はやや尖り気味の丸底である。頸部に部分的であるが、退化した綾杉文状の文様がある。口縁部はヨコナデで調整する。体部内面はヘラケズリの後ハケメ調整し、外面には緻密なヘラミガキで調整する。口径の体部径に対する比率が大きいことや、口縁部の立ち上がりの特徴から山陰系の甕の影響を受けていると考えられる。棺本体に使用されていた。6・7は、第8主体部の壺棺である。6は、残存高24.7cmを測る。丸底の体部をもち、口縁部は棺の蓋に転用する際に打ち欠いている。体部内面はヘラケズリ、外面はハケメ調整を施す。器壁は非常に薄い。7は、口径20.4cm・器高59.2cmの大型の二重口縁壺である。丸底で、最大径を肩部に有する体部から、直立した後、内傾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は内側に面をもつ。頸部及び口縁部内外面は、ヨコナデの後ハケメ調整を施す。体部内面はヘラケズリで調整し、外面はハケメ調整を施す。口径の体部径に対する比率が小さいことや、口縁部の立ち上がりの特徴から東部瀬戸内系の壺の影響を強く受けていると考えられる。8は、高杯である。4号墳の墳丘北西部表土直下で出土した。口径14.2cm・器高13.2cmを測る。やや内湾して立ち上がる体部をもち、口縁端部は外反する。体部と口縁部の境で稜線をもつ。体部及び口縁部の外面はヨコナデで調整し、内面はハケメ調整を施す。



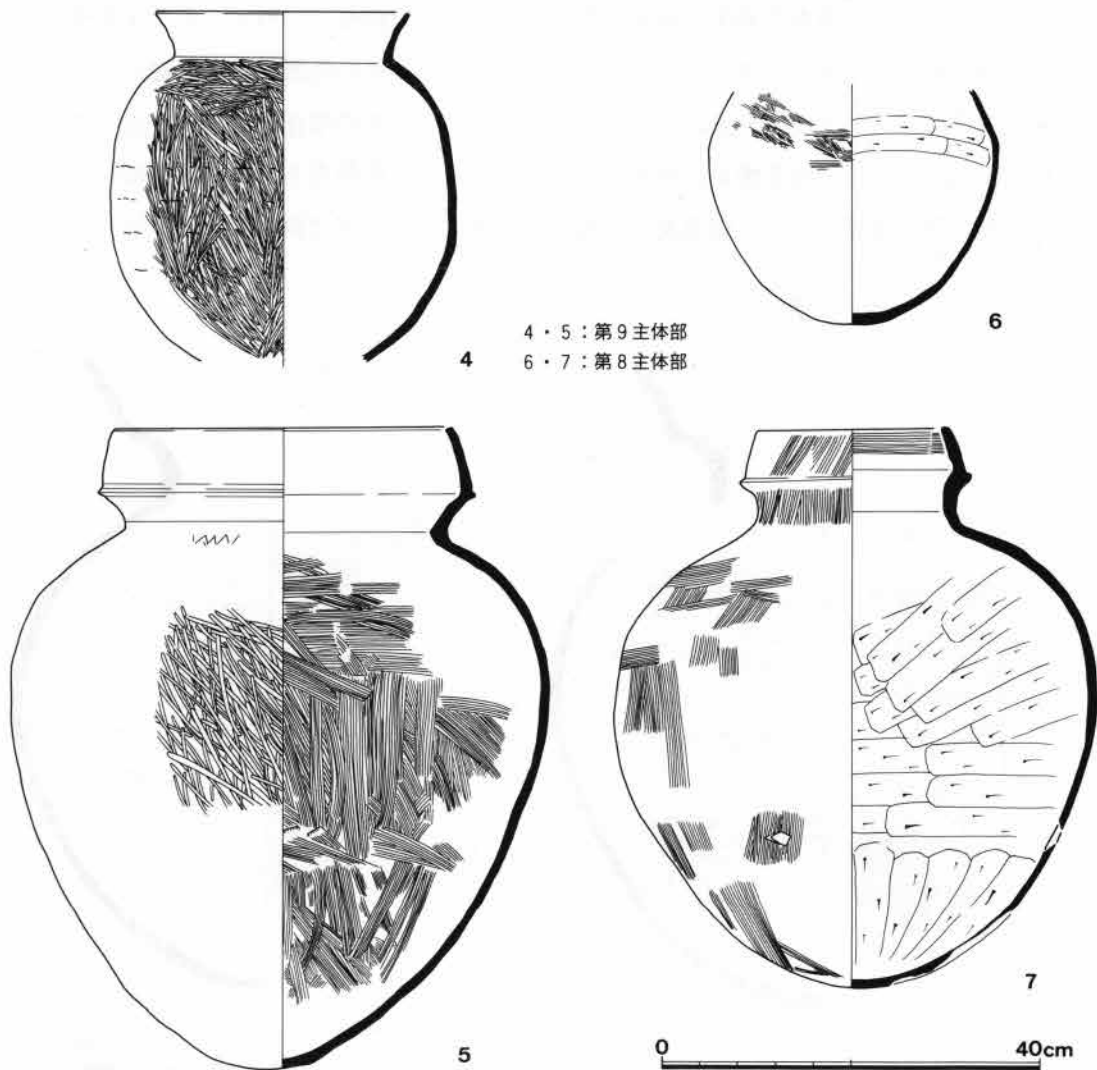
第83図 2号墳第7主体部出土壺棺実測図



第9主体部壺棺(第84図5)肩部文様

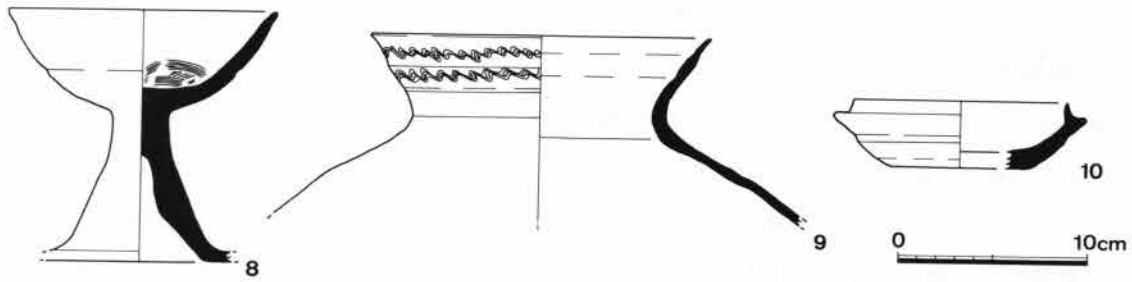
(2)須恵器(第85図9・10)

9は、須恵器壺である。5号墳の墳丘北西部の表土直下で出土した。口径17.8cm・残存高9.8cmを測る。口縁部は「く」の字に外反し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面には櫛描きの波状文が施されている。内外面ともタタキ・あて具の痕跡をナデ消しているなど、古い様相をもっている。10は、須恵器杯身である。試掘調査D地区で

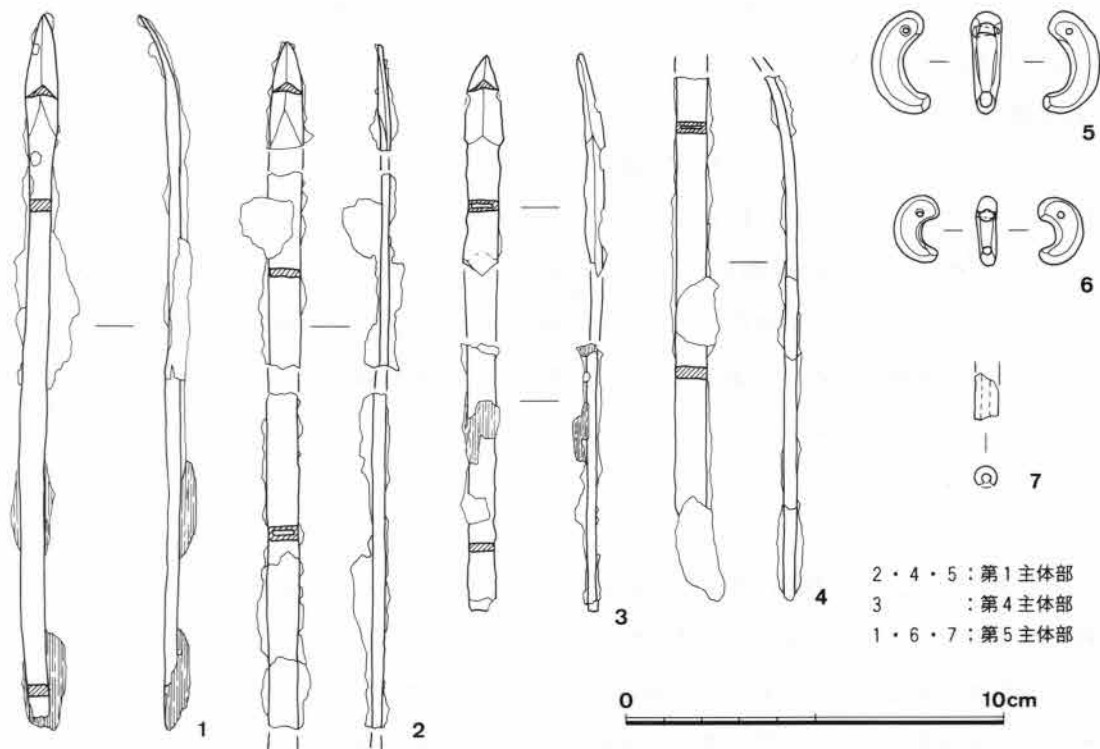


4・5：第9主体部
6・7：第8主体部

第84図 2号墳第8・第9主体部出土壺棺実測図



第85図 出土遺物実測図(1)



第86図 出土遺物実測図(2) 鉄製品・玉類

付表6 苗代古墳群検出遺構一覧表

古墳	主体部	墓壙形態	墓壙規模(m)	棺掘形規模(m)	棺形態	副葬品
1号墳		二段	1.2以上×2.2	0.9以上×1.4	箱形?	
	第1	〃	5.7×2.5	5.0×1.2	組合式	鍬2・勾玉1
	第2	〃	5.7×2.5	5.2×0.85	箱形?	なし
	第3	〃	6.4×2.2	4.7×0.6	舟形?	なし
	第4	〃	3.6×1.5	3.15×0.5	割竹形	鍬1
2号墳	第5	〃	3.7×1.2	2.85×0.5	箱形	鍬1・勾玉1・管玉1
	第6	〃	3.6×1.3以上	3.6×0.4	箱形?	不明鉄製品
	第7	楕円形素掘り	1.0×0.85	—	壺棺	なし
	第8	円形素掘り	径1.3	—	〃	なし
	第9	方形素掘り	1.4×1.15	—	〃	なし
3号墳		素掘り	3.6×1.9	—	不明	なし
4号墳		二段	4.2×1.6	3.2×0.5	箱形	不明鉄製品
5号墳		〃	2.8×1.7	2.7×0.55	割竹形	なし
6号墳		〃	3.0×1.5	2.5×0.6	箱形?	なし

出土した。口径11.2cm・器高3.5cmを測る。6世紀末頃のものである。

(3)鉄製品(第86図1～4)

1～4は、鉞である。すべて二つ以上に折れて出土している。1は、第5主体部から出土した。刃部長3.2cmで、基部から切先にかけて大きく外反している。刃部は内側に反り、基部はわずかにくびれる。柄部には木質が残る。2・4は、第1主体部から出土した。2は西側仕切り板の、4は東側仕切り板の外側で出土した。2は刃部長2.7cmで、基部から切先にかけての外反度合いはわずかである。刃部は内側に反り、基部のくびれはほとんどない。4は、刃先が欠けているが、基部から切先にかけて大きく外反している。基部のくびれはほとんどない。3は、第4主体部から出土した。刃部長2.4cmで、基部から切先にかけての外反の度合いはわずかである。刃部は内側に反り、基部はわずかにくびれる。

(4)玉類(第86図5～7)

5は、第1主体部出土の勾玉である。翡翠製で、長さ2.7cmを測る。「C」字形を呈し、全体に丸みを帯びており、ていねいに仕上げられている。両面穿孔である。6は、第5主体部出土の小型の勾玉である。長さ1.8cmを測る。「C」字形を呈し、ていねいに仕上げられている。全体に丸みはなく、扁平である。片面穿孔である。淡灰緑色を呈し、質の悪い緑色凝灰岩製と推定される。7は、第5主体部出土の管玉である。径6.5cmを測る。破損が激しく、全長は不明である。ガラス製でスカイブルーを呈する。

5. まとめ

今回の調査で、苗代古墳群は6基の古墳からなる古墳群であることが明らかになった。2号墳は複数埋葬墳で、3～6号墳は単独埋葬墳である。1号墳は一部のみの調査であったが、墳丘の規模から複数埋葬墳と推定される。埋葬施設のほとんどが木棺直葬であった。木棺の種類には、箱形木棺・舟形木棺・「H」形の組合式木棺がある。いずれも盛り土をもたず、地山を整形しており、日本海側の弥生時代から続く台状墓の系譜を引く。古墳群の中で特に注目されるのは、2号墳である。9基の埋葬施設の中には、乳幼児または小児用と考えられる壺棺が存在しており、家族墓的な色彩が強い。弥生時代の家族墓の伝統を強く残しているといえる。なお、個々の主体部の規模・副葬品などは付表6にまとめた。また、出土遺物は第88図に出土地を図示した。

以下、いくつかの問題点について整理し、まとめとしたい。

(1)主体部の新旧関係について(第87図)

まず、2号墳の9基の主体部の新旧関係についてであるが、重複関係から第1主体部→第2主体部→第5主体部、第1主体部・第6主体部→第3主体部→第4主体部・第8主体部の流れを追うことができる。第1主体部と第6主体部、第4主体部と第5主体部、第7主体部、第9主体部は直接重複関係をもたず、個々の新旧関係は残念ながら不明である。

次に、主体部の主軸に目を転じると、主体部の主軸方向は、

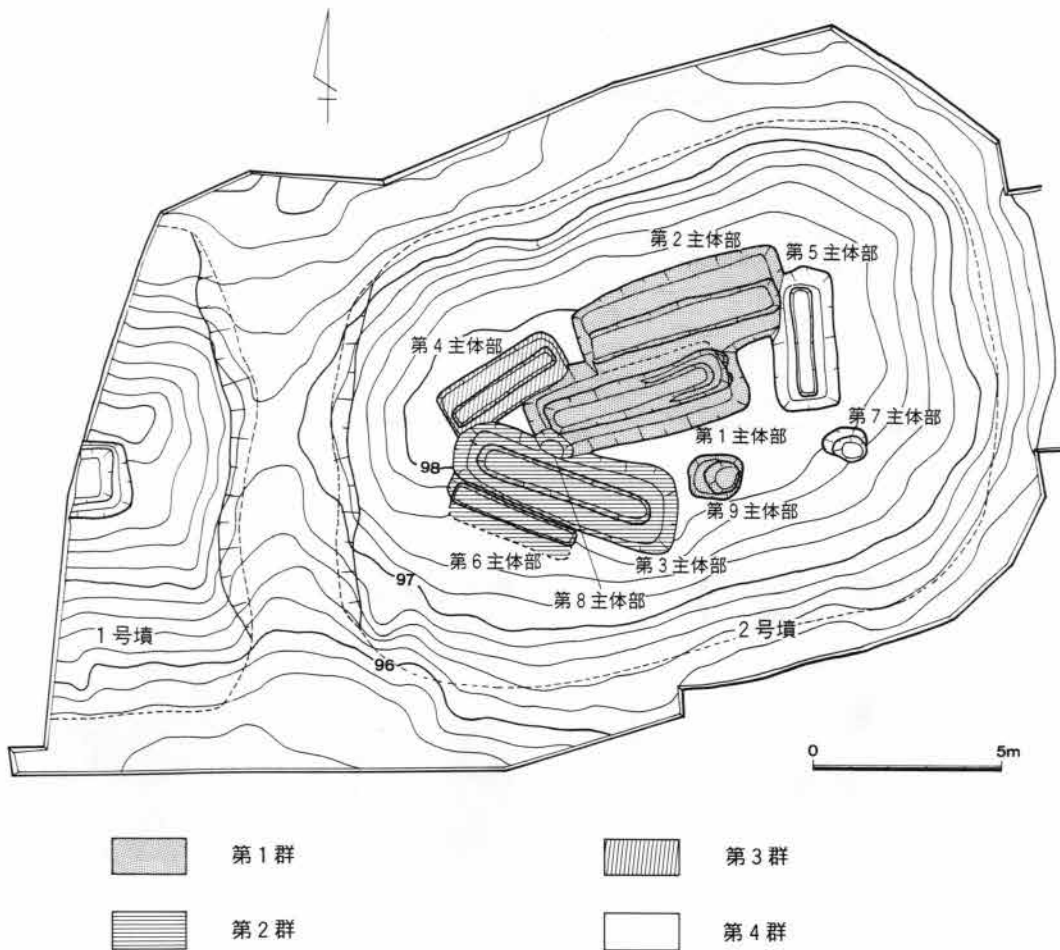
第1群 北で東に約75°前後振るもの 第1主体部・第2主体部

- | | | |
|-----|---------------|-------------|
| 第2群 | 北で西に約70°振るもの | 第3主体部・第6主体部 |
| 第3群 | 北で東に約50°振るもの | 第4主体部 |
| 第4群 | 北で西に約9.5°振るもの | 第5主体部 |

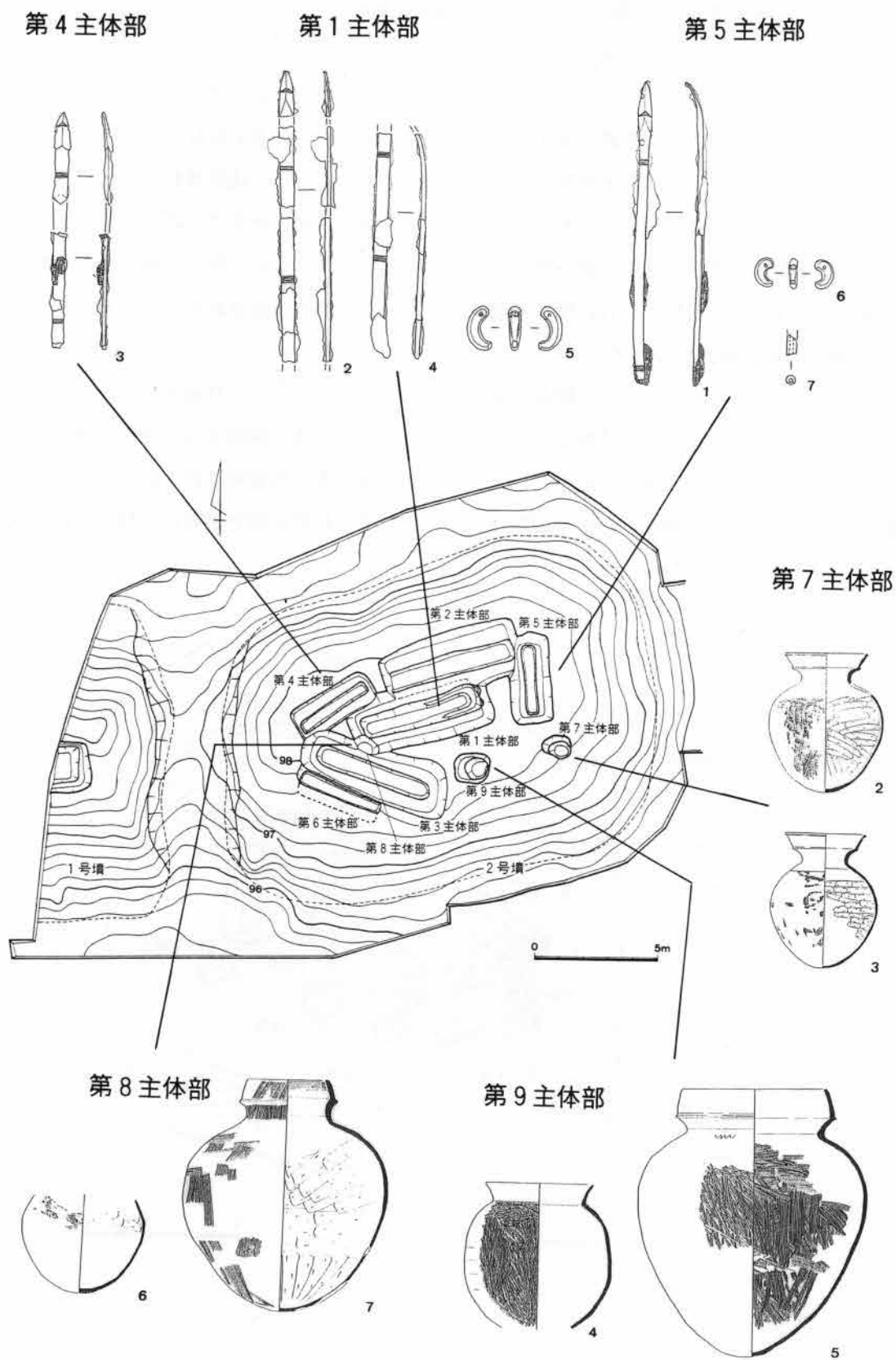
の4つのグループに分けられる。さらに、第7～9主体部については、棺の主軸から、第9主体部が第1群、第8主体部が第2群、第7主体部が第4群に属すると考えられる。このように見ていくと、第4主体部のみが他の主体部の相関関係からはずれており、注意される。また、第5主体部は、尾根筋に直交するという点で3～6号墳の主体部と共通点をもつ。以上のことから、2号墳では、第1群→第2群→第3群→第4群の順に主体部は構築され、第5主体部または第7主体部を最後の主体部として、それ以降3号墳、4号墳、5号墳が新造されたものと考えたい。

(2) 古墳群の築造時期について

古墳群の築造時期は、出土土器の検討が重要となってくる。^(注19)しかし、丹後地方における土器編年がまだ確立していないため、時期比定には慎重を要する。今回の調査では、壺棺に使用された土器が年代を考える手がかりとなるが、いずれも、布留式土器の影響を受けているものの、共伴遺物に乏しいため定点を押さえるのが困難である。そこで、類似の例を参考に現時点での年代観



第87図 2号墳主体部主軸別分布図



第88図 2号墳出土遺物分布図

を提示したい。壺棺の類似例は奈具古墳群(14号墳)^(注20)：古墳時代前期中頃、福知山市宝蔵山古墳^(注21)(4号墳)：古墳時代前期後半、丹後町神明山古墳^(注22)：古墳時代前期後半末、峰山町七尾南古墳群^(注23)(1号墳)：古墳時代前期後半末～中期中頃、弥栄町スクモ塚古墳群^(注24)(37号墳)：古墳時代前期後半末～中期、加悦町愛宕山9号墳^(注25)：古墳時代中期前半、久美浜町権現山古墳^(注26)：古墳時代中期前半～中頃にみられる。これらの年代は、いずれも古墳時代前期中頃から中期中頃に位置づけられており、今回の出土例もこの範囲内におさまると考える^(注27)。

具体的に見ていくと、第7主体部の壺棺は神明山古墳の例に近似しており、ほぼ同時期と考えられ、体部の肩部に最大径を持つ点から、加悦町愛宕山9号墳の例よりも古いと考える。第9主体部の壺棺については、口縁部の屈曲がシャープであることと、体部の肩部に最大径を持つ点から古い方に位置づけられるが、肩部の張りがゆるいことや、文様の様相から、宝蔵山例・権現山例よりも新しいと考えられる。したがって、2号墳の築造時期は古墳時代前期中頃以降と考えられる。また、4号墳で出土した土師器高杯は、加悦町鳴谷東1号墳出土の高杯よりも新しく、須恵器を伴う時期になる。以上のことから、苗代古墳群は、4・5号墳出土の土器が古墳の築造時期を示すと考えると、古墳時代前期後半から中期中頃にかけて1～5号墳へと順次築造されていたと考えられる。6号墳については、どの時期に構築されたか不明である。

(3) 副葬品について

埋葬施設の副葬品は、全体的に質素であるが、鉄製品に鉄鏃が1点も見られず、鉈のみであった。このことは、造墓集団の性格を考える上で興味深い。また、鉈がすべて二つ以上に折れていることと、第5主体部での出土状況から、葬送の時に意図的に鉈を折る行為が想定できる。

(4) 複数埋葬墳について

2号墳のような古墳時代の複数埋葬墳は、但馬地方や丹後地方でよく見られる墓制である。丹後地方の例としては、峰山町金谷1号墓、加悦町内和田古墳群^(注29)・愛宕山3・9号墳^(注30)、久美浜町権現山古墳などがあげられ、出土土器の年代から2号墳は愛宕山3・9号墳より若干古く位置づけられると考える。金谷1号墓は弥生時代終末から庄内期、内和田古墳は古墳時代前期のもので、これらや、弥生時代の墳墓と2号墳との違いは、弥生時代に見られる破碎土器供献^(注31)が行われていないこと、墓壙が長大であることであろう。

苗代古墳群は、2号墳にみられるように在地色の強い古墳であり、その後は4～6号墳にみられるように単独埋葬墳へと変化していく。一つの古墳群の中で弥生時代的な墓制から古墳時代的な墓制へと変化していくようすがわかるという点で重要な資料であり、丹後地方の古墳時代前期から中期にかけての墓制を考えていく上で貴重な資料を追加したといえる。また、2号墳の築造が開始される古墳時代前期中頃は、丹後地方では加悦町蛭子山古墳に代表される大規模な前方後円墳が築造され始める時期であり、言い換えれば、弥生時代からの伝統を残す在地の古墳が存在する一方、畿内の影響を強く受けた古墳が出現してくる時期である。苗代古墳群の被葬者集団として、畿内の墓制を取り入れた集団の支配体制に組み込まれた在地の小首長クラスを想定したい。

(松尾史子)

(9) 相之目古墳

1. はじめに

相之目古墳は、中郡峰山町字二箇小字相之目233他に所在する。この調査は、二箇団地の造成に伴い実施した。相之目古墳は、竹野川支流の鱒留川左岸の丘陵上の苗代城跡推定地(三角点が置かれた丘陵頂点)から、南東方向にのびる尾根筋にある。この尾根筋の中間に古墳状隆起が2か所あり、丘陵先端側(南方のもの)は、開発予定地に含まないこととなり、北方に位置するものが調査対象地となった。周辺には、北に苗代古墳群、西に笹ヶ谷古墳などがある。

2. 調査概要

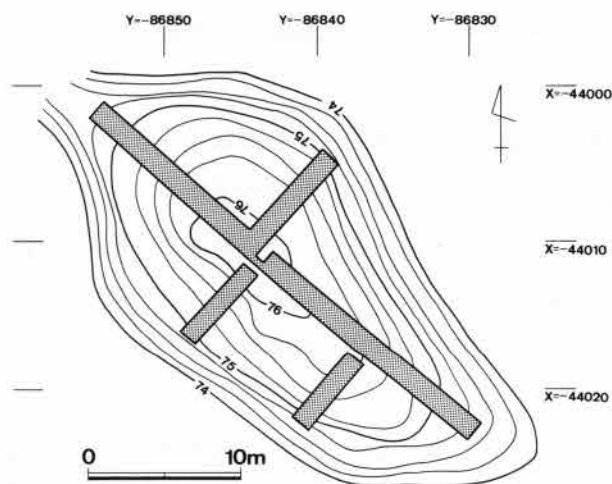
調査対象地域の樹木伐採後に地形測量を実施したところ、尾根筋の隆起は自然地形の可能性も考えられたので、試掘調査を行った。古墳状隆起の中心部分の埋葬施設が想定される場所を起点とした幅1.2~1.5mのトレンチを設定し、人力で掘削した。

トレンチの堆積土観察では、北西で表土の下が赤褐色土・明赤褐色粘質土、中心部で表土の下が茶褐色土・明赤褐色粘質土、南東で表土下約10cmで黄色砂礫質土(花崗岩風化土)となる。明赤褐色粘質土や黄色砂礫質土は堅く締まっており、「地山」と推定された。中心部で深掘りしても土色変化はなかった。調査対象地内で、遺物は出土しなかった。

3. まとめ

試掘調査で、堅く締まった明赤褐色粘質土や黄色砂礫質土の堆積層が、古墳状隆起として残存した自然地形と判断できる結果となった。

(石尾政信)



第89図 地形測量・トレンチ配置図

(10) 菩提城跡(菩提東古墳)

1. はじめに

菩提城跡は、京都府竹野郡弥栄町字吉沢小字菩提に所在している。この城跡は、竹野川の東側にある吉沢地区の入り組んだ丘陵上に築かれた中世の城跡である。調査地は、城跡が想定される丘陵の尾根先にあり、尾根とは切り放された、小高い丘陵の南側半分である。調査地の西側には吉沢城跡があり、調査地の丘陵先端部には菩提古墳が存在する(第90図)。今回の発掘調査は、国営農地吉沢団地の造成に伴って実施した。

なお、今回の報告は、略報的なものであり、本来の報告は来年度に予定されている。そのため、現段階は整理作業中で、今後の報告とは遺構・遺物の数量や考察にに変更点が生じる可能性があることを了承しておいていただきたい。

2. 調査概要

調査地の地形は、南方の主尾根とは分断された小高い隆起をもつ丘陵で、頂部は平坦になっている。北側斜面は、数段の曲輪状の平坦地があり、急な傾斜になっている。今回の調査地は、小高い隆起の南側部分について調査を実施した。標高は約93mである。

調査区は、頂部平坦地と北側を除いた斜面部及び斜面裾の平坦部を調査した。頂部平坦部の中央部は、さらに一段高くなっている。

現地作業は、樹木伐採終了後に表土掘削を開始し、現地表から約5cmで遺構を検出した。頂部の西側では約3～5cmで地山となる岩盤を検出した。頂部東側では5cmほど掘り下げると遺構を検出したが、地山ではなく、10cmほど盛り土されていた。その地山面で下層の遺構となる古墳時代と思われる遺構を検出した。また、東側のテラス部分と南西斜面で埋葬施設を検出した。そのため、弥栄町教育委員会と協議し、頂部とその周辺で検出した下層の古墳時代の遺構について菩提東古墳の名称を与えることとなった(第91図)。

3. 検出遺構

(1) 城跡の遺構(中世の遺構)

丘陵の平坦地で、数多くの小穴を検出した。この小穴は幾つか並んでいるものがあり、建物や塀を建てる柱穴と思われる。東西棟の掘立柱建物が2棟建てられていたようである。その他には、小溝や不定形な土坑を検出した。

① 掘立柱建物跡1

調査区中央の一段高い高まりの北側にある。尾根の主軸に対して、東西方向に建てられ、1間×2間である(約2.8m×約4.2m)。



第90図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

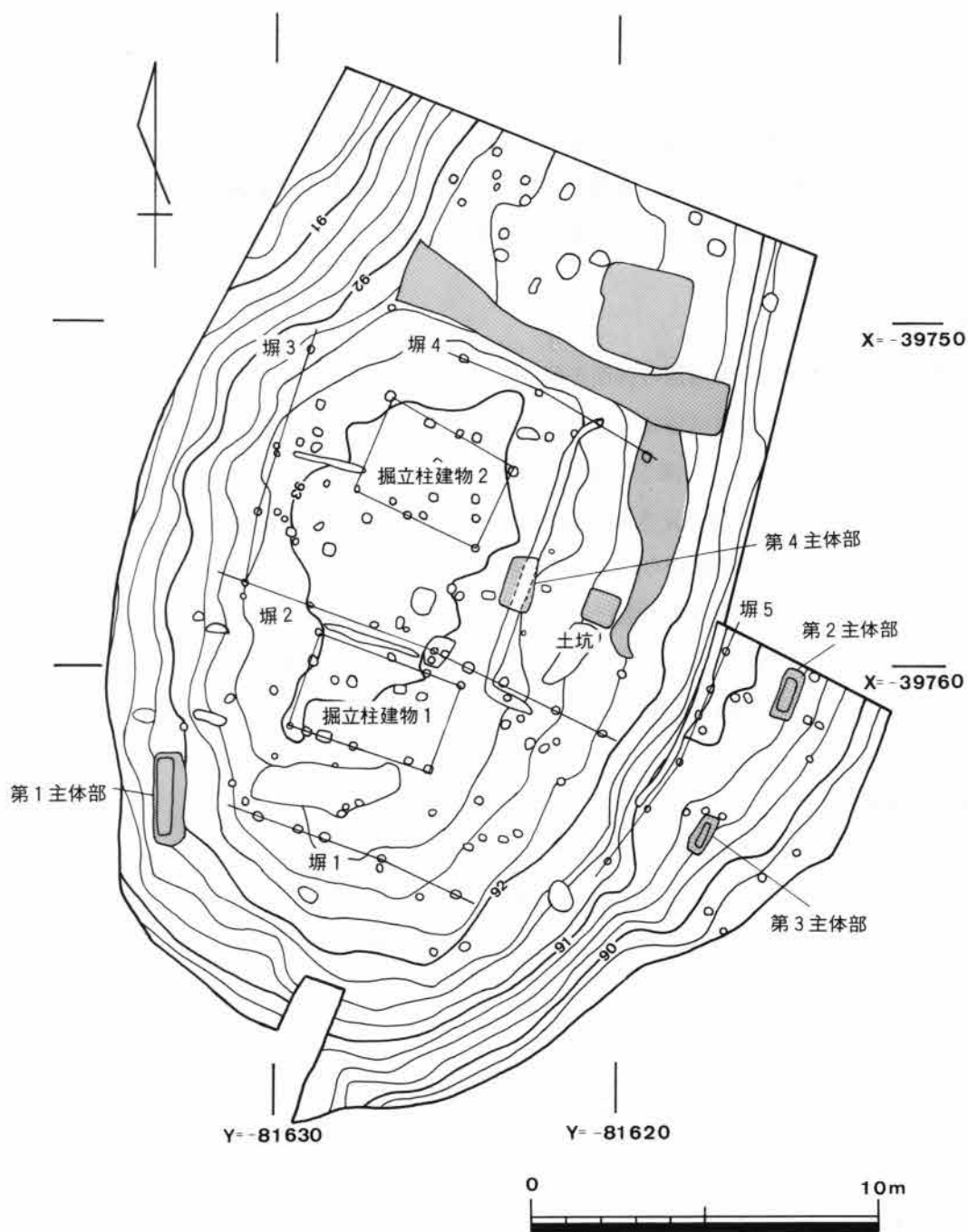
- | | | | |
|----------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 菩提城跡(菩提東古墳) | 2. 菩提古墳 | 3. 吉沢城跡 | 4. 新ヶ尾東古墳群 |
| 5. 新ヶ尾古墳群 | 6. 上野古墳群 | 7. スクモ塚古墳群 | 8. 下上野古墳 |
| 9. 茶カス古墳群 | 10. シミズ谷城跡 | 11. 堤城跡 | 12. 立山城跡 |
| 13. 溝谷城跡 | 14. 太田古墳群 | 15. 丸山古墳 | 16. 奈具岡古墳群 |
| 17. 奈具岡北古墳群 | 18. 奈具岡南古墳群 | 19. 芋野城跡(×印) | 20. 愛宕神社古墳群 |

②掘立柱建物跡 2

同じく高まりの南側にあり、建物も尾根の主軸に対して東西方向に1間×2間で建てられている(約2.7m×約4.5m)。方角・規模などはほぼ同じで、同時期に建てられたものと思われる。

③堀跡 1～5

建物跡は、堀によって区画されていたようである。頂部で4列(堀1～4)、そして東側のテラス部で堀を1列(堀5)検出した。その堀と丘陵斜面の間には、小溝が検出された。



第91図 菩提城跡遺構平面図(スクリーントーンは、古墳時代の遺構)

また、不定形な土坑や、南北方向に長い「コ」の字状を呈する小溝1条と、東西方向の短い小溝2条を検出した。さらに、この調査地区の南側に、陸橋らしきものを幅約1m確認した。

なお、現在、遺構の配置を検討中であり、頂部平坦地には、かなりの数の柱穴が存在するため、建物跡や塀が増えたり、規模が変わる可能性がある。

(2) 菩提東古墳の遺構(古墳時代の遺構)

頂部平坦地の東側半分の下層、及び斜面やテラス部分で、古墳時代の遺構を検出した。墳丘は、頂部が削平されているため詳細は不明であるが、方墳であったと考えられる。規模は、現状で南北方向約20m・東西方向約16mを測る。墳丘の高さは、テラス面から現在の墳頂部までで約2mを測る。東側のテラス部分は、幅約5mある。また、墳頂部の北側と北東側で区画溝らしきものを検出した。

検出した遺構は、埋葬施設4基や土坑などである。埋葬施設は、頂部平坦地で破壊されたものが1基検出され、南西斜面で1基と東側テラス部分で2基検出した。南西斜面のものを第1主体部、東側テラス部分の北側にあるものを第2主体部、南側を第3主体部、頂部平坦地の破壊されたものを第4主体部とした。

① 第1主体部

この埋葬施設は、丘陵の南西側の斜面を削り込んで平坦面をつくり、埋葬されている。埋葬形態は、二段墓壇で木棺の痕跡は確認できなかったが、おそらく木棺直葬と思われる。墓壇の上段の長さが約2.7m・幅約0.9m、深さは東側では約0.5mであった。西側の一部は、破壊されているようである。2段目の墓壇の長さは、約1.7m・幅約0.5m・深さ約0.3mと細長い墓壇であった。棺内の北側には、朱が床面から約2～5cmの厚さで敷かれていた。おそらく、遺体は北枕で葬られていたと思われる。その朱の底付近から、板状の滑石製勾玉が1点出土した。中央付近からは管玉3点やガラス製小玉9点・滑石製小玉55点・琥珀玉4点が集中して出土した。玉類が集中して出土した地点から15cmほど南側から、銅製の小型鏡が鏡面を上にした状態で1枚出土した(第92図)。

② 第2主体部

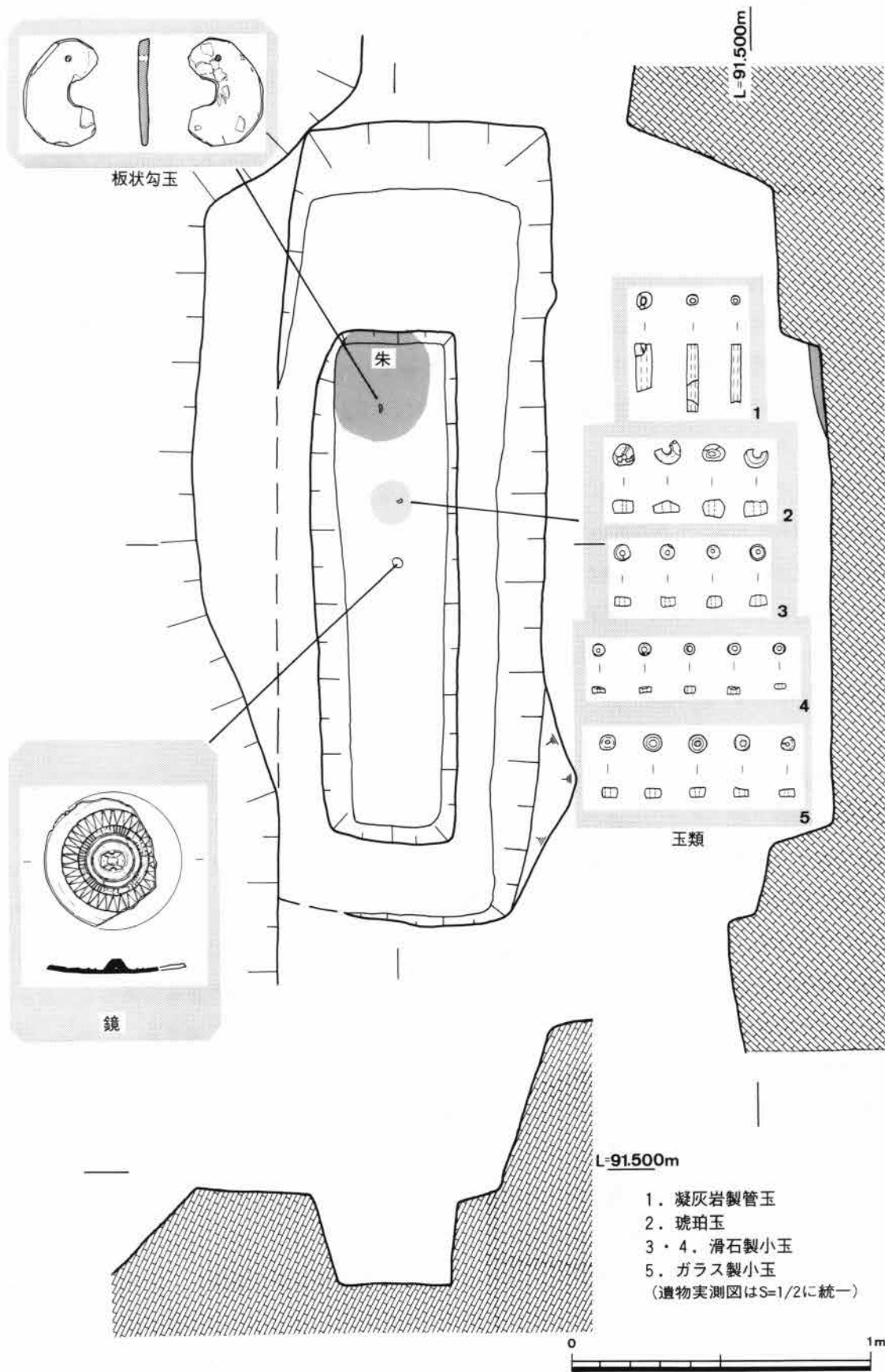
東側のテラス部分の北側に位置し、やや東に傾いた南北方向の墓壇である。埋葬形態は、二段墓壇である。規模は、上段が長さ約1.5m・幅約0.6m・深さ約0.05mで、下段は長さ約1.0m・幅約0.3m・深さ約0.12mである。第1主体部と比べると小規模なものである。この墓壇からは、遺物は出土しなかった。

③ 第3主体部

この墓壇は、第2主体部の南側に位置しており、方向も同一の方向を向いている。墓壇自体も同じく小規模な二段墓壇である。規模は、上段は長さが約1.2m、幅が約0.6m、深さが約0.16mで、下段が長さ約0.8m・幅約0.25m・深さ約0.1mである。ここからも遺物は出土しなかった。

④ 第4主体部

この墓壇は、中世の遺構検出面から、約10cm掘り下げた地山面で検出した。しかし、後世の遺



第92図 菩提東古墳第1主体部実測図及び出土遺物

構などで破壊され、地山自体も削平されていた。墓壙は、二段墓壙であったと思われるが、東側と南側が破壊されていて上段の規模は不明である。下段となる墓壙の規模は、長さ約1.1m・幅約0.6m・深さ約0.15mであった。墓壙埋土からは、須恵器の甕の破片が数点出土した。

⑤土坑

この土坑は、約1m四方の方形で、1基検出した。深さは、約0.15mあったが、出土遺物はなかった。

4. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、城跡のものとしては少量で、須恵器・土師器・陶磁器などの土器の破片と鉄製の鋤先1点が出土した。土器の器種としては、須恵質の大型甕・土師質のすり鉢・土師器の小皿の破片などがある。鉄製の鋤先は、「U」字状を呈している。その他、砥石などが出土している。

古墳時代の遺物は、南西斜面にある第1主体部から出土したものがほとんどである。銅製の小型鏡は、径約4.6cmと小さなもので、1/4ほど欠損していた。鏡背の文様は、外区に鋸歯文、内区に櫛歯文が確認されるが、錆などでもろくなっており、文様が判別しづらく、鏡の種類については、現在、検討中である。また、玉類としては、滑石製の板状勾玉が1点、緑色凝灰岩製の管玉が3点、コバルトブルーのアルカリ石灰ガラス製小玉が9点、滑石製小玉大小含めて55点、琥珀玉が4点出土した(第92図)。

5. まとめ

今回の調査では、当初、城跡の調査として発掘作業を開始した。しかし、調査を進めていくと、城跡に関する遺構のほかに、下層遺構として古墳時代の遺構が確認された。中世の遺構としては、平坦面に柱穴群と不定形の土坑や小溝などを検出した。柱穴の存在から、掘立柱建物と塀が建っていたようであり、建物は塀によって区画されており、建物の方向などに規則性がみられる。建物跡の規模は小規模で、その数も少ない。出土遺物からみても、土器類が少量であることから常駐するような施設ではなく、小規模な見張り程度の出先の施設であったと考える。しかし、同規模の建物跡や塀による区画など、規則性がみられることから、重要な施設であったと考えられる。南側には、陸橋が存在しているので、さらに南側に城の本体が存在する可能性がある。今回の調査の結果、城跡に関連する遺構は、出てきた遺物から考えて、平安時代末～鎌倉時代前期と思われる。今後、今回確認した山城に伴う小規模な見張り施設のようなものについて、その性格付けや本城との位置関係など、検討の必要があると考える。

次に、今回新たに検出した古墳時代の遺構は、弥栄町教育委員会と協議し、古墳に伴う埋葬施設などであると判断した。それによって、古墳の名称が新たに与えられた。調査地の尾根の先端部分には、菩提古墳が存在するが、少し距離があることから菩提東古墳と名付けられた。墳丘は、南北方向に若干長い方形墳であった。墳頂部は、中世の遺構がつくられた際に破壊されていた。

城としてこの丘陵を利用する際、丘陵を削ったり、土を盛って平坦地に整地していたことを確認した。

古墳時代の遺構としては、埋葬施設や土坑が確認された。しかし、埋葬施設は、頂部の平坦地には少なく、丘陵斜面や東側のテラス部分で3基検出した。また、中心となる埋葬施設も検出できなかった。墳頂部の埋葬施設は、後世に削られ破壊された可能性がある。斜面やテラス部分で検出した埋葬施設は、周辺埋葬墓であると思われる。しかし、第1主体部は、大量の玉類や鏡が副葬されていたり、テラス部分よりわざわざ高い位置に墓壙が築かれていることから中心主体(存在不明)の埋葬者に近い存在であった可能性がある。

これらの主体部の埋葬時期は、第1主体部から出土した遺物の玉類のセット関係や鏡などから、古墳時代前期後半～中期初めのものと考えられる。

また、今回出土した鏡は、鋸歯文鏡と呼ばれる小型の鏡と思われるが、いままで出土した鏡の中では、類似するものが京都府内にはなく、大きさも最小のものである。現在、類似鏡や鏡式を検討中である。

今回の調査で、中世の山城に関連する遺構のほかに、新たに古墳時代の遺構が確認されたことで、今後この付近にもさらに古墳の存在が予想される。また、丘陵の先端に存在する菩提古墳との関連も検討する必要がある。

さらに、今回、この地区を調査したことで、中世では、菩提城の本城と今回の検出遺構との関係など、多くの課題がでてきた。古墳時代の遺構にしても、新規の発見であり、今後、この地域の古墳時代を考える上で、貴重な資料を提示することとなった。今後のこの地域における城跡の関連施設や、古墳時代の墓域の広がり、集落との関連などを考えることが必要であろう。

(村田和弘)

(11) 吉 沢 城 跡

1. はじめに

吉沢城跡は、弥栄町字吉沢小字城山に所在する早尾神社境内を中心とした戦国時代の城跡とされている。城跡は、神社本殿がある標高68mのやや広い平坦地と、その南に同じ標高の平坦地があり、周囲は急な崖で、それより下にこれらを取り巻く曲輪群が造られている。2か所の平坦地の間には、深い堀切が設けられ、北側の広い平坦地に主郭(本丸)が推定されている。

永正13(1516)年から翌年にかけての丹後一色氏と若狭武田氏の争乱は、一色氏が二分した複雑な戦争であった。永正13年9月10日頃に武田元信方の兵が、丹後国の奥深く吉沢城・堤城にまで侵入している(三重県白井家文書)。

天正10(1582)年に細川氏と一色氏方の攻防で吉沢城によったのは、一色氏の武将松田遠江守と後藤下総守であったという(『丹後旧事記』)。戦いは一色方の敗北に終り、吉沢城は廃城となったと推定される。

今回の調査対象地は、これまで推定されていた吉沢城跡の南東の丘陵上に所在する平坦地で、南まで広がる広域の城跡と推定した場合に、関連する施設が想定される地域であった。そこでは、平坦地や階段状の地形が観察できた。また、南には、弥栄町小原集落に至る道沿いの低丘陵に新ヶ尾古墳群・同東古墳群が、北には茶カス古墳群があり、古墳の可能性もあった。

2. 調査概要

調査地を、方形の平坦地と緩傾斜地及び階段状地形、2段の平坦地が続く地形、稜線が古墳状を呈する地形の3か所に分け、竹野川に近い方から、A・B・C地区と呼称する。樹木伐採後、各地区の試掘をした。A地区には、平坦地・緩傾斜地・階段状地形に、幅約1.4mのトレンチを合計9か所設定した。試掘調査では、方形の平坦地で隅丸長方形土壇(埋葬施設)1か所、緩傾斜地及び階段状地形で隅丸長方形土壇(埋葬施設)を3か所検出した。緩傾斜地の南東では堀切溝跡を検出した。また、緩傾斜地の西側に急斜面があり、急斜面の崩落土から平安時代後期の土器が出土した。その後、遺構が検出された地域を中心に、表土掘削の範囲を拡大した。

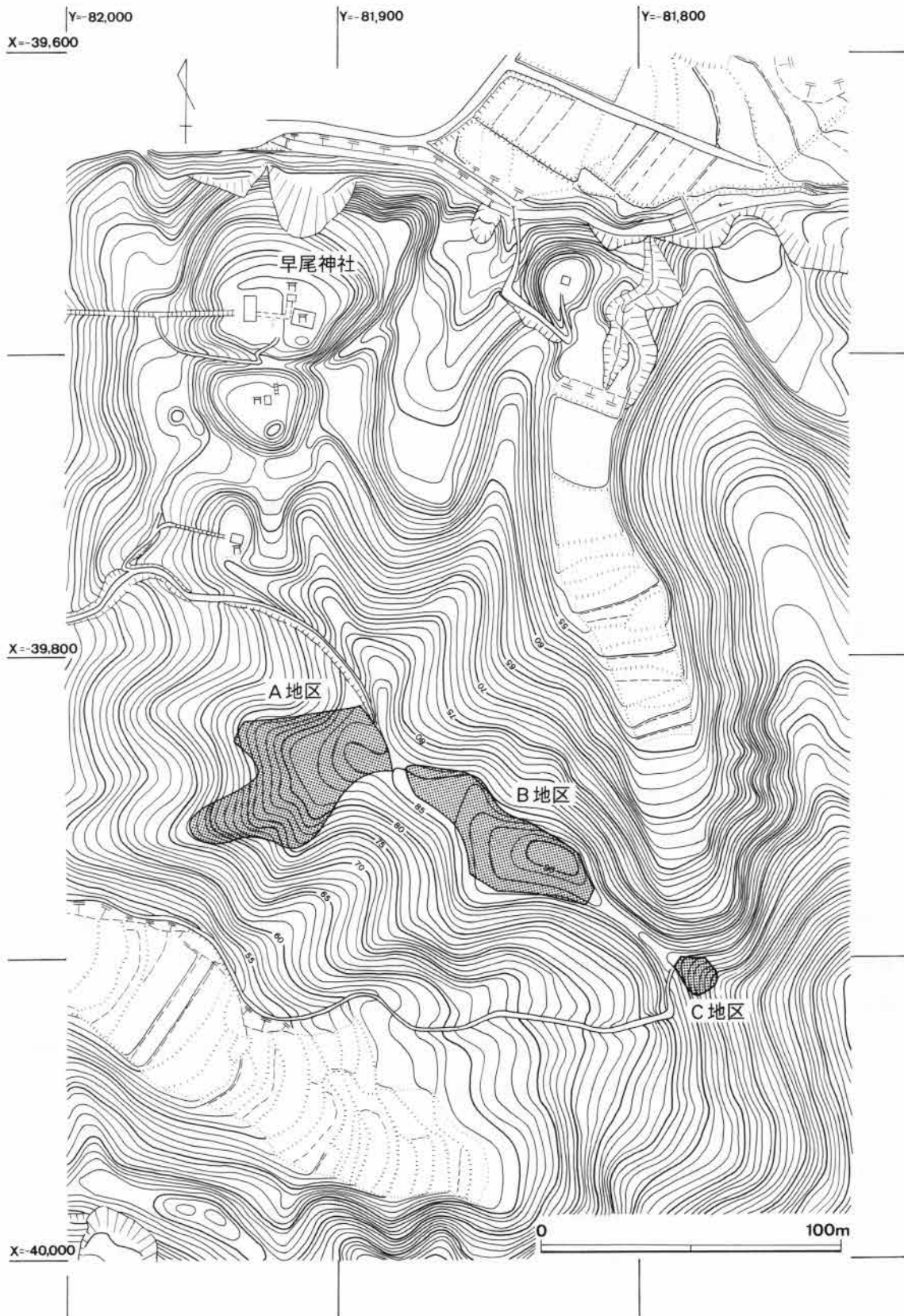
B地区は、試掘調査で土坑などが見つかったので、表土掘削の範囲を拡大した。ここでは、低位の平坦地で方形土坑1か所、高位の平坦地で炭や焼土が混じる土坑2か所、平坦地の地形変換点で落ち込みを検出した。

C地区の試掘調査では、表土直下が黄褐色・淡褐色砂質土(花崗岩風化土)の「地山」となり、自然地形と判断できた。

城跡に関連するものには、緩傾斜地の南東で検出した溝跡、緩傾斜地西側の急斜面がある。溝跡のみ掘削しただけであり、時期は不明である。なお、A地区で検出した埋葬施設を古墳と判断

し、弥栄町教育委員会と協議した結果、小字名から家ノ山古墳群と命名された。

(石尾政信)



第93図 調査地位置図

(12) 天王山古墳群・別荘古墳群・別荘遺跡

1. はじめに

平成9年度の丹後西部地区での発掘調査は、天王山古墳群・別荘古墳群・別荘遺跡の3遺跡である。これらは、熊野郡久美浜町字鹿野小字天王山・別荘ほかに所在する。国営農地鹿野1団地造成工事に伴う発掘調査は、平成8年度から開始され、京都府教育委員会・久美浜町教育委員会・当調査研究センターとの3者が分担して調査を実施してきた。

2. 調査経過

天王山古墳群は、A・Bの2支群からなる。調査対象となったのはB支群の1・2号墳であったが、造成工事に伴う樹木伐採によって古墳状隆起の確認や、工事中に須恵器片や石棺材と考えられる石材が出土したため、天王山古墳群A支群で6基、B支群では8基の古墳が不時発見となった。地区外となるA支群28号墳・B支群の5～7号墳を除き、京都府教育委員会がA支群25号墳を、当調査研究センターがA支群23・24・26・27号墳と、B支群3・4・8～10号墳の調査を実施した。

不時発見された古墳については、造成工事を中断することなく、かつ円滑に調査が実施できるよう関係諸機関協議の上、工事の進捗状況をみながら調査を実施することとなった。調査は、別荘遺跡と併行して実施した。このため、古墳の表土掘削及び主体部検出までは大量に作業員を動員し、主体部検出後は少人数で調査を実施したため、遺構の残存状況により、短期間で終了した調査もあれば、規模の割に長期化したものもある。

別荘古墳群・別荘遺跡は、標高約20mの台地に広がる遺跡である。試掘調査の結果、顕著な遺構・遺物が検出された場合には、面的な調査を実施する予定で調査を開始した。

当初、調査対象となったのは別荘1・2号墳と台地平坦部約10,000m²であった。650m²の試掘調査結果を受けて、5,000m²の調査面積が確定し、調査を実施することとなった。

調査は、平成9年5月12日から重機で平坦部全域の試掘に着手し、沈砂池が計画されている台地東・南側の谷部も掘削を行った。平坦部は梨園や畑地として開墾され、部分的に杉・檜が植林されていた。また、畑の区画である大きな溝が東西南北方向に認められることから、遺構はかなり削平を受けていると想定された。試掘では遺物包含層を確認した後、徐々に包含層を除去しながら最終地山面まで遺構が存在するかどうか確認を行った。

その結果、平坦部の西側1/3は削平が著しく、遺物包含層も遺構も検出されなかった。しかし、別荘1号墳が存在する平坦部中央付近から東側谷部までは、多くの遺構・遺物が検出された。

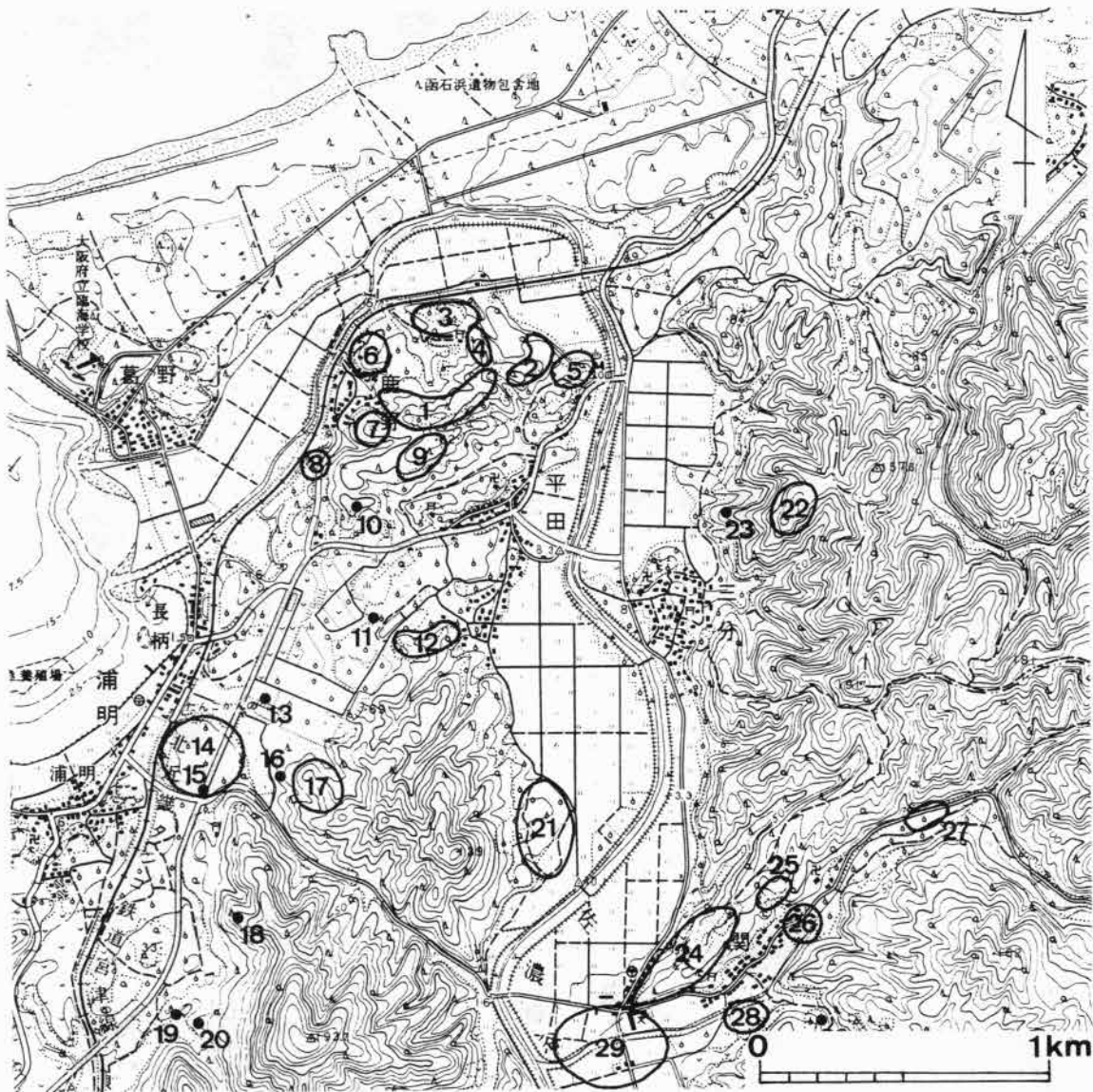
以上の調査経過から、別荘古墳群は、墳丘部分が全壊した古墳2基が加わって合計4基となった。また、別荘遺跡については、竪穴式住居跡2基、古墳状遺構2基、掘立柱建物跡14棟以上、

井戸1基、鍛冶炉5基、土坑1基、火葬墓1基、溝状遺構1条、1,200を越える柱穴群などを検出した。遺物としては、これらの遺構に伴うもののほか、弥生時代後期から中世の陶磁器類にいたるまでのものが大量に出土している。

なお、古墳の規模などについては、鹿野団地造成予定地内で調査を行ったすべての古墳を末尾の一覧表に記した(付表8)。

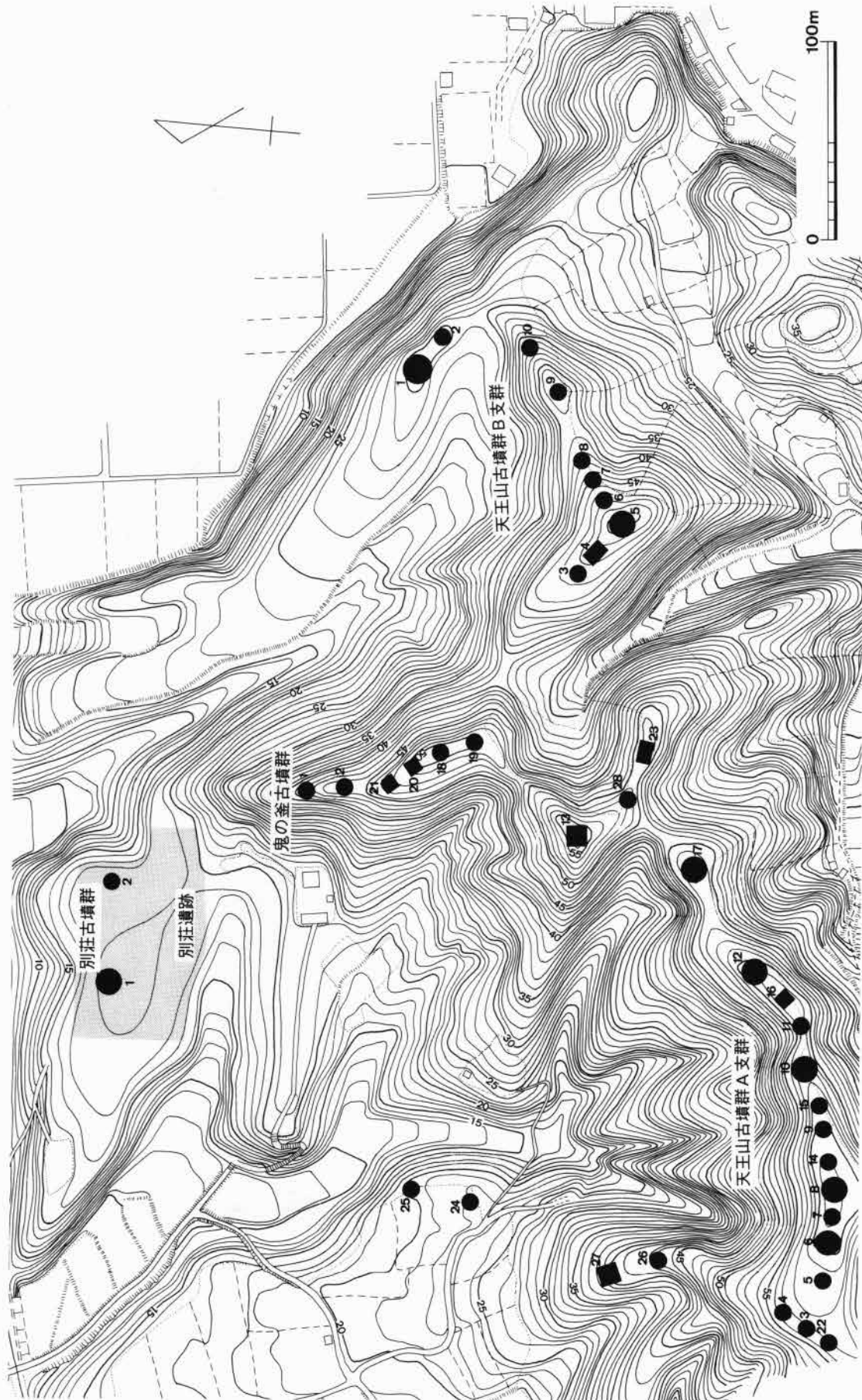
3. 遺跡分布状況(第94・95図)

天王山古墳群・別荘古墳群・別荘遺跡は、久美浜湾に注ぐ佐濃谷川河口部の左岸に位置し、日本海を望む標高20mの台地から50mの丘陵上に分布している。別荘遺跡の北東約750mには、国



第94図 調査地及び周辺主要遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | |
|--------------|--------------|---------------|-------------|
| 1. 天王山古墳群A支群 | 2. 天王山古墳群B支群 | 3. 別荘古墳群・別荘遺跡 | 4. 鬼の釜古墳群 |
| 5. 平田城跡 | 6. 鹿野A遺跡 | 7. 鹿野城跡 | 8. 鹿野B遺跡 |
| 9. ドウブシ古墳群 | 10. 古里ヶ山古墳 | 11. 奥茨田古墳 | 12. 明神古墳群 |
| 13. 日光寺古墳 | 14. 日光寺遺跡 | 15. 小丸山古墳 | 24. 岡がなる古墳群 |

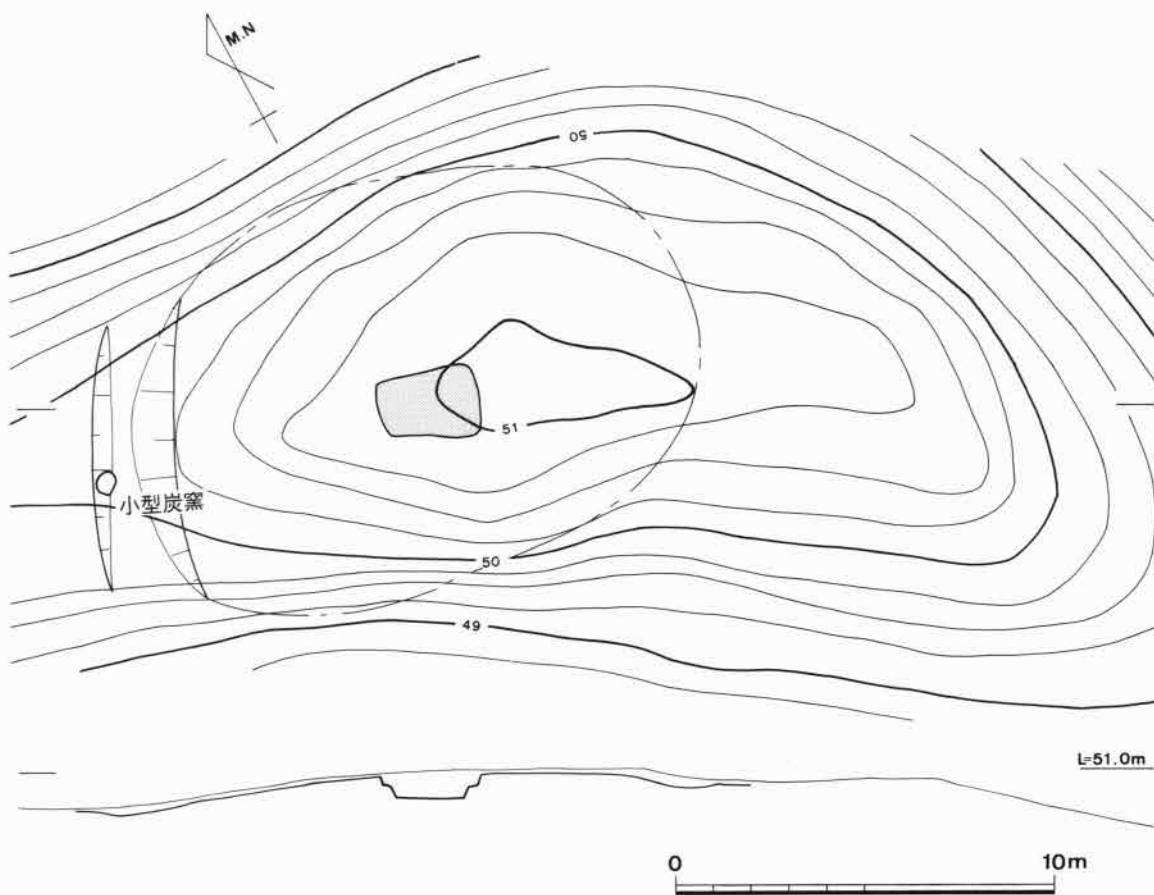


第95図 鹿野団地内遺跡分布図

指定史跡である函石浜遺跡がある。鹿野1団地造成予定地内及び周辺の丘陵上には、別荘古墳群(4基)、天王山古墳群A支群(27基)、B支群(10基)、横穴式石室墳の可能性ある鬼の釜古墳群(2基)、前方後円墳1基を含むドウブン古墳群(7基)の総数50基の古墳が築かれている。また、丘陵裾部分の台地には別荘遺跡、これより谷を挟んで西側の台地には鹿野A遺跡が存在しており、多くの遺跡が密集する地域でもある。また、別荘古墳群・別荘遺跡が存在する台地上は、過去に7つの塚があったとか、「大門」の地名が残ることから寺院が存在する可能性もあると指摘されていた。このほか、丘陵上には鹿野城跡、平田城跡など中世の山城跡も存在する。

平成8年度には京都府教育委員会が天王山古墳群A支群5号墳^(注32)の調査を行い、6世紀中頃の装飾付壺を副葬した木棺直葬墳、久美浜町教育委員会が天王山古墳群A支群2・3・22号墳^(注33)の調査を行い、6世紀前半に比定される木棺直葬墳を確認した。当調査研究センターでは天王山古墳群A支群13・17~19号墳^(注34)の調査を行い、中期を中心とした木棺直葬・箱形石棺を検出するとともに、経塚2基の調査も行った。

天王山古墳群及び周辺の古墳群の埋葬施設には、箱形石棺、木棺直葬、横穴式石室と多岐にわたっており、時期的には古墳時代前期後半~後期後半にかけての古墳群であり、長期間にわたり丘陵が利用されていたことがうかがわれる。造墓集団としての集落遺跡は、周辺では鹿野A遺跡・別荘遺跡・箱石浜遺跡・浦明遺跡^(注35)などが考えられるが、詳細は不明である。また、丘陵上で



第96図 天王山A支群23号墳測量図

弥生土器が出土する部分も認められ、弥生墳墓が存在していた可能性もある。

4. 調査の概要

A. 天王山古墳群

a. A支群(23・28号墳)

工事に伴う伐採整理中に発見したもので、A支群21号墳から南にのびる尾根が東に派生する分岐点に28号墳が、派生した東側に23号墳が存在する。いずれも尾根全体が梨・桃畑として開墾を受けており、部分的に段々畑状の地形が認められた。

(1)28号墳(第95図)

重機の轍跡から須恵器片が出土し、古墳の存在が明らかとなったものである。墳丘東側は、平成8年度調査で試掘が行われているが、開墾によるためか古墳とは認められていなかった。地形からすると、墳丘は12mほどの円墳であったと考えられる。

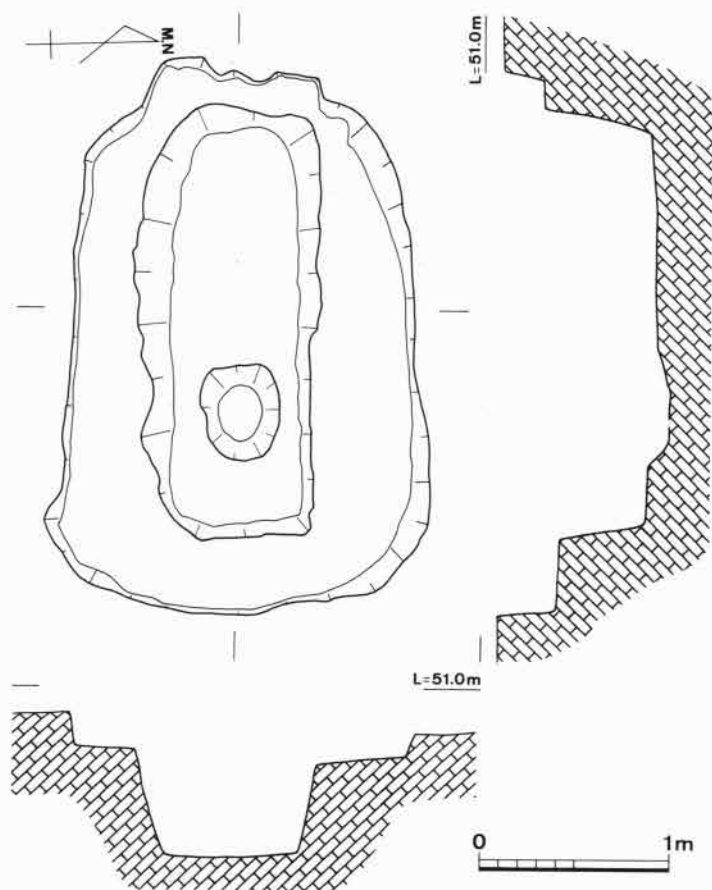
重機が通った部分を中心に試掘を行ったところ、主体部と考えられる土色の変化を確認したが、開墾及び重機の削平により部分的にしか残存していなかった。墓壙と考えられる部分は、およそ長さ約3m×幅約1m・深さ約0.1mと推定される。規模から木棺部掘形の底面のみ残存するものと推定される。遺物は出土していない。外表から出土している須恵器破片からすると、6世紀

中頃に築造されたものと考えられる。

(2)23号墳

①墳丘(第96図、図版第71)

27号墳の東側に位置する。27号墳同様開墾を受け、墳頂部には東西にのびる溝状の窪みが見られた。墳丘は、楕円形状に改変されるが、長辺約15.5m×短辺約10.5m・高さ約1mを測る方墳である。西側には自然地形と区画する幅2mの溝が設けられている。墓壙北側に梨棚のアンカーが設置され、そのときかなり削平したようで、削平は、南側ほど著しい。墳丘中央部で墓壙1か所、西側墳丘区画溝で円形の炭窯1基を検出した。

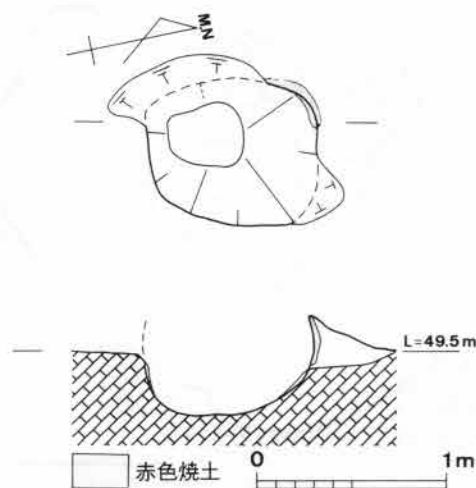


第97図 天王山A支群23号墳主体部実測図

②埋葬施設(第97図、図版第71)

墓壙は、隅丸長方形をなし、長辺約2.9m×短辺約2m・深さ0.8mを測り、東側がやや広い。主軸はN-89°-Wである。梨棚のアンカー設置時に墓壙の存在に気付き、掘削が行われたようで、墓壙周辺に石棺材として使用されていた凝灰岩の板石が積まれていた。掘削は、墓壙底面よりも下層にまで及んでおり、中央部分が舟底状に窪んでいる。

墓壙内部は完全に掘削されているため、まったく遺物は出土しなかったが、墓壙検出面で細片化した土師器壺片と思われるものが少量出土した。時期を特定できるものではないが、昨年度調査を行った箱式石棺を主体部とする13・17号墳の成果からすると、中期古墳の可能性がある。



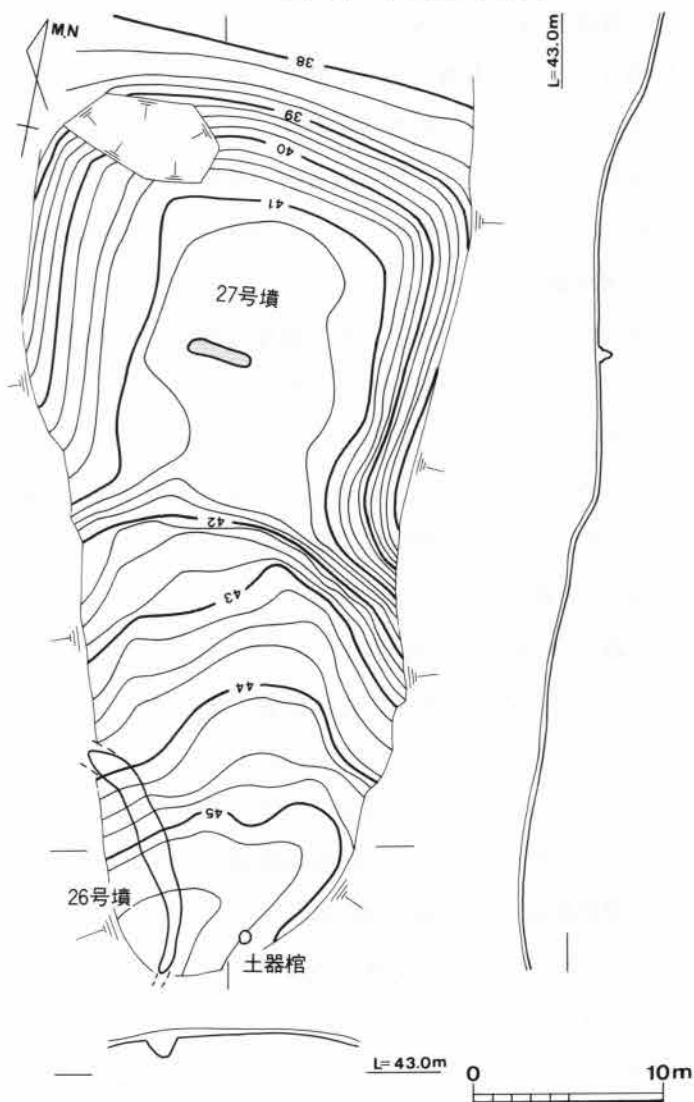
第98図 小型炭窯実測図

③炭窯(第98図、図版第71)

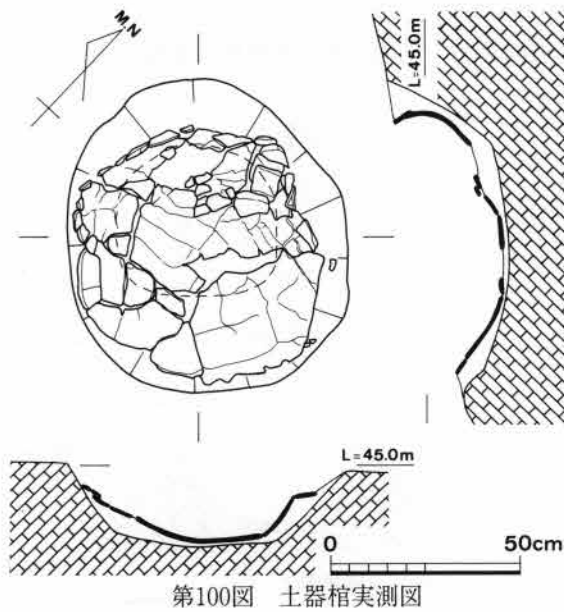
西側区画溝中央付近で検出したもので、直径約0.8mの円形をなすもので、深さ約0.5mを測る。掘り込み側壁には粘土を貼り付けるが、底面から約0.25m上方までしか貼られていない。底面には空焚き時に酸化したと思われる被熱部分が認められた。内部は、木炭・灰が多く堆積していた。時期を特定できるような遺物の出土は認められなかったが、別荘遺跡で検出されている鍛冶工房に伴う炭窯であったとも考えられる。

b. A支群26・27号墳

平成8年度に調査された天王山A支群3・4・22号墳から北に派生した稜線上に位置する。いずれも伐採後の木材片づけ時に発見されたもので、26号墳は墳丘の大半を削られ、27号墳は墳丘の北東側裾付近が大きく削平されていた。



第99図 天王山A支群26・27号墳測量図



(1)26号墳

①墳丘(第99図、図版第72)

標高45m付近に位置し、尾根稜線上よりやや西側斜面にかけて築造されたものである。東側には南から北に向かって傾斜を持つやや円形をなす尾根と区画する「V」字状の溝が設けられている。溝の規模は、幅約1.5m・確認長約12.3m・深さ約0.75mを測る。稜線上に築造されなかったのは、区画溝の東側には土器棺墓があり、これを意識したものかもしれない。溝内から須恵器杯蓋片が出土した。復原される古墳の規模は、直径約15m・高さ約2mが推定される。

②埋葬施設(第100図)

墳丘中心部が重機によって削平されており、主体部は検出されなかった。その東側では、重機によって削平された斜面が広がり、そこから土器棺墓が検出された。土器棺は、重機で口縁部及び体部の大半を削平されているが、長径約0.84m・短径約0.73mの楕円形の掘形内に口縁部を北に向けた状態で壺を納めていた。内部からは副葬品などの出土はなかった。

③出土遺物

溝内から出土したもので約1個体分ある。天王山A支群1号墳第1主体部出土のものと同様のもので、TK10併行期と考えられる。

土器棺に使用されていた壺は、口縁部・体部の大半を削平されており、全体を復原できる残存状況でないため図化できなかった。体部外面はハケ調整を行う。内面は残存状況が悪く不明である。時期的には、古墳時代中期のものと考えられる。

(2)27号墳

①墳丘(第99図、図版第72・73)

26号墳下方の標高40m付近に位置する。自然地形を方形に削り出したもので、一辺約24m・高さ約3.3mの規模を測る。盛り土はほとんどなく、尾根高位側にも自然地形と区画する溝は設けておらず、4面とも自然地形との傾斜変換点が墳丘裾となるようである。

墳丘西側肩部付近で、土師器長頸壺片が出土しているが、図化できなかった。

②埋葬施設(第101図、図版第73)

墳丘中央部で、地山を掘り込んだ1基の埋葬施設を検出した。墓壙の検出時には、棺蓋の落ち込みに伴う暗褐色粘質土が溝状に堆積していた。墓壙は、長辺約3.4m×短辺約0.75m・深さ約0.8mを測り、細長い二段墓壙で、主軸はN-89°-Wである。木棺痕跡は確認されなかったが、墓壙の形状から舟形木棺が想定される。

遺物は、墓壙上面と棺上に置かれていたと考えられる土師器の2群がある。いずれも中央部分を中心に出土している。墓壙内から出土したものには、高杯5点・器台3・壺4～6点・甕1点以上がある。いずれも破碎され埋められていた。

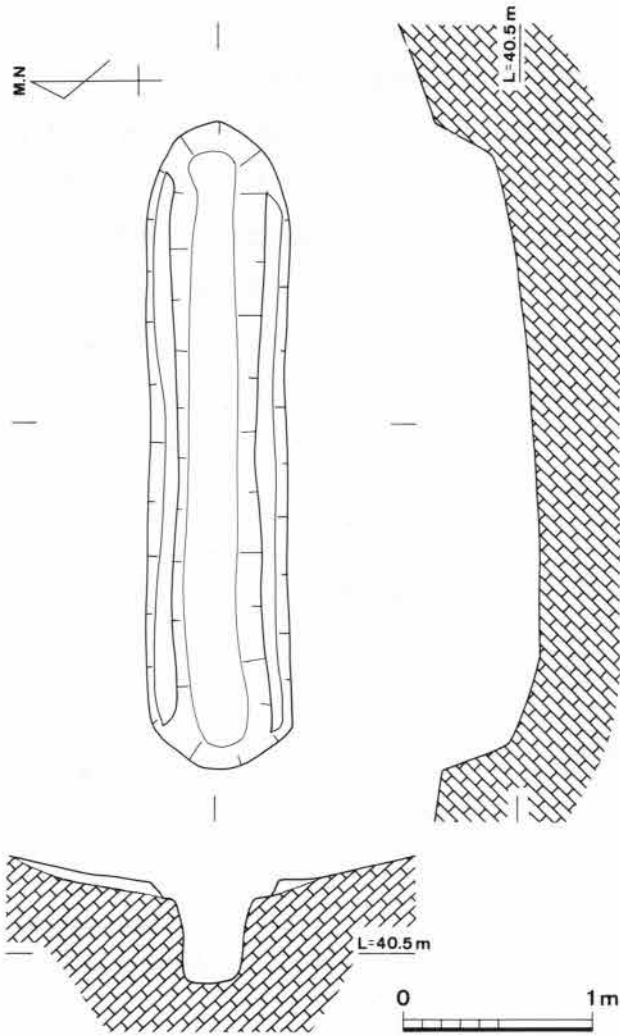
③出土遺物(第102図)

いずれも土師器で、その残存状況は非常に悪く、器壁は剥離しており、復原は困難である。

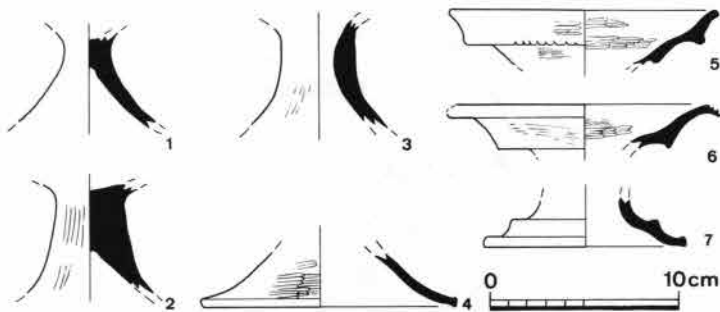
高杯(1・2) 高杯の脚部のみで、他の部分は細片の状態が出土したため、復原はできなかった。大きく「ハ」字状に開く脚部と、器壁が太く斜め下方に開く脚部の2種が見られた。

器台(3・4) おそらく別個体と思われる。大きく開く脚端部外面に、わずかにヘラ磨きの痕跡が見られた。

台付壺(5～7) 「く」字状に屈曲して大きく外反する口縁部(5・6)と、脚の部分(7)を図化した球状の体部の一部も確認しているが、図化できなかった。弥栄町太田4号墳出土品と類似するが、口縁部に擬凹線文を施していないことからすると、後続するものと考えられ、古墳時代前期初頭に相当すると思われる。



第101図 天王山A支群27号墳主体部実測図



第102図 天王山A支群27号墳出土遺物実測図

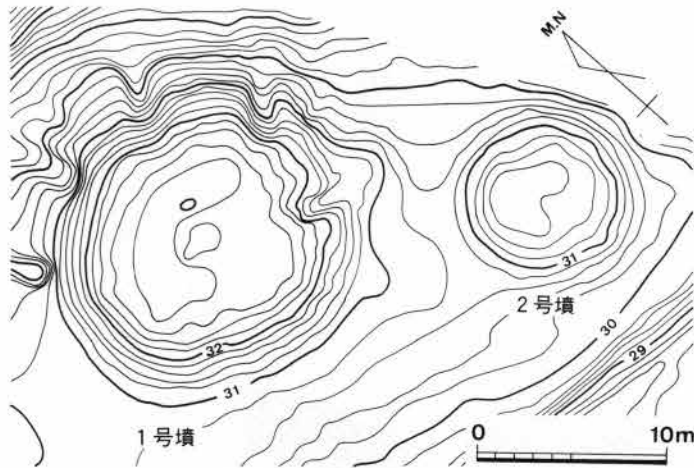
c. B支群1・2号墳

天王山古墳群の東端に位置する古墳で、北方に派生する丘陵先端部に位置する。昨年度に一部掘削が行われ、1号墳墳丘上から、12世紀後半の経塚1基が確認されている。板石で室を設け、鉄製の経筒が埋納されていた。レントゲン写真の結果、経筒内には経巻1巻が残っていた。この経塚については昨年度に調査を実施しているため、その詳細については省略する。

(1) 1号墳

①墳丘(第103・104図、図版第74・79)

直径約18m・高さ約1.8mを測る円墳である。大半が盛り土で築かれた古墳で、主体部検出面から約1m下で旧表土を確認した。主体部は、墳頂部中央と南西寄りで2基確認した。また、第1主体部の北東側検出面で須恵器杯身・杯蓋4点が出土した(第107図、図版第77)。もう1基の主体部の存在が考えられたが、主体部は見つからなかった。1・2号墳間には幅約3m・深さ約0.8mを測る区画溝が設けられている。この区画溝の流土内から、管玉(第111図87)とともにミニチュア土器が1点(第113図111)出土した。これらの遺物は、埋葬後の祭祀に伴うものとも考えられる。

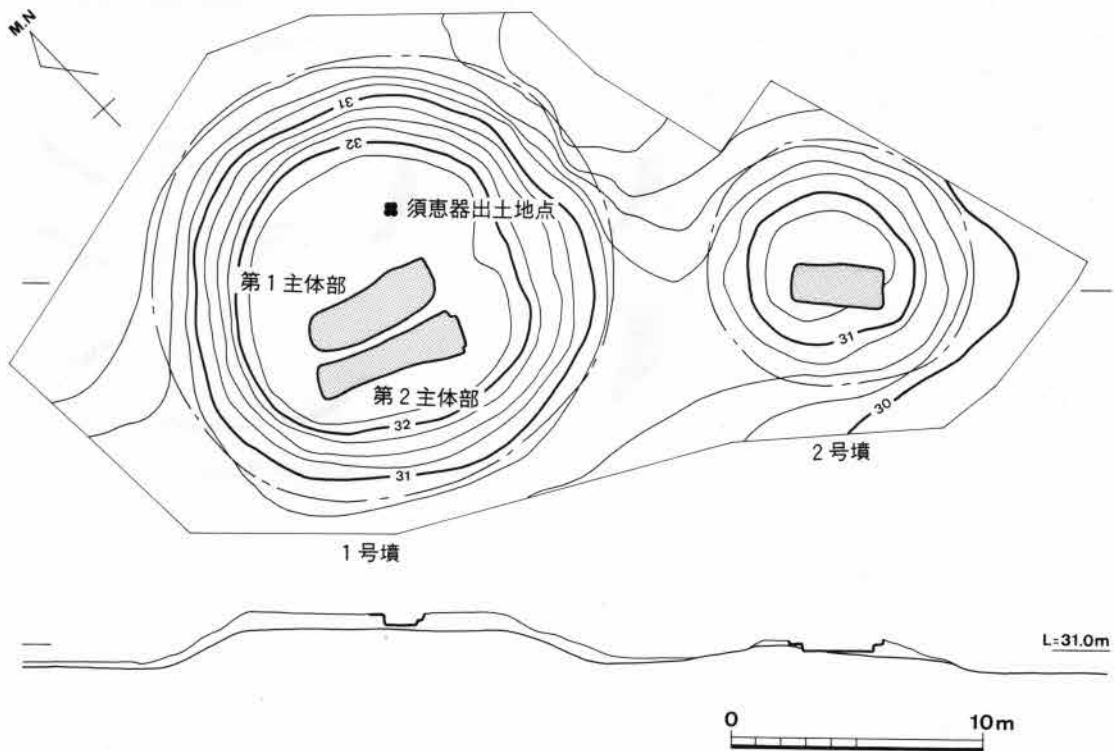


第103図 天王山B支群1・2号墳測量図(調査前)

②埋葬施設(第105・106図、図版第74~76)

中央に位置する主体部を第1、南西側の主体部を第2主体部として調査を行った。

第1主体部 墳頂部ほぼ中央から、二段墓壇を検出した。検出面での規模は、幅約1.9m・長さ約5.4m・深さ約0.4mを測る。主軸はN-78°-Wである。木棺痕跡は確



第104図 天王山B支群1・2号墳測量図(調査後)

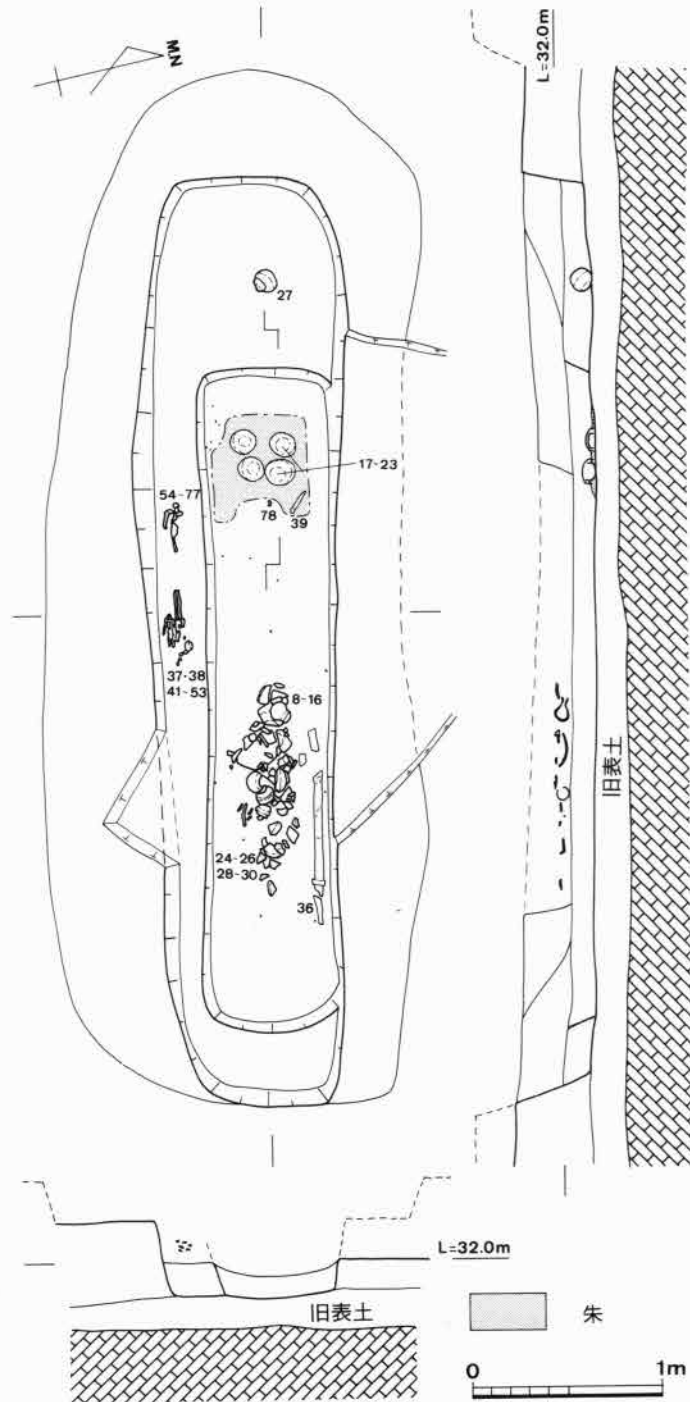
認められなかったが、墓壇の形状などから幅約0.7m・長さ約3.5mを測る箱形木棺であったと考えられる。出土遺物には、棺内遺物と棺上遺物があり、棺上遺物は主に木棺上と南側板横から出土した。

棺上遺物としては、木棺上から須恵器の杯身8・杯蓋8・高杯1・甕4・甕1、土師器長頸壺1などが破碎された状態で出土しており、長側板外側から馬具(轡1・辻金具・革金具)や鉄鏃などの鉄製品も出土した。また、裏込め内からも甕1が出土した(第105図、図版第77)。

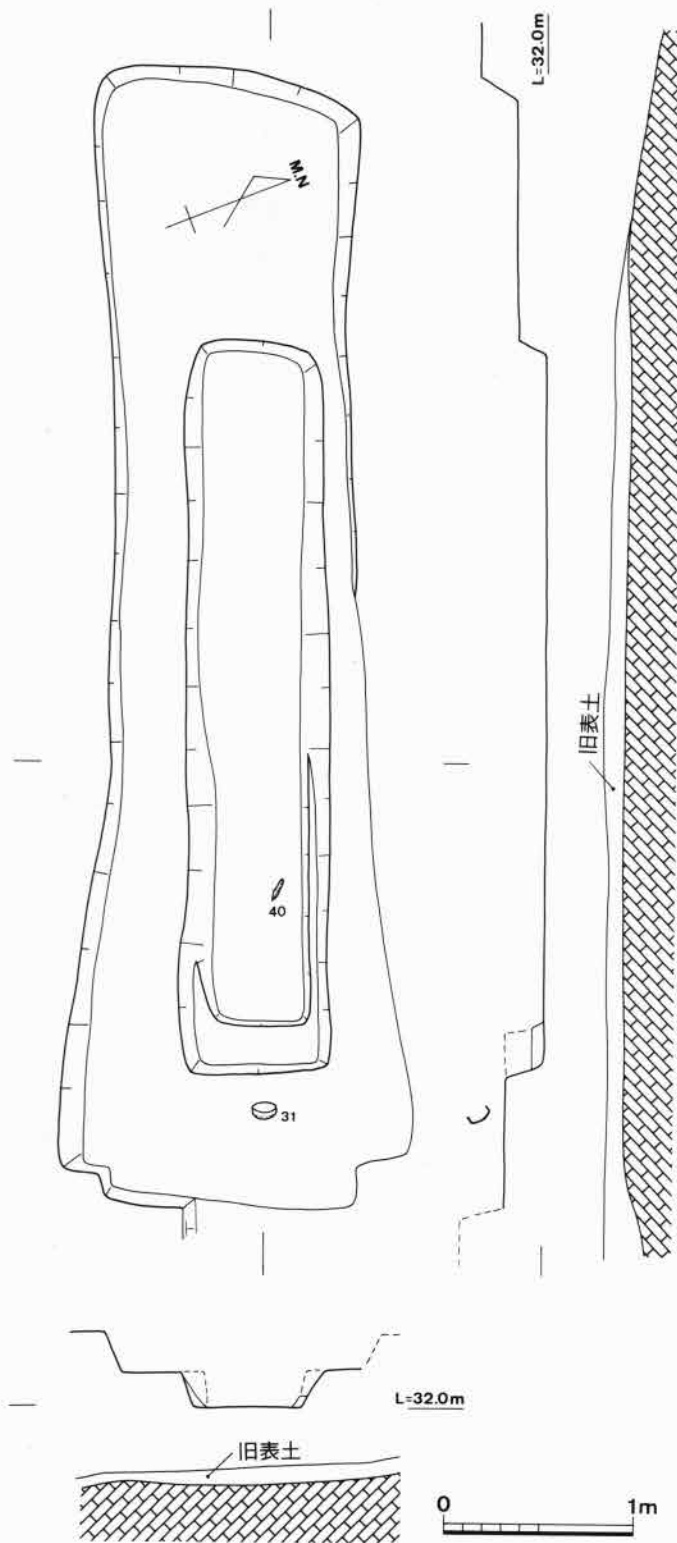
棺内遺物としては、勾玉1、ガラス玉14、管玉8、須恵器(杯蓋5・杯身2)、鉄鏃、刀1、刀子が出土した。杯身・杯蓋は転用枕として使用され、周辺に朱が認められた。転用枕は4か所に土器を据えており、口径のさまざまな杯身・杯蓋でもって、枕としていた。勾玉は、この転用枕付近から出土した。刀は切先を西に向け、足元付近(図版第77)から、また玉類は、棺内にまき散らした状態で出土した。転用枕から頭位方向は西である。

出土した土器の形態から、6世紀前半の特徴をもつものと中頃のものが共存しており、6世紀中頃に築造されたと考えられる。

第2主体部 第1主体部西側から並行して検出した主体部で、二段墓壇である。第1主体部より残存状況は悪いが、検出面での規模は幅約1.3m・長さ約6.0m・深さ約0.4mを測り、主軸はN-69°-Wである。木棺痕跡は確認されなかったが、墓壇の形状などから箱形木棺が推定される。墓壇検出面の東小口部から、須恵器杯蓋1点が出土した。棺内からは切先を南東に向けた刀子1が出土した。頭位方向は不明である。



第105図 天王山B支群1号墳第1主体部実測図



第106図 天王山B支群1号墳第2主体部実測図

小口部の土器の形態から、6世紀中頃に埋葬されたと考えられる。墓壙掘形は、第1主体部とほぼ同一面から掘り込まれていることや、第1主体部との位置関係から、第1主体部より後に、ほとんど時間差をおかずに埋葬されたとと思われる。

③出土遺物(第108～111図、図版第97～104、附表7)

土器 第108図8～16と24～26、28～30の土器群は、第1主体部の棺上遺物で破碎した状況で出土した。17～23は、転用枕として使用されていた須恵器である。27は、棺を埋葬する際に埋められたものである。31は、第2主体部から出土した杯蓋で、32～35は第1主体部東側から出土したもので、祭祀に伴う土器群であると考えられる。

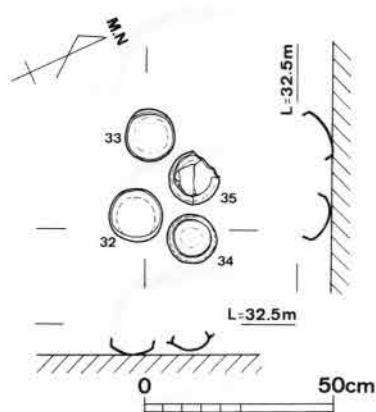
杯蓋(8・17～19・31) 丸みを帯びた天井部と下方に降りる口縁部からなる。17・18は、口縁部がほぼ真下を向く。器高の高いもので、杯身と合わせると球状に近い形となる。口縁部基部には、1条の凹線がめぐる。天井部外面はヘラ削りが施され、天井部内面と口縁部はロクロナデで成形されている。土器の形状からTK10併行期のものと考え、その中でも古い要素の濃い遺物と思われる。

杯蓋(9～11・20・21・32・33) 口径がやや小さくなり、中でも11は、

小型の杯蓋である。器高も上記の蓋ほど高くない。丸みを帯びた天井部と下方に降りる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りが施され、天井部内面と口縁部はロクロナデ成形している。土器の形状からTK10併行期のものと考え、その中でも新しい要素の濃い遺物と思われる。

杯身(14・16・22・23) 丸みを帯びた底部と上方に立ち上がる口縁部からなる。いずれも器高は高く、蓋と合わせると球状に近い形となる。底部外面はヘラ削りを施し、底部内面及び口縁部はロクロナデ成形している。その形状から、TK10併行期のものとする。杯身34・35と比較すると、古い時期のものとする。

杯身(34・35) 平坦な底部から外上方に立ち上がる体部と、斜め内上方に立ち上がる口縁部からなる。底部外面の平坦部のみヘラ削りが施され、その他はロクロナデ成形で仕上げている。杯蓋9・10・32・33と同時期のものとする。



第107図 天王山B支群1号墳
墳頂部遺物出土状況

無蓋高杯(24) 底部から内湾しながら立ち上がる杯部と、外下方に降りる脚部からなる。脚部には、三方に長方形の透かしがある。杯部底部外面にはわずかにヘラ削りの痕跡が認められ、その他はロクロナデ成形を施す。脚部はロクロナデ成形されており、ヘラ状工具で透かしを作っている。そのため、部分的に粘土のはみ出しが内面に見られた。その形状からTK10併行期に相当する土器であろうとする。

甕(26・28) 球状の底・体部と逆「ハ」字状に開く口縁部からなる。26は、体部半ばの張るもので、口縁部は大きく開く。口縁端部は、「S」字に屈曲する。底部外面にはヘラ削りが施され、体部半ばと口縁部には波状文が施されていた。28は、26よりも器高が高く、口縁端部・口縁部には波状文がめぐっていた。時期については、土器の形状ならびに上記の杯身・杯蓋とともに出土していることから、TK10併行期のものとする。

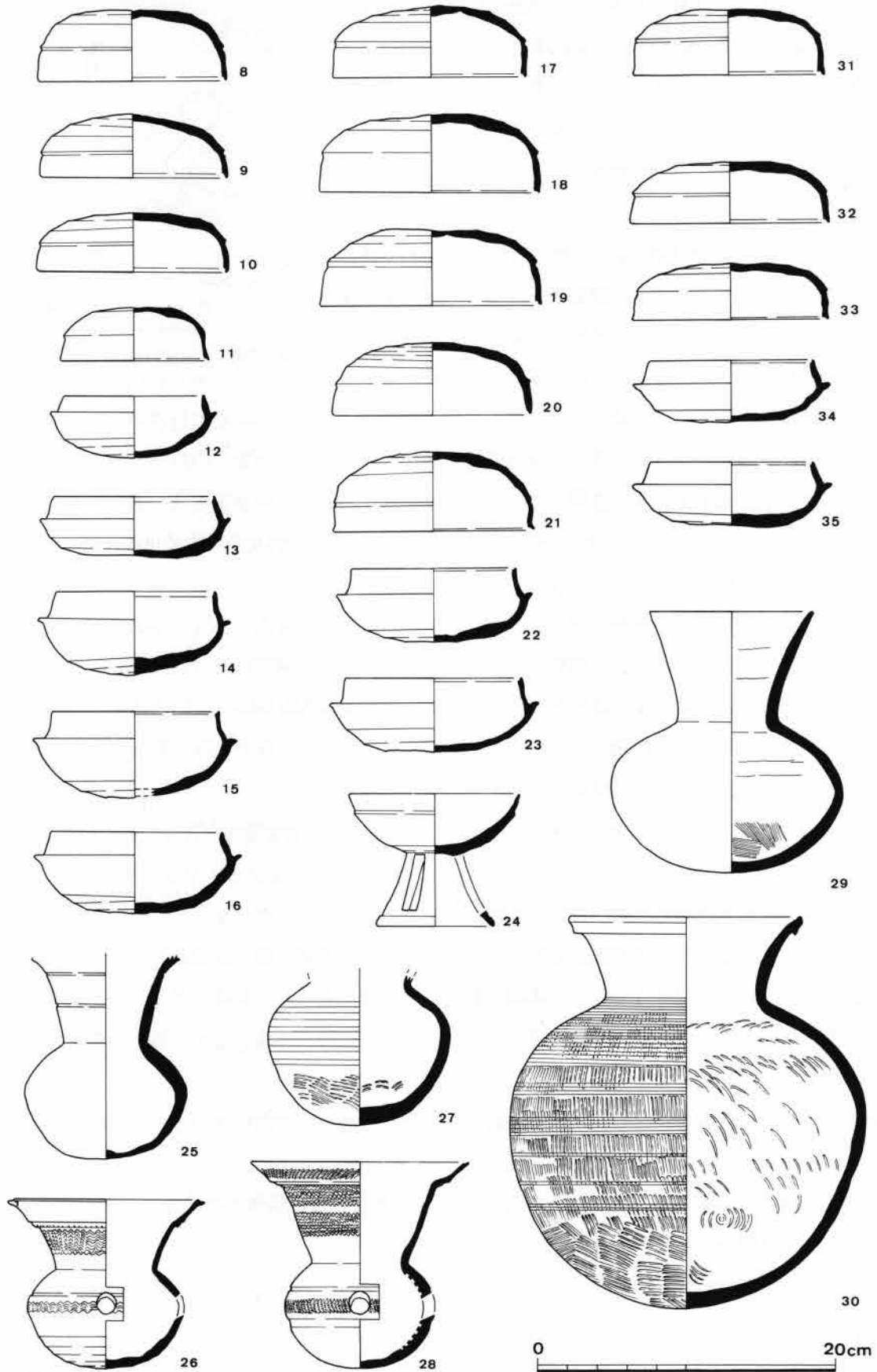
壺(25・27・29) 29は、土師器である。25・27は、口縁部や口縁端部を意図的に欠いている。25は、須恵器の長頸壺である。やや肩の張る体部と逆「ハ」字状に立ち上がる口縁部からなる。頸部に2条の凹線が認められた。27は、木棺を固定するための土中から出土したもので、口縁部は出土しなかった。やや肩部の張るもので、外面にはカキ目が見られ、底部内外面には叩き目が残っていた。29は、体部半ばで大きく外側に張り、口縁部は逆「ハ」字状に開く。口縁端部は丸い。時期については、25・27の土器の形状ならびに上記の杯身・杯蓋とともに出土していることから、TK10併行期のものとする。

甕(30) 球状の体部と逆「ハ」字状の口縁部からなる。体部内外面には叩きが一面に施されており、体部2/3にカキ目がめぐる。

鉄製品 第109図36～39・第110図54～77は、第1主体部の長側板横から出土したものである。40は、第2主体部内から出土した。

直刀(36) 全長105cm・刃部幅4cmを測る。関は片関である。刃部に、鞘と思われる木質が遺存する。

刀子(37～40) 37は、同一個体と考えられる。37は、刃部残存長8cm・茎残存長5cmを測る。38は、両関で全長14.3cm、39は棟側が斜めの両関で、全長13.4cmを測る。40は、関部分で錆によ



第108図 天王山B支群1号墳出土遺物実測図(1)

り刃部と茎が左右にズレている。全長10cmを測る。

鉄鎌(41~52) 41・42は短頸鎌で腸袂三角形鎌。鎌身断面は平造り、頸部は関籠被。41は、鎌身部全長6cm・幅3cm。42は、鎌身部全長8cm・幅3cm。43~52は長頸鎌で、鎌身部は長三角形状を呈する。44・46・48は、鎌身関が角関である。43・45・47は、斜め関である。頸部関は関籠被であるが、48は台形関に近い。ほぼ完存する46は全長11cm、鎌身部長2.3cm・幅1.4cmを測る。49~52は、頸部のみ残存するもので、49・50は籠被部から茎部にかけて徐々に細くなる無籠被、52は出土した鉄鎌中最も籠被部が長いもので、関部刃がやや台形関を呈する。

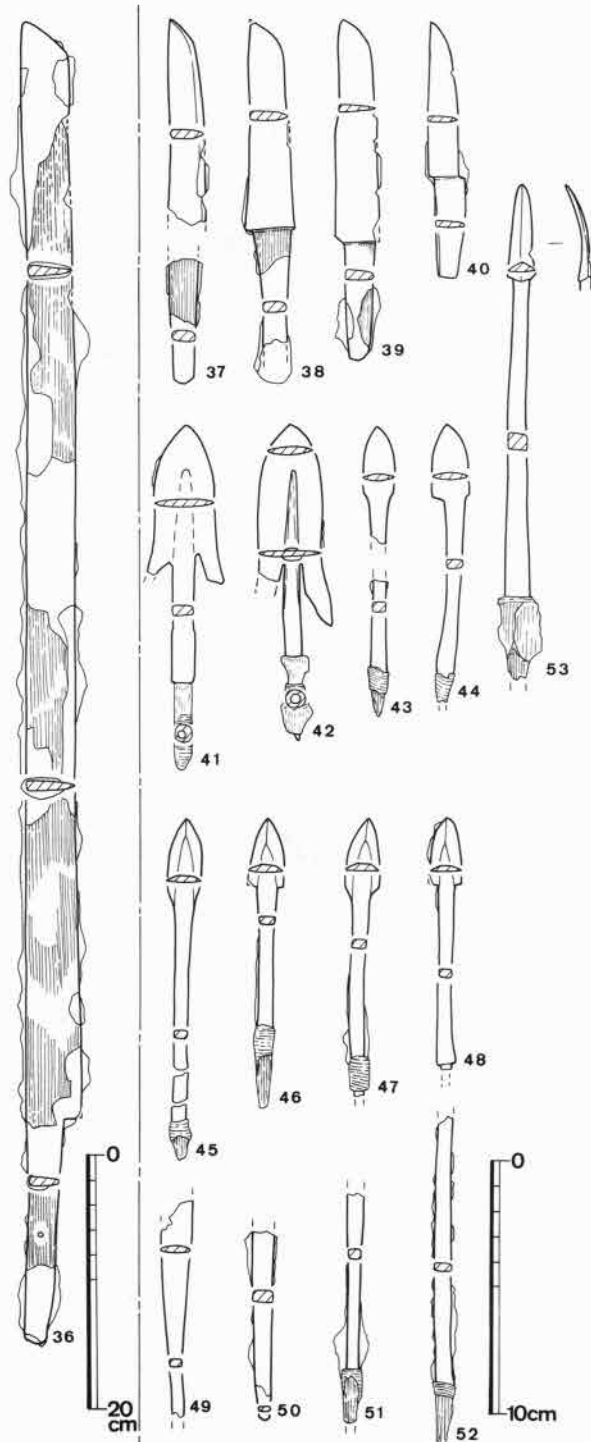
鉈(53) 残存長19.4cm・刃部長4cm・幅1cmを測る。刃部は大きく上方へ湾曲して鑄を持つ。断面は片平鑄造りである。

馬具(第110図) 馬具には、辻金具・革金具・鉸具・環状鉄器不明鉄製品がある。

辻金具(55~57) 4点出土しているが、図化できたものは3点である。十字状の辻金具で、厚さ0.2cmの鉄板の中央部に1鉸、各々4脚に1鉸ずつ配したものである。鉸はいずれも径0.6

~0.7cm・高さ0.2~0.3cmの半円状の鉸を配するが、中心鉸、脚鉸ともほとんど差は認められない。脚は、基部に鉸が打ち込まれていないため、責金具が使用されていた痕跡が認められた。55の脚の鉸は、足が直角に曲げられ、この折り曲げられた部分と鉄板の間には皮革の痕跡が残っており、幅0.3cm弱ほどあいていることから、使用されていた革帯は0.3cmほどのものと思われる。

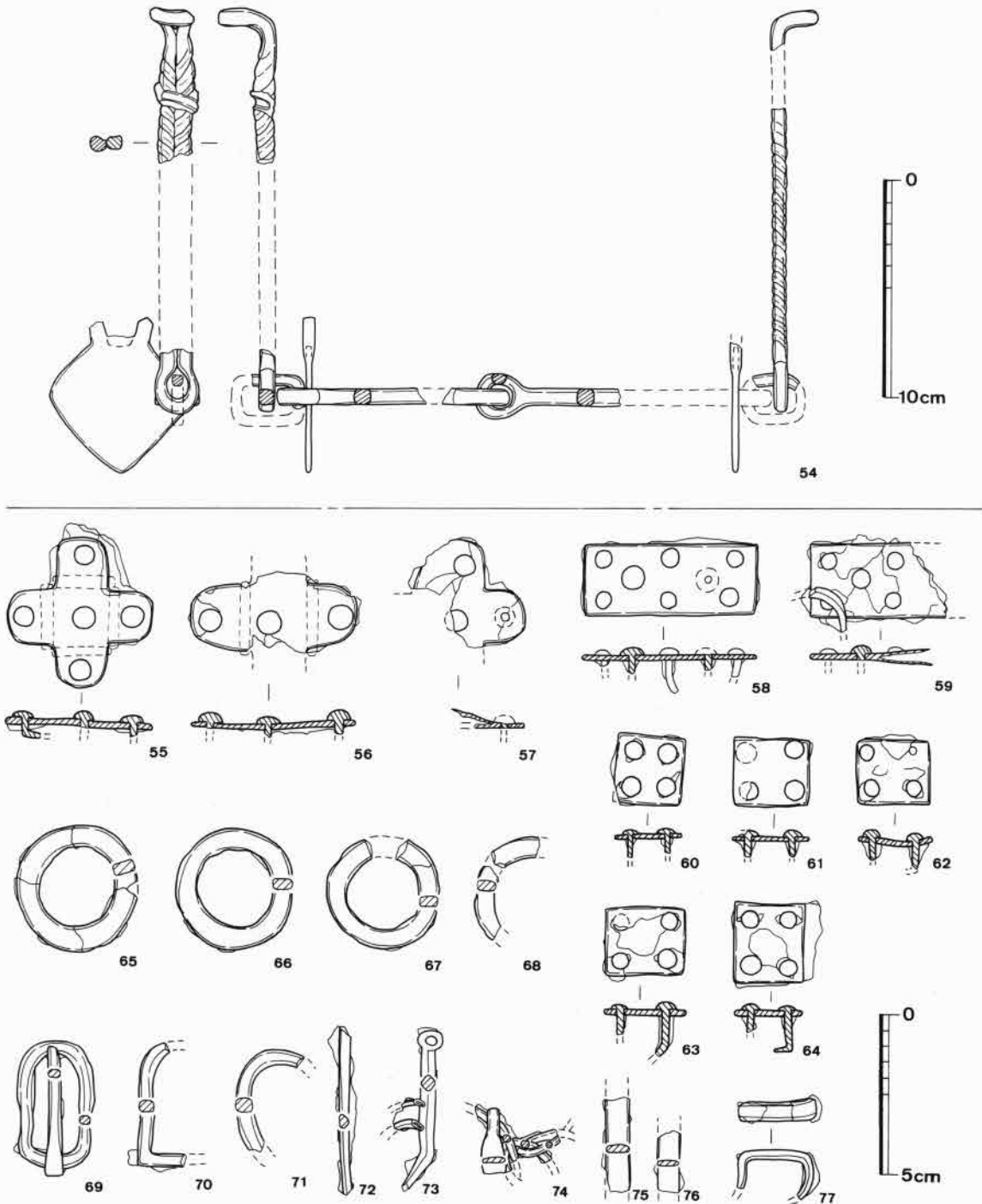
環状鉄器(65~68) 4点出土した。直径3.5~4.0cmの環状をなすもので、環の厚さ0.3cmを測る。馬具の一部と考えられ、革帯をつないだものと思われる。



第109図 天王山B支群1号墳出土遺物実測図(2)

革金具(58~64) 4 鈎と 8 鈎の 2 種が認められる。8 鈎のものは 2 点出土した。58 は、5.4cm×2.2cm の長方形の地板に、鉄製円頭鈎を 8 鈎打つ。中央部の 2 鈎は周囲の 6 鈎に比べて 0.8cm とやや大きい。59 も同様のものであるが、1/2 を欠損する。鈎上に貴金具が付着する。鈎脚の先端をいずれも欠く。4 鈎を持つものは 6 点出土したが、凶化できたものは 5 点である。2~2.5cm の方形の地板に鉄製円頭鈎を 4 鈎打つ。裏面には皮革の痕跡が残る。鈎脚の先端を欠くが、64 の 1 鈎は完存しており、革帯の厚さ 1cm で鈎脚が直角に曲げられる。

鉸具(69~71) 69 は、直径 0.5cm の鉄棒を曲げて輪金をつくり、基部に 5cm ほどの鉄棒を端を



第110図 天王山B支群1号墳出土遺物実測図(3)

巻きつけて刺金とする。輪金の全長4cm・環部幅2.5cmを測る。70は、0.5cmの鉄棒を「U」字形に曲げ、基部でさらに「L」字形に折り曲げる。約1/2が残存。71は、環状部分の破片である。

72・73は釘状のもので、73は頭部先端を扁平にたたき、内側に強く巻き込む巻頭形のもので、断面が方形を呈する。先端を欠損するが残存長5.4cmを測る。側面に貴金具が付着する。

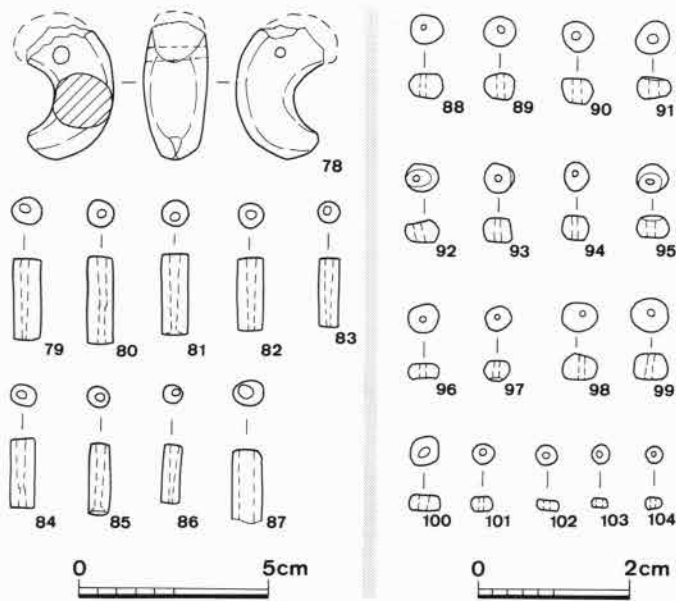
74は方形鉄板鏡板付轡で、鏡板・銜・引手は搦め輪を介して結合される。鏡板は、方形の厚さ2mmの鉄板で、角部分には突起が認められる。先端を欠損しているが、これを立開にしたものと思われる。鏡板の一辺は、約5cmである。搦め輪は、方形ないし楕円形の輪であったと推定される。引手は、厚さ7mmの方形の鉄棒をねじり、二つ折りにして、両端に輪を設けたものである。手綱側になる環は外側に「く」の字状に折り曲げている。復原される全長は、19cmほどと考えられる。中央部分に貴金具が装着されていた痕跡が残る。

74は、鐙のミニチュア状を呈するもので、「V」字形の鐙靱金具と1連の兵庫鎖が残存する。

兵庫鎖は、はずれた状態で2連分付着する。

75・76は、薄い板状を呈しており、75は残存長3cm・厚さ0.3cmを測る。

貴金具(77) 辻金具には装着されていたものと考えられる。細片化したものは多数認められるが、ほぼ全体がわかるものはこれ1点である。先端を欠損するが、厚さ0.3cm・幅0.5cmほどの鉄板を「コ」字状に曲げて固定しており、細片化しているものも、ほぼ同じ大きさである。



第111図 天王山B支群1号墳出土遺物実測図(4)

装身具 勾玉1点(78)、管玉9点

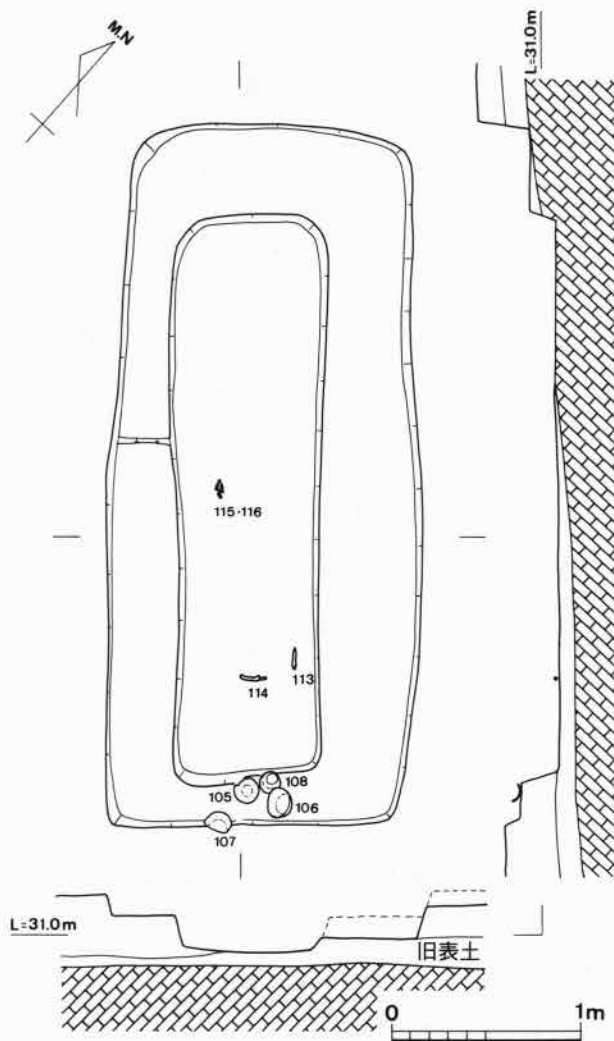
付表7 天王山B支群1号墳第1主体部出土玉製品一覧表(mm)

番号	器種	長	幅	孔径	色調	備考	番号	器種	長	幅	孔径	色調	備考
78	勾玉	35.0	15.0	5.0~2.5	淡緑色	欠損	92	ガラス玉	3.0	4.5	1.0	濃紺色	
79	管玉	22.0	8.0	2.0~1.0	濃緑色	碧玉	93	〃	3.5	4.0	1.0	濃紺色	
80	〃	24.0	7.0	1.5	濃緑色	〃	94	〃	3.5	3.5	1.0	濃紺色	
81	〃	21.0	7.0	5.0~1.0	濃緑色	〃	95	〃	3.0	4.5	1.0	濃紺色	
82	〃	19.0	7.0	3.0~1.5	濃緑色	〃	96	〃	2.0	4.0	1.0	濃紺色	
83	〃	18.0	6.0	2.0~1.0	濃緑色	〃	97	〃	3.0	3.5	1.0	濃紺色	
84	〃	18.0	7.0	3.0~2.0	濃緑色	〃	98	〃	3.5	5.0	1.0	濃紺色	
85	〃	18.0	6.0	4.0~2.0	濃緑色	〃	99	〃	3.5	5.0	1.0	濃紺色	
86	〃	15.0	6.0	2.0~1.0	濃緑色	〃	100	〃	2.5	4.5	1.5	濃紺色	
87	〃	19.0	8.0	4.0	淡緑色	欠損	101	〃	2.0	3.0	1.0	淡青色	
88	ガラス玉	3.5	4.5	0.5	濃紺色		102	〃	1.5	3.0	1.0	淡青色	
89	〃	3.5	4.5	1.0	濃紺色		103	〃	1.0	2.5	1.0	淡青色	
90	〃	3.5	4.5	1.0	濃紺色		104	〃	1.5	2.0	0.5	淡緑色	
91	〃	3.0	4.5	1.5	濃紺色								

(79~87)、ガラス玉17点(88~104)は、管玉87以外は第1主体部内から出土したものであり、管玉87は墳丘裾部からミニチュア土器とともに出土したものである。法量については、付表7に記した。なお、管玉の穿孔については、片側と両面穿孔の2種がある。

(2) 2号墳

①墳丘(第103・104図、図版第78・79)

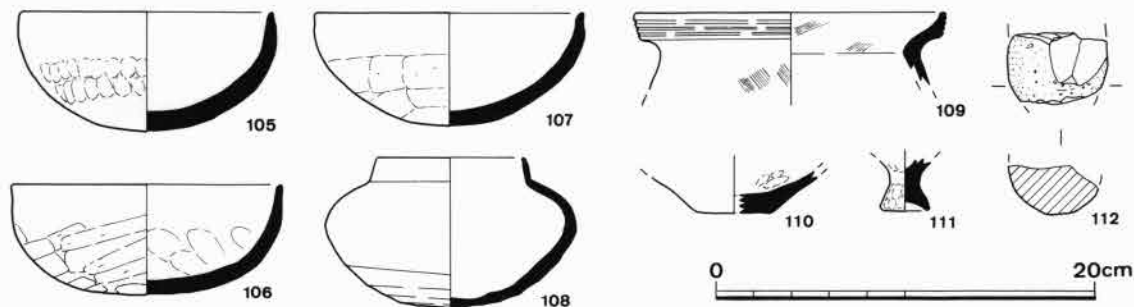


第112図 天王山B支群2号墳主体部実測図

径約10m・高さ約1mを測る円墳で、大半を盛り土で築いた古墳である。南側から西側にかけての墳丘斜面と墳頂部盛り土は、一部流失していた。墳頂部中央から主体部1基を検出した。主体部床面付近に旧表土が広がっており、ここから弥生時代後期の土器片や水晶性のハンマーが出土した。これに伴う遺構は検出されなかった。このことから古墳時代以前にも人の営みがあったと思われるが、古墳築造などによって、遺構は削平された可能性がある。

②埋葬施設(第112図、図版第78)

墓壇は二段墓壇で、検出面での規模は幅約1.7m・長さ約3.5mを測る。主軸はN-42°-Wである。木棺痕跡は確認されなかったが、墓壇の形状などから箱形木棺が推定される。墓壇検出面の南東側小口部で須恵器短頸壺1、土師器杯3が、床面から刀子1・鉄鏃1が出土した。土器は、その形態から6世紀中頃に築造されたと考えられる。



第113図 天王山B支群2号墳出土遺物実測図(1)

③出土遺物(第113・114図、図版第98・100・101)

2号墳から出土した遺物は、主体部内から105～108の土器と、113～116の鉄器である。109～112については、古墳築造前の旧表土から出土した土器と石器である。

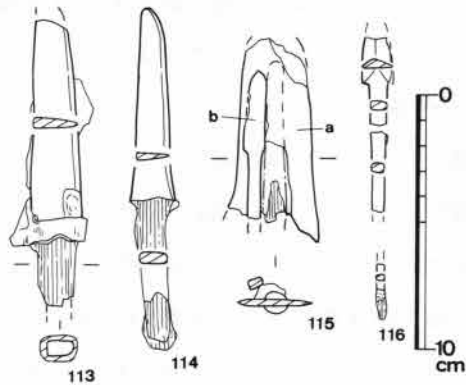
杯(105～107) 土師器である。底部から内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁端部は上方を向く。外面はヘラ削りを施し、内面はナデを行う。その後、外面全面に指押さえを施す105もある。

短頸壺(108) 肩の大きく張る体部と短く立ち上がる口縁部からなる須恵器である。底部外面にはヘラ削りが施され、その他はロクロナデ成形である。この形態からTK10併行期に該当するものと思われる。

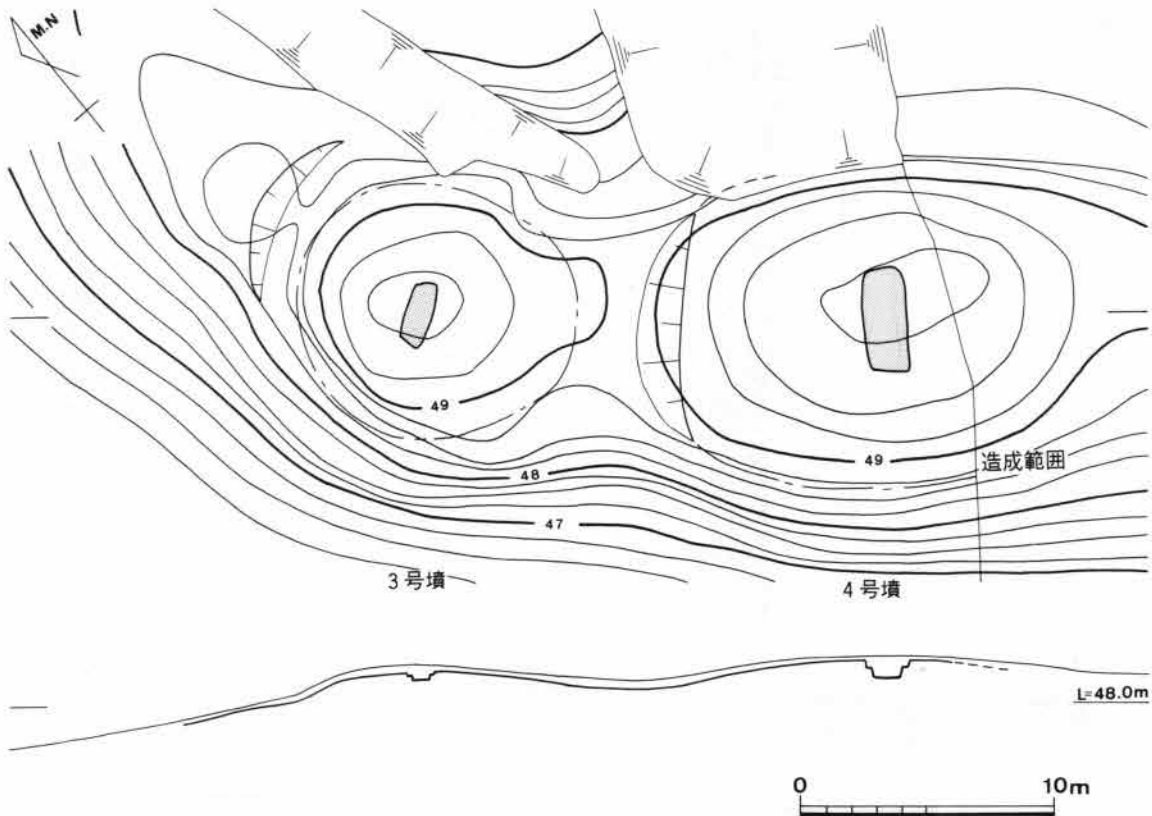
弥生土器(109・110) 109は、「S」字形に屈曲する甕の口縁部で、端部外面には疑凹線がめぐることから後期の土器である。古墳築造前にも人の営みがあったことがわかる。甕内外面には、部分的にハケ目が見られる。

ミニチュア土器(111) 管玉87とともに表土直下から出土したもので、この遺物は1号墳に伴うと思われる。祭祀に使用されたと思われる。

石器(112) 水晶製のハンマーである。残存長4cm・同幅5cmを測る。かつて、丘陵裾部を掘削した際に多量の水晶が出土しており、この周辺出



第114図 天王山B支群2号墳出土遺物実測図(2)



第115図 天王山B支群3・4号墳測量図

土の水晶をハンマーとして使用した可能性がある。

鉄製品 いずれも主体部内から出土した。

刀子(113・114) 113は、切先・茎の一部を欠損する。残存長11.2cmを測る。114は、全長13.5cmを測り、研ぎ減りが観察される。

鉄鍬(115・116) 115-aは、短頸鍬と思われる鍬身部のみ残存するもので、腸袂三角形鍬である。逆刺部刃重袂である。鍬身断面は平造り、鍬身部残存長8cm・幅3.8cm。115-b・116は長頸鍬で、鍬身は長三角形状を呈し、断面形は片丸造り。鍬身部関は115-bが斜関、116が角関。115-bは、鍬身部全長3.2cm・幅0.9cmを測る。

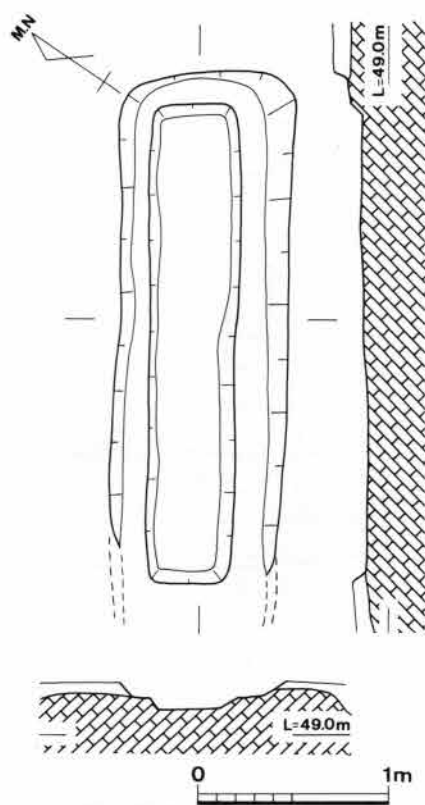
d. B支群3・4号墳

1・2号墳の西側の標高約49mの丘陵稜線上に位置し、1・2号墳とは同一丘陵で続いている。伐採に伴い、発見されたものである。

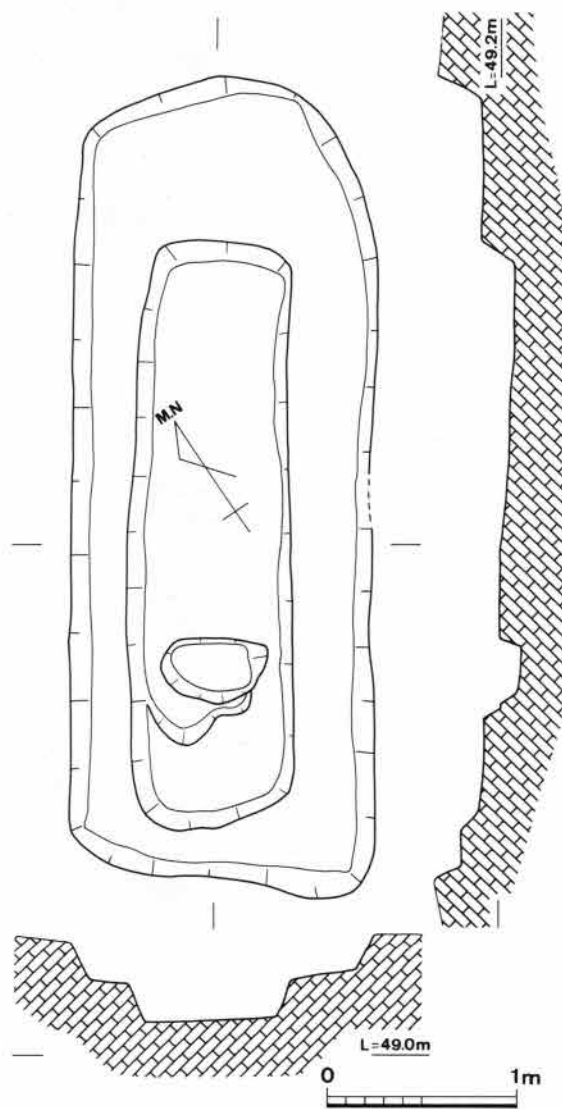
(1) 3号墳

①墳丘(第115図、図版第79)

丘陵が北にゆるやかに傾斜を始める部分に位置する。直径約12m・高さ約1.4mを測る。墳丘の北側の大半と西側の一部は盛り土を行うが、大半は地山を削り出して整形する。北側は、自然地形と区画する幅約

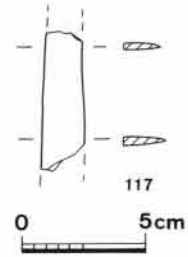


第116図 天王山B支群3号墳主体部実測図



第117図 天王山B支群4号墳主体部実測図

2.5m・深さ約0.5mの溝が「C」字状に回る。南側は、4号墳の区画溝を埋める形で3号墳の南側の削り出しを行っているため、両古墳間が4.1m離れている。墳頂部には盛り土が施されていたと考えられるが、流出したようで、表土直下がほぼ地山面となっていた。



②埋葬施設(第116図、図版第80)

墳頂部中央部で、尾根に直交する主軸をN-57°-Eを持つ主体部1基を検出した。墓壙は、隅丸長方形をなし長辺約2.9m×短辺約0.9m・深さ約0.15mを測る。木棺痕跡は確認されなかったが、墓壙の形状などから箱形木棺が推定される。内部からは副葬品などは出土しなかったが、墓壙北西側の表土直下で須恵器杯蓋片が出土した。1号墳の墓壙検出面に見られるものと同様な性格をもつと考えられる。

第118図 天王山
B支群4号
墳出土遺物
実測図

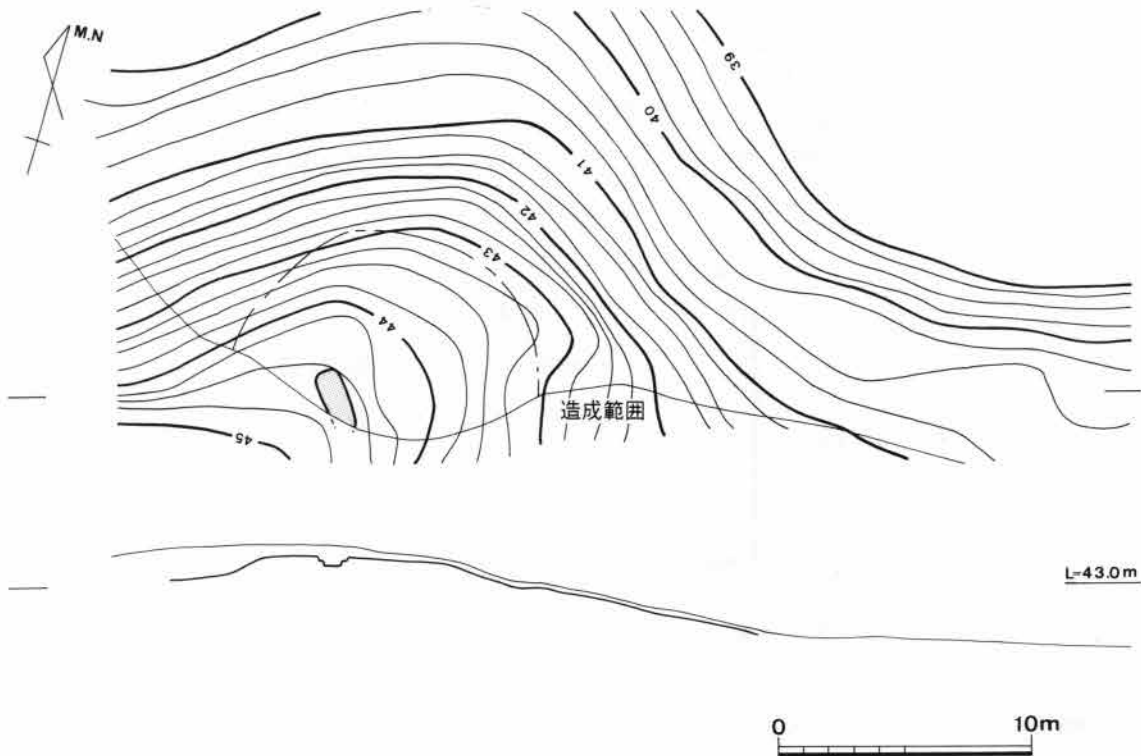
③出土遺物

表土直下で須恵器杯蓋片が出土しているが、図化できなかった。残存する部分の観察では、1号墳第1主体部の棺上遺物と同様の形態で、TK10併行期と考えられる。

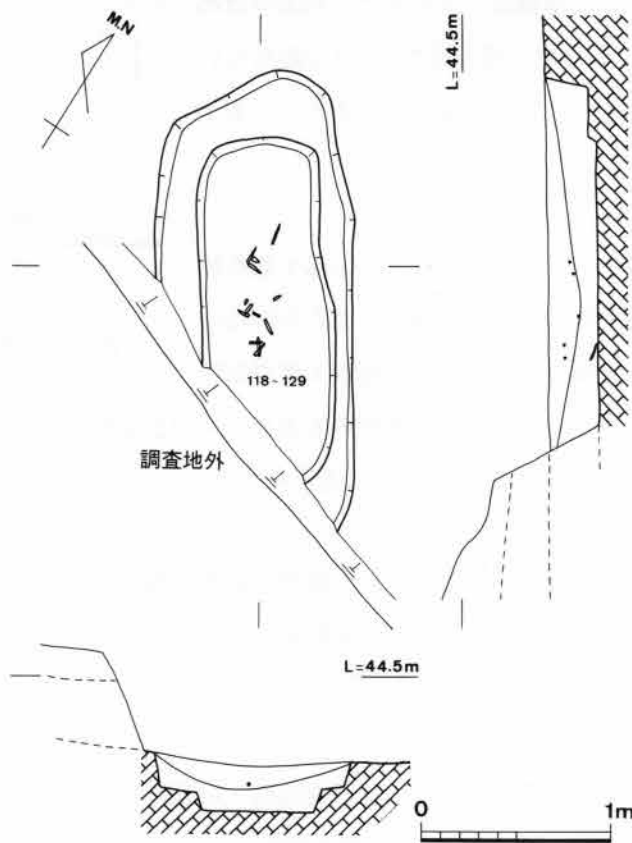
(2) 4号墳

①墳丘(第115図、図版第79)

3号墳の南側に位置し、墳丘の大半を削り出して整形する。長辺約19m・短辺約12mを測る方墳で、墳頂部には約0.3cmの盛り土が施されている。北側の3号墳との間には幅約2mの直線的な溝が設けられていたと思われる。3号墳の築造に際して溝が埋められ、それに伴い北側の墳丘の一部が削平されている。南側は、5号墳の溝が「C」字状に回る。造成界付近に位置するため、



第119図 天王山B支群8号墳測量図



第120図 天王山B支群8号墳主体部実測図

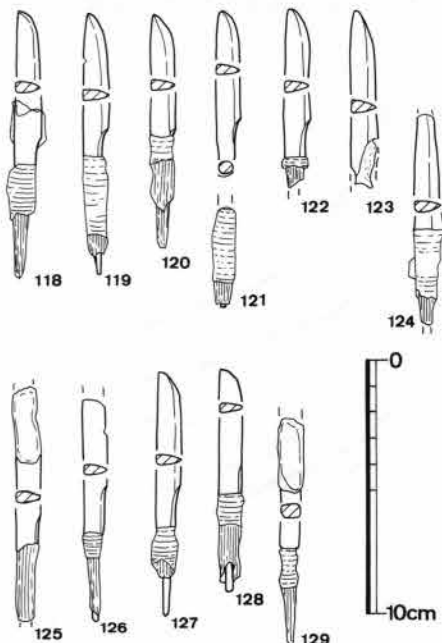
墳丘の南側1/3は調査地外となる。

②埋葬施設(第117図、図版第80)

造成界付近で尾根に直交し、主軸をN-34°-Eに持つ主体部1基を検出した。墓壙は隅丸長方形で、長辺約4.25m×短辺約1.6m・深さ約0.45mを測る。木棺痕跡は確認されなかったが、墓壙の形状などから箱形木棺であったことが推定される。墓壙中央部の埋土中から刀子1が出土した。出土状況から木棺を埋置し、埋め戻す過程で入れられたと考えられる。

③出土遺物(第118図、図版第100)

刀子117は、刃部だけの破片である。切先・基部を欠損する。残存長5.4cm・刃部幅1.7cmを測り、断面二等辺三角形をなす。



第121図 天王山B支群8号墳出土遺物実測図

e. B支群8・9・10号墳

3・4号墳から南にのびる尾根が東に分岐し、1・2号墳へと続いていくほぼ中央部分に位置する。丘陵稜線より南側は梨・桃の果樹園となっており、墳丘の1/2～1/3はそれに伴い削平を受けている。また、造成界付近に位置するため、部分的な調査を実施するにとどまった。

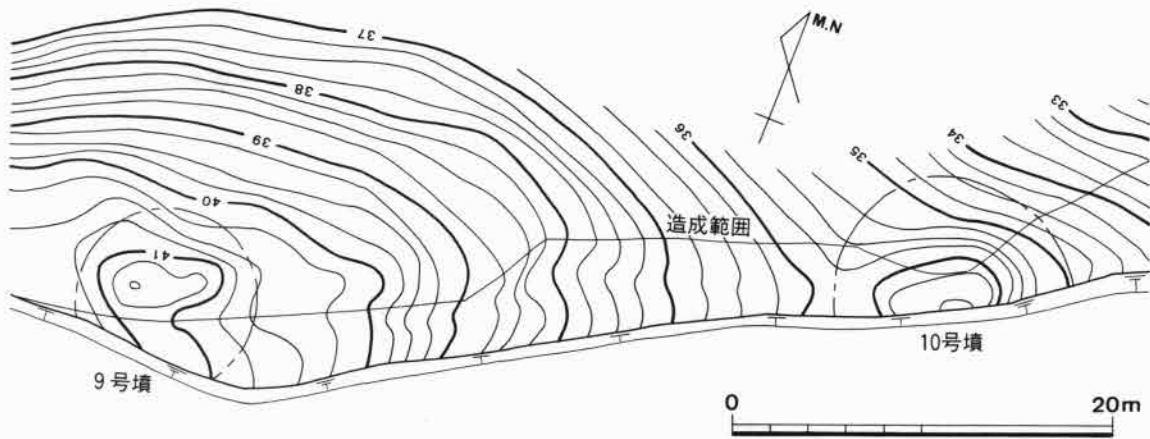
(1) 8号墳

①墳丘(第119図、図版第81)

B支群で最高所に位置する5号墳から、北東方向に派生する丘陵尾根筋上に位置する。直径約10m・高さ約1.5mを測る円墳で、墳頂部から主体部1基を検出した。墳丘1/3は調査対象地外となり、主体部も一部調査することができなかった。墳丘は、全体に砂土ないし砂質土で0.5m盛り土する。

②埋葬施設(第120図、図版第81)

主体部南端部分が調査地外となるため、その全容については不明であるが、検出面での長さ



第122図 天王山B支群9・10号墳測量図

2.5m以上・幅約1mを測る素掘りの墓壇で、尾根に直交し主軸はN-32°-Wである。主体部内からは、鉄鏃12点が出土した。

③出土遺物(第121図、図版第101)

鉄鏃(118~129) 8号墳から出土した遺物は鉄鏃のみで、土器は出土しなかった。残存状況の悪い122・123も含め、すべて鏃身部と頸部の比率がほぼ1:1の短頸闊筈被片刃箭式の鉄鏃である。鏃身部は斜闊で、筈被までの長さはほとんどない。鏃身部断面形は、切刃造りである。全長のわかる最大の118は10.5cm、最小のもの120は9.2cm。鏃身部最大のもの118は長さ5cm・幅1cm、最小の128は長さ3.8cm・幅0.9cmを測る。いずれも茎部には桜の樹皮がよく残存する。

(2) 9号墳(第122図、図版第81)

8号墳の北東に位置する古墳である。調査は、古墳の北側1/3のみ行った。直径約9m・高さ約1mを測る円墳である。調査の結果、主体部の検出には至らず調査地外に存在すると思われる。

(3) 10号墳

①墳丘(第122図、図版第81)

9号墳の北東に位置する古墳で、古墳の北側裾部のみ調査を行った。直径約9m・高さ約1mを測る円墳である。

付表8 天王山古墳群規模一覧表

遺跡名	墳形	墳丘規模 (m)	主体部	墓壇規模 (m)	出土遺物	備考・調査主体
A-3号墳	円墳	径9.5 高1.5	木棺直葬	2.2×0.4	須恵器・刀子・鉄鏃	平成8年度町教委
4号墳	円墳	径9 高1.2	木棺直葬	3.5×1.2	須恵器	平成8年度町教委
5号墳	円墳	径14 高1.4	木棺直葬	4.5×2.0	須恵器・土師器・鉄鏃 刀子	平成8年度府教委
13号墳	方墳	17×15 高2.3	箱式石棺	4.5×2.5	なし	経塚・平成8年度埋文
17号墳	円墳	径16		3.3×1.9	ガラス玉・管玉・勾玉	平成8年度埋文
18号墳	不明	半壊		3.2×1.1	なし	平成8年度埋文
19号墳	不明	半壊	箱式石棺	3.1×0.9	なし	経塚・平成8年度埋文
20号墳	方墳	10×7	箱式石棺	2.3×0.6	なし	平成8年度埋文
21号墳	方墳	10×6	箱式石棺	1.9×0.7	なし	平成8年度埋文

22号墳	円墳	半壊	流失		土師器	平成8年度町教委
23号墳	方墳	12×15 高1.5	箱式石棺	2.5×1.5	土師器	平成9年度埋文
25号墳	円墳	半壊	木棺直葬			平成9年度府教委
26号墳	円墳	径15 高2	流失	区画溝確認	須恵器	平成9年度埋文
27号墳	方墳	一辺24 高3.3	木棺直葬	3.4×0.8	土師器	平成9年度埋文
28号墳	円墳	径12	木棺直葬	3.0×1.0	須恵器	平成9年度埋文
B-1号墳	円墳	径18 高1.8	木棺直葬	5.4×1.9	須恵器・土師器・馬具	経塚
			木棺直葬	6.0×1.3	刀・鉄鏃・ガラス玉・勾玉	平成9年度埋文
2号墳	円墳	径10 高1	木棺直葬	3.5×1.7	須恵器・土師器・刀子	平成9年度埋文
3号墳	円墳	径12 高1.4	木棺直葬	2.9×0.9	須恵器	平成9年度埋文
4号墳	方墳	12×19 高1.2	木棺直葬	4.25×1.6	刀子	平成9年度埋文
8号墳	円墳	径10 高1.5	木棺直葬	2.5以上×1.0	鉄鏃・刀子	平成9年度埋文
9号墳	円墳	径9 高1	調査地外		なし	平成9年度埋文
10号墳	円墳	径9 高1	調査地外		土師器	平成9年度埋文

町教委：久美浜町教育委員会 府教委：京都府教育委員会 埋文：(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

②出土遺物

墳丘斜面から土師器片1点が出土したが、破片からその形態や時期についてはわからなかった。

B. 別荘古墳群

当初、調査対象となったのは別荘1・2号墳と台地平坦部約10,000m²の試掘調査であった。650m²の試掘調査結果を受けて、5,000m²の調査面積が確定し、調査を実施することとなった。

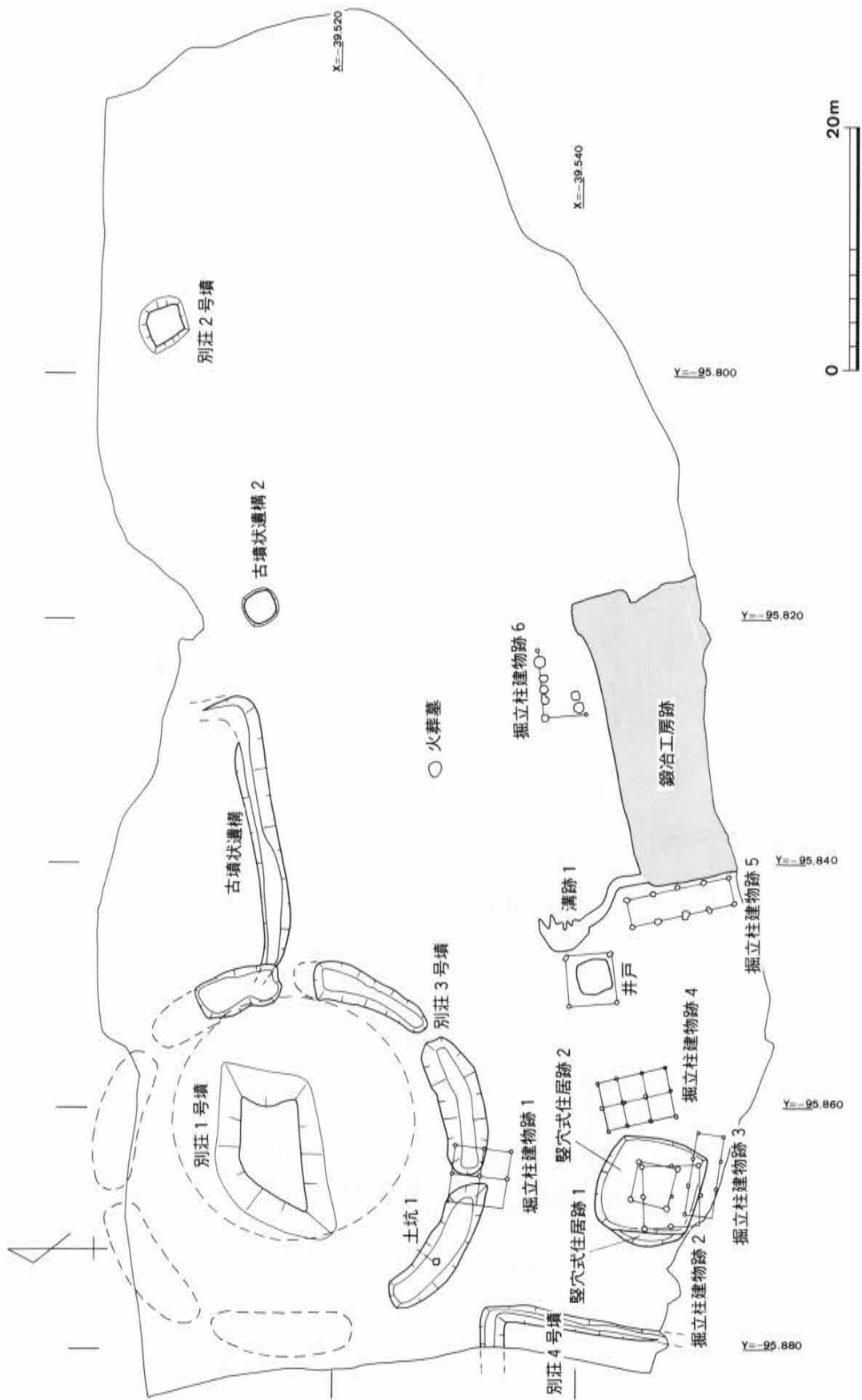
別荘古墳群では、1号墳南側であらたに墳丘部分が全壊した古墳2基が検出され(3・4号墳)、西側でも古墳状遺構2基を検出した。調査終了時点で別荘古墳群は、新たに検出した古墳2基を加えて、3基の古墳群(1・3・4号墳)と、1基の古墳状遺構(古墳状遺構1)、2基(2号墳・古墳状遺構2)の方形の段地形を検出した。方形の段地形については、五輪塔・石仏を安置していた段と考えられる。

(1) 1号墳

①墳丘(第123・127図、図版第82～84)

別荘遺跡のほぼ中央部に位置し、中世以降の土地利用に伴い、墳丘の約2/3が削平されており、残存する部分や遺物の出土状況から、本来は直径約20mの円墳と推定される。墳丘は、旧表土上に直接盛り土して築かれている。盛り土は、黒褐色粘質土と地山である黄褐色粘土の縞状堆積で突き固められており、約1mを確認した。墳丘の東、南側には3号墳の溝が残存するが、この1号墳の周溝とはならない。理由としては、築造時の旧表土と同じものがすでに周溝内の底近くに堆積しているのが認められ、1号墳築造時には3号墳の周溝はすでに埋まっていたことになり、1号墳に先行することが明らかである。天王山古墳群中で調査された6世紀の古墳では、あまり遺物がなく、この古墳と同様な築造状況・規模であったり、刀を保有していた古墳は、B支群1号墳のみである。刀を保有していた主体部が中心主体とすれば、これをもとに墳丘を復原すると直径約20mとなる。3号墳の復原径を31mにすると、大きくなりすぎ、また刀の出土位置が極端に偏ることからも、別のものと考えた方がよからう。

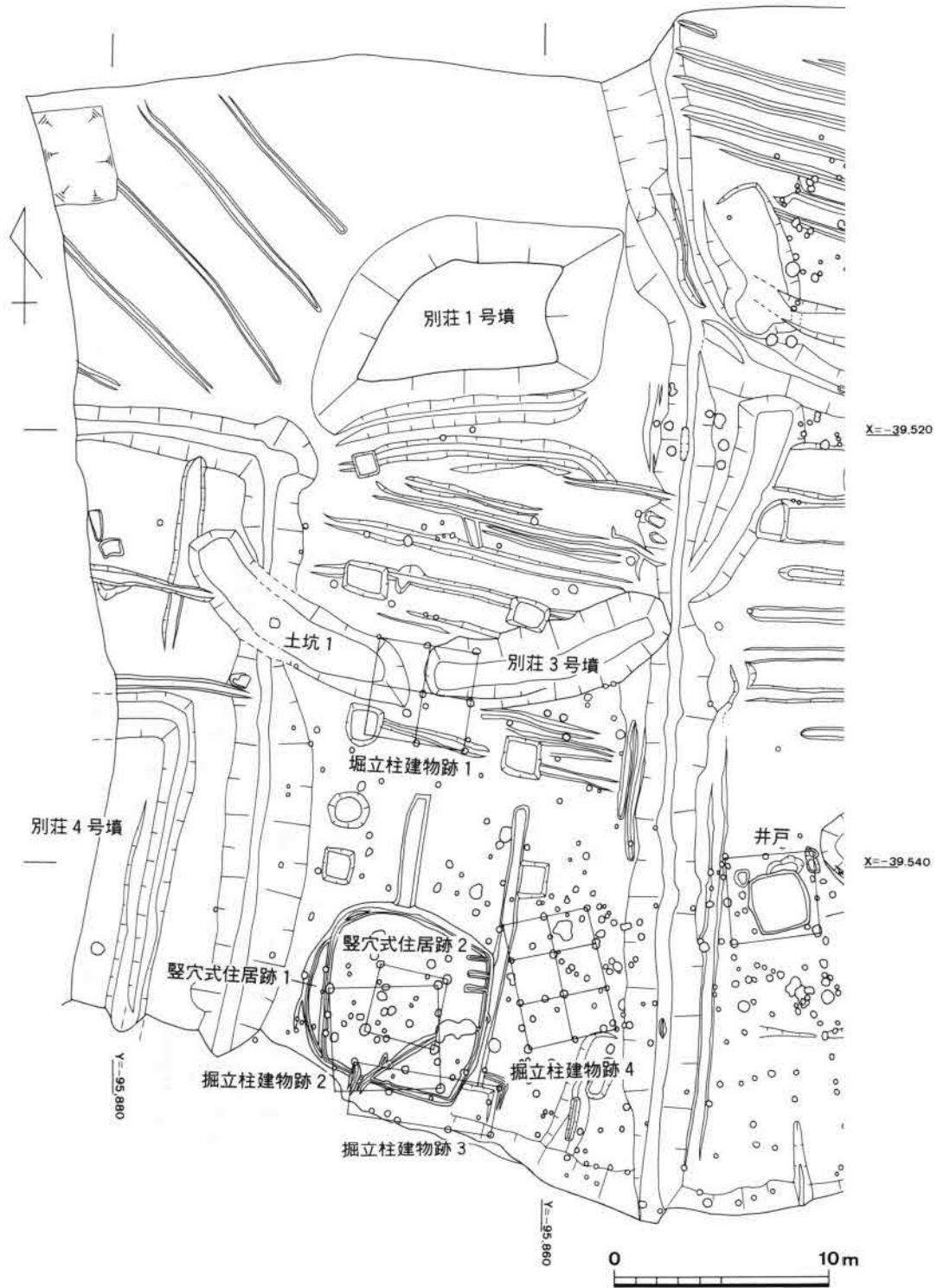
墳丘頂部の開墾を受けた部分から、須恵器杯蓋片が出土している。



第123図 別荘古墳群・別荘遺跡主要遺構配置図(1)

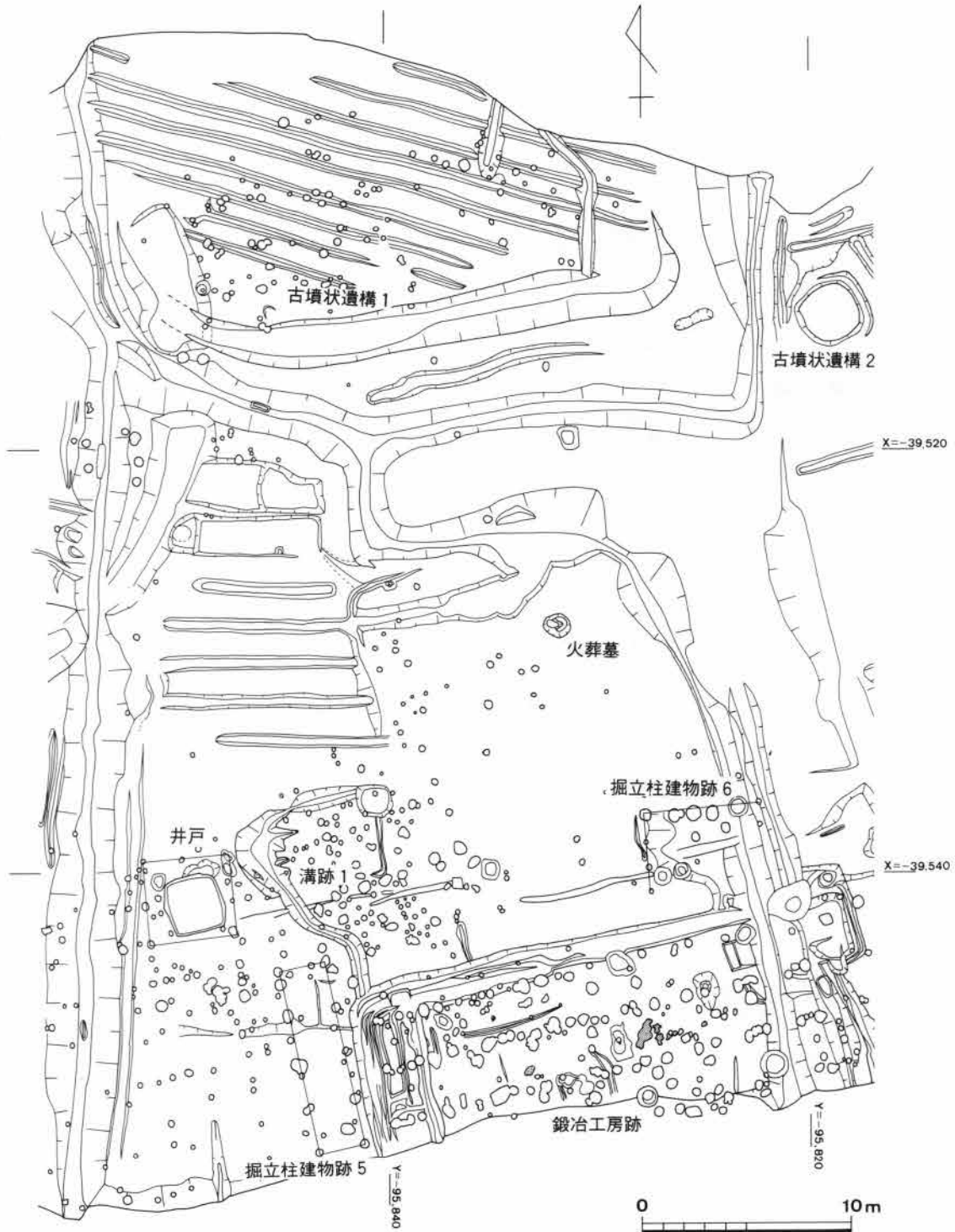
②埋葬施設

墳頂部全体が削平されているため、墓壙は検出されなかったが、かろうじて表土直下には木棺部底面近くが残存していた。そこから、切先を西に向けた直刀1、削平に伴い細片化した鉄鏃約4点・刀子2点、これらとともにばら撒かれたような状態でガラス玉60個が出土した。木棺部底



第124図 別荘古墳群・別荘遺跡遺構配置図(2)

面の復原規模は約3m×約0.8mを測る。直刀の方向は、N-68°-Wであり、墓塚の主軸もこれに近いと推定される。頭位は、直刀の出土状況から東枕と考えられる。墳頂部自体の削平は戦後に行われ、南辺側には経塚があったようで、外容器・経筒が出土したという伝えがあるが、遺物自体はすでに散逸し、所在不明となっている。

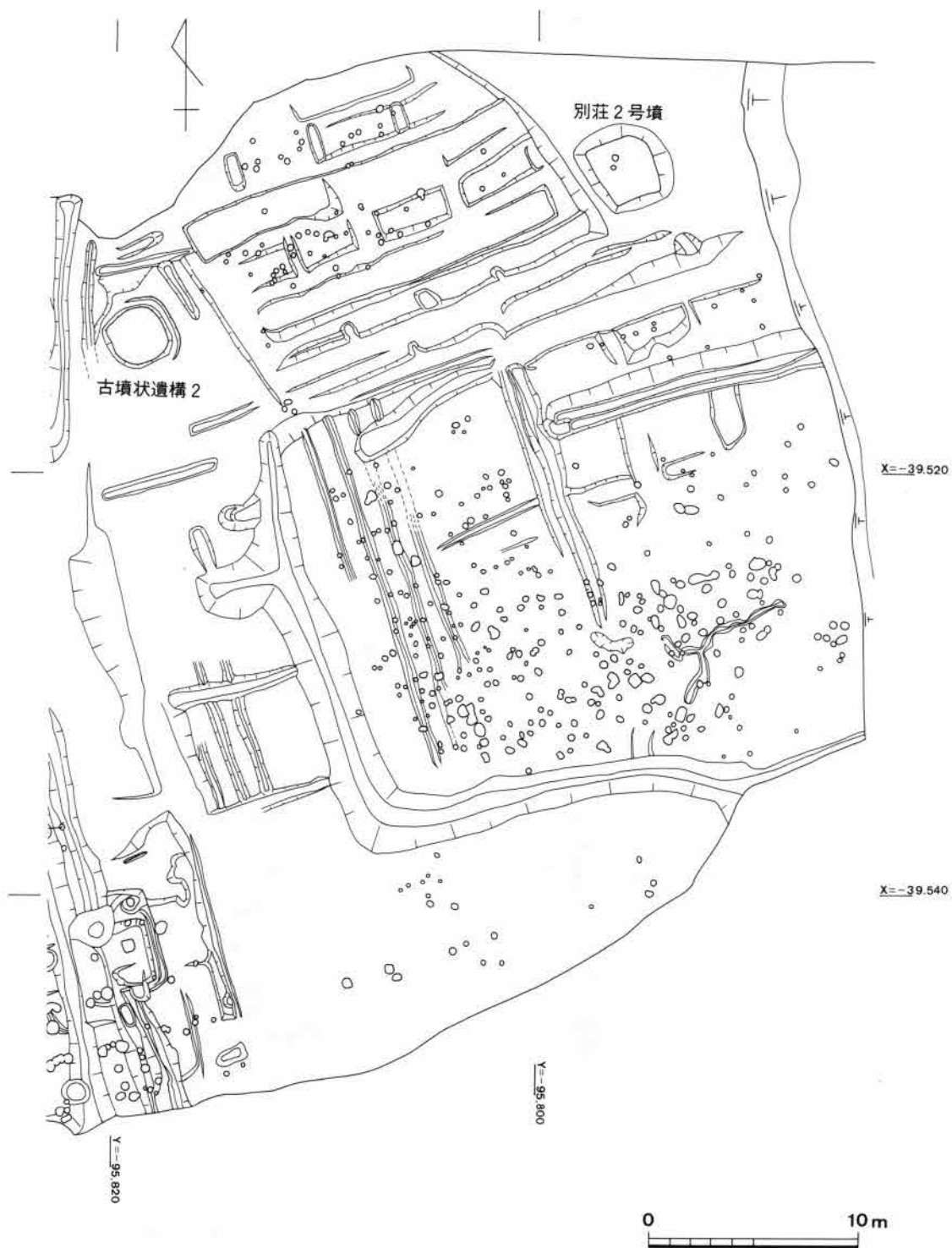


第125図 別荘古墳群・別荘遺跡遺構配置図(3)

③出土遺物(第128・129図、図版第104・105、附表9)

墳頂部から出土した遺物は、刀・刀子・鉄鎌・ガラス玉である。

直刀(130) 錆化及び根により劣化が著しい。全長96cm・刃部幅3.5cmを測る。関は片関である。刃部に鞘と思われる木質が残存する。



第126図 別荘古墳群・別荘遺跡遺構配置図(4)

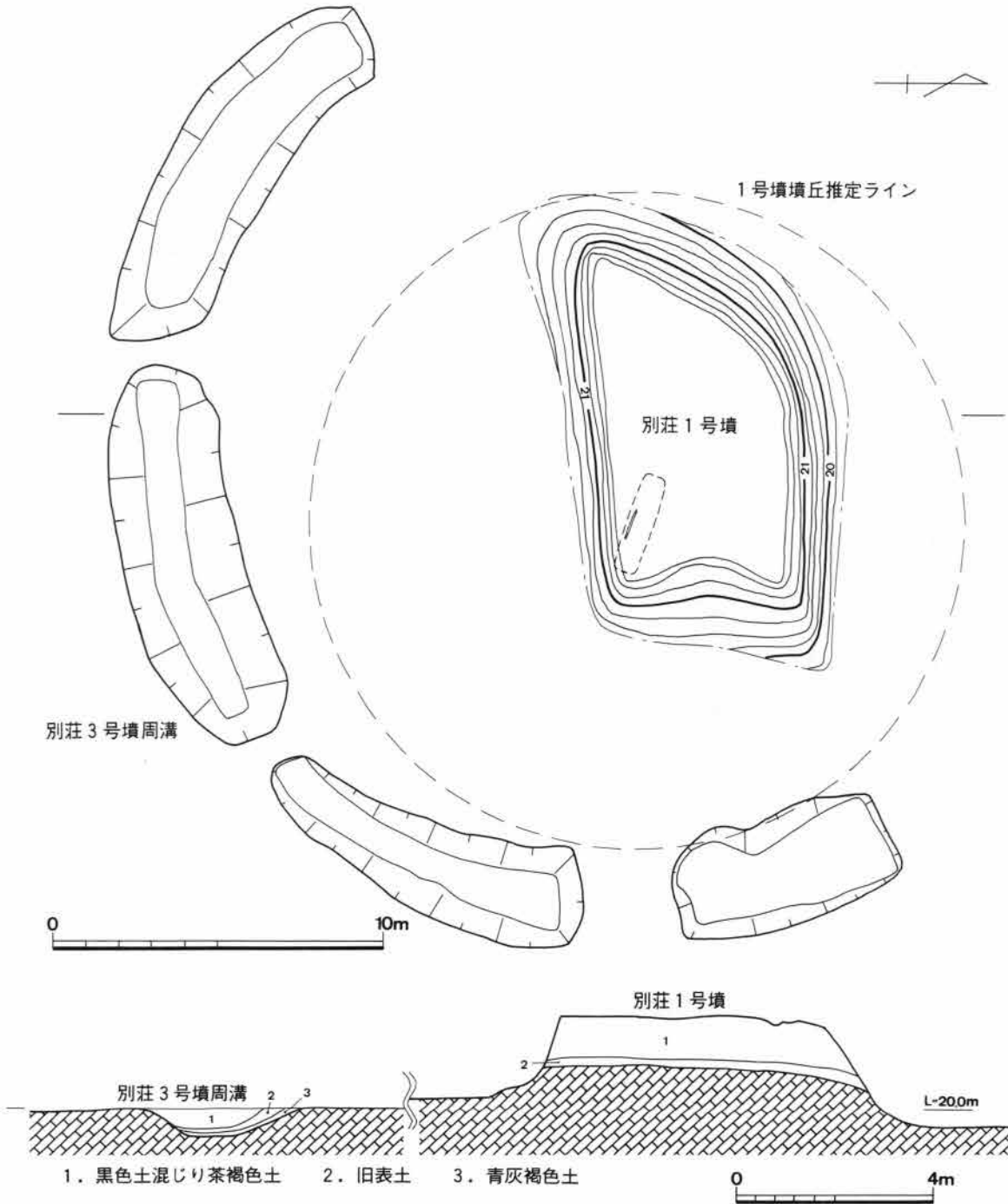
刀子(131・132) いずれも茎片である。131が残存長5cm、132が残存長3.8cmを測る。

鉄鍬(133~135) いずれも長頸鍬で、細片化して全長のわかるものはない。133は、鍬身断面形は片切刃造り、頸部関は台形関。134・135は関篋被で、134の鍬身部断面形は両丸造りである。

(2) 2号墳

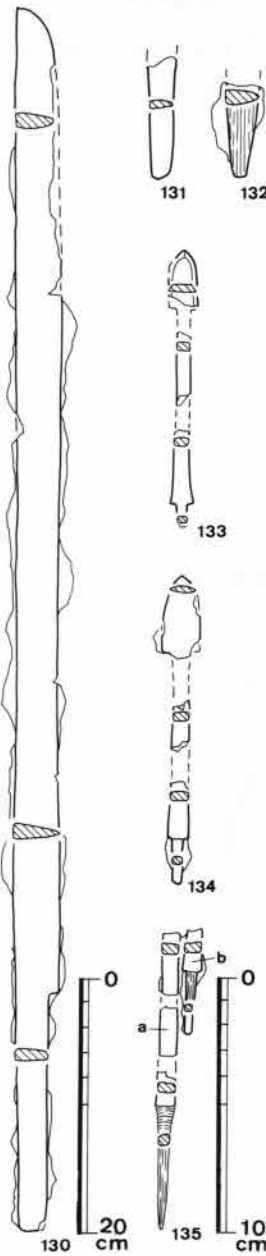
①墳丘(第123・130図、図版第85)

台地東端付近に位置し、一辺約2m・高さ約1mの方形壇状で、平坦部には石仏・一石五輪塔が約20個体置かれていた。これらは意識的に並べたのではなく、周辺にあったものを1か所に集



第127図 別荘1・3号墳測量図

付表9 別荘1号墳出土玉製品一覧表(mm)



第128図 別荘1号墳出土
遺物実測図(1)

番号	器種	長	幅	孔径	色調	番号	器種	長	幅	孔径	色調
136	ガラス玉	2.5	3.6	0.5	淡青色	166	ガラス玉	2.0	3.0	0.8	濃青色
137	〃	2.0	3.0	0.5	淡紺色	167	〃	2.5	3.8	0.5	濃紺色
138	〃	2.0	3.3	0.5	淡紺色	168	〃	2.8	3.5	0.5	淡紺色
139	〃	2.0	3.3	0.5	淡紺色	169	〃	2.8	3.8	0.5	濃青色
140	〃	2.0	3.0	0.5	淡青色	170	〃	3.5	4.0	0.5	淡青色
141	〃	2.0	3.5	0.5	淡紺色	171	〃	3.0	3.5	0.5	淡青色
142	〃	1.5	3.0	0.8	淡紺色	172	〃	2.5	3.0	0.5	濃紺色
143	〃	1.3	2.5	0.5	淡紺色	173	〃	2.8	3.8	0.5	淡紺色
144	〃	1.5	2.8	0.5	淡緑色	174	〃	2.5	3.5	0.5	濃青色
145	〃	2.0	3.0	0.5	淡紺色	175	〃	1.8	3.5	0.5	淡紺色
146	〃	2.3	3.8	0.5	濃紺色	176	〃	3.0	3.8	0.8	淡青色
147	〃	1.5	3.3	0.5	淡紺色	177	〃	2.8	4.3	0.8	淡紺色
148	〃	2.5	3.0	0.5	淡紺色	178	〃	1.5	3.0	0.8	淡紺色
149	〃	1.5	3.0	0.8	淡紺色	179	〃	1.5	3.0	0.5	淡紺色
150	〃	1.8	3.5	0.5	淡紺色	180	〃	2.8	3.5	0.5	淡紺色
151	〃	2.0	3.3	0.5	淡青色	181	〃	2.5	4.5	0.5	淡紺色
152	〃	1.8	3.0	0.5	淡紺色	182	〃	3.0	3.5	0.5	淡緑色
153	〃	2.0	3.3	0.5	淡紺色	183	〃	2.5	4.0	0.5	淡紺色
154	〃	2.0	3.0	0.5	淡紺色	184	〃	2.8	4.0	0.5	淡紺色
155	〃	2.5	2.5	0.5	淡青色	185	〃	2.5	4.0	0.5	濃紺色
156	〃	3.0	3.0	0.5	淡青色	186	〃	2.5	4.0	0.5	淡紺色
157	〃	2.5	3.5	0.5	濃青色	187	〃	1.5	3.3	0.5	濃紺色
158	〃	2.5	3.5	0.5	淡緑色	188	〃	3.3	3.8	0.5	淡青色
159	〃	1.5	3.0	0.5	淡紺色	189	〃	2.5	3.0	0.5	淡青色
160	〃	2.0	3.0	0.8	淡紺色	190	〃	2.0	3.5	0.8	淡紺色
161	〃	2.3	3.5	0.5	淡青色	191	〃	2.0	3.5	0.5	青緑色
162	〃	2.3	2.8	0.5	淡紺色	192	〃	2.5	3.0	0.5	淡紺色
163	〃	2.0	3.3	0.5	淡青色	193	〃	2.0	3.0	0.5	淡紺色
164	〃	2.5	3.0	0.5	淡青色	194	〃	1.5	3.0	0.5	淡紺色
165	〃	2.3	3.0	0.5	淡紺色	195	〃	3.5	4.0	0.8	淡青色

めたような状態であった。石仏・五輪塔を除去した後、精査したが、埋葬施設は存在しなかった。

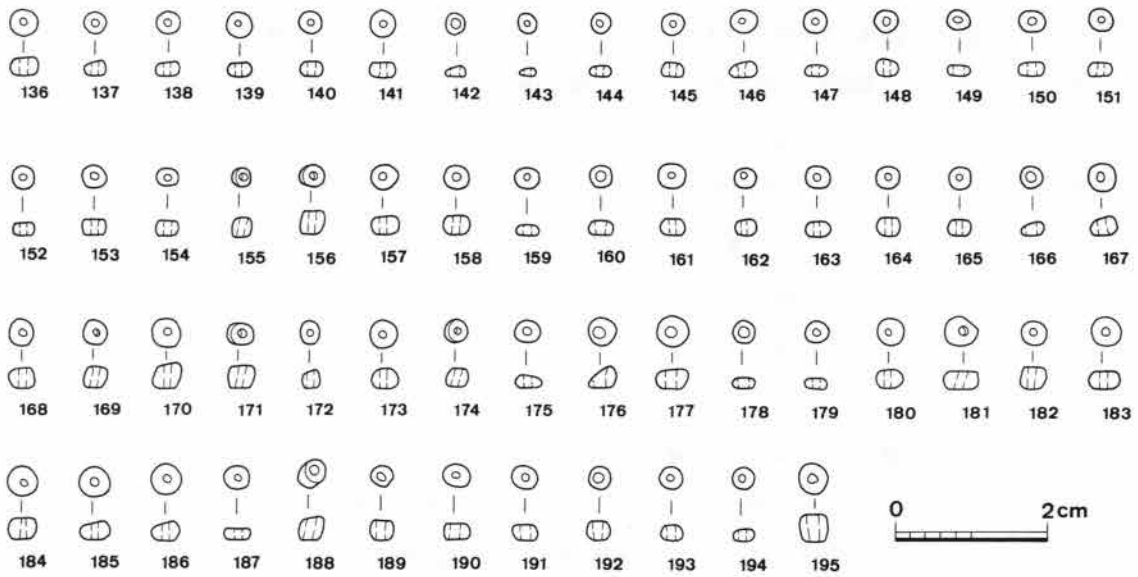
②出土遺物(第130図、図版第108)

平坦部から石仏体・一石五輪塔が集積した状況で確認した。部分的に破損したものや、熱を受け割れたものなどがあり、実際の個体数はこれよりも1.5倍ほどあったと考えられる。江戸時代中期以降のものと考えられる。

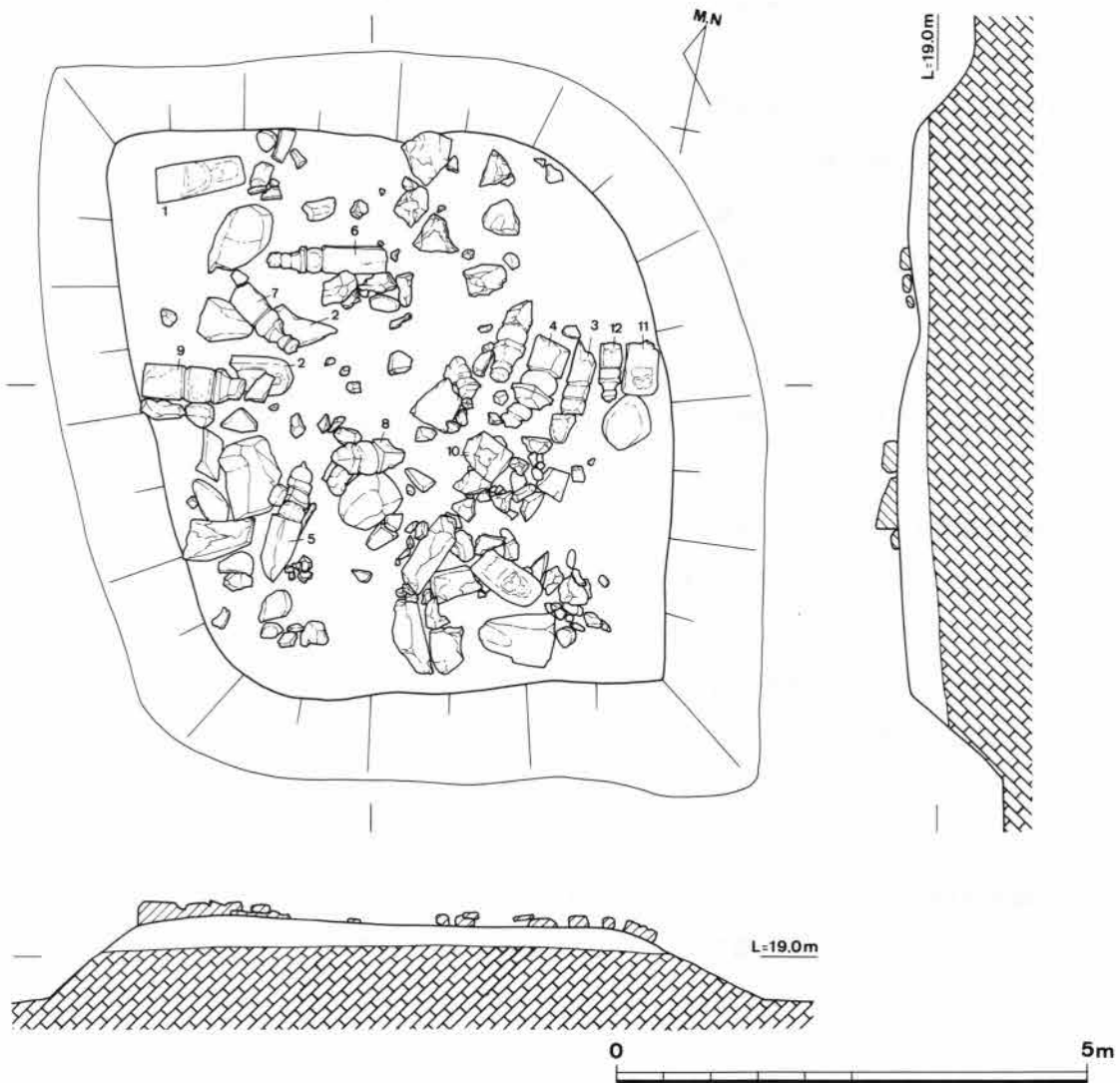
(3) 3号墳

①墳丘(第123・127図、図版第86・87)

1号墳周囲を取り囲むような状態で検出した周溝である。先述したように、1号墳築造時にはすでに旧表土面(黒褐色土)が溝内に形成されており、1号墳の溝とは考えられない。



第129図 別荘1号墳出土遺物実測図(2)



第130図 別荘2号墳実測図(番号は図版第108参照)

溝は、1/2北側部分を開墾により削平されるが、南半分は「C」字状に残存していた。溝は、幅約1mの陸橋状の区画で5分割されており、全周あったとすると7分割されていたことになる。1区画は長さ約12m・幅約3.5mを測る。深さは、東側が高く西側が低くゆるい傾斜地に設けられているため、地形に応じた深さとなっていたようである。上端は開墾により削平を受けるが、東側溝で検出面から約0.5m、南側溝で約0.9mの深さがある。いずれも排水施設がなく、断面観察では水が溜まっていたようで、最下層には青灰褐色の有機質を含む粘質土の堆積が認められた。その上層には1号墳の旧表土面(黒褐色土)が溝内に形成されていた。これから上層は、1号墳の築造に伴うと考えられる整地層、さらに中世の建物建設に伴う削平や整地の時の淡黒褐色粘質土の堆積が認められた。

残存する西端溝の観察をすると、北側に続く部分は同レベルにもかかわらず、溝が存在していないことからすると、この部分が古墳の入口に相当する可能性がある。溝内最下層からは遺物が出土しなかったため、時期は不明である。東側溝の中世の開墾に伴う堆積土中からは、須恵器短頸壺が出土している。

3号墳の中心が1号墳の南辺近くにあたるため、1号墳の盛り土を除去して精査を行ったが、埋葬施設は検出されなかった。

(4) 4号墳(第123・124図、図版第87)

竪穴式住居跡の西側で検出したもので、開墾を受けて墳丘部分は残存しない。古墳の周溝は、東側と北側の一部を「L」字状に確認した。検出面での溝幅約2m・深さ約0.45mを測る。周溝は、西側部分は試掘トレンチでは検出されなかったため、北側から南に向かって水が流れるようになっていたと考えられる。南側は、台地の斜面に入ってしまうため、南辺を除く「コ」字状の周溝であったと推定される。地形と周溝を観察すると一辺7m前後の方墳が想定できる。周溝内からは遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、3号墳と切り合っていないことから、同時期とも考えられる。

(5) 古墳状遺構1(第123・125図、図版第82)

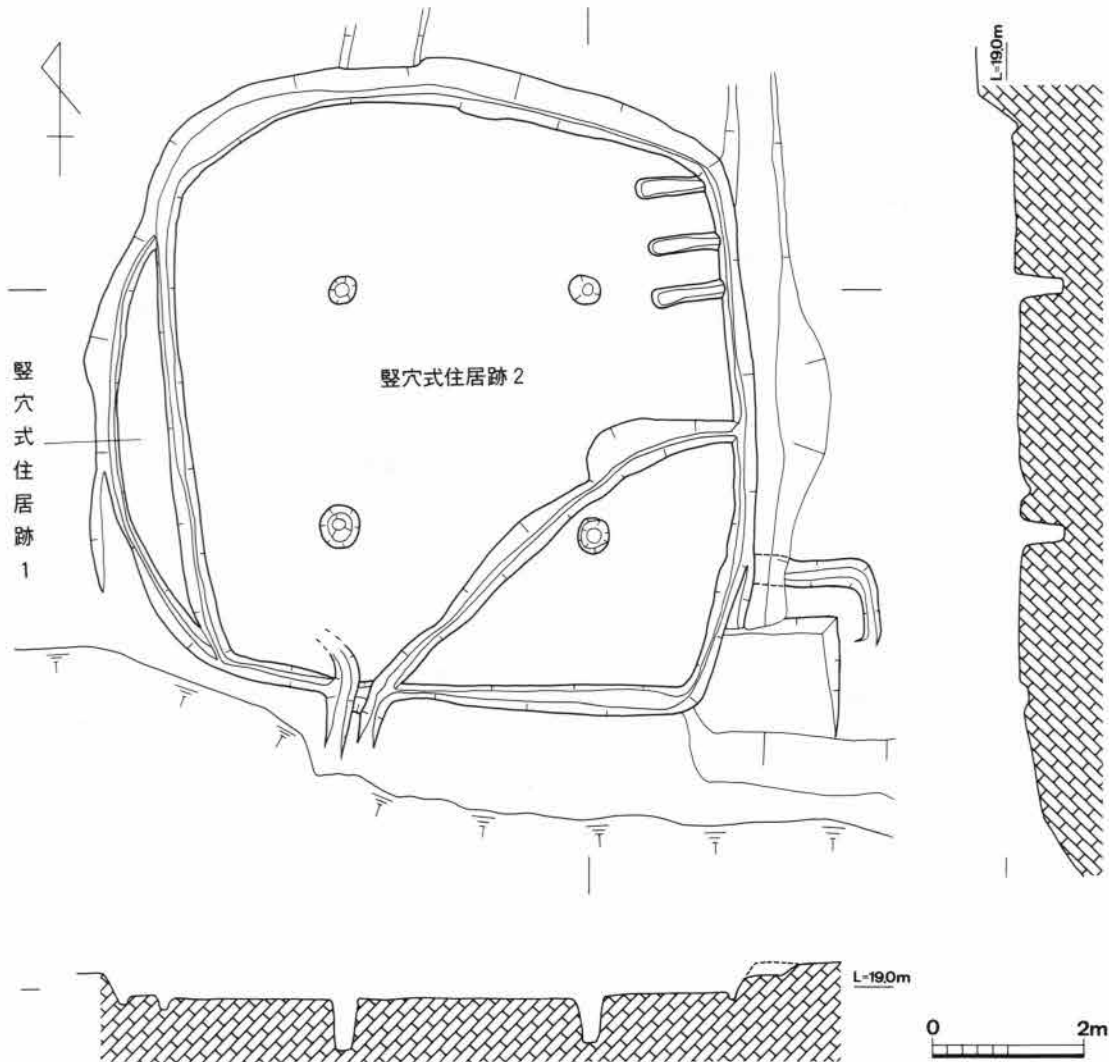
1号墳の東側で検出したもので、3号墳の周溝上に重なっており、3号墳よりあとに築造される。台地上に見られる東西南北方向の区画溝とは明らかに異なっており、4号墳の周溝の残存部を南北逆に置いたような形態を呈する。検出面での幅約2m・深さ約0.4mを測る。3号墳周溝と重なった部分が西側角と考えられるが、東側は地形が北下がりにより開墾されており、それによって消滅したと思われる。地形からすると大きくとも本来は一辺約30mの方墳であった可能性が推定できる。遺物が出土していないため時期は不明である。

(6) 古墳状遺構2(第123・125・126図、図版第82)

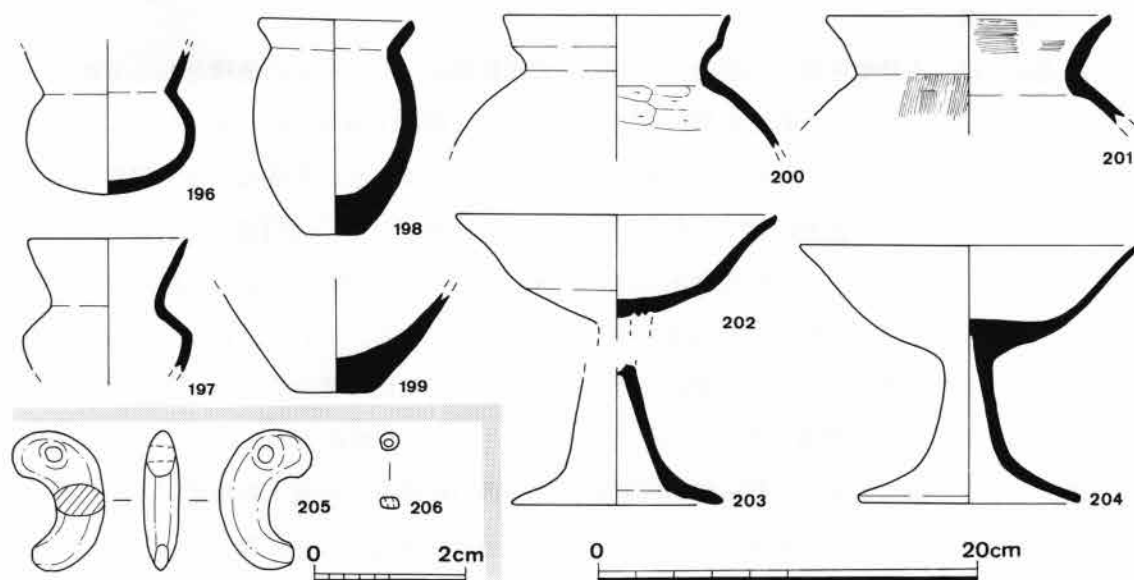
1・2号墳間から検出した遺構である。開墾や耕作に伴って削平されたため、非常に残りが悪い。わずかに窪む溝を方形に確認したので、古墳状遺構とした。しかし、溝からの規模は一辺約3mであり、2号墳の規模に近似することや、調査地北側斜面で五輪塔や石仏の散乱が認められることから、2号墳と同様、石仏や五輪塔などを安置する方形の段地形であった可能性もある。

C. 別荘遺跡

別荘遺跡では、1号墳南側で古墳時代中期の竪穴式住居跡2基、中世の遺構として平坦部中央より南側で掘立柱建物跡6棟以上や鍛冶工房を検出した。鍛冶工房内では、建て替えに伴う掘立柱建物跡8棟、鍛冶炉5基も検出した。鍛冶炉は削平を受けており、本体部分が一部残存するものは1基のみであった。最初に建てられたと考えられる建物跡には、入口部分に岩盤を削り出した階段が設けられていた。掘立柱建物跡には、大きく2つの方向がある。鍛冶工房内の掘立柱建物跡と同方向のものは平安時代末期～鎌倉時代初頭と考えられる。これと異なる方向の建物跡は、周辺から出土した遺物からすれば、鎌倉時代中頃の掘立柱建物跡と推定される。そのほか、土坑1基、火葬墓1基、溝状遺構1条、1,200を越える柱穴群などを検出した。これ以外に、竪穴式住居跡1・2の西側に南北にのびる畑の区画溝は、中世の段階では台地上の集落に入る道路であった可能性がある。ほかの区画溝に比べて深く、3号墳の周溝近くで急に細くなっている。3号墳の周溝内には土坑があり、周溝が埋まってから土坑を掘削したとすると、1.3m以上の深さとなり掘削不可能のはずで、道路のすぐ近くに土坑を設けていたと考えたい。



第131図 竪穴式住居跡1・2実測図



第132図 竪穴式住居跡1・2出土遺物実測図

遺物としては、これらの遺構に伴うもののほか、弥生時代後期から中世の陶磁器類にいたるまでの多くの遺物が出土した。鍛冶工房跡に伴う遺物としては、製作された可能性のある鉄器や鉄片、鍛冶滓、鍛造剥片・粒状滓がある。なお、鍛造剥片・粒状滓は鍛冶炉周辺の土砂を採集し、水洗し強力磁石によって磁着採集した。

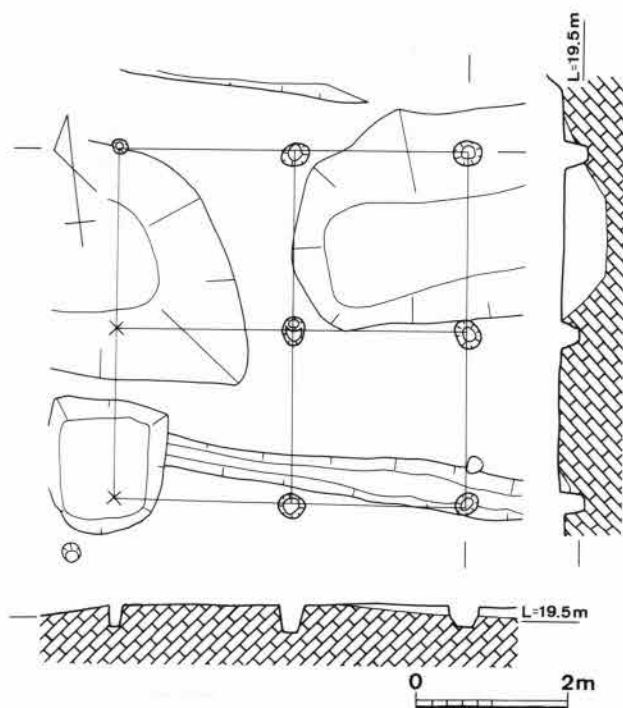
a. 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構としては、先述した3基の古墳及び古墳状遺構1基のほかに、調査地南端、4号墳の西側で同位置に重なり合った大型の竪穴式住居跡2基を検出した。顕著な遺構は検出され

なかったが、遺物は、東端の谷状地形の部分から柱穴に伴って多く出土した。

(1) 遺構の概要

竪穴式住居跡1・2(第131図、図版第82・83・88・96)を検出した。直径約7m・深さ約0.3mの円形の竪穴式住居跡(竪穴式住居跡1)を、一辺約7.5m・深さ約0.4mの隅丸方形の竪穴式住居(竪穴式住居跡2)に建て替えたものである。竪穴式住居跡1は、建て替えに伴って西側1/5が残存するにすぎない。住居跡床面からは、支柱穴4か所と周壁溝を検出した。支柱穴は、直径約0.5m・深さ約0.7mを測る。周壁溝は、壁に沿ってめぐり、幅約15cm・深さ約6cmを測る。

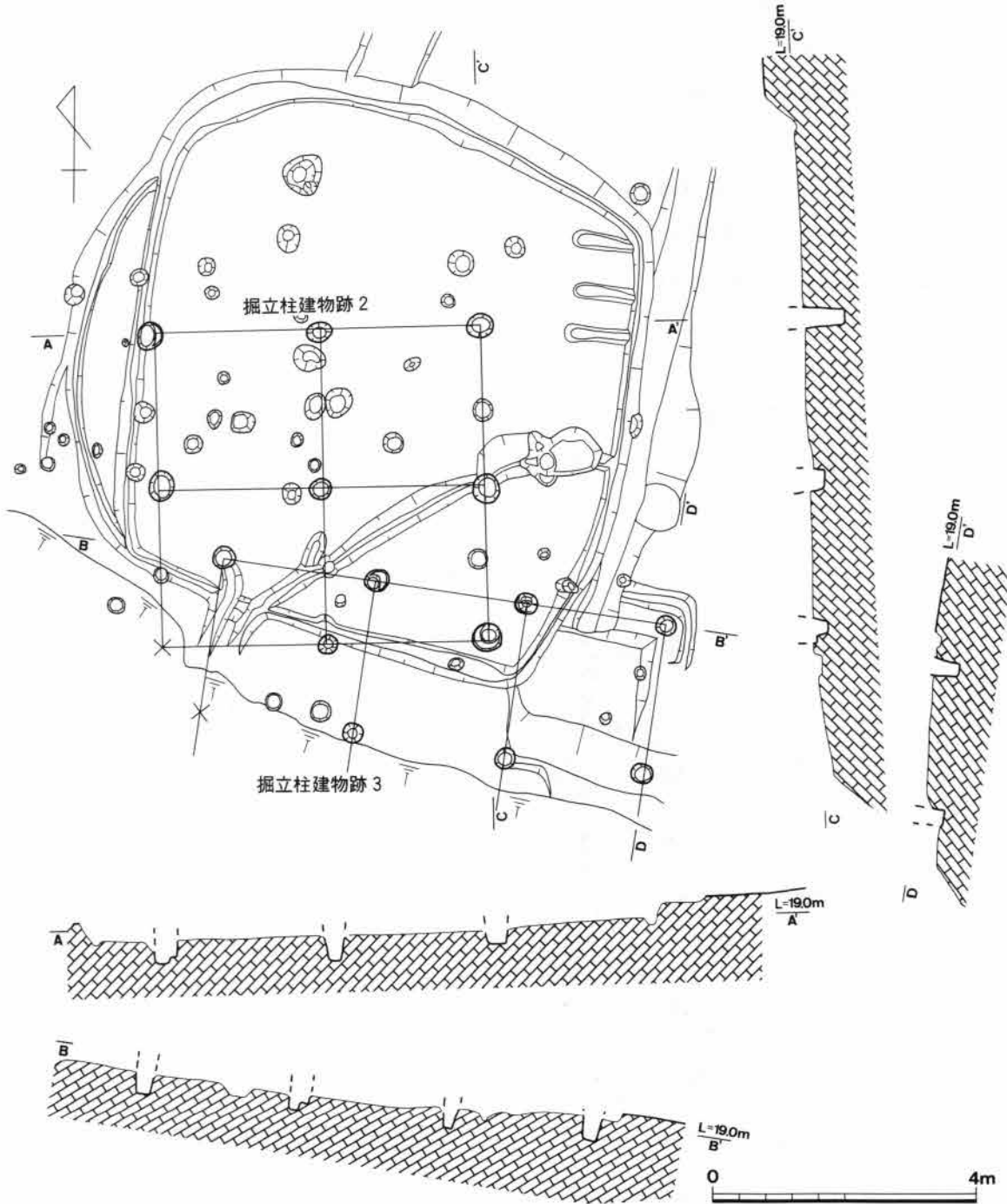


第133図 掘立柱建物跡1実測図

竪穴式住居跡1は、竪穴式住居跡2の建て替え時に床面を10cm下げて整地し直していたため、西側部分のみの検出となった。竪穴式住居跡2の周壁溝には、南辺中央部分で台地斜面側に排水するための溝が設けられている。住居跡床面中央部分よりやや南側で、焼土を検出したがよく焼け締まったものではない。住居跡南東角付近には、東側に約1.5m×約1.6mほど広がる削り出し部分がみられ、浅い柱穴2か所も検出した。入口に関する遺構の可能性も考えられる。

(2)出土遺物(第132図・図版第107)

遺物は、竪穴式住居跡2の床面北東角で土師器高杯、南西角で小型丸底壺がほぼ完形で出土し



第134図 掘立柱建物跡2・3実測図

た。その他、周壁溝内から土師器細片も出土している。

また、この住居跡からは、勾玉も出土している。なお、ここでは、古墳状隆起2付近から出土したガラス玉についても説明する。

小型丸底壺(196・197) 球状の体部と逆「ハ」字状に大きく開く口縁部からなる。軟質で器壁が磨滅していたため、調整は不明である。

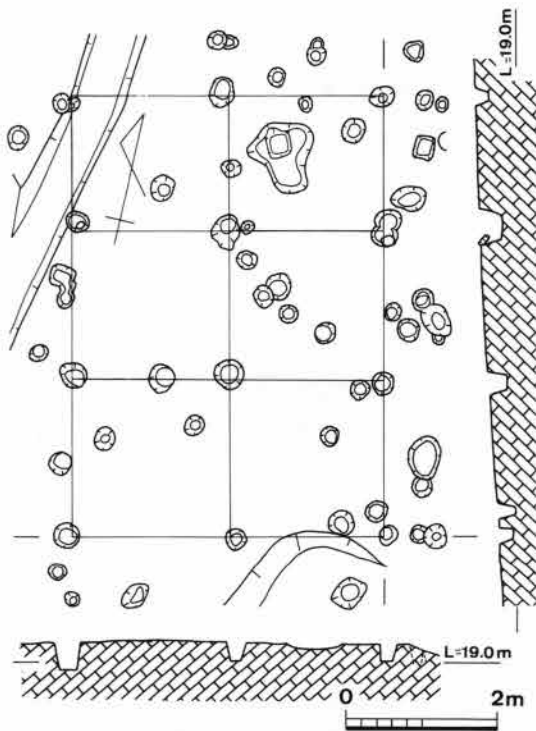
壺(198) 口径8cm・高さ11.4cmと非常に小型である。器壁は厚い。平坦な底部から内湾しながら上方に立ち上がり、口縁部で「く」字状に屈曲する。部分的に指押さえの痕跡が見られるが、調整は、器壁表面が剥離しているため、不明である。

甕(199~201) 球状の体部から外上方に立ち上がる口縁部からなる。体部外面に縦方向のハケ目が見られ、口縁部内面には横方向のハケ目が部分的に見られた。体部内面は横方向の削りを行っている。

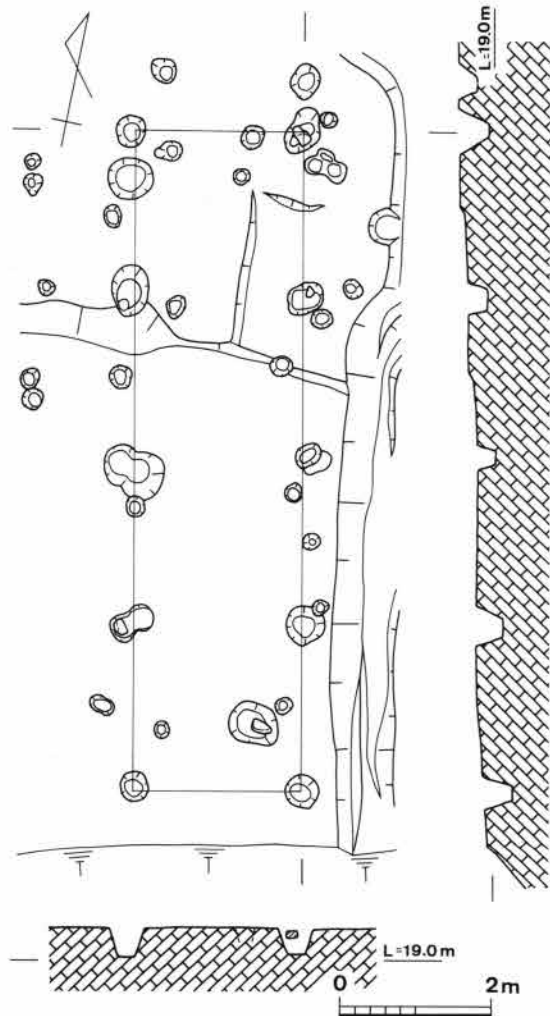
高杯(202~204) 平坦な底部縁から大きく外反して外上方に立ち上がる口縁部からなる杯部と、外下方に真っ直ぐ降り脚端部で大きく外側に屈曲して端部に至る脚部からなる。

勾玉(205) 住居跡の北側から出土した偏平な玉である。長さ1.8cm・幅0.6cm・厚さ0.4cmを測る。

ガラス玉(206) 古墳状隆起2付近から出土したもので、径0.25cm・長さ0.15cm・孔径0.1cmを測る。古墳を破壊した際に散乱したものの一部と考えられる。近接するものとして、古墳状遺構1がある。



第135図 掘立柱建物跡4 実測図



第136図 掘立柱建物跡5 実測図

b. 鎌倉時代の遺構

(1) 遺構の概要

遺構としては掘立柱建物跡・鍛冶工房・井戸・溝・土坑・火葬墓があり、いずれも鍛冶生産に関連した一連の遺構と考えられる。以下、遺構ごとに概要を記す。

① 掘立柱建物跡 1 (第133図・図版第86)

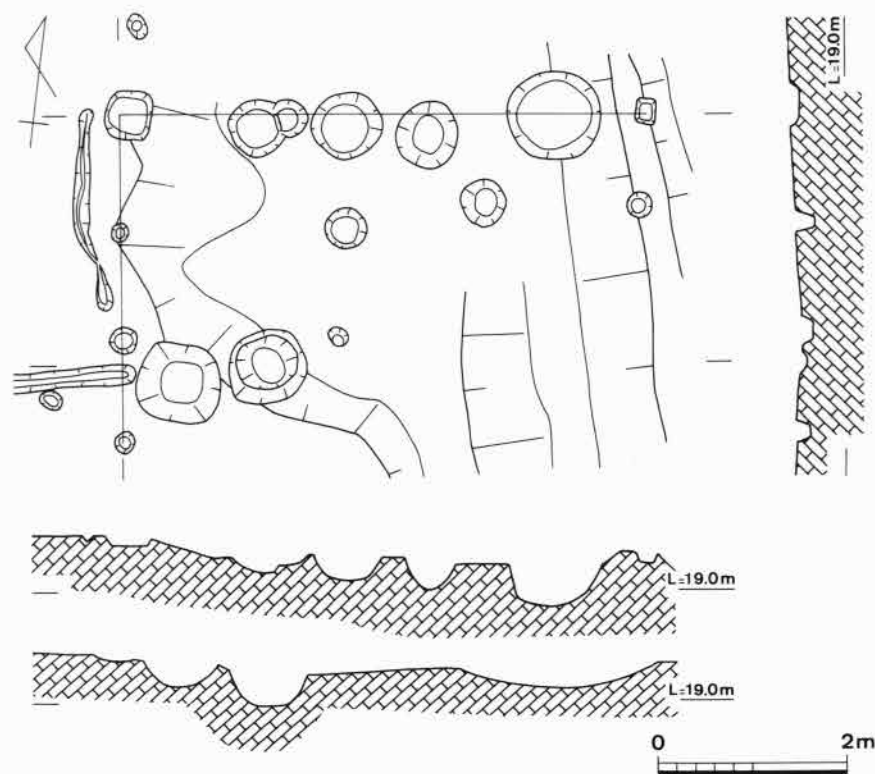
別荘3号墳の周溝と重複して検出された建物跡である。柱穴は、周溝埋土を掘り込んでおり、2間(約4.6m)×2間(約4.6m)の南北棟の総柱建物跡で、方位はN-8°-Eである。柱間寸法は約2.3m、掘形は直径0.25~0.4mの円形あるいは隅丸長方形を呈し、遺構検出面からの深さは約0.35mを測る。

② 掘立柱建物跡 2 (第134図、図版第88・94)

竪穴式住居跡に重複する形で検出した建物跡である。鎌倉時代の土器片が出土していることから、この時期の建物跡と考えられる。確認規模は、2間(約4.8m)×2間(約5.0m)を測る、東西棟の総柱建物跡で、方位はN-2°-Wである。柱間寸法は約2.4m・約2.5mを測る。柱の掘形は、直径0.30~45m・深さ約0.3mを測る。掘立柱建物跡4と同方向に建てられている。

③ 掘立柱建物跡 3 (第134図、図版第88・94)

竪穴式住居跡の南側で検出した建物跡である。鎌倉時代の土器片が出土していることから、この時期の建物跡と考えられる。確認した規模は1間(約2.3m)×3間(約6.8m)を測る。東西棟の総柱建物跡で、方位はN-8°-Eである。南側は、後世の開墾によって削平されていることから、2間以上の建物跡であったと思われる。柱間寸法は、桁行が西から約2.35m・約2.35m・約



第137図 掘立柱建物跡6 実測図

2.1m、梁間が約2.3mを測り、柱穴は、直径0.3~0.4m・深さ約0.3mを測る。建物跡の方向は、掘立柱建物跡1と同じであり、同時期の可能性がある。建物跡北東角の「L」字に屈曲する溝は、竪穴式住居跡に伴うもので、この建物をめぐる溝ではない。

④掘立柱建物跡4 (第135図)

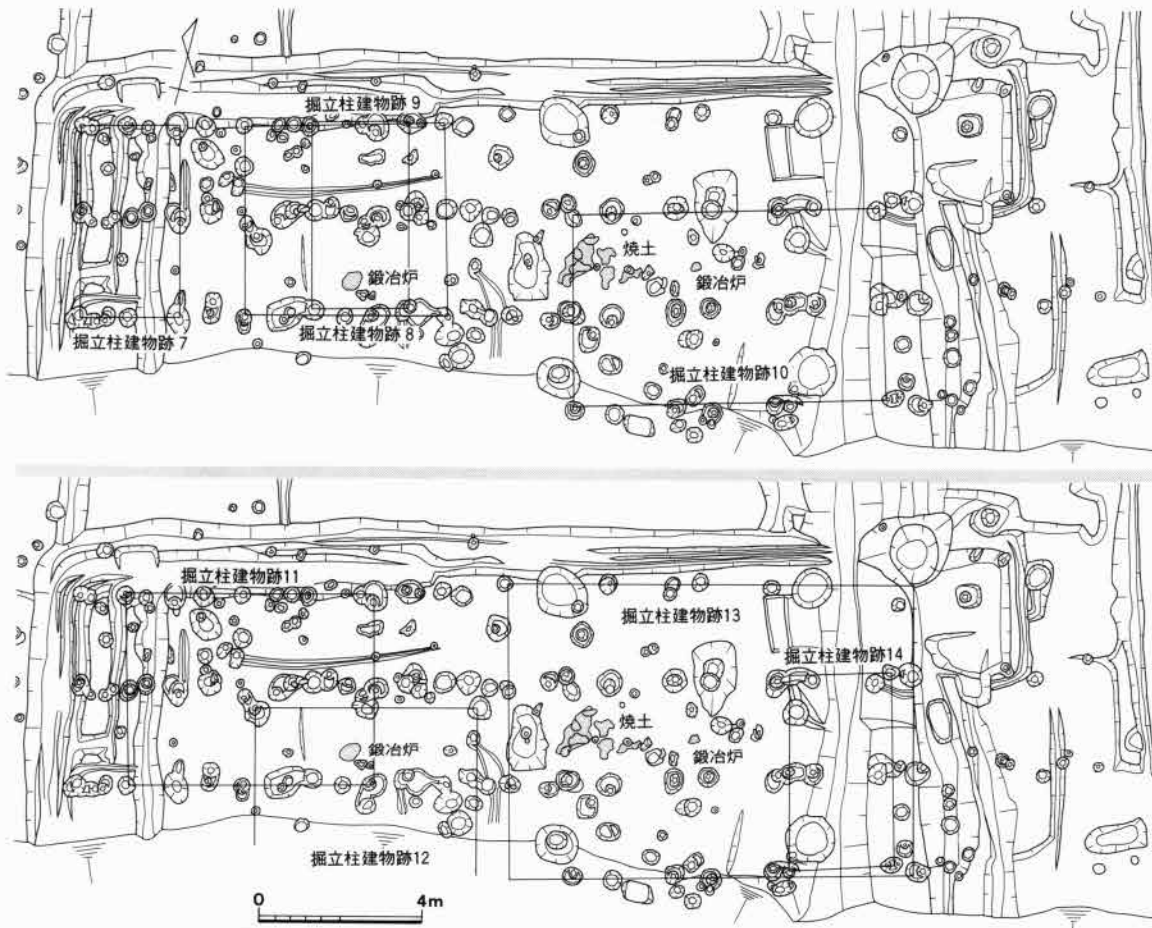
竪穴式住居跡東側で検出した南北棟の総柱建物跡で、方位はN-13°-Wである。2間(約4.1m)×3間(約5.8m)を測る。柱間寸法は、桁行が北から約1.8m・約2.0m・約2.0m、梁間が西から約2.1m・約2.0mを測り、掘形は直径0.25~0.4m・深さ約0.35mを測る。

⑤掘立柱建物跡5 (第136図・図版第94)

鍛冶工房跡西側に隣接した形で建つ。1間(約2.2m)×4間(約8.6m)の南北棟建物跡で、方位はN-12°-Wである。柱間寸法は、桁行が約2.2m・約2.1m・約2.2m・約2.1mを測る。掘形は、直径0.4~0.5mの円形を呈し、遺構検出面からの深さ約0.4mを測る。建物跡は、鍛冶工房内の建物跡と同方向である。

⑥掘立柱建物跡6 (第137図・図版第93)

鍛冶工房跡北側から検出した東西棟の建物跡で、鍛冶工房に平行する。1間(約3.4m)×1間(約5.6m)を測り、南東角の柱穴は削平のため検出されなかった。方位はN-7°-Wである。西側の柱穴は、岩盤を掘り抜いており、掘形は直径0.25~0.6mの円形あるいは方形を呈し、遺構



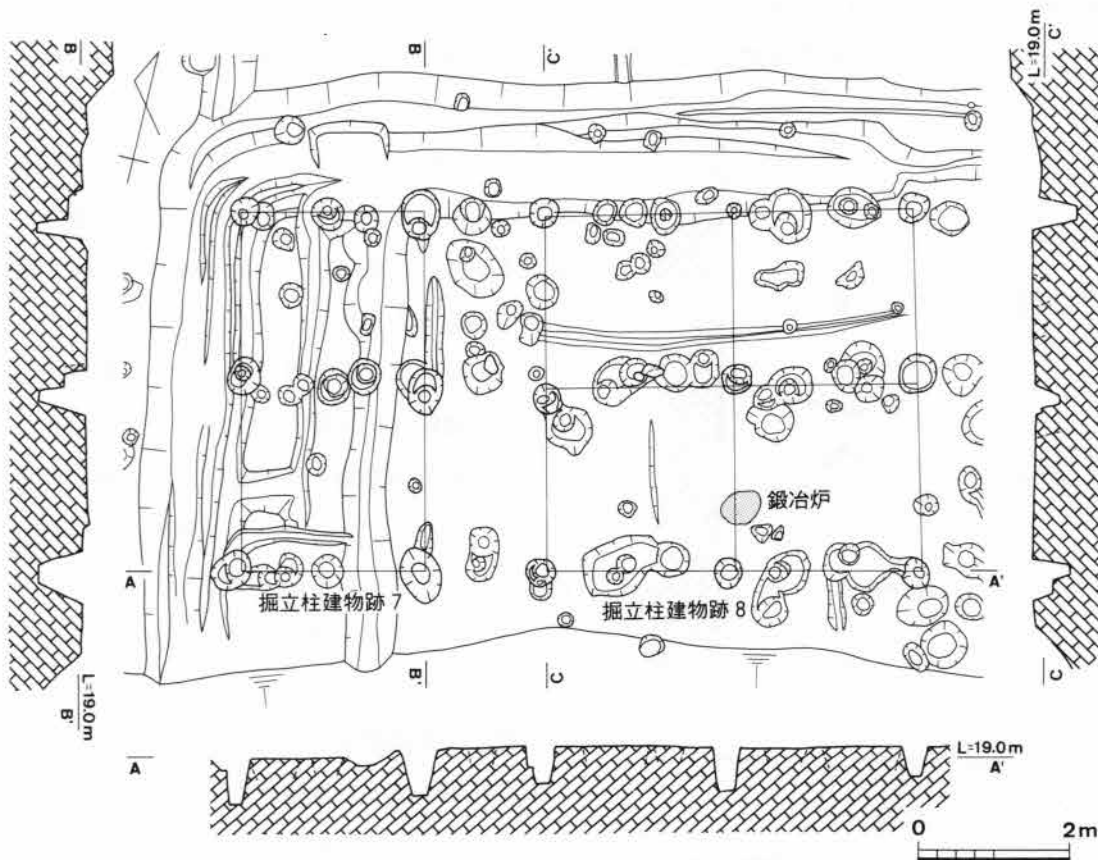
第138図 鍛冶工房跡内遺構配置図

検出面からの深さ0.2~0.4mを測る。内部には、断面が逆台形状を呈した直径0.55~0.98m・深さ0.16~0.4mの穴が6か所認められた。大甕を掘り据えた貯蔵庫などの施設の覆い屋と考えられる。

⑦鍛冶工房跡(第138~145図、図版第83・89)

平坦部南端で見つかった遺構で、建物を建てる範囲の岩盤を一段掘り窪めて整地し、建物と掘り窪めた間には排水溝を設けていた。排水溝は、工房棟・倉庫棟の建て替えに伴い、埋め戻し・新設が行われたようで、削り出し長辺北側では2~3条認められるが、西側では4条ほどの溝が切り合う。このことは、当初の整地面から北・西方へ拡張されたための遺構の重複である。南北の区画は大きく初期のものと拡張後の2回の痕跡を確認した。

柱穴は、約210を検出したが、近接していることや、南側が開墾によって削平され存在しないことから、建物の規模が大きくなる可能性がある。溝と柱穴の数や位置関係から、工房棟や倉庫棟と考えられる約8棟の建物跡が重複して検出された。工房棟の規模は平均2間×3間または2間×4間、倉庫棟は1間×2間と考えられる。工房棟の柱穴は平均約60cmと深く、根石や柱を固定する石材が確認された柱穴が多い。柱穴が深いのは、火を使うため必然的に天井の高い建物が要求され、建物の安定をはかる上で深い柱穴となったと思われる。この内の幾つかの柱穴内からは、鍛冶滓・鞆羽口・鉄器が出土し、建物跡の床面には焼土が認められた。また、焼土周辺の炭混じり土からは粒状滓や鍛造剥片が出土しており、焼土は鍛冶炉と考えられ、この建物跡は製品



第139図 掘立柱建物跡7・8実測図

を製作する小鍛冶段階の作業を行った工房跡と推察される。初期の掘削面では、東側が入り口となっていたようで、岩盤を削り出した階段も検出した。

柱穴出土の土器には時期差が認められないことから、わずかな溝の屈曲や建物跡の北辺の位置関係などから、掘立柱建物跡9・13→掘立柱建物跡12・14→掘立柱建物跡10・11→掘立柱建物跡7・8へと、4回ほどの建て替えが行われたと推定される。このように、柱穴の切り合い関係もそれほど確認していないことから、同一工人が比較的短期間に建て替えたと考える。

台地南端に鍛冶工房が設けられ、狭い範囲の中で建て替えられているのは、日本海からの北風を直接受けるのを避けるための工夫とも思える。

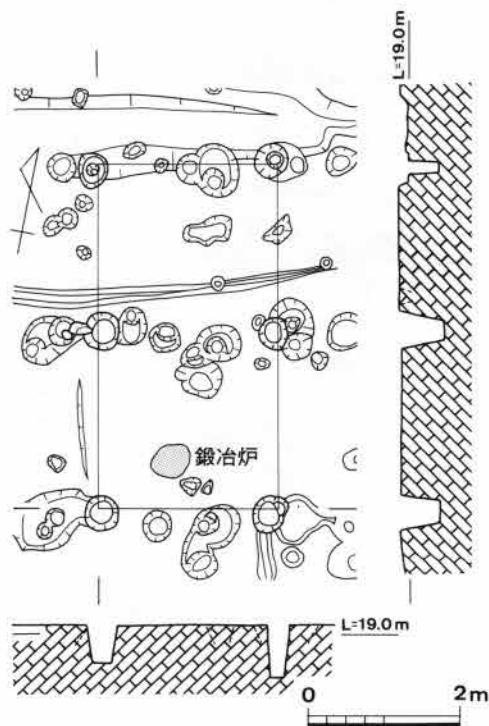
⑧掘立柱建物跡7(第139図・図版第89)

工房跡西端から検出した1間(約2.4m)×2間(約4.7m)の南北方向に長い建物跡である。建物跡の南側が後世に開墾・削平されているため、2間以上の建物跡になる可能性もある。方位はN-4°-Wである。柱間寸法は、桁行約2.2m・約2.5mを測る。掘形は、直径0.35~0.7mの円形あるいは隅丸長方形を呈し、遺構検出面からの深さ約0.6mを測る。この建物跡内からは、焼土や粒状滓・鍛造剥片などは認められなかったことから、資材や原料などの置き場として建てられたと思われる。南北方向の溝を跨ぐ形で築かれていることから、工房跡拡幅後の建物跡で、工房内の建物跡の中では最も新しいものと思われる。

⑨掘立柱建物跡8(第139図、図版第89)

掘立柱建物跡7の東隣りで検出した。2間(約4.8m)×2間(約4.8m)を測る。方位はN-4°-Wである。柱間寸法は、桁行が約2.4m、梁間が2.4mを測り、掘形は直径0.2~0.5mの円形ある

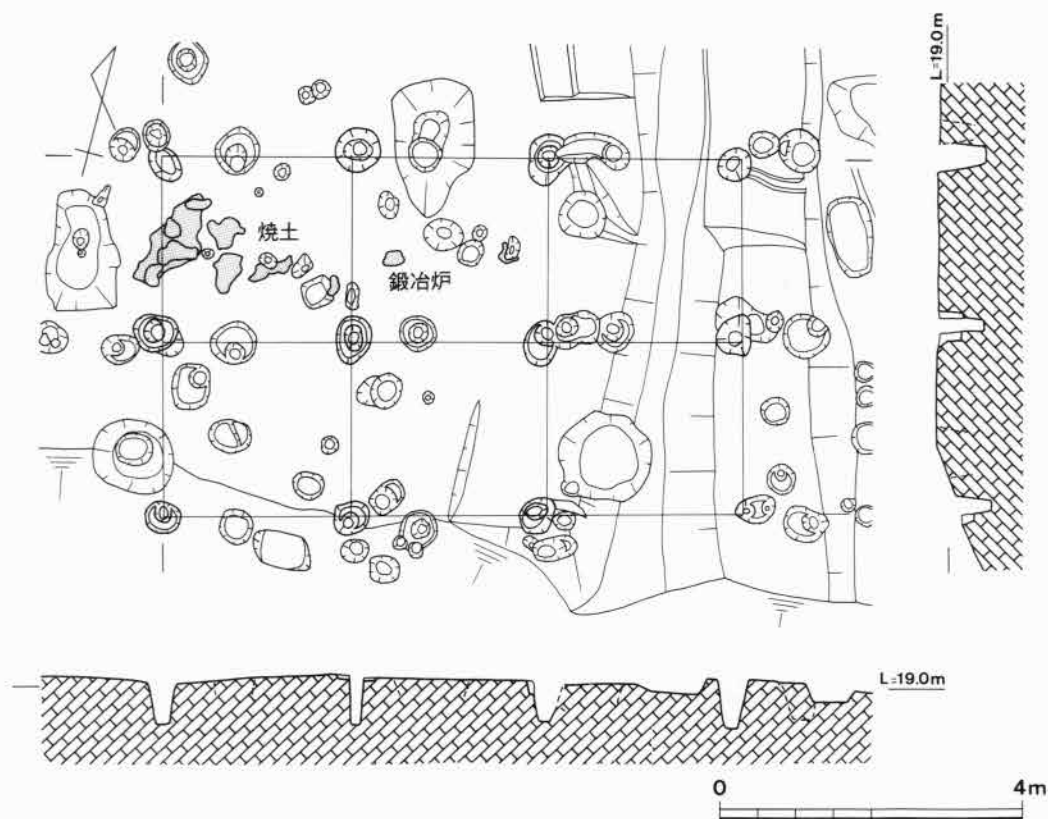
いは隅丸長方形を呈し、遺構検出面からの深さは約0.6mを測る。建物跡の南側が後世に削平されているため、2間以上の建物跡になる可能性もある。建物跡の南側中央から約60cm×約45cmを測る平面楕円形の赤色焼土が認められた。焼土の周辺からは、粒状滓や鍛造剥片が出土し、鍛冶炉と断定し、建物跡は炉を覆う施設と考えられた。しかし、この鍛冶炉を囲む建物跡は、他に掘立柱建物跡11・12もあることから、どの建物が覆いとして使用されたかについては不明である。柱穴内からは、平安時代末期~鎌倉時代初頭の土師器皿が出土している。



第140図 掘立柱建物跡9実測図

⑩掘立柱建物跡9(第140図、図版第89)

掘立柱建物跡8と重複する形で見つかった、1間(約2.4m)×2間(約4.5m)の南北棟建物跡である。方位はN-11°-Wである。柱間寸法は、桁



第141図 掘立柱建物跡10実測図

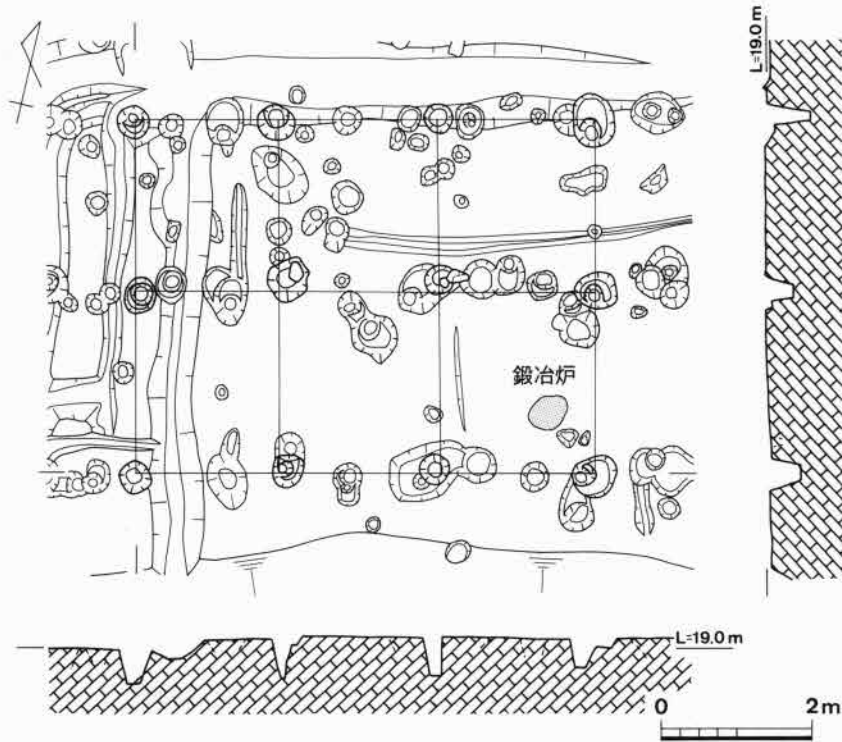
行が北から約2.2m・2.3mを測る。掘形は、直径0.3～0.4mの円形あるいは隅丸長方形を呈し、遺構検出面からの深さ0.5～0.7mを測る。掘立柱建物跡7と同規模であることから、資材置き場であったと思われる。掘立柱建物跡9の西方約3mには南北方向の溝が存在することから、工房跡拡幅前の建物と推測される。したがって、拡幅工事に伴って、掘立柱建物跡9→掘立柱建物跡7へと建て替えられたと考える。

①掘立柱建物跡10(第141図・図版第89)

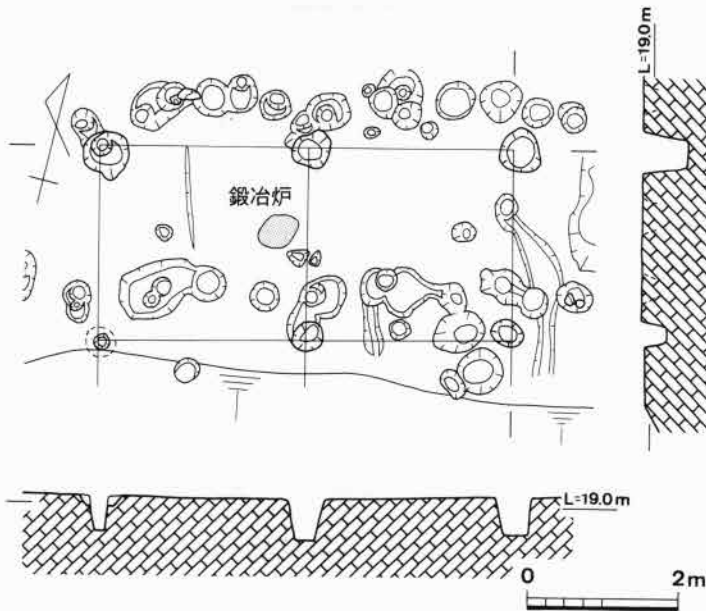
工房跡東側から検出した東西棟の建物跡で、規模は2間(約4.75m)×3間(約7.65m)を測る。方位はN-15°-Wである。柱間寸法は、桁行が西から約2.5m・約2.6m・約2.55m、梁間が北から約2.45m・約2.3mを測る。掘形は、直径0.4～0.6mの円形あるいは隅丸長方形を呈し、遺構検出面からの深さ0.45～0.6mを測る。建物跡の南側は、後世削平されていることから、2間以上であったかもしれない。建物跡の東側の南北方向の溝は、後世に掘られたもので、工房跡をめぐる溝ではない。

②掘立柱建物跡11(第142図・図版第89)

工房跡西側で検出した建物跡で、建物跡の西側には跨ぐ形で拡幅前の排水溝が南北にめぐる。建物跡の規模は、2間(約4.7m)×3間(約6.1m)である。方位はN-12.5°-Wである。柱間寸法は、桁行が西から約1.9m・約2.15m・約2.05m、梁間が北から約2.25m・約2.4mを測る。掘形は、直径0.4～0.5mの円形あるいは隅丸長方形を呈し、遺構検出面からの深さ0.4～0.5mを測



第142図 掘立柱建物跡11実測図



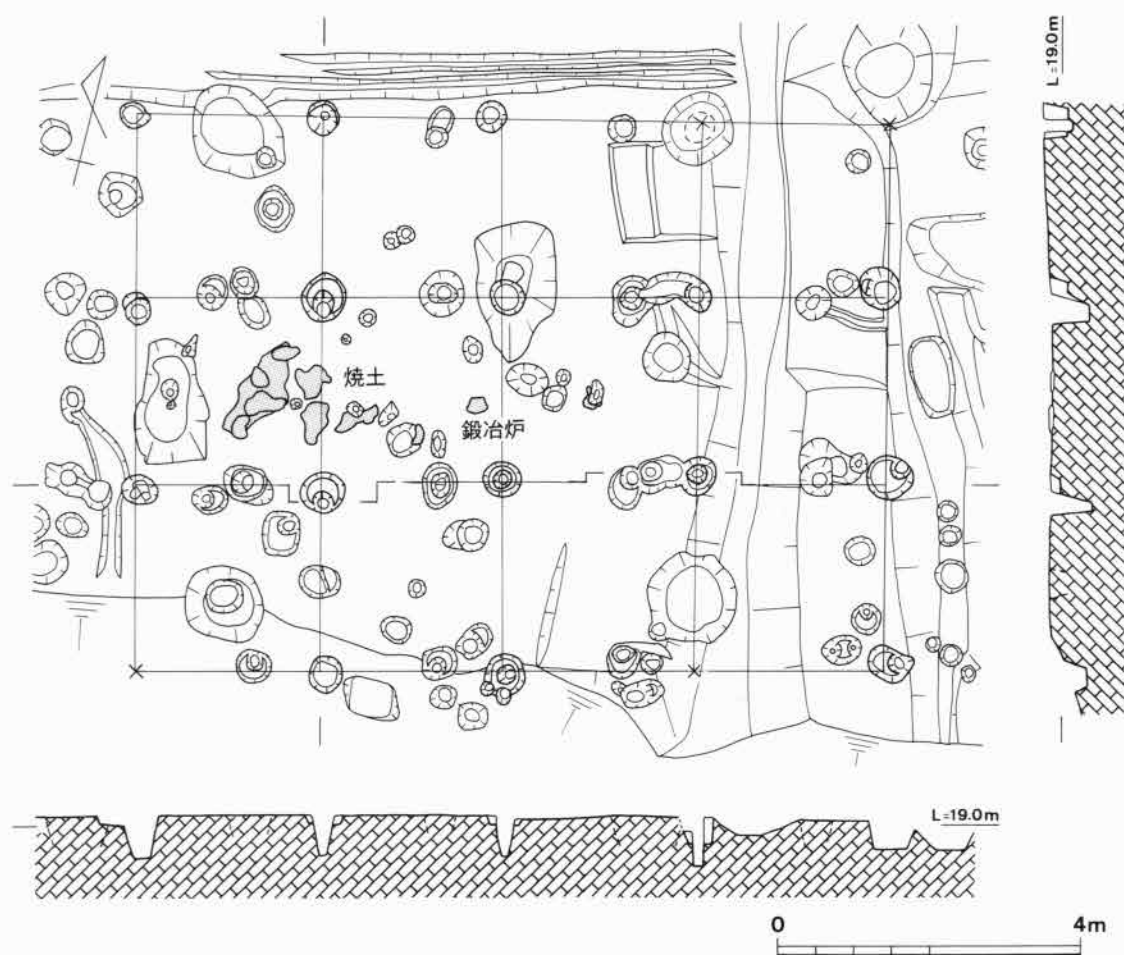
第143図 掘立柱建物跡12実測図

る。柱穴内に石を入れて柱を固定したり、柱が沈まないように柱穴底に根石を入れるなど、建物跡の中では最も強固に建てられていたようである。建物跡の南東角で鍛冶炉1基を検出した。鍛冶炉については、掘立柱建物跡8で記している。

⑬掘立柱建物跡12(第143図・図版第89)

掘立柱建物跡11と13の間、11に重複する形で検出した建物跡である。確認規模は、1間(約2.5

m)×2間(約5.5m)であるが、建物跡の南側の削平を考えると、2間以上の建物であったと思われる。方位はN-14°-Wである。柱間寸法は、桁行が西から約2.8m・約2.7mを測る。掘形は、直径0.4~0.6mの円形あるいは隅丸長方形を呈し、遺構検出面からの深さ0.4~0.5mを測る。建物跡内には鍛冶炉が存在するが、掘立柱建物跡11の柱穴と比較すると、根石などは認められず、わずかであるが深さに差があった。



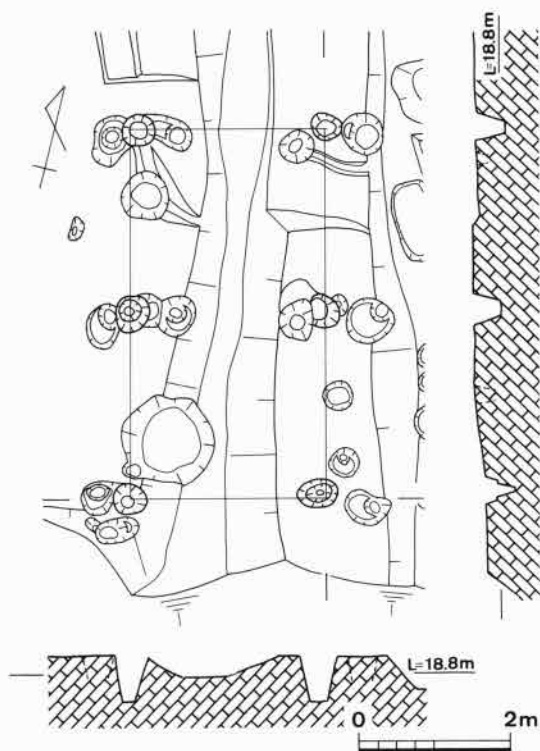
第144図 掘立柱建物跡13実測図

⑭掘立柱建物跡13(第144図・図版第89)

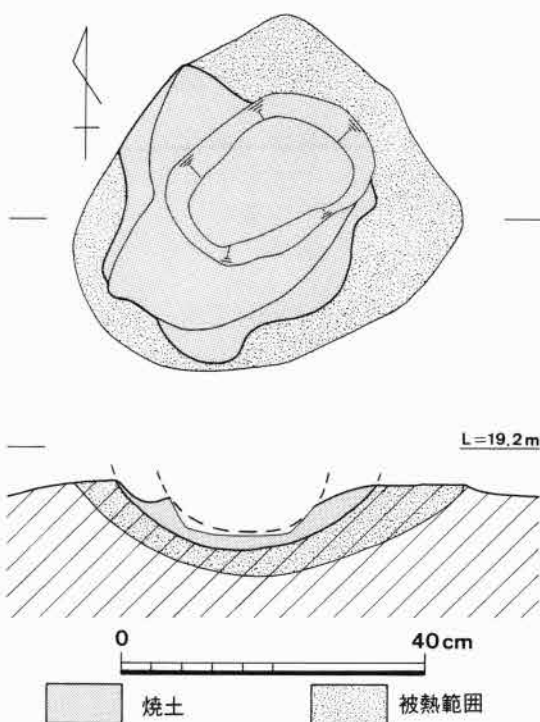
工房跡で最も規模の大きな建物跡である。3間(約7.3m)×4間(約9.9m)を測る東西棟建物跡である。方位はN-14°-Wである。柱間寸法は、桁行が西から約2.45m・約2.4m・約2.55m・2.5m、梁間が北から約2.4m・約2.7m・約2.2mを測る。掘形は、硬質の岩盤を径約0.3~0.6m・深さ約0.5~0.6m掘り込んでおり、かなり強固に建てられた施設であったことがうかがえた。建物跡の西側から広範囲にわたって赤色の焼土が確認でき、周辺部には粒状滓や鍛造剥片が多量に採集された。このことから、焼土は鍛冶炉であることが明らかとなった。また、鍛冶炉西側の約0.9m×約1.6mの落ち込みは鞆座の可能性もある。

⑮掘立柱建物跡14(第145図、図版第89・91)

掘立柱建物跡13に重複する形で検出した遺構である。その規模は1間(約2.6m)×2間(約4.9m)を測り、方位はN-14°-Wである。柱間寸法は、桁行2.45mを測る。掘立柱建物跡7・9と同規模である。南側は、後世の削平を受けていることから、2間以上の建物であったかもしれない。柱穴は、直径0.3~0.5m・深さ0.4~0.6mを測り、根石などは用いず、簡単な建物であったと思われる。



第145図 掘立柱建物跡14実測図



第146図 鍛冶炉実測図

⑩鍛冶炉(第146図、図版第90)

鍛冶炉と考えられる焼土は3か所確認したが、炉本体が一部存在するものは工房内東側と西側で2基検出した。残るものは焼土のみの広がりであるが、周囲から粒状滓や鍛造剥片(図版第102)が出土することから、鍛冶炉の可能性は高く、ここでは鍛冶炉としてとり上げた。焼土は約2m×約1.2mの広がりをもっており、焼土が上下2層に重なり合うものも認められる。焼土と焼土の空間部分には直径15~30cm・深さ約15cmの杭状の柱穴が認めらる。焼土(第144図)西側では、杭状の柱穴を中心に南北約1.6m・東西約0.9mの方形の浅い窪みが認められ、鞆座の可能性はある。鍛冶炉と考えられる焼土は、掘形などを有していないため、この上に炉本体を築いていた露出型の可能性^(注36)がある。炉本体が残る2基の鍛冶炉は、天井部を欠損する火窟型と思われる。西側の鍛冶炉(第146図)は、直径約35~40cm・深さ約9cmの掘形内に設けられ、炉の内径は、長径約30cm・短径約25cm・深さ約7cmを測り、炉壁粘土は一部青灰色部分も認められよく焼け締まる。東側の鍛冶炉は、炉底面がわずかに遺存しているにすぎない。鍛冶炉周辺からは、鉄鏃・刀子・釘・飾り金具・環状・棒状の鉄器などが出土している。

⑪井戸(第147図、図版第91・92)

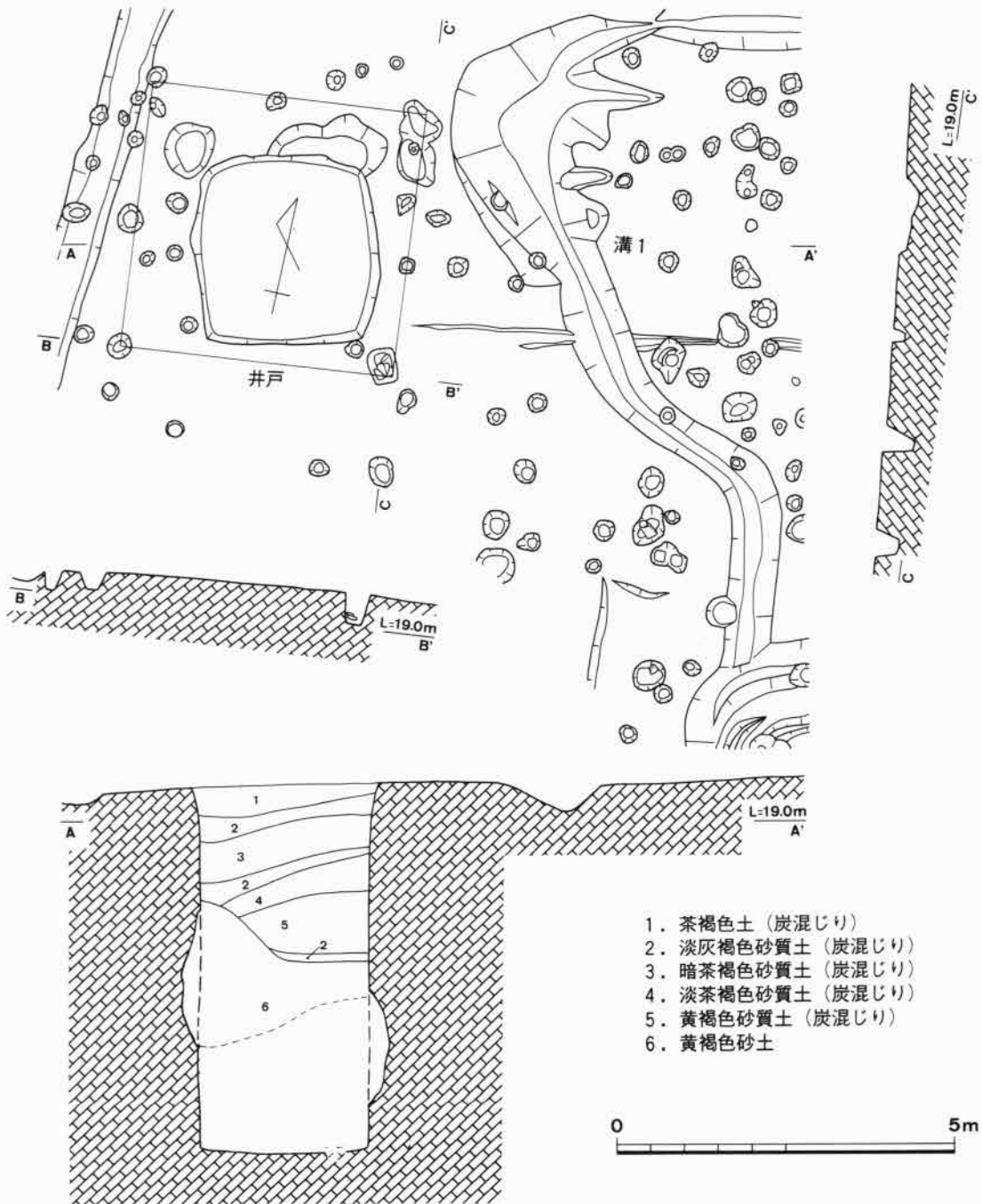
鍛冶工房北西側で検出した素掘りの井戸である。当初人力で掘削していたが、2m以上の井戸であることが判明した時点で、重機による半掘を試みた。掘形は一辺約2.3m・深さ約6.0mを測る。検出面は黄褐色粘土であるが、それから3m以下は褐色砂層となり、井戸底面まで続

く。砂層で水が滞水しないため、粘土層や岩盤をめざしこれほど深く掘削したようであるが、井戸の壁面である砂層の崩壊などのため、あと50cmで岩盤に達するところで掘削を断念したと考えられる。その後、検出面から3m下まで掘削した砂層で埋め戻される。壁面が粘土層になった段

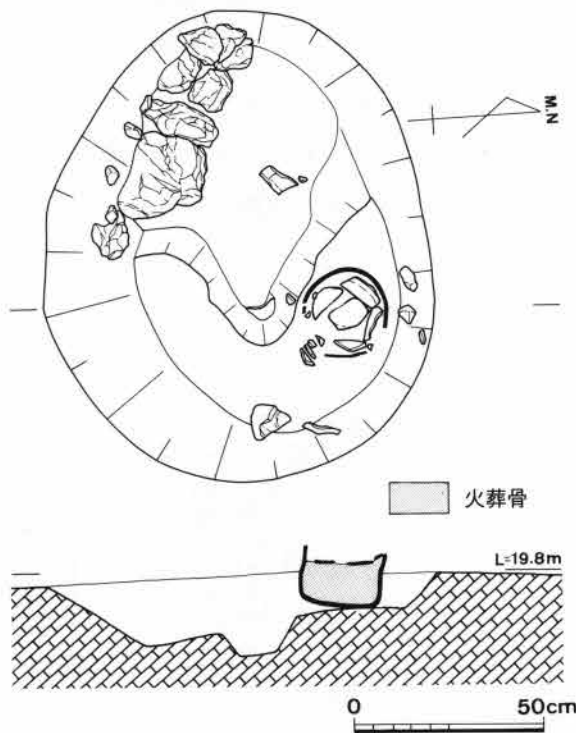
階で、粘質土や粘土で埋めて水を溜めていたようで、泥状になった有機質の堆積が認められた。埋め戻した砂層中からは、木炭や土師器皿が少量出土した。それから上方の内部の埋土中からは多量の土器が出土している。井戸の東側には鍛冶工房に通じる溝1が南流することから、鍛冶生産に伴う水を溜めていた池状の施設と考えられる。井戸の周囲から柱穴を4か所で確認したことから、井戸にも覆い屋があったことが判明した。柱間寸法は、南北・東西とも約4mほどである。出土遺物からすると、鎌倉時代中頃には完全に埋まったようである。

⑱溝(第147図、図版第91・94)

井戸の東側で検出した溝で、北端に楕円形の池状の窪みがあり、そこから蛇行しながら細長い



第147図 井戸・溝1実測図



第148図 火葬墓実測図

「V」字状の溝が南側の谷部に向かったのびている。池状の窪みは、長径約3.5m・短径約2.0m・深さ約0.5mを測り、東側には遺構検出面から池状の窪みに向かって、幅約0.7mの細い「V」字状の溝が取り付く。南側に蛇行してのびる溝は、幅0.7～0.9m・深さ約0.4mを測る。この溝の東側では柱穴群が確認されたが、建物跡までは特定できていない。鍛冶工房に伴う研ぎ場があった可能性があり、池状の窪みに注ぐ3条の細い溝はそれに伴う排水路ともいえる。この溝の南側は、鍛冶工房内では建物を建てる際に造られた溝と重なっており、建物の内部に水を引き込んでいる。

⑱火葬墓(第148図、図版第95)

台地のほぼ中央部で検出した。掘形は、長径約1.24m・短径約1mの楕円形を呈し、深さは東側が約0.15m、西側が0.22mと一段低い階段状なす。内部の北東端に火葬骨を納めた口径221.6cm・高さ15.5cmの土師製蔵骨器を安置する。蓋は、容器内に落ち込んでいた。蔵骨器は、細片化した火葬骨が混じった土で埋められており、容器内には7割近くまで火葬骨が納められていた。蔵骨器及び蓋の内面には、墨書が認められたが、判読するには至らなかった。蔵骨器周辺にも火葬骨が散乱していたが、南側の一段下がった部分には認められなかった。南側が一段低いのは、当初この深さまで掘削する予定であったが、岩盤となったため北側の浅い部分でやめた結果と考えられる。

台地のほぼ中央部で検出した。掘形は、

⑳土坑1(第123・124図、図版第96)

別荘3号墳周溝底から検出した、方形の掘形を持つ遺構である。検出面での規模は、約0.6m×約0.8m・深さ約0.3mを測るが、周溝埋没後に掘られた遺構であることから、もとは深さ約1.3m以上を測る土坑であったと考えられる。土坑四隅に径約10cmの杭状の掘形が見られることから、ここに杭状のものを打ち込んでいたと考えられる。どのような性格の遺構かは不明であるが、ここから須恵器鉢が1点(第150図249)出土している。鎌倉時代中頃のものと考えられる。

(2)出土遺物(第149～154図、図版第102・105～107)

①土器・陶磁器類(第149・150図、図版第106)

掘立柱建物跡2の柱穴内から出土したものは220、掘立柱建物跡8に伴うものは219・227、掘立柱建物跡9に伴うものは218・224・228・240・243・245、掘立柱建物跡11に伴うものは216・231・259～262、掘立柱建物跡13に伴うものは217・264、掘立柱建物跡14に伴うものは258、井戸内下層出土のものは229・232～238、上層からは252～254・256、溝1からは223、土坑1からは

249で、その他は各々建物跡の周辺の柱穴から出土した。

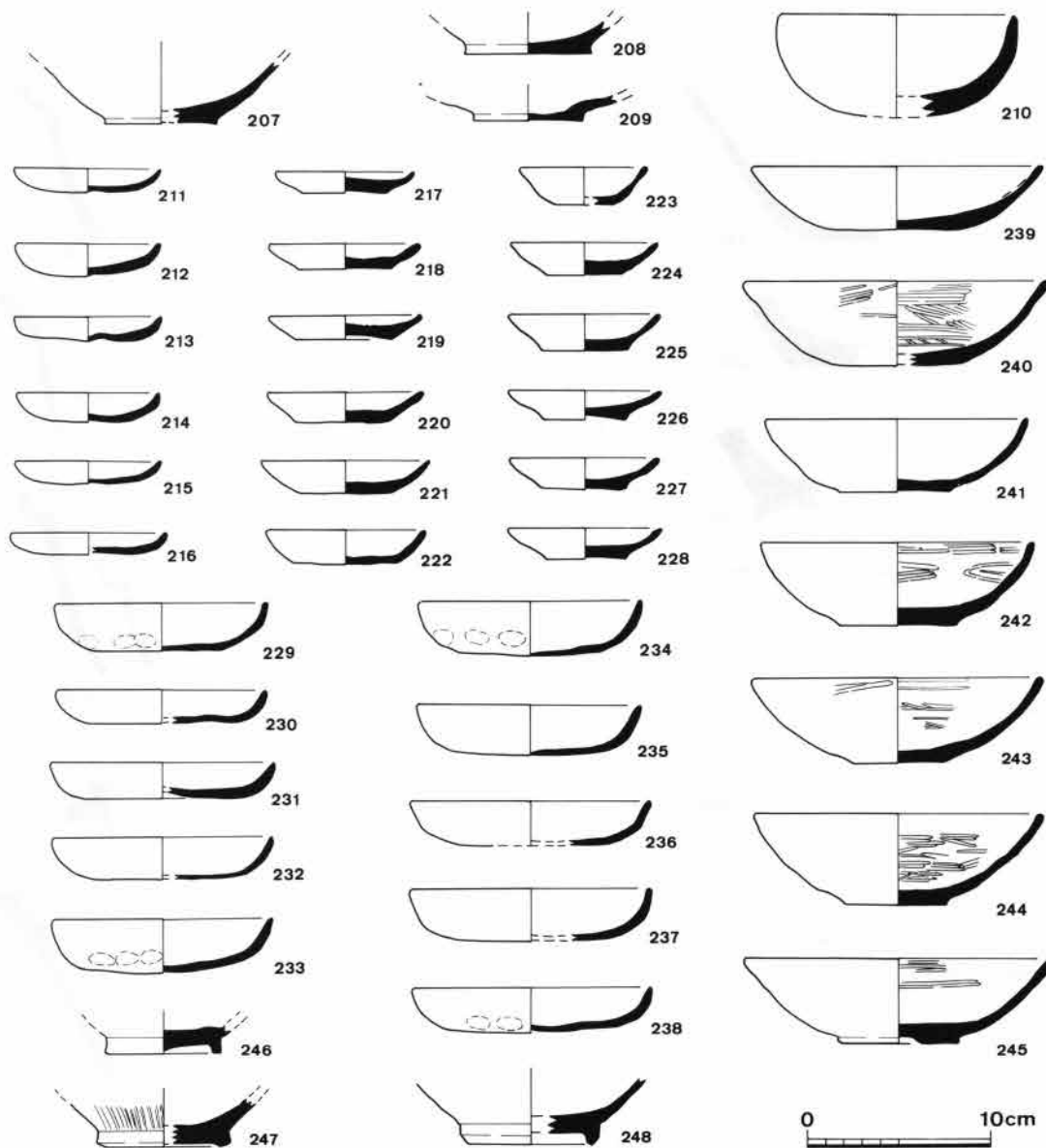
須恵器碗(207~209) 平底の碗である。平坦な底部から外上方に内湾しながら立ち上がる。体部は水引き成形で、底部切り離しは糸切りである。形態から10世紀後半から11世紀にかけてのものと思われる。

土師器碗(210) 出土した点数は非常に少ない。形態がわかるものはこの1点である。底部から内湾しながら上方に立ち上がる。

土師器皿(211~216) 丸みのある底部と内湾しながら外上方に短く立ち上がる体部からなる。口縁端部は丸い。手捏ねによる製作である。

土師器皿(220~222) この形態は、比較的大型の土師器皿229~238と似ており、小型の土師器皿の中でも深さのある皿である。

土師器皿(223) 非常に小型で高さもあることから、杯に近い形態のものである。



第149図 別荘遺跡出土遺物実測図(1)

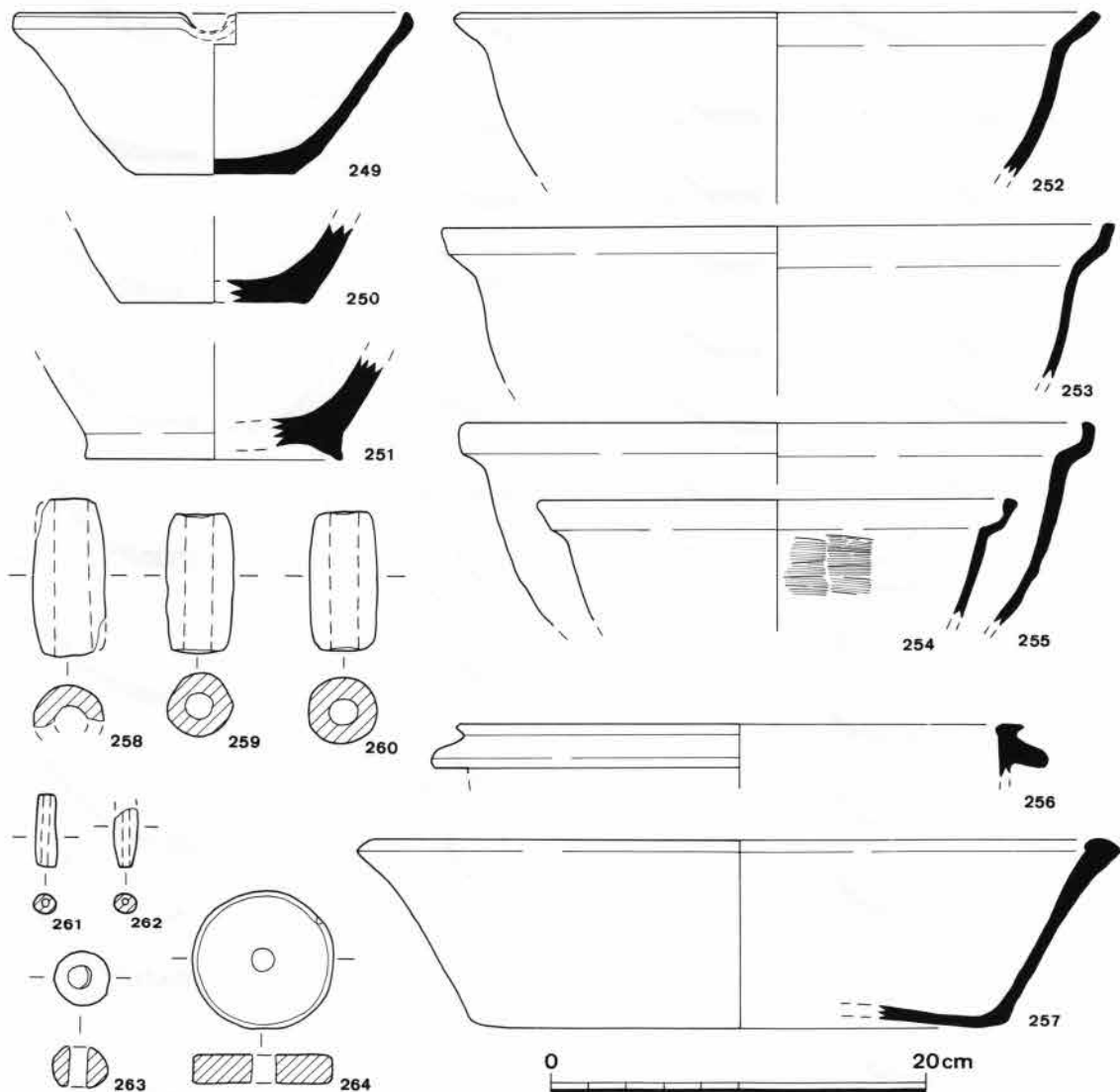
土師器皿(217~219・224~228) 底部の平坦なものである。深い皿と浅い皿とに分けることができるようであるが、ここでは一括してとり上げた。底部外面には糸切り痕を残す。

土師器皿(229~238) 口径の大きな皿である。平坦な底部と上方に内湾しながら立ち上がる体部からなる。口縁端部は丸い。体部外面下半に指押さへの痕跡を残すものがある。

黒色土器碗(239~245) 高台のないもの(239~243)と平高台のもの(244)、輪状高台のもの(245)がある。いずれも平坦な底部から内湾しながら外上方に立ち上がる。口縁端部は丸く、肥厚する。245のみ高台中央部削り出し、輪状高台としているようである。口縁部内面から体部内面にかけてヘラ磨きが比較的密に施されていた。

磁器(246~248) 輪状高台をもつもので、246は青磁、247・248は白磁である。磁器の出土量は少量であった。平安時代末~鎌倉時代初頭のものと思われる。

須恵器鉢(249・251) 249・250は、平坦な底部から外上方にまっすぐ立ち上がる体部からなる。口縁端部は、上方に尖る。注ぎ口が1か所にある。鎌倉時代中頃のものと思われる。251は、断



第150図 別荘遺跡出土遺物実測図(2)

面三角形の貼り付け高台をもつ。

土師器鍋(252~255) ゆるやかに内湾しながら立ち上がる体部と「く」字状または「S」字状に屈曲する口縁部からなる。口縁端部は平坦である。体部外面にハケ目を施すものもある。

土師器羽釜(256) 口縁部から鏝の部分のみで、全体の形態は不明である。

土師器鉢(257) 口径40cmを測る広口で、平坦な底部と外上方にまっすぐ立ち上がる体部からなる。口縁部は肥厚し、端部は平坦である。

②土製品(第150図、図版第107)

土錘(258~263) 大型のものと小型のものが出土している。長さ約8cm・幅約4cmを測る大型のもの(258~260)と、長さ3.8cm・幅1.2cmを測る小型のもの(261・262)がある。中には球状の土錘263も出土している。

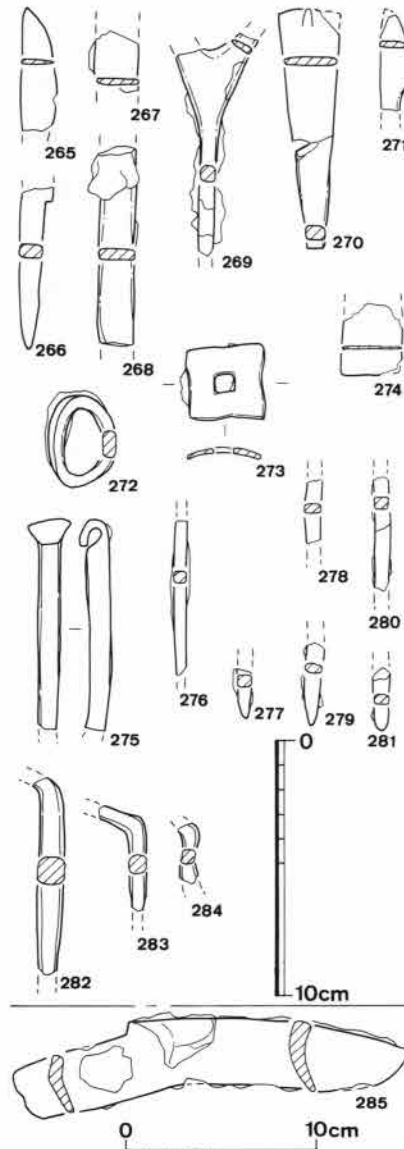
紡錘車(264) 直径7.6cm・厚さ1.6cmを測る円板状のものである。中央に直径1.2cmの孔を穿つ。

③鉄製品(第151図、図版第105)

出土した鉄製品は、主に鍛冶工房跡内から出土した。掘立柱建物跡3の柱穴内からは265が、掘立柱建物跡6からは281が、掘立柱建物跡9からは271が、掘立柱建物跡10の柱穴内からは272が出土した。鍛冶工房跡内東側の焼土付近からは267が、西側の鍛冶炉付近から268・269が、工房跡内から267・270・273~276・278~280・282~284が出土した。また、井戸近辺から277が、遺跡東側の柱穴群から266も出土している。小片化した針状・鉄塊状のものは多数認められるが、図化できたものはわずかである。

刀子(265・266) 265は、掘立柱建物跡3柱穴内から出土したもので、刃部の一部が残る。残存長4.8cmを測る。266は、調査地東端の柱穴群から出土した片関の茎片である。残存長6.3cmを測る。267・268は、刀及び刀子の一部と考えられるもので、西側の鍛冶炉付近及び焼土付近から出土した。

鉄鏃(269~271) 271は、掘立柱建物跡9の柱穴内から出土したもので、鏃身部のみ残存する。片刃箭式で、関は斜関、断面形は片切刃造り。残存長3.8cmを測る。古墳に副葬されていたものが、破壊に伴い混入したと考えられる。269は、西側の鍛冶炉の周辺で出土したもので、残存長9cmを測る。鏃身部は雁又式で、先端を欠損する。頸部は無篋被である。270は、鍛冶工房内焼土付近で出土したもので、残存長9.4cmを測る。斧箭式で、茎部を欠損する。無



第151図 別荘遺跡出土遺物実測図(3)

窺被で、鍔身先端部より茎部に向かって徐々に細くなっていく。

環状鉄器(272) 掘立柱建物跡10の柱穴内から出土したもので、長径3.6cm・短径2.7cm・幅0.5cm・厚さ1.1cmを測る。刀装具の一部と推定される。

飾り金具(273・274) 長辺3cm・短辺2.6cm・厚さ0.2cmで、一辺の中央部分がやや窪む花びら状のもので、中央部分に一辺0.8cmの方形の穴があく。この中央部分の穴に向かって全体がレンズ状に膨らむ。中央部分の穴は、釘などによる固定用の穴と考えられる。掘立柱建物跡12の柱穴内から出土した。274は、幅2.5cm・厚さ0.2cmの薄い板状を呈する。全長は不明である。焼土付近から出土した。

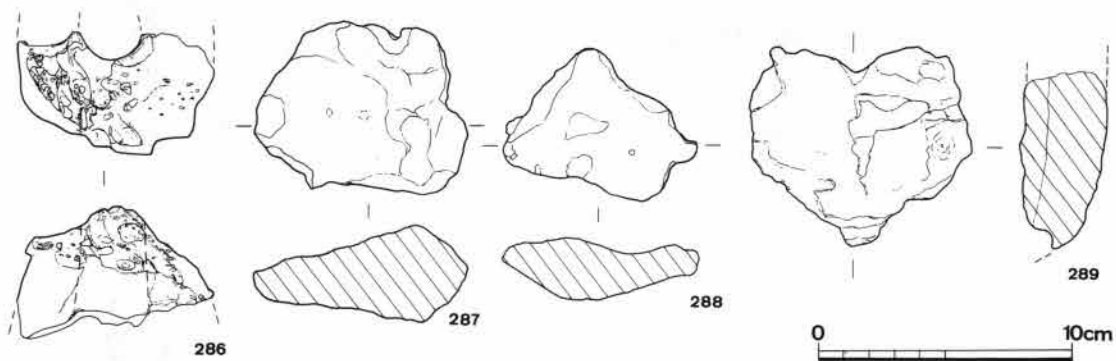
釘(275・282・283) 275は頭部先端を偏平にたたき、内側に強く巻き込む巻頭形をしており、断面が方形を呈する。先端を欠損するが、残存長8.3cmを測る。282・283は、西側鍛冶炉付近から出土したもので、先端部に向け徐々に細くなり、断面が方形を呈する角釘で、頭部先端が屈曲しやや偏平化した頭部をもつ、いわゆる折曲頭形を呈している。芯部断面は、282が1.05cm、283が0.7cmを測る。

棒状鉄製品(276~281・284・285) 277は井戸周辺から出土し、281は掘立柱建物跡6内から出土した。その他は、焼土及び東側鍛冶炉付近から出土している。277よりも小さいものは多数見られる。断面が一辺0.6cmの方形で、鉄鍔の頸、茎部か釘などが想像される。284は、「S」字状に屈曲している。

不明鉄製品(285)は、全長約21cm・幅約4cmを測り、断面はレンズ状にやや湾曲し、刃側は棟側に比べて、やや狭い刀子状を呈する。棟側には、関状に切り込まれた部分が認められる。刀子の製作途中のものと考えられる。西側鍛冶炉周辺から出土した。

④鍛冶生産関連遺物(第152図、図版第102)

鍛冶生産関連遺物としては、生産工程で排出される鍛冶滓(精錬鍛冶滓・鍛錬鍛冶滓)や鞆羽口直下の火床中に形成される椀形滓と呼ばれるものがある。また、先に述べた鉄製品や、加熱・鍛打した際に生じる鍛造剥片・粒状滓や鞆羽口、金床石、木炭がある。別荘遺跡では、鉄滓などの分析を行っていないため、精錬鍛冶滓か鍛錬鍛冶滓かは断定できないが、出土遺物や遺跡の状況から考えて、鍛錬鍛冶が存在していたと推定される。鍛冶生産関連遺物の出土量はそれほど多く



第152図 別荘遺跡出土遺物実測図(4)

はない。このことは、操業終了に伴い工房建物や鍛冶炉が破壊・削平され、新たな工房を設けるために整地された際に消失したとも考えられる。地形的な状況からすると、南側谷部へ移動したと思われる。

図示したのは、羽口・鍛冶滓・炉壁の4点である。掘立柱建物跡9の柱穴内から289が、掘立柱建物跡12の柱穴内から286・288が、別荘1号墳東側墳丘裾部から287が出土した。

羽口286は、鍛冶工房内柱穴から出土したもので、先端付近が一部残存する程度である。先端付近のみ残存するため、製作方法は不明である。残存長5.5cm・先端部復原外径6cm、同内径2.5cmを測る。先端部には溶解したガラス・鉄滓の付着が認められる。

鍛冶滓287・288は、出土したもののなかでも大きく、287が235g、288が90gあり、このほ

か小片や鍛冶滓が破損した破片と考えられるものがある。気泡があき、鉄分が多く残る部分は錆化が著しい。木炭の小片が挟み込まれているものや、鍛造剥片が付着するものが観察されるものもある。

炉壁289は、炉内底近くの破片と考えられ、炉内側1/3は青灰色によく焼け締まり、表面はガラス・鉄滓の付着が認められる。裏側は、熱のため赤褐色になっている。残存する炉壁の厚さ約3.3cmを測る。

鍛造剥片・粒状滓は、鍛冶炉・焼土周辺の炭混じり土を採集し、水洗強力磁石で採集した。これらのすべてから出土しているが、鍛冶炉かどうか判断するために行ったにすぎず、全量採集したわけではない。鍛造剥片については、採集・水洗・磁着という過程で細片化した可能性があり、大きな剥片はほとんど採集されなかった。粒状滓は、直径0.75～4.5mmまでのものが採集され、直径1.2mm前後のものが最も多いようである。

金床石と考えられる被熱した石材は、遺跡の全体で各所に認められたが、割れていたり、柱穴内に根石や柱の固定に使用されており、確実に金床石と断定できるものはなかった。

木炭は、鍛冶工房柱穴内や鍛冶炉周辺から多数出土しているが、いずれも小片化している。

⑤石製品(第153図、図版第107)

図示したのは5点である。掘立柱建物跡9の柱穴内から291が、掘立柱建物跡13からは294が、鍛冶工房跡北側中央付近から290・293が、竪穴式住居跡内から292が出土した。そのほか、石鍋なども出土しているが、小片化しており図化できなかった。

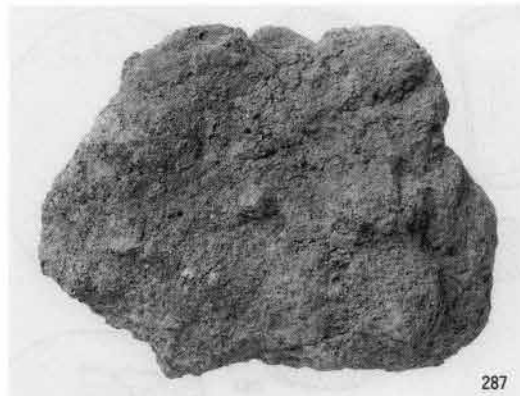
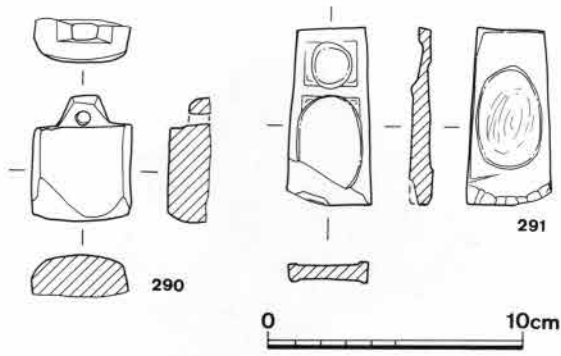
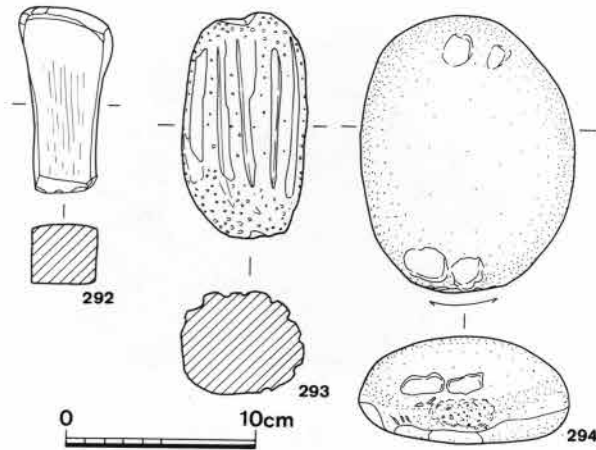


写真 別荘遺跡出土鍛冶滓



分銅290は、縦に半割された状態で出土した。上部につまみの付くいわゆる分銅形のこの錘は、一辺4cmで、厚さ1.5cmあり、つまみには0.4cmの穴が穿孔されていた。ちょうど分銅の半分の状態であることから、推定厚さは約3cmであったと考える。現状で25gであることから、もともとは50gの分銅であったと思われる。



硯291は、長さ7cm・幅3cmと非常に小さく、携帯用としての硯であったと思われる。一部、墨を摺ったと思われる使用痕が認められた。

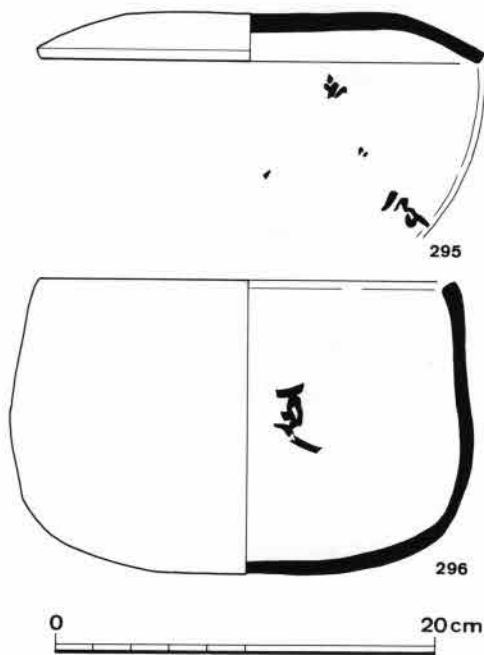
砥石292・293は、鍛冶関連の遺物と考える。鉄製品の刃部を研ぐための砥石292と、仕上げ砥石として使用したと思われる軽石293である。軽石には、断面「V」字状の使用痕跡が全面についており、十数条認められた。

第153図 別荘遺跡出土遺物実測図(5)

叩き石294は、鍛冶工房跡の柱穴内の根石に使用されていたもので、取り上げて水洗いすると叩き石であったことがわかった。

⑥蔵骨器(第154図、図版第106)

火葬墓の北東隅に埋められていた。口径21cmを測る容器に火葬骨を入れ、偏平な蓋で閉じていた。容器内面と蓋の内面に墨書が見られたが、判読することはできなかった。しかし、蓋の内面中心部から口縁端部付近までに墨書の範囲が認められたことから、もとは数行にわたって書かれていたと思われる。梵字の可能性もある。鎌倉時代のもと思われるが、今後の類例を待って考えていきたい。



第154図 蔵骨器実測図

4. まとめ

①天王山古墳群について 天王山古墳群の調査では、前期～中期の古墳2基、中期の土器棺墓1基、6世紀中頃築造と考えられる古墳3基を調査した。今回の調査では土器が出土しなかったが、立地条件などから後期古墳の可能性のある4基

の古墳についても、調査を実施した。前期古墳は、前期～中期の古墳が立地する丘陵に築かれており、後期古墳はそれに近接したり、まったく別の丘陵に新たに築造されていた。

前期・中期の古墳については、昨年度の調査でも、丘陵高所の東側は箱式石棺、西側は木棺直葬を内部主体とする墓制がとられており、墓制の異なる2つの造墓集団が存在することが明らかとなった。また、A支群27号墳のように、丘陵低位の稜線上に築かれる古墳の築造時期は、当初、考えられていたよりも早まるようであり、丘陵の利用状況を考える上で重要な調査成果が得られた。

②別荘古墳群について 別荘古墳群では、前期または中期と考えられる古墳2基、それを破壊し新たに築造された6世紀中頃の古墳1基の調査を行った。これを、先に述べた天王山古墳群A・B支群の調査結果と合わせて考えてみる。後期古墳については、いずれも6世紀中頃築造でほとんど時間差をおかず、丘陵全域に同時発生的に短期間で出現しており、大きな群を構成せず2～3基を一単位として丘陵全域に分散している。最高所に位置するA支群6～12・14～16号墳は未調査であるが、明確な墳丘を持たないものと、完全に腰高の古墳が存在しており、別荘古墳群に見られたように過去の墳丘を削平し、新たな古墳を設けたり、先に築造された古墳の空間を利用しているようでもある。そのために、少数の後期古墳が近接したとも考えられるが、立地条件のよい場所に馬具や装飾付須恵器を有する古墳が集中して築かれず丘陵内全域に分散している。このことは、立地、墳丘築造方法、規模、副葬品などの内容が一定でないことや、先の古墳の上に新たに古墳を築いていることから、造墓集団の違いが指摘される。このようなことからすると、6世紀中頃前後にはこの丘陵上には2～3の造墓集団が存在したと推定される。

調査結果から、古墳時代後期の首長墳と考えられるものに、天王山古墳群A支群25号墳、B支群1号墳、別荘1号墳がある。別荘1号墳は、削平により副葬品の保有量が定かでないが、刀を有しており、他に刀を持つものはB支群1号墳のみであり、築造方法も盛り土を持ち腰高となり、独立性を帯び、規模も18m以上ある。これに対し、副葬された須恵器の量ではA支群25号墳、B支群1号墳が多いが、古墳の規模・築造方法ではA支群25号墳の方が劣る。

馬具が出土したのはB支群1号墳のみであるが、同時期で丹後半島内で馬具や多くの鉄器・須恵器の副葬例としては、弥栄町太田^(注38)2号墳・太田^(注39)4号墳、峰山町桃山^(注40)1号墳があげられる。太田4号墳は、丘陵削り出し成形による直径16mの古墳であるが、馬具は保有していない。太田2号墳は、埴輪をもつ直径約30mの円墳である。桃山1号墳は直径約18mで、B支群1・別荘1号墳と同じように盛り土によって墳丘を成形している。このことからみると、盛り土により墳丘が築造され、直径約18mを越える古墳でないとも馬具は保有できない基準となっているのではないだろうか。削り出し成形により墳丘を成形したものは、規模は大きくとも須恵器を多く保有するにすぎない。B支群1号墳は、首長墓にふさわしい内容の副葬品を有する6世紀中頃築造の木棺直葬墳であるが、丘陵上には横穴式石室を内部主体とする可能性のある鬼の釜古墳群があり、佐濃谷川河口域での横穴式石室導入直前の古墳群の可能性もある。

③別荘遺跡について 堅穴式住居跡や遺構は検出されなかったが、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての出土遺物は、天王山古墳群築造に直接関係する可能性がある。

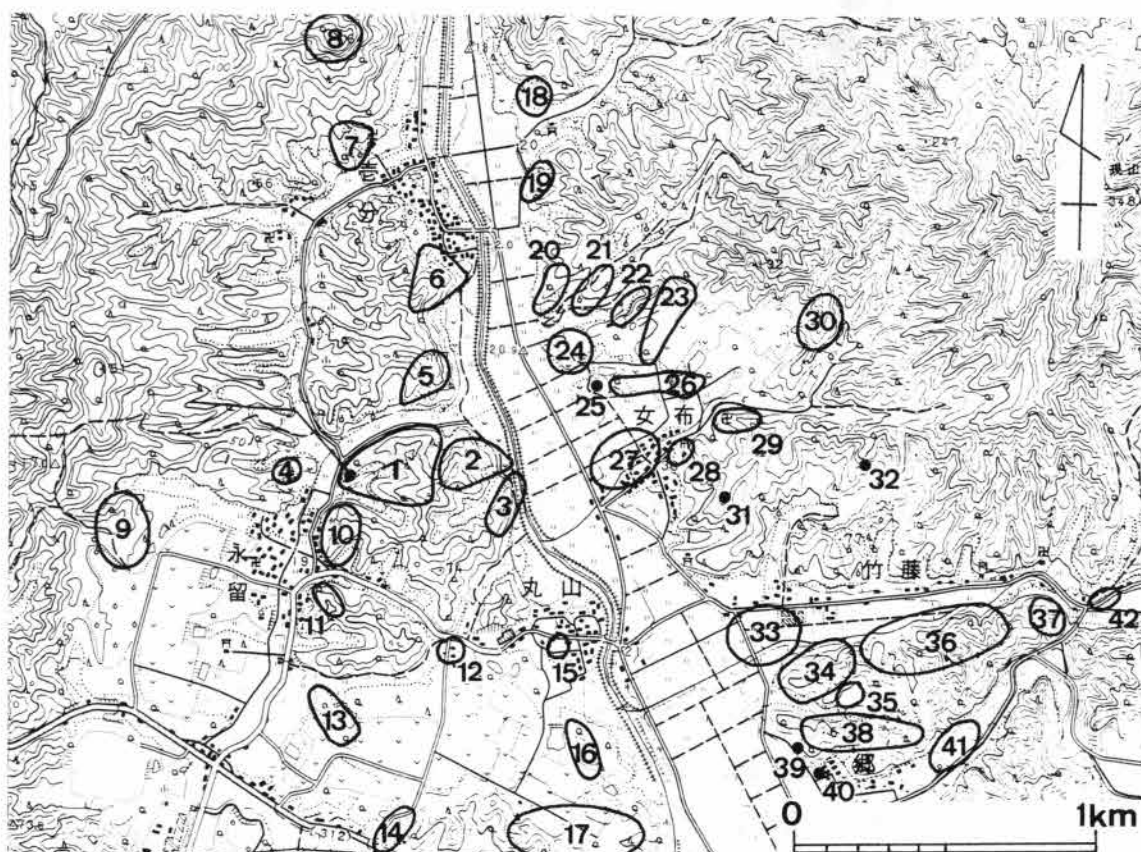
久美浜町内の製鉄遺跡・製鉄関連遺跡の存在は知られているが、初の鍛冶生産遺跡の調査を実施した。検出された掘立柱建物跡には、鍛冶工房内の掘立柱建物跡と方向が異なる掘立柱建物跡と2種がある。鍛冶工房内で検出された掘立柱建物跡は、規模・構造的にもしっかりしたもので、鍋・釜類の遺物の出土がやや少ないものの、貯蔵庫や多くの土器類からみて、一定の場所で鉄生産が行われていたと推定される。工房跡周辺の建物跡群についても、工房と同方向になるものは、工房に伴う住居ないし倉庫などが考えられる。工房及びそれに関連する施設からは平安時代末期～鎌倉時代初頭に比定される遺物が出土している。また、工房と方向が異なる掘立柱建物跡1・3は、周辺から出土した遺物からすれば、鎌倉時代中頃の時期が考えられる。建物跡を復原できなかった平坦部で検出した多くの柱穴は、平安時代末期～鎌倉時代中頃にかけての何らかの施設が存在していたと思われる。集落跡としては、立地条件や規模などから、谷を挟んだ南西側の台地に位置する鹿野A遺跡が考えられる。生産(鍛冶)部門だけ分離していた可能性もあり、今後十分検討を重ねていく必要がある。また、鎌倉時代初頭には鹿野庄や鹿野保という荘園名が文献に見えることと合わせて、この地域の中世を考える上で重要な遺跡となった。

(増田孝彦・岡崎研一)

(13) 谷垣古墳群

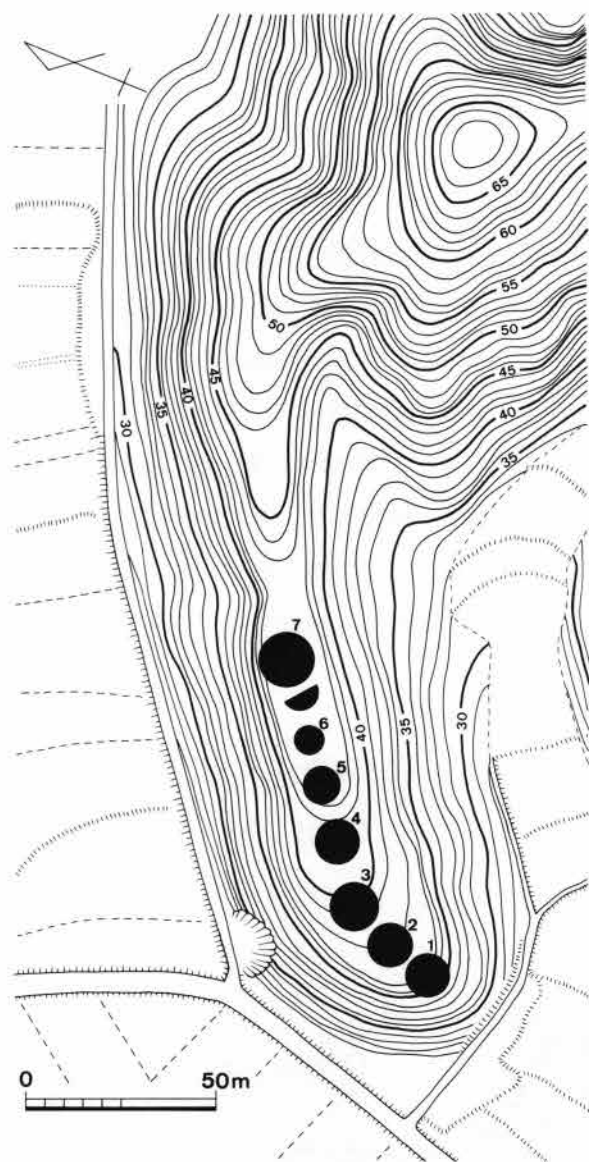
1. はじめに

この調査は、永留団地造成に伴って実施した。本古墳群は、熊野郡久美浜町字永留小字谷垣10ほかに所在し、東西方向にのびる丘陵尾根筋上に円墳13基・方墳4基からなる。調査の対象となった古墳は、丘陵西側先端に位置する1号墳～3号墳であり、3号墳は区画溝の一部を調査するにとどまった。また、1号墳の南側先端には2か所の階段状地形が見られ、久美浜町教育委員会が調査を実施したが、自然地形であることが明らかとなった。このほか、東方280mの丘陵最高所でも久美浜町教育委員会により谷垣18・19号墳の発掘調査が実施され、18号墳主体部内からは朱文鏡2をはじめ、勾玉1・管玉18・ガラス玉180などが出土した中期古墳がある。佐濃谷川右岸には前期の古墳として、碧玉製紡錘車形石製品が出土した北谷1号墳があり、佐濃谷川を挟んで対峙する首長墓として興味深い。



第155図 調査地及び周辺主要遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | |
|-------------|----------------|----------------|-----------|
| 1. 谷垣古墳群 | 2. サト古墳群B支群 | 3. サト古墳群A支群 | 4. 畑山城跡 |
| 9. 永留城跡 | 10. マンダラ古墳群B支群 | 11. マンダラ古墳群A支群 | 23. 北谷古墳群 |
| 24. 女布北遺跡 | 25. 鶏塚古墳 | 26. 薬師古墳群 | 27. 女布遺跡 |
| 42. 堀坂神社古墳群 | | | |



第156図 古墳配置図

2. 位置と環境

谷垣古墳群は、久美浜町東部を北流する佐濃谷川中流域の左岸の丘陵上に位置する。この丘陵上には、谷垣古墳群(17基)、サト古墳群A支群(11基)・B支群(7基)、マンダラ古墳群B支群(10基)の4つの古墳群が形成されている。このうち、佐濃谷川に面するのはサト古墳群A支群・B支群で、谷垣古墳群・マンダラ古墳群B支群は永留から壱分に通じる谷筋沿いの丘陵部に位置する。谷垣古墳群のうち、13~16号墳は、尾根最高所を東側に越え、サト古墳群B支群と谷を隔て向かい合っており、1~12号墳とは築造時期・性格が異なるものと考えられる。このことは、前者が方墳であるのに対し、後者が円墳であることからもうかがえる。谷垣古墳は、ほぼ同規模の古墳の集まりであり、首長墳となるような特筆される古墳は存在しない。造墓集団としての集落遺跡は、周辺では佐濃谷川右岸の女布遺跡・女布北遺跡^(注43)が知られ、微高地状の地形に須恵器・土師器片の散布を見るが、その詳細については不明である。

3. 調査概要

調査の結果、古墳1基(1号墳)と周溝の一部(3号墳)を確認した。2号墳は、1・3号墳を築いた際の残丘であることがわかった。

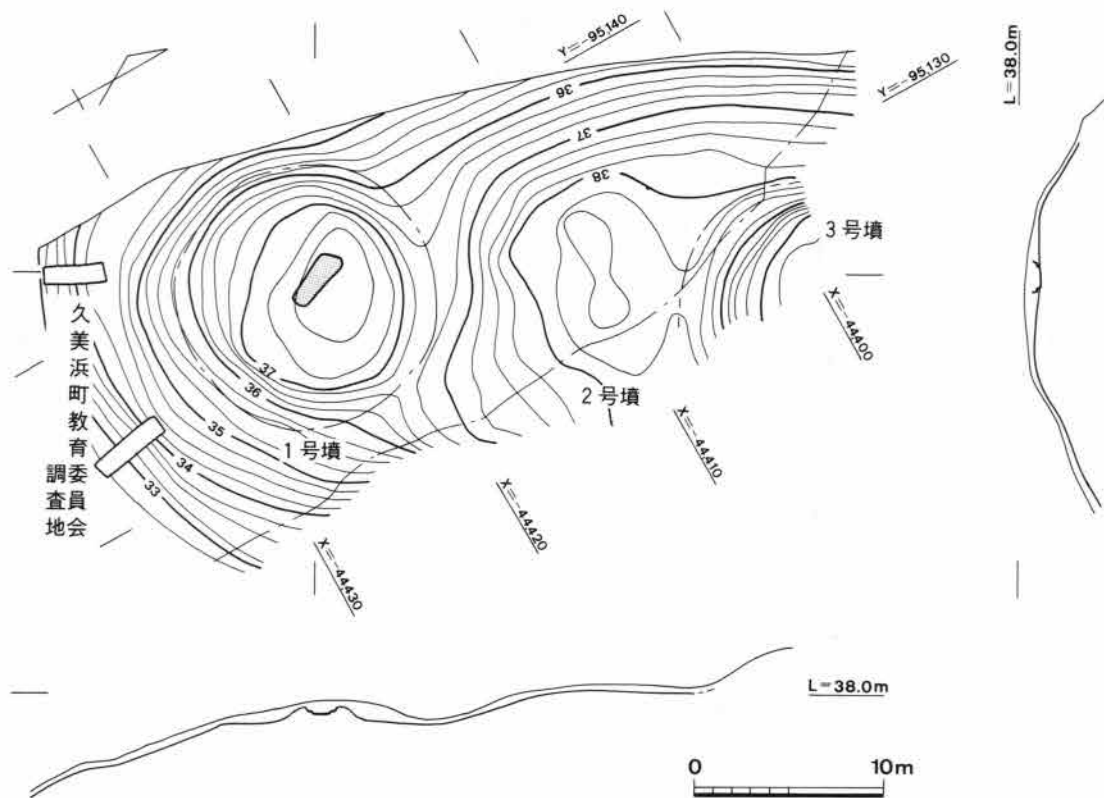
(1) 1号墳

①墳丘(第157図、図版第109)

径約14m・高さ約1.8mを測る円墳で、墳丘南西部分が一部流失していた。墳丘周縁部は、0.2~0.8m盛り土されており、墳丘北斜面部分が最も厚く盛られていた。墳頂中央部で主体部1基を検出した。また、主体部と重複する形で、経塚1基も検出した。

②主体部(第158図、図版第109・110)

ほぼ南北方向の二段墓壙で、長さは約3.2m、幅は約1.1m、深さは約0.34mを測る。主軸はN-17.5°-Wである。木棺痕跡は確認されなかったが、墓壙の形状から箱形木棺が推定される。墓壙北側床面からは、勾玉・ガラス玉・紡錘車が出土している。墓壙西側から、須恵器杯身・



第157図 谷垣1・2号墳測量図

壺・土師器杯などの土器片がまとまって出土しており、木棺埋葬後の祭祀に伴う遺物と思われる。その土器の形態から、6世紀中頃と思われる。

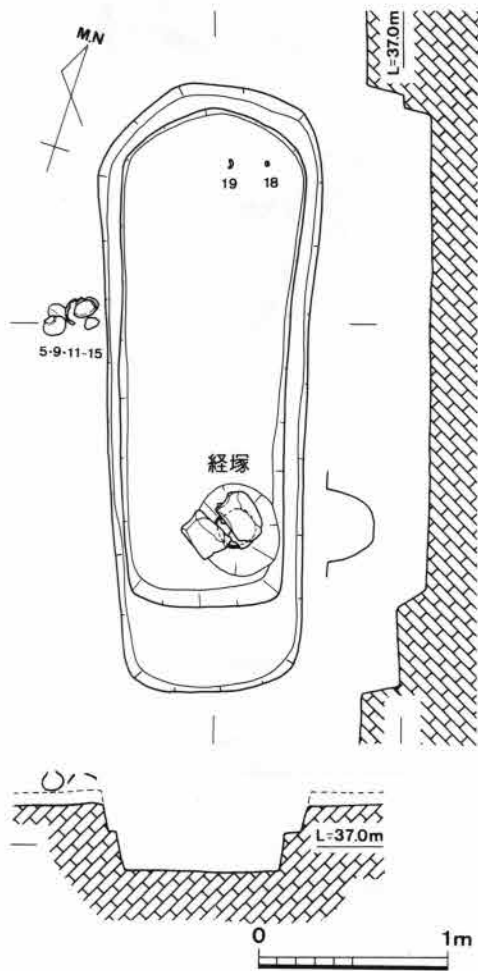
(2) 2号墳(第157図)

1号墳北側13mに認められた古墳状隆起で、調査を進めたが、主体部の検出には至らなかった。この部分から、散乱した状態で須恵器杯蓋・杯身などが出土した。これらの遺物からすれば、2号墳が古墳であった可能性もある。しかし、1号墳と2号墳の墳頂部の比高差は約1mあるにもかかわらず、1号墳での主体部の検出状況を考えると、2号墳でも主体部が認められなければならない。仮に、主体部が削平を受けて遺存していないとすると、背面の3号墳との比高差が少なくなる。2号墳北側・西側は、比較的古墳状の地形であるが、南・東側は尾根筋として緩傾斜が続く。以上のことから、2号墳は古墳であった可能性は少なく、ここでは3号墳築造時の残丘としておきたい。

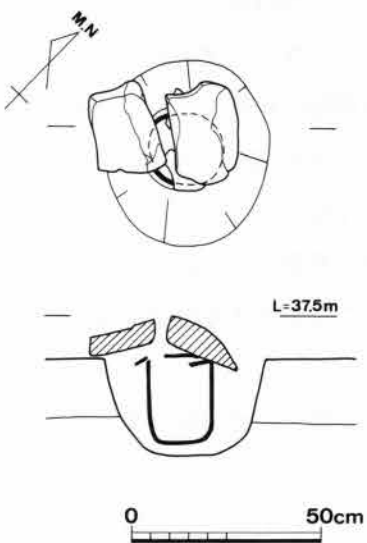
京都府教育委員会刊行の『京都府遺跡地図』にこの古墳群の出土品として金環・刀・土器が記されている。3号墳の墳頂部に大きな落ち込みが見られたことから、これらの遺物は3号墳から出土したものであると思われる。前述したこの残丘から出土した土器群についても、3号墳のものである可能性がある。

(3) 3号墳(第156図)

1号墳から北東約25mに位置する古墳である。1号墳との比高差は約2.7mを測る。墳丘は、1号墳よりも高く明確にめぐっており、規模も大きい。古墳の大半が調査地外となるため、造成



第158図 谷垣1号墳主体部実測図



第159図 経塚実測図

にかかる墳丘裾部の一部を調査したにすぎない。調査の結果、顕著な遺構は確認されなかったが、墳丘裾の一部が明らかとなった。裾部からは土師器片が出土しているが、細片であるため時期のわかるものではなかった。裾部の一部から復原すると、3号墳は径16m前後の古墳と思われる。また、3号墳も一部盛り土で築かれている可能性が高いが、調査地外となるため不明である。

(4) その他の遺構(第159図、図版第111)

墳頂部から主体部と重複する形で、経塚1基を検出した。径約0.6m・深さ約0.25mの掘形の中に、外容器が埋まっていた。外容器の上部には、蓋が割れた状態でのっており、蓋の上には偏平な石が2石あった。外容器の中には何も入っていなかった。

4. 出土遺物(第160・161図、図版第112、付表10)

(1) 1号墳出土遺物

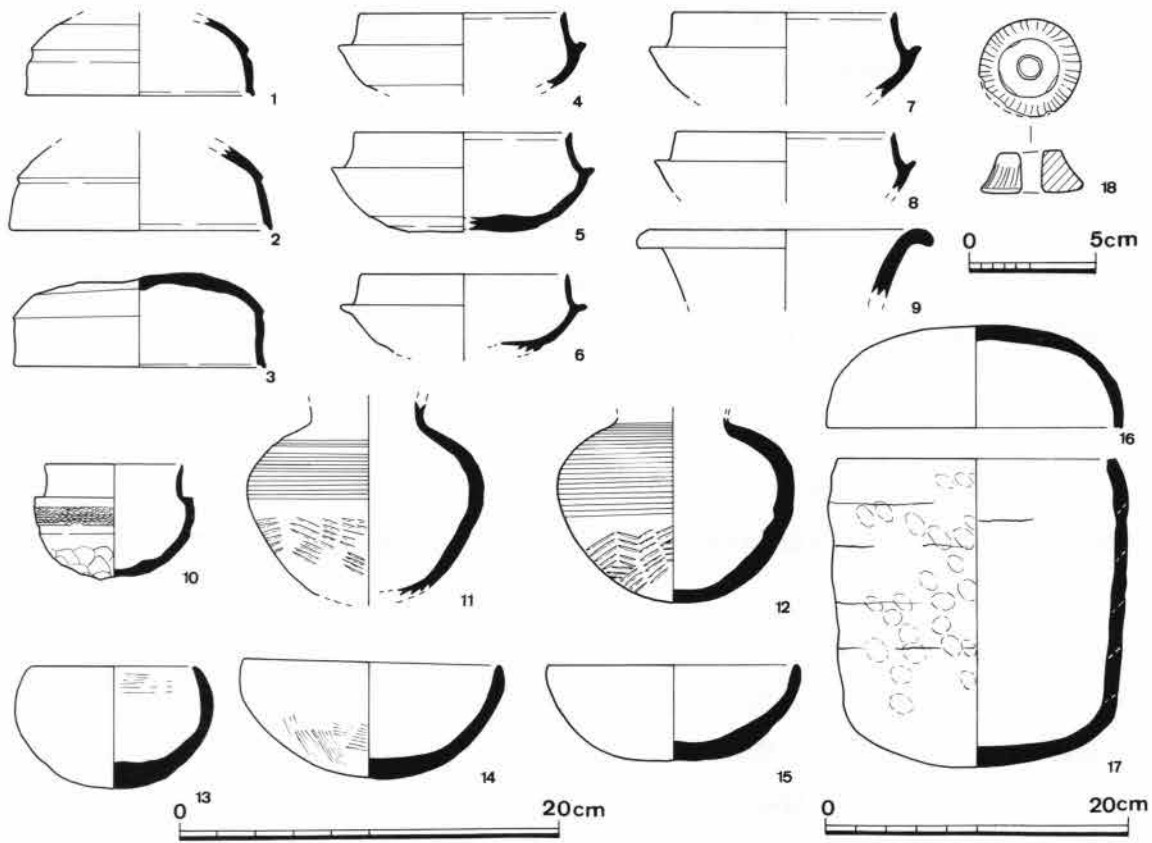
1号墳第1主体部内から出土したものは、紡錘車1点(18)、勾玉1点(19)、ガラス玉10点(20~29)である。主体部肩部付近から出土したものは、杯身1

点(5)、壺3点(9・11・12)、土師器杯3点(13~15)である。残丘(2号墳)頂部から出土したものは、杯蓋2点(1・3)、杯身3点(6~8)、短頸壺1点(10)である。その他、1号墳東側墳丘裾部から杯蓋1点(2)、杯身1点(4)を採集した。

杯蓋(1~3) 1・2は、丸みのある天井部と外下方に降りる口縁部からなる。天井部外面はヘラ削りを施し、他はロクロナデ成形である。3は、平坦な天井部から屈曲して下方に下がる口縁部に続く。天井部外面はヘラ削りを施し、他はロクロナデ成形している。一部歪みが見られる。

杯身(4~8) 丸みのある底部から内湾しながら外上方に立ち上がり受け部に至る。立ち上がりは内上方を向き、口縁端部は丸いもの(6)や平坦なもの(4・5・7)がある。

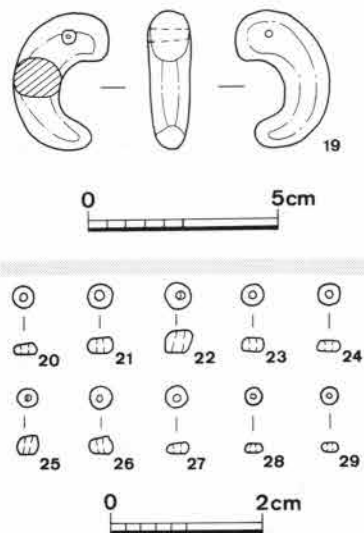
短頸壺(10) 底部から丸みを帯びながら上方に立ち上がり、口縁部で屈曲して上方に立ち上がる。口縁端部は丸い。底部外面にはヘラ削りの痕跡が見られ、体部半ばに波状文がめぐる。これに伴う蓋は出土していない。



第160図 出土遺物実測図(1)

付表10 谷垣1号墳出土土玉製品一覧表(mm)

番号	器種	長	幅	孔径	色調	備考
19	勾玉	3.6	1.2	4.0~2.0	濃緑色	碧玉
20	ガラス玉	1.5	3.0	1.0	淡青色	
21	〃	2.0	3.0	1.0	淡緑色	
22	〃	3.0	3.5	1.0	淡青色	
23	〃	2.0	3.0	1.0	淡青色	
24	〃	1.5	3.0	1.0	淡青色	
25	〃	2.5	3.0	1.0	淡青色	
26	〃	2.5	3.0	1.0	淡青色	
27	〃	1.5	3.0	1.0	淡青色	
28	〃	1.0	2.0	0.8	淡青色	
29	〃	1.0	2.0	0.8	淡青色	



第161図 出土遺物実測図(2)

壺(9・11・12) 9は、壺の口縁部である。端部で大きく反り返るものである。11・12は、やや肩部の張る球状の壺である。

口縁部は、埋葬時に欠いているようである。11は、底部も意図的に砕いていた。

杯(13~15) 土師器である。底部から内湾しながら上方に立ち上がり、口縁部に至る。13は、口縁部で大きく湾曲し、端部は内上方を向く。端部は丸い。

紡錘車(18) 断面台形を呈し、上面径2.5cm・下面径4cm・高さ1.5cmを測る。中央に径0.8cmの孔が施される。側面には線刻が施される。

勾玉・ガラス玉(19~29) 濃緑色で硬玉の勾玉と、淡青色で直径2~3mmのガラス玉である。これら玉製品は、主体部北端付近から出土した。付表10に大きさなどを記している。

(2) 外容器(16・17)

17は、わずかに丸みのある底部から屈曲して上方にまっすぐ立ち上がる。口縁端部でやや内傾する。端部は平坦である。外面にはナデ痕跡と指圧の痕跡が見られる。16は、わずかに丸みのある天井部から内湾しながら外下方に降り、口縁端部に至る。端部は平坦である。内外面ともにナデ痕跡が残る。蓋も身も厚さ1cmと、厚手のものである。

5. まとめ

久美浜町教育委員会の調査で、谷垣古墳群は19基からなる古墳群であることがわかった。今回の調査で、2号墳が古墳の可能性が非常に薄いことから、結果的には18基の古墳で構成されていることとなった。

佐濃谷川中流域右岸の最高所に前期古墳である北谷1号墳が、中期になると北谷1号墳の尾根筋や谷垣18号墳が築かれる。流域沿いに広がる平地部には、女布遺跡・女布北遺跡が所在する。この遺跡は、前述の古墳から一望することができる。今回、調査を行った谷垣古墳群は、谷垣18号墳から西方に派生する低丘陵尾根筋に築かれており、丘陵先端部には明確な墳丘を持つ直径18m前後の古墳が並ぶ。今回、発掘調査した1号墳は、3~7号墳と規模がほぼ共通する。それは、地山を掘削して区画溝を築き、その排土を墳丘として構築したために、規模や形態が類似したからであると、現地形と今回の調査結果からうかがえた。その結果、古墳群の動向は、古墳時代中期までは丘陵高所に築かれるが、6世紀中頃になると丘陵先端部へと移動するようになる。この発掘調査の成果は、佐濃谷川中流域の古墳時代を考える上で、貴重な資料を提示することができる。今回の調査は、1・3号墳の調査であったが、3号墳は一部の調査にとどまった。今後、この地域での調査成果が待たれる。

(増田孝彦・岡崎研一)

注1 主な調査参加者(順不同・敬称略)。

山崎頼人・小林宏和・大熊宏子・森本直哉・高木 彩・樋口直子・笠次清仁・藤村重裕・森岡啓輔・田中美穂・猿橋紀子・森オリ江・小倉志麻・下村尚子・寺尾貴美子・丸谷はま子・森川敦子・河崎祐子・金保真由美・勝山紀子・金久真弓・谷辻絹代・有田美恵子・上田奈智子・野口美乃・可児直典・藤井矢壽子・永埜ヤス子・吉岡美秋・山本 絹・伊熊佐知子・宮地聡一郎・岡本 洋・中島秀二・勝田浩章・平林秀夫・松村 仁・森野美智代・本城義晴・田村文代・由良里枝・鷺山犬昌・藤原敏子・尾崎二三代・村上五月・小川 伸・小牧朝男・吉村晴雄・坪倉愛子・森 秀雄・城下則行・小國喜市郎・藤原多津子・岩佐正一・石井 清・石嶋文恵・石田寿子・嵯峨根清一・堀口百合子・大江田洋子・安達定雄・大垣鉄雄・城下 勇・安田正夫・田宮節子・新井俊一・金久富美子・黒川英恵・吉岡つや子・入江敏夫・上田辰巳・藤原悦子・増田英男・今西百合子・岸田町子・寺田悦男・中島睦子・中西 保・中村隆子・中村登紀江・深田みち代・藤原まさ子・山本 博・吉岡昌

- 三・吉田美恵子・池田健一・櫻井 保・高野貞子・高野昭七・立野行夫・坪倉孝一・坪倉利恵子・堂本茂夫・藤原慶治・松井伊津子・松本一夫・森 和夫・森 正雄・山本貴美子・吉岡美明・田家フミ子・石河季夫・入江君子・高橋かね子・安達文代・森 繁夫・山本 守・白波瀬篤子・沖 令子・松本富代・中村佳代子・栗倉隆夫・末次和雄・堀 か江・坪倉初江・坪倉美代子・大石四郎・大橋弘之・岡崎 巖・日下部富雄・日下部安子・能勢貞雄・林 敬祐・谷口勝江・岸本久幸・長砂幸男・日下部昭一郎・奥田栄吉・藤原 諭・阪井義彦・木下照夫・高田正彦・日下部好弘・小幡利満・山下 進・山下幸子・井舎千代美・木村豊子・井尻たづ子・和田啓美・辺見 律・津久田さつき・井内美智子・岡所文之・岡田桂子・岡田すみこ・藤原郁恵・大西絹子・小西キヌ子・小滝初代・松崎才枝
- 注2 『昭和2年3月7日北丹後地震報告 京都府測候所調査』 京都府測候所 1927
 國富信一「四、北丹後列震に現はれたる断層」『驗震時報』第3巻第1号 1927
 國富信一・鷺坂清信「十、北丹後列震激震区域踏査報告」『驗震時報』第3巻第1号 1927
 活断層研究会編『活断層研究』6 活断層研究会 1989 72~80頁参照
 網野町誌編さん委員会『網野町誌』上巻・中巻 網野町 1994
 宇佐美龍夫『新編 日本被害地震総覧』東京大学出版会 1996
 寒川 旭『揺れる大地 日本列島の地震史』同朋舎 1997
- 注3 久保哲正「地震と遺跡」(『古代学研究』138 古代學研究會) 1997
 細川康晴「京都府北部の地震痕跡」(『古代学研究』138 古代學研究會) 1997
 増田孝彦・岡崎研一「丹後国営農地(東部地区)関係遺跡昭和62・63、平成3年度発掘調査概要 (1) 遠所古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第50冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
 石崎善久「丹後国営農地(東部地区)関係遺跡昭和62・63、平成3年度発掘調査概要 (3) 通り古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第50冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注4 有井広幸・有井宏子「京都府における古墳時代祭祀」(『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』東日本埋蔵文化財研究会) 1993
- 注5 坂 靖・青柳泰介「井戸遺跡・南郷(丸山・大東)遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』1994年度 奈良県立橿原考古学研究所) 1995
- 注6 穂積裕昌ほか『城之越遺跡—三重県上野市比土—』(三重県埋蔵文化財調査報告99-3 三重県埋蔵文化財センター) 1992
- 注7 宮島義和・寺内隆夫「屋代遺跡群」(『シンポジウム1 水辺の祭祀』日本考古学協会三重県実行委員会) 1996
- 注8 『丹後国風土記逸文』(秋本吉郎『風土記』岩波古典文学大系2) 1958
- 注9 釋 龍雄ほか『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会 1977
- 注10 『京都府遺跡地図』第1分冊には記載されていないが、国営農地開発事業(二箇団地)の造成に伴う事前調査で新たに発見された。2基の古墳からなり、平成9年度、2号墳に隣接する古墳状隆起を当調査研究センターが発掘調査した。調査の結果、自然地形であることがわかった。
- 注11 「苗代城跡発掘調査報告書」(『京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書』第19集 峰山町教育委員会) 1997
- 注12 石崎善久「金谷古墳群(1号墓)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第66冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注13 国営農地開発事業(二箇団地)の造成中に発見され、京都府教育委員会が調査を実施した。

- 注14 杉原和雄「京都府北部の須恵器生産について」(『丹後郷土資料館報』2 京都府立丹後郷土資料館) 1981
また、丹後郷土資料館長谷川達氏の御教示により再度踏査を行ったところ、須恵器片を採集した。
- 注15 久保哲正ほか『権現山古墳発掘調査概報』久美浜町教育委員会 1984
- 注16 『丹波の古墳』I 山城考古学研究会 1983
- 注17 田中光浩「七尾南古墳群について」(『京都府埋蔵文化財情報』第11号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984.3
- 注18 中川和哉「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和63年度発掘調査概要 (1)スクモ塚古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注19 土器については当調査研究センター主任調査員竹原一彦、調査員野々口陽子の教示を得た。
- 注20 河野一隆「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成6年度発掘調査概要 2. 奈具墳墓群・奈具古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注21 注16に同じ
- 注22 遺物については『大山墳墓群』丹後町教育委員会 1983
- 注23 注17に同じ
- 注24 注18に同じ
- 注25 『愛宕山9号墳発掘調査報告書』加悦町教育委員会 1975
- 注26 注15に同じ
- 注27 権現山出土壺棺については、4世紀にさかのぼる可能性がある。
- 注28 『立命館大学 文学部学芸員課程研究報告 第4冊—鳴谷東古墳群第3・4次発掘調査概報』立命館大学文学部 1992
- 注29 森 正「176号関係遺跡発掘調査概要 (1)内和田古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第49冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注30 「愛宕山古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1966)』京都府教育委員会) 1966
- 注31 肥後弘幸「墓壇内破碎土器供献—近畿北部弥生墳墓土器供献の一樣相—」(上)・(下)(『みずほ』第12・13号 大和弥生文化の会) 1994
- 注32 松尾史子「国営農地開発事業関係遺跡平成8年度発掘調査概要 [2]天王山A5号墳」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1997)』京都府教育委員会) 1997
- 注33 岩崎浩一「天王山古墳群」(『京都府久美浜町文化財調査報告』第19集 久美浜町教育委員会) 1997
- 注34 黒坪一樹「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成8年度発掘調査概要 (6)天王山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第76冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注35 松井忠春「浦明遺跡」(『久美浜町文化財調査報告』第3集 久美浜町教育委員会) 1980
- 注36 増田孝彦・岡崎研一ほか『遠所遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第21冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注37 マグハンドHMC-10Aカネテック株式会社製のものを使用した。
- 注38 堤 圭三郎「太田2号墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1970)』京都府教育委員会) 1970
- 注39 増田孝彦・石崎善久「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成元年度発掘調査概要 (1)太田古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第39冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

- 注40 三好博喜「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要 (2)桃山古墳群」
(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注41 「谷垣古墳群18・19号墳」現地説明会資料 久美浜町教育委員会 1997.10.29
- 注42 田代 弘「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成6年度発掘調査概要 (9)北谷古墳群」
(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注43 筒井崇史「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成5年度発掘調査概要 (7)女布北遺跡」
(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

付 載

国営農地開発事業に伴う発掘調査抄録(当センター分)

伊野近富

1. 左坂古墳群(概報60冊 1994年)

所在地 中郡大宮町周枳小字左坂

調査期間 平成5年5月～平成6年3月

概要 B支群(1～4号墳、6～8号墳、32・33号墳)、C支群(21～23号墳)、G支群(10～13号墳)の調査を実施した。

いずれも、方形の木棺直葬墳である。特に、G支群の埋葬施設については、明瞭な中心主体部と、それに付随する小型の主体部によって構成されている。時期は古墳時代初頭頃である。

2. 左坂横穴群(概報60冊 1994年)

所在地 中郡大宮町周枳小字左坂

調査期間 平成5年5月～8月

概要 B支群は13基調査した。1・2・6号横穴には焼骨が納められていた。出土遺物には、須恵器長頸壺・横瓶・杯、土師器甕・杯などがある。時期は7世紀後半から8世紀前半までであるが、7・9号横穴は平安時代末期に再利用されている。

3. 芋谷遺跡(概報60冊 1994年)

所在地 中郡大宮町口大野小字芋谷

調査期間 平成4年11月～12月

概要 製鉄炉1基、登り窯状炭窯3基、伏焼き式炭窯2基、土器埋納土坑1基が確認された。製鉄炉は、いわゆる長方形炉で、その下部には石材が据えられていた。土坑から出土した土器は土師器甕で、奈良時代後半のものである。

4. 奈具谷遺跡(概報60冊 1994年)

所在地 竹野郡弥栄町溝谷

調査期間 平成4年6月～10月

概要 奈具谷遺跡は、奈具遺跡のある丘陵の南の谷にある。地表下2～3mで、弥生時

代中期の遺構を確認した。それは、杭と板で護岸した水路で、その一部にトチノミの加工場を確認した。

5. 溝谷古墳群(概報60冊 1994年)

所在地 竹野郡弥栄町溝谷

調査期間 平成5年4月～7月

概要 1～3号墳の3基を調査した。1号墳は墳丘の部分的調査であったが、他の2基は全面的に調査を行った。

1号墳は一辺15m以上の方墳で、土製模造品などを確認した。時期は古墳時代前期末頃であろう。2号墳は直径28mの円墳で、長さ約10m・幅約3mの大規模な主体部である。棺は長さ約8mの組合式木棺で、棺内床面に小礫を敷き詰めていた。出土遺物には銅鏡1面がある。腐蝕のため文様は明瞭ではない。直径約9.4cmである。

6. 女布北遺跡(概報60冊 1994年)

所在地 熊野郡久美浜町女布

調査期間 平成5年8月～12月

概要 調査地はA・B地区の2か所である。A地区には鶏塚古墳がある。横穴式石室墳であるが、開墾により上部は削平されていた。この他、平安時代の土器溜まりと時期不明の掘立柱建物跡1棟、ピット多数を検出した。また、黒ボク層から縄文時代早期や、弥生時代中期の土器を検出した。

B地区では、弥生時代後期末から古墳時代前期頃の竪穴式住居跡3基を確認した。

7. 薬師7号墳(概報60冊 1994年)

所在地 熊野郡久美浜町女布小字薬師

調査期間 平成5年5月～6月

概要 木棺直葬墳1基を確認した。墳丘の東側は中世の寺造成のため、削平されていた。遺物は須恵器の破片が出土した。時期は古墳時代後期である。

8. (島津)遠所古墳群(概報65冊 1995年)

所在地 竹野郡網野町島津小字遠所

調査期間 平成5年8月～9月

概要 17・18号墳の2基を確認した。いずれも木棺直葬墳である。17号墳では、墓壇上に甕棺を据えていた。時期は古墳時代前期である。報告では、古墳群名は網野となっているが、島津に統一した。

9. 奈具・奈具岡古墳群

所在地 竹野郡弥栄町溝谷(概報65冊 1995年)

調査期間 平成6年5月～10月

概要 奈具古墳群では、3基(13～15号墳)を確認した。いずれも木棺直葬墳である。壺棺も出土した。時期は古墳時代中期頃である。

奈具墳墓群は、当初古墳時代と考えていたが、調査の結果、弥生時代中期の墳墓群(7基)であることが確認された。墳丘墓と方形周溝墓が同一丘陵上で確認できた。この調査地の西方約100mには、同時期の集落跡である奈具遺跡がある。

10. 奈具岡南古墳群(概報65冊 1995年)

所在地 竹野郡弥栄町溝谷

調査期間 平成6年4月～12月

概要 5号墳を調査した。当古墳群の調査としては初めてのものである。丘陵のもっとも上位にある。直径約7mの小規模な横穴式石室墳である。上部は削平されており、石材もほとんど残っていない。出土遺物には金環や、赤彩高杯などがある。時期は古墳時代終末期か。

11. 黒部(製鉄)遺跡(概報65冊 1995年)

所在地 竹野郡弥栄町黒部

調査期間 平成5年11月～平成6年2月

概要 黒部遺跡は、その後の調査によって石熊地区、仲谷地区、金屎地区、長芝原地区という、東西約600m・南北約400mの範囲に広がっていることが判明した。平成5年度は石熊地区を調査し、製鉄炉2基、登り窯状炭窯2基を確認した。

12. 糖谷城跡(概報65冊 1995年)

所在地 竹野郡弥栄町黒部

調査期間 平成6年9月～12月

概要 城跡本体ではなく、端の一部を調査した。ピットなどを検出したが、時期は不明である。

13. 裾谷横穴・遺跡(概報65冊 1995年)

所在地 中郡大宮町

調査期間 平成6年5月～10月

概要 枝様に張り出した丘陵の間の窪地に調査地はある。横穴はその窪地の上部の丘陵腹部にあり、2基確認した。出土遺物は須恵器・土師器がある。

裾谷遺跡は横穴より一段低い窪地にある。鍛冶滓などが出土したことから、この地で鍛冶を行

った可能性がある。また、竪穴式住居跡17基・掘立柱建物跡7棟を確認した。珍しい遺物としては土馬がある。

14. 左坂古墳群(概報65冊 1995年)

所在地 中郡大宮町周枳

調査期間 平成6年7月～平成7年3月

概要 B支群の10～14・17号墳を調査した。ほとんどは木棺直葬墳である。出土遺物には、鉄剣・竪櫛・鉈などがある。

15. 北谷古墳群(概報65冊 1995年)

所在地 熊野郡久美浜町女布

調査期間 平成6年4月～10月

概要 北谷古墳群は、10基から構成されている。その内、当センターが1号墳から5号墳までを調査した。1号墳は直径30m以上の中規模古墳である。主体部は1基で大規模な墓壙を確認した。墓壙上面には古墳時代前期の小型丸底壺などの土器が置かれていた。主体部から石製の紡錘車が出土した。

16. (島津)遠所古墳群(概報71冊 1996年)

所在地 竹野郡網野町島津小字遠所

調査期間 平成7年5月～8月

概要 16号墳と19～21号墳を調査した。楕円形に近い方墳で、主体部は2基である。時期は古墳時代前期か。21号墳の主体部からは鉄刀、鉄鏃、刀子が出土した。時期は古墳時代中期である。

最も高所にある16号墳は、中世に城として利用されたことが判明した。南側に不整形に突出させ、平坦地を増やしている。

17. 中原城跡(概報71冊 1996年)

所在地 中郡峰山町橋木小字新蔵

調査期間 平成7年5月～7月

概要 中原城跡は峰山から網野へ向かう道近くに所在する。しかし、今回の調査地内では城の兆候を知ることはできなかった。

18. 左坂墳墓群・左坂古墳群・左坂横穴群

所在地 中郡大宮町周枳

調査期間 平成7年4月～8月

概要 今回の左坂墳墓群は、左坂古墳群G支群の22号墳周辺で確認した。墳墓は4基で、主体部は11基である。時期は弥生時代後期である。

左坂古墳群はC支群の6～13号墳を対象とした。これらは以前に表土掘削が終了していたもので、主体部の調査を集中して実施した。いずれも木棺直葬墳で、主体部は1～2基ずつである。遺物には鉄鎌やノミなどがある。時期は古墳時代中期から後期にかけてである。

左坂横穴群では、A支群の1～4号横穴を調査した。玄室部分がフラスコ形を呈するタイプである。遺物は須恵器杯や土師器椀などである。

19. 枯木谷遺跡(概報71冊 1996年)

所在地 中郡大宮町奥大野小字枯木谷

調査期間 平成7年9月～11月

概要 A～C地区の3か所を調査した。この内、A地区では流路を確認した。埋土から奈良時代後半頃の遺物が包含されていた。中には墨書土器も含まれており、一般的な集落とは違った内容である。

B地区では掘立柱建物跡1棟を検出した。

20. 南谷古墳群(概報71冊 1996年)

所在地 熊野郡久美浜町壱分小字南谷

調査期間 平成7年7月～10月

概要 1・4号墳の2基を調査した。いずれも木棺直葬墳である。これらから出土した須恵器によれば、時期は古墳時代後期に相当する。なお、隣接する2・3号墳では、久美浜町教育委員会の調査によって、銅鏡1点が確認されている。

21. 黒部遺跡(概報73冊 1996年)

所在地 竹野郡弥栄町黒部小字仲谷・金屎

調査期間 平成6年4月～平成7年7月

概要 仲谷地区と金屎地区の調査を行った。仲谷地区では製鉄炉7基、炭窯27基を確認した。これらは小さな谷ごとにまとまりがある。すなわち、A地点では製鉄炉3基と炭窯12基のまとまりがあり、B地点では製鉄炉4基、炭窯1基のまとまりがある。しかし、C・E・F地点は炭窯のみが集中しており、大きく見れば仲谷地区という大きな単位で、鉄生産はまとまっていた可能性がある。

金屎地区では、K・L地点で製鉄炉を確認したが、炭窯はほとんどなかった。この結果によれば、大きな谷ごとで製鉄作業は完結していたわけではなく、隣接した谷を含めたまとまりがあったことがわかる。

22. 奈具谷遺跡(概報76冊 1997年)

所在地 竹野郡弥栄町溝谷小字奈具岡

調査期間 平成8年4月～7月

概要 今回の調査地は、平成4年度に調査した奈具谷遺跡の西約100mに位置する。調査地は樹枝状に張り出した丘陵の窪地にある。地形としては三方を丘陵に囲まれた地点である。遺構は上層と下層の2面があり、上層は溝と水路の護岸施設が確認できた。

下層では溝が確認できた。遺構は明確ではなかったが、プラント・オパール分析では、上層では稲作を行っていた可能性が高い。これとは対照的に、下層は溝と木道をつけるのみで、谷部の積極的な土地利用はみられなかった。出土遺物の中には、木剣などの優品がある。

23. 奈具岡遺跡(概報76冊 1997年)

所在地 竹野郡弥栄町溝谷小字奈具岡

調査期間 平成7年4月～2月、平成8年4月～7月

概要 7次と8次の調査を実施した。その結果、弥生時代中期後半の建物跡74基とともに、そこで行われた水晶製玉作り、鍛冶生産、鉄器、ガラス製玉作りなどの生産形態が明らかとなった。

24. 奈具岡遺跡(試掘)(概報76冊 1997年)

所在地 竹野郡弥栄町溝谷小字奈具岡

調査期間 平成8年5月

概要 7次と8次調査の奈具岡遺跡の南側で、ひとつの狭い窪地を隔てた地を調査したが、この地点までは玉作り生産や、集落が及んでいなかったことが明らかとなった。

25. 奈具岡北古墳群(概報76冊 1997年)

所在地 竹野郡弥栄町溝谷小字奈具岡

調査期間 平成7年4月～平成8年2月、平成8年4月～7月

概要 奈具岡北古墳群の調査としては初めてである。平成7年度には1～3・6・7号墳、平成8年度には4・5号墳を調査した。

特に、1号墳は重要な調査となった。全長約60mの前方後円墳で、平面形は不整形である。すなわち、丘陵を最大限に利用しており、後円部は楕円形である。また、前方部に関しても北西部は少し外へ流れており、全体の形はいびつである。

主体部は、2基確認できた。第1主体部は礫床をもつもので、墓壙上には陶質土器もしくは初期須恵器を置いていた。主体部の中には鉄剣や、多数の鉄鏃群があるほか、鉄矛があり、矛先と石突きとの出土位置から矛の長さを復原すると、約3.3mある。また、銅釦も出土した。古墳からの出土例はおそらく初めてのものである。

26. 奈良岡南古墳群(概報76冊 1997年)

所在地 竹野郡弥栄町溝谷小字奈良岡

調査期間 平成8年4月～平成9年1月

概要 奈良岡南古墳群は、およそ23基からなる古墳群である。この内、20基を調査した。各古墳は、木棺直葬を主要な埋葬施設とし、一部壺棺・土壙墓がある。副葬品は、少量ではあるが、鉄剣・鉄鏃などがある。時期は、古墳時代前期後半から後期までである。

27. 黒部遺跡(概報76冊 1997年)

所在地 竹野郡弥栄町黒部小字長芝原

調査期間 平成8年4月～5月

概要 黒部遺跡としてはもっとも奥の谷での調査である。製鉄炉2基、炭窯1基を確認した。形態は、1mほどの方形小形炭窯である。出土遺物は、少量の土師器で、時期は奈良時代から平安時代前期と思われる。

28. 天王山古墳群(概報76冊 1997年)

所在地 熊野郡久美浜町鹿野小字天王山

調査期間 平成8年6月～平成9年1月

概要 天王山古墳群は、A支群19基、B支群2基の合計23基で構成されている。この内、8基(天王山A支群13・17～21号墳、同B支群1・2号墳)を調査した。主体部は、木棺と石棺の二種がある。特に、A支群13号墳の石棺は、大きな墓壙(長さ約4.5m・幅約2.5m・深さ約1.6m)の中に設置されていた。上層には中世の経塚が埋置されていた。

A支群17号墳は木棺直葬墳で、銅鏡1面が出土した。

B支群1号墳は後期の木棺直葬墳で、その上層には中世の経塚が確認できた。青銅製の経筒が出土した。

29. シミズ谷城跡(概報79冊 1997年)

所在地 竹野郡弥栄町堤小字平野・シズ・山の神

調査期間 平成8年5月～9月

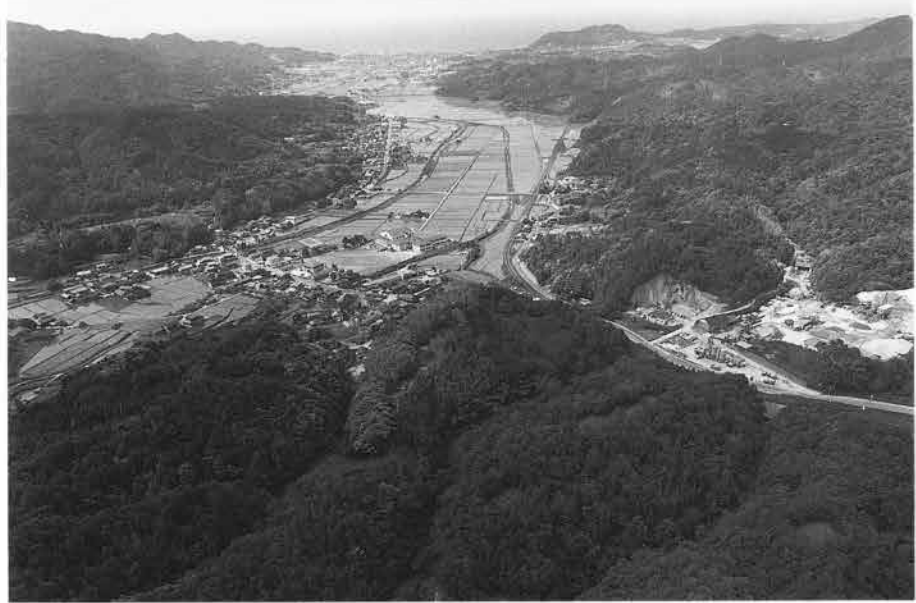
概要 シミズ谷城跡としては、A～C地区の3か所を調査した。A地区は、本来、周知されているシミズ谷城跡の奥の隣接地であるが、ここでは城に伴う施設は存在しなかった。B地区(小屋ヶ谷城跡)では、上層と下層の遺構面を二面確認できた。上層では、炉跡や建物基壇の一部を確認した。下層では、一辺約1.5mを越える土坑群がある。この中から、鉄釘・鉄鍋片・刀子状鉄製品などが出土した。また、銅製のおもりや「上吉」と墨書された白磁皿も出土した。

C地点では、古墳時代の遺構・遺物を確認できた。

圖 版

図版第1 スガ町古墳群

(1)スガ町古墳群遠景
(南から)



(2)第2区調査前
(北から)



(3)第3区調査前
(北から)



図版第2 スガ町古墳群



(1)第4区調査前全景
(北から)



(2)第4区南側調査前
地震痕跡
(北から)



(3)第5区調査前
地震痕跡
(北から)

図版第3 スガ町古墳群

(1)第6区調査前全景
(北東から)



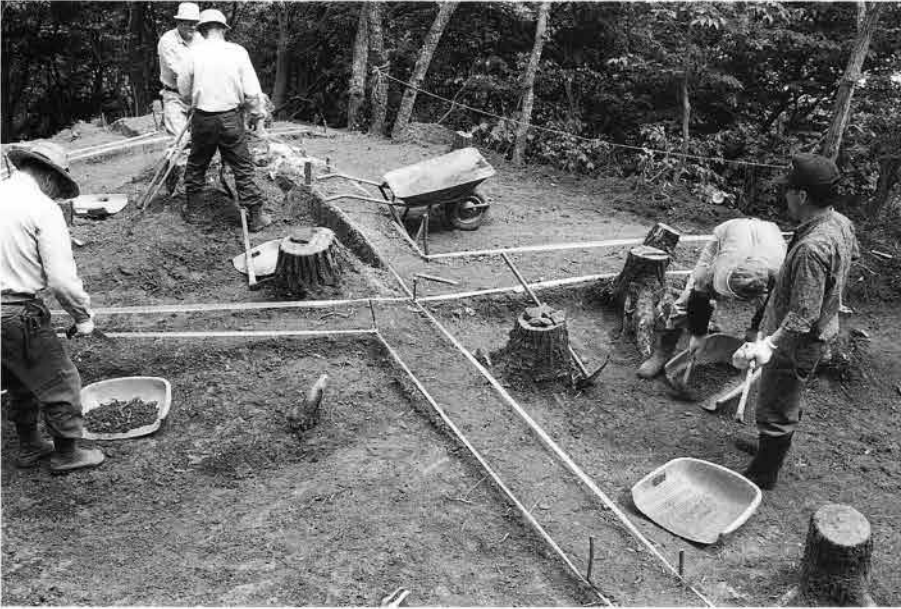
(2)B支群試掘トレンチ
(南から)



(3)第4区調査風景
(南から)



図版第4 スガ町古墳群



(1)第2区調査風景
(南から)



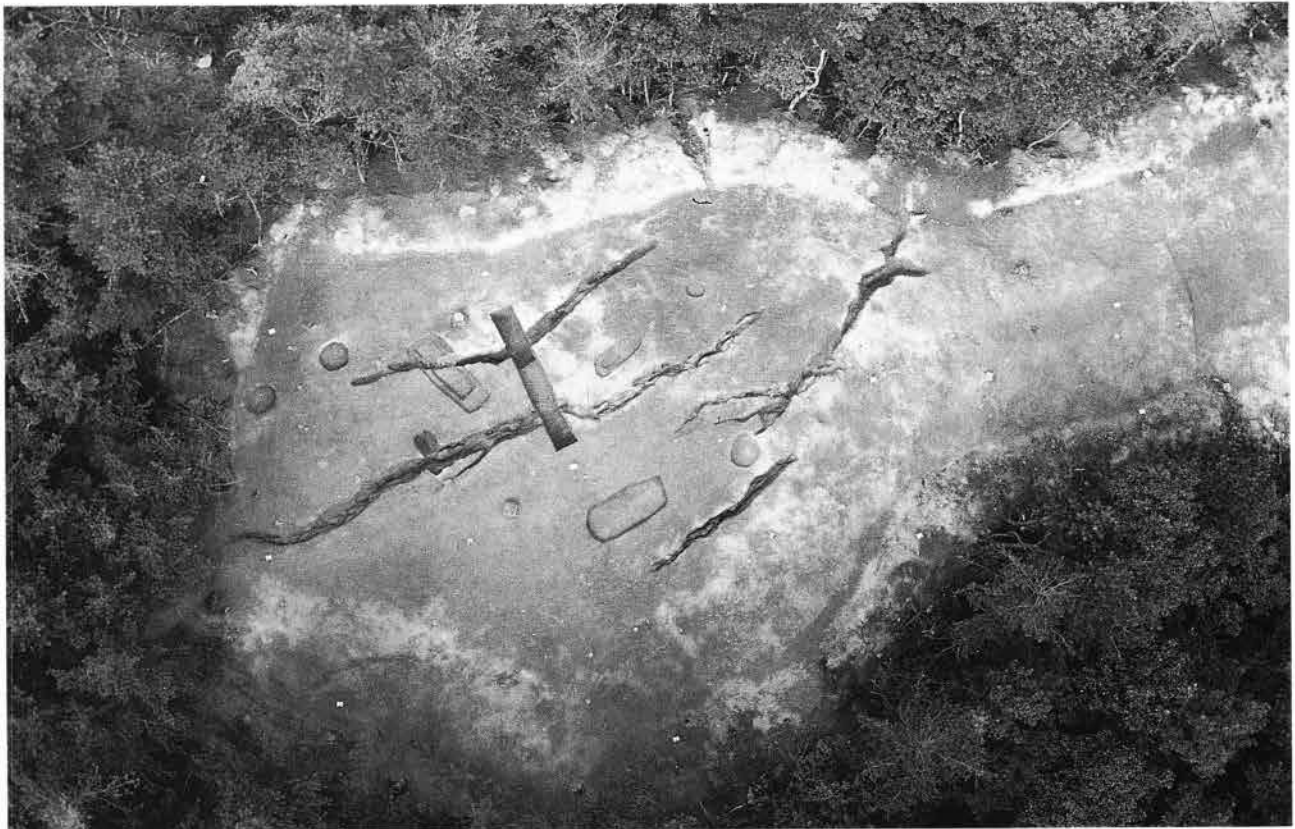
(2)第4区南側
地割れ内調査風景
(北から)



(3)第4区北側遠景
(南から)



(1)B-1号墳全景(垂直、右が北)



(2)B-3号墳全景(垂直、右が北)



(1)B-4号墳全景（垂直、上が北）



(2)C-4号墳全景（垂直、右が北）



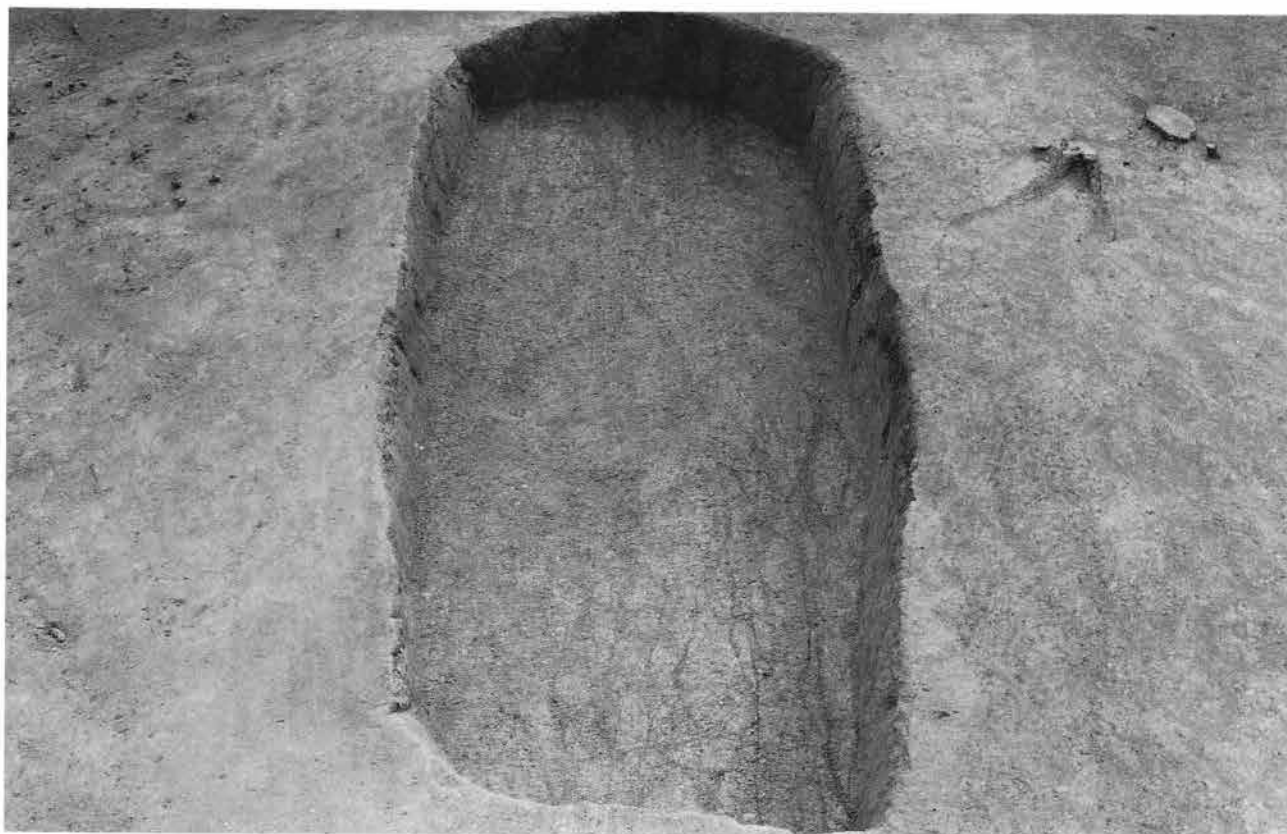
(1)第2区陥穴(東から)



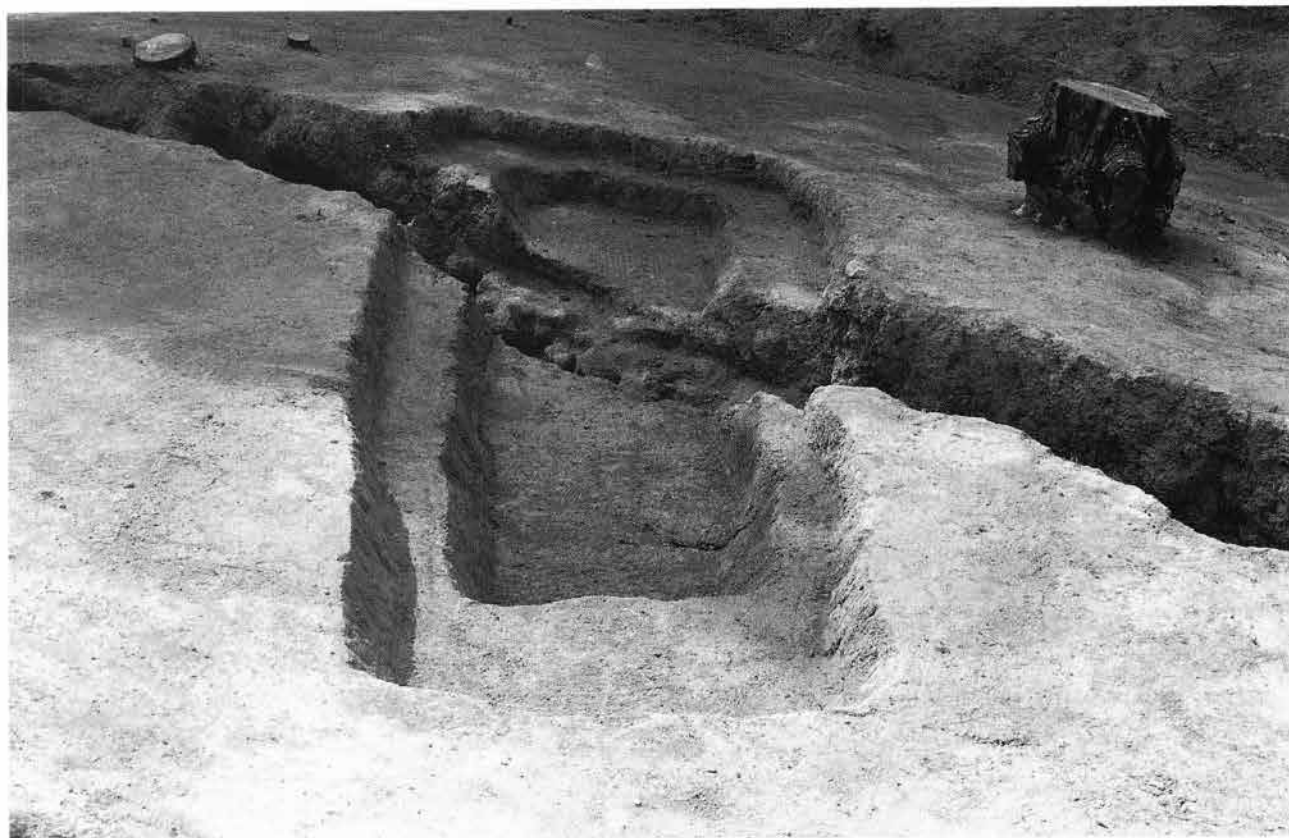
(2)第4区北側炭窯(西から)



(1)B-1号墳第1・第2主体部(東から)



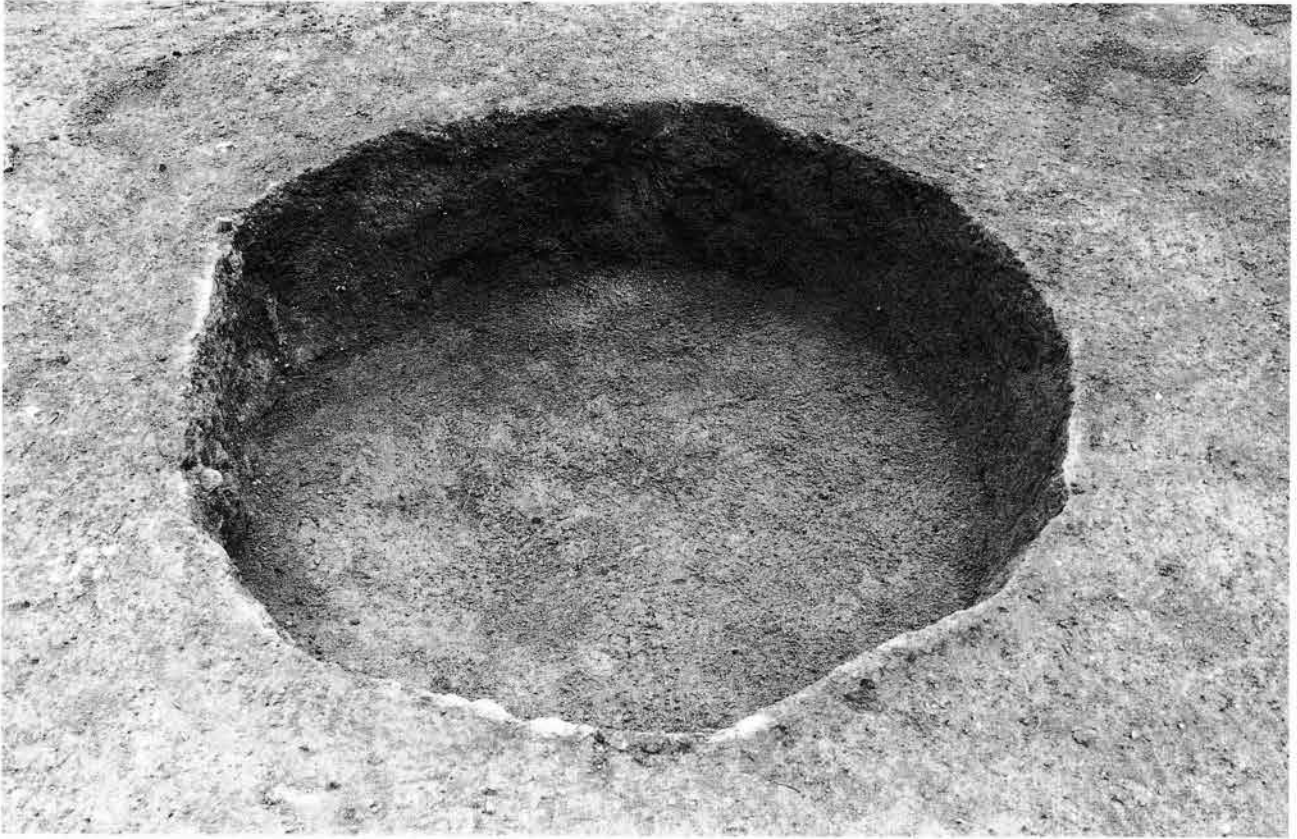
(2)B-3号墳第1主体部(北から)



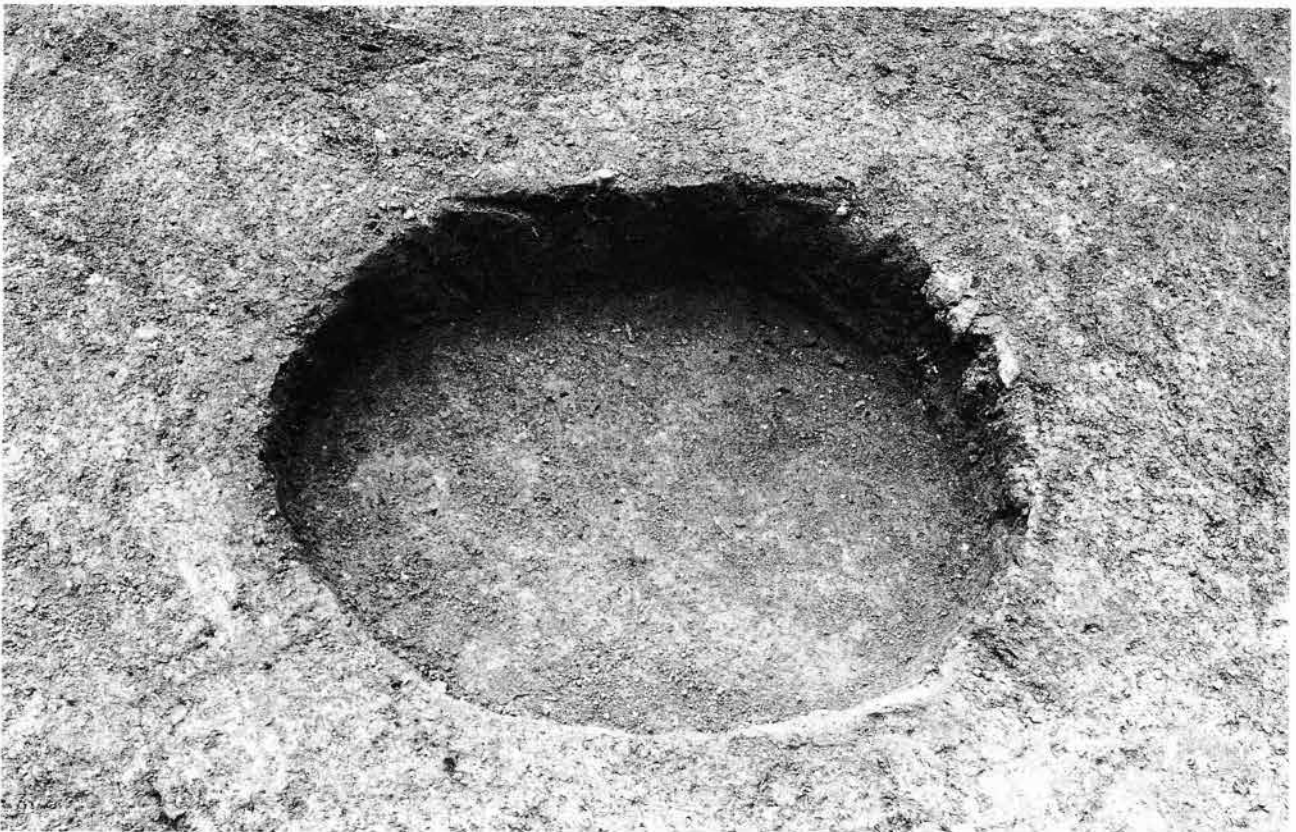
(1)B-3号墳第2主体部(東から)



(2)B-3号墳第2主体部と地割れ(南から)



(1)B-3号墳炭窯1 (西から)



(2)B-3号墳炭窯2 (西から)



(1)B-3号墳炭窯3 (南東から)



(2)B-3号墳土坑1 (西から)

図版第12 スガ町古墳群



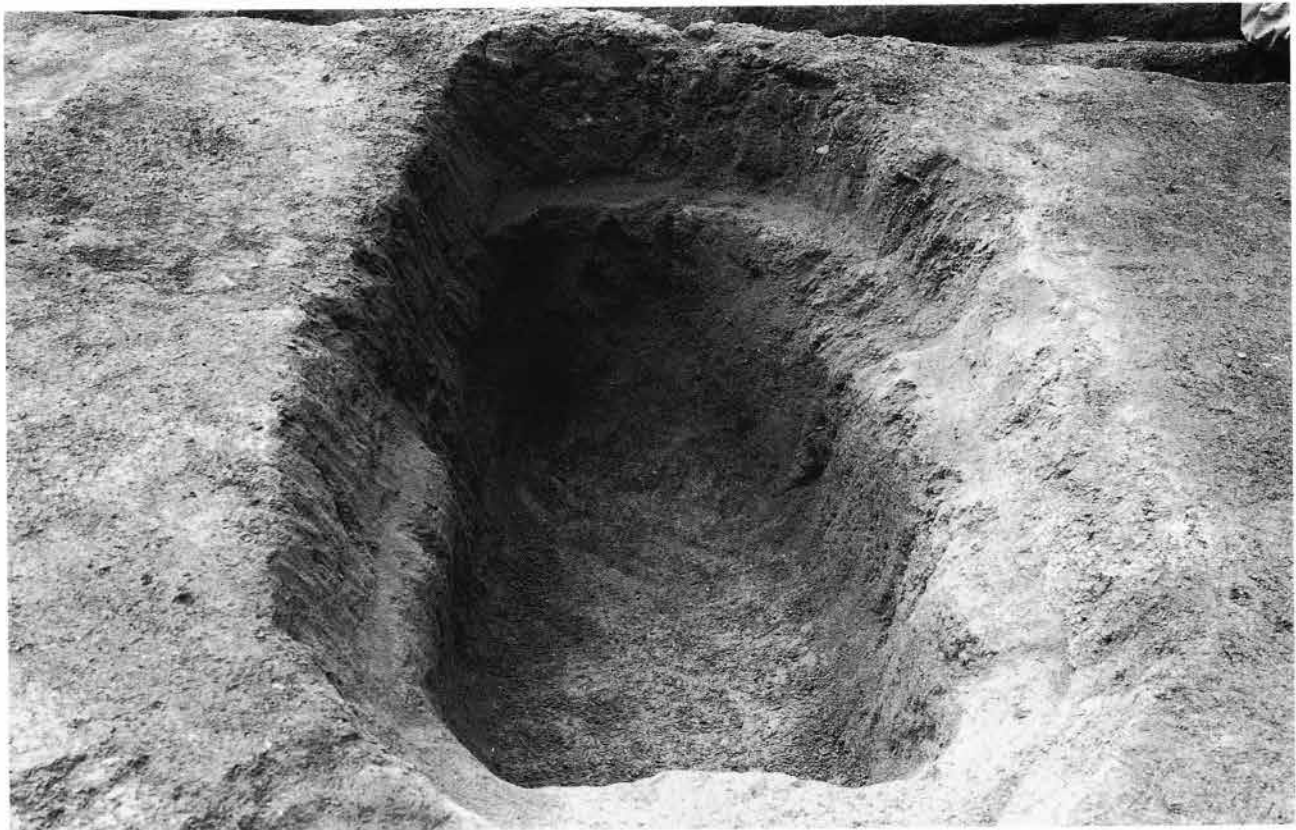
(1)B-4号墳第1主体部(東から)



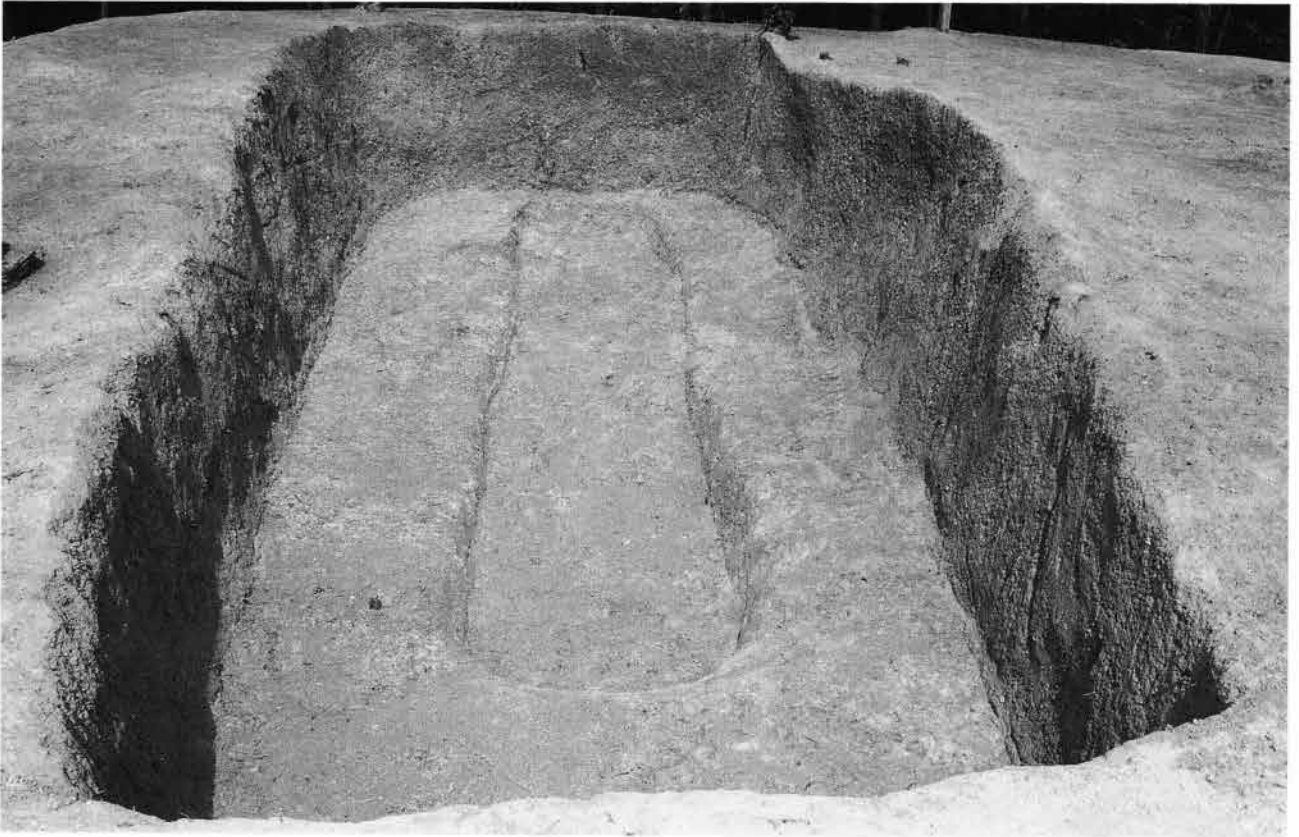
(2)B-4号墳第2主体部(北東から)



(1)B-4号墳第3主体部(西から)



(2)B-4号墳土坑(東から)



(1)C-4号墳第1主体部(南から)



(2)C-4号墳第2主体部(南から)



(1) C-4号墳第3主体部(南から)



(2) C-4号墳北東斜面炭窯群(北東から)



(1)B-3号墳墳頂部断ち割り(南から)



(2)B-4号墳墳頂部断ち割り(南東から)

(1) B-3号墳断ち割り断面
(南から)



(2) B-3号墳墳頂部地震痕跡
(南から)



(3) B-3号墳第2主体部
地震痕跡
(南から)





(1)B-4号墳断ち割り断面
(南から)



(2)B-4号墳東側地震痕跡
(北から)



(3)B-4号墳西側地震痕跡
(北から)

(1) A地点調査前全景
(南東から)



(2) A地点調査地全景
(南東から)



(3) B地点調査前全景
(南西から)





(1)B 地点調査地全景
(南西から)



(2)D 地点調査前全景
(南西から)



(3)D 地点調査地全景
(北東から)

(1)C地点調査前全景
(北東から)



(2)C地点第1トレンチ全景
(南から)



(3)C地点第1トレンチ炭窯
(南から)



図版第22 生野内城跡



(1) E地点調査前全景
(北から)



(2) E地点調査地全景
(北から)

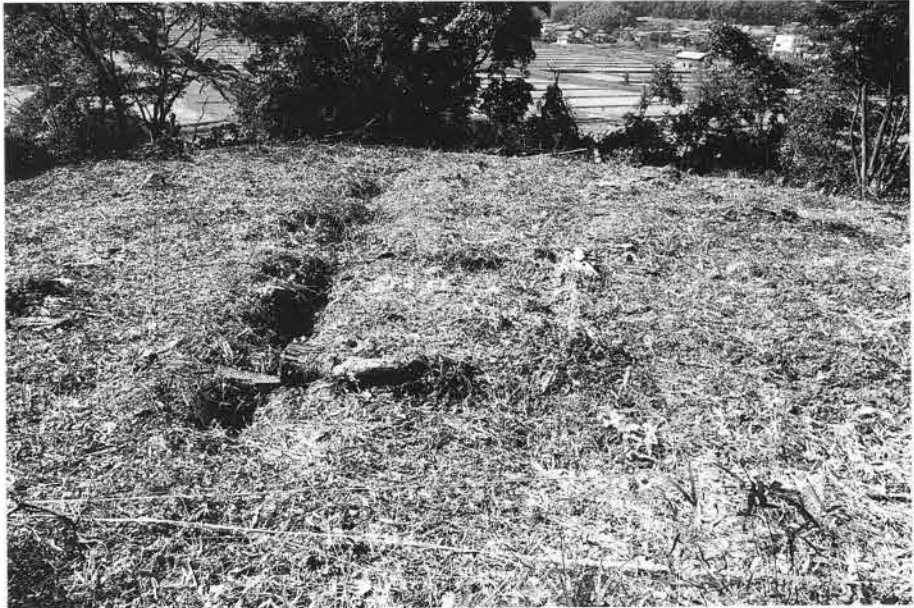


(3) E地点第5トレンチ地震痕跡
(北から)

(1)調査地遠景
(南から)

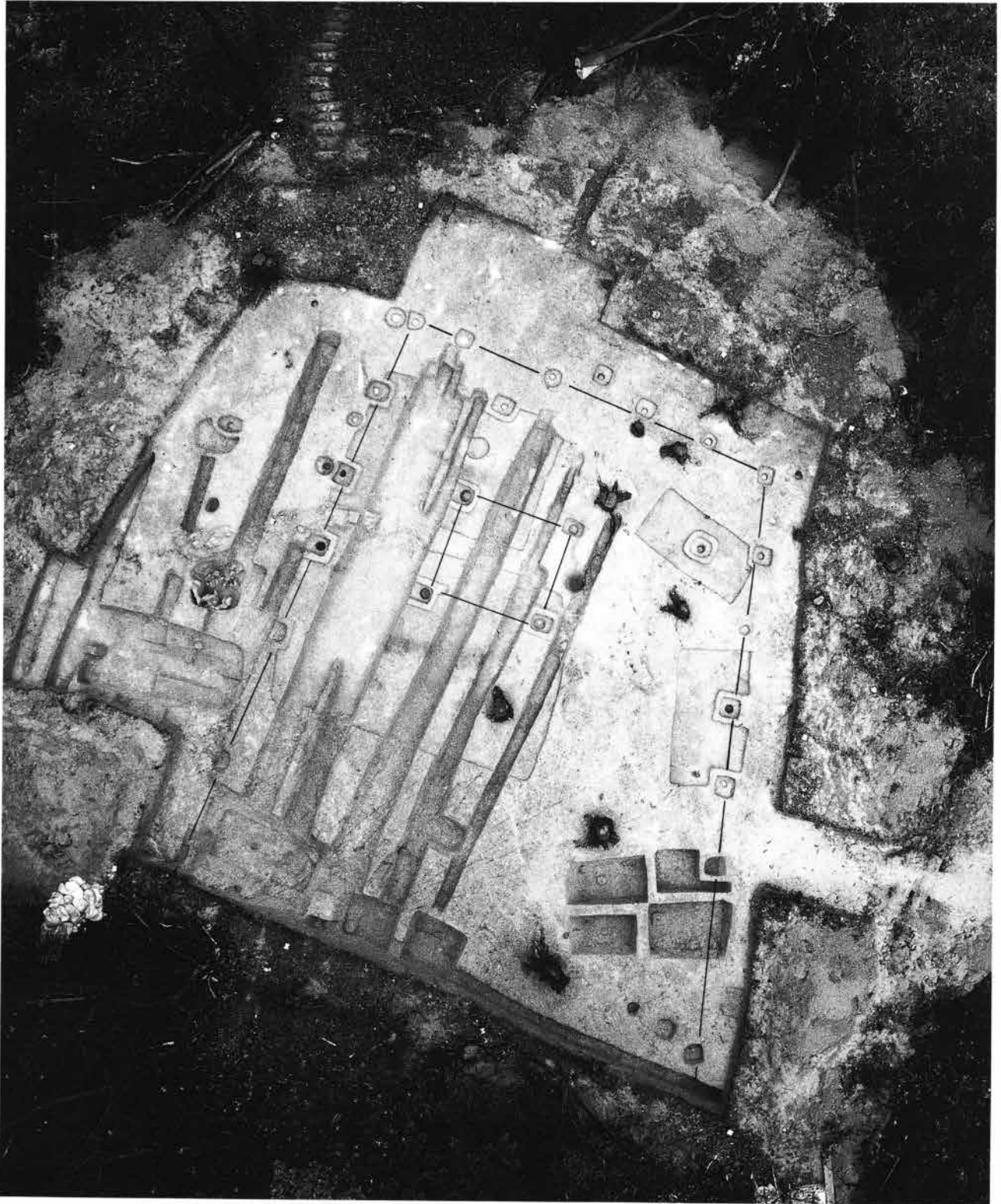


(2)調査前調査地全景
(北東から)



(3)城跡施設調査風景
(北東から)





浅後谷南城跡施設全景（右下が北）



(1)弥生時代墳墓第1 主体部
(北西から)



(2)第1 主体部副葬品出土状況
(南西から)



(3)第1 主体部玉類出土状況
(南東から)



(1)第1 主体部埋土断面
(南東から)



(2)第1 主体部木棺痕跡検出状況
(南西から)



(3)第1 主体部南東部木棺裏込め土・
断ち割り断面
(南西から)

(1)第2主体部
(南東から)



(2)第2主体部副葬品出土状況
(南西から)



(3)第2主体部東南部埋土断面
(南西から)





(1)第4主体部
(南西から)



(2)第4主体部
ガラス製勾玉出土状況
(北西から)



(3)第9主体部
(南西から)



(1)第7トレンチ導水施設検出状況（東から）



(2)同・堰止め部検出状況（東から）



(1)導水施設本体
部分(1) (北東から)



(2)導水施設本体
部分(2) (北から)



(3)導水施設本体
部分(3) (北西から)

(1)第3トレンチ流路跡
検出状況(北から)



(2)第3トレンチ流路内・
土器溜まり検出状況
(北東から)



(3)第3トレンチ流路内・
土器溜まり検出状況
(垂直、アップ)



図版第32 芋野城跡



(1) 芋野城跡全景
(北から)



(2) 第2区調査前
(南西から)



(3) 第2区頂部掘削状況
(南西から)

(1)第1区調査前
(東から)



(2)第1区頂部掘削状況
(西から)



(3)第1区尾根部掘削状況
(北西から)



図版第34 芋野城跡



(1)第3区調査前
(北西から)



(2)第3区頂部～裾部掘削状況
(北西から)



(3)第3区土層断面
(北から)

(1)調査地全景
(東から)



(2)調査地全景
(北から)



(3)愛宕神社1号墳全景
(北から)



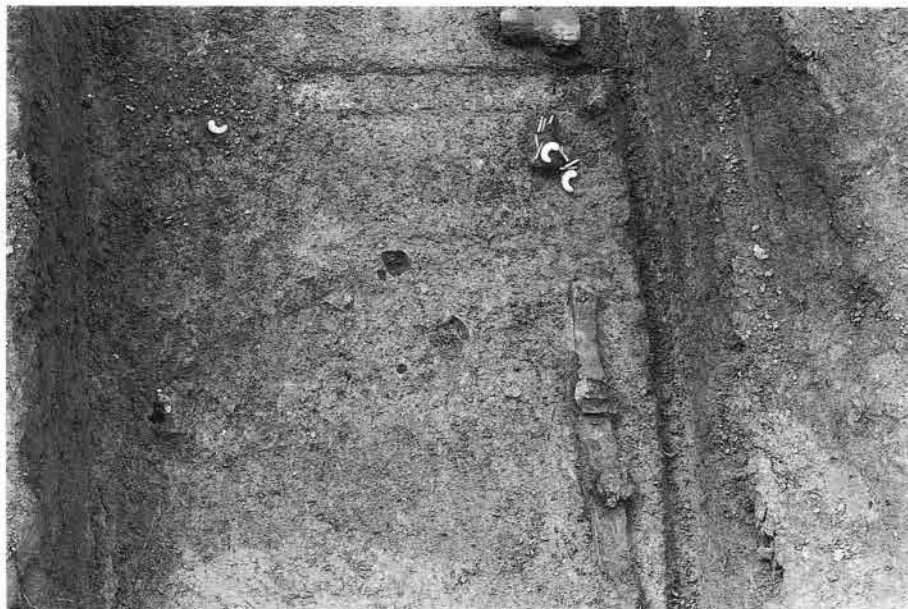


(1) 1号墳全景（北から）



(2) 1号墳主体部（南から）

(1) 1号墳主体部
主室北側（南から）

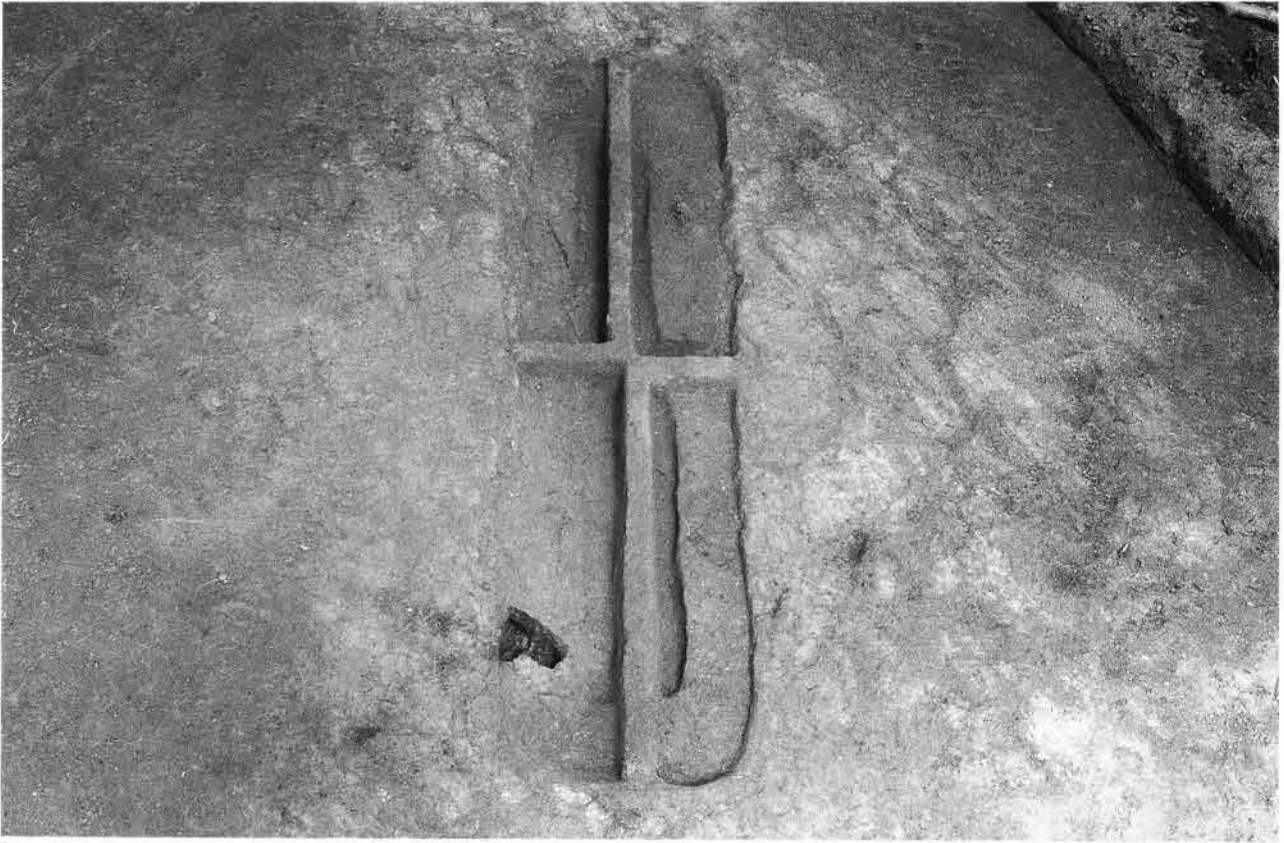


(2) 1号墳主体部
主室南側小口部分（南から）



(3) 1号墳主体部
主室内銅鏡出土状況（北から）



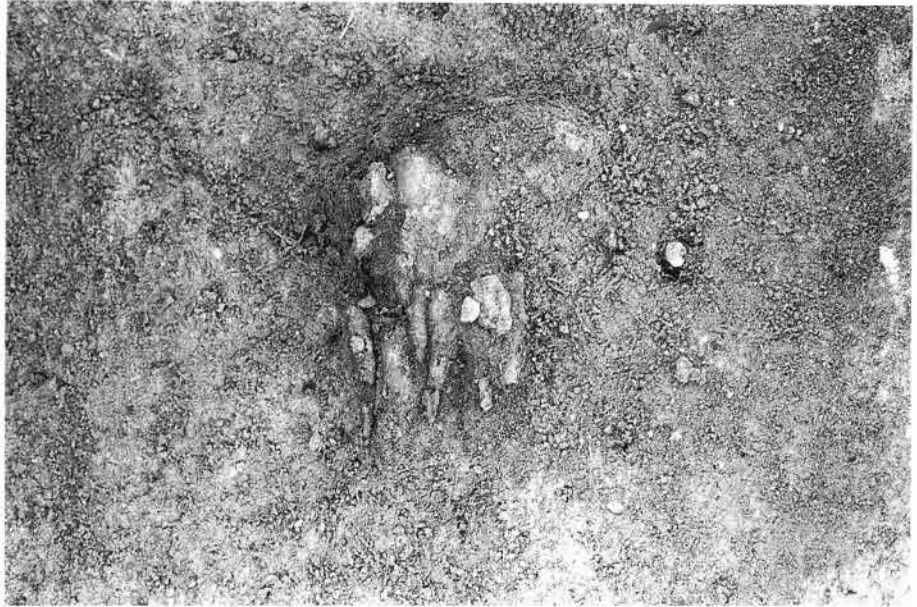


(1) 3号墳主体部（南から）



(2) 中世墓（西から）

(1) 3号墳主体部棺外
鉄鏃出土状況
(上が北)



(2) 3号墳主体部棺内
鉄剣出土状況
(南東から)



(3) 3号墳主体部棺内
鉄製鋤先・鉤出土状況
(下が北)





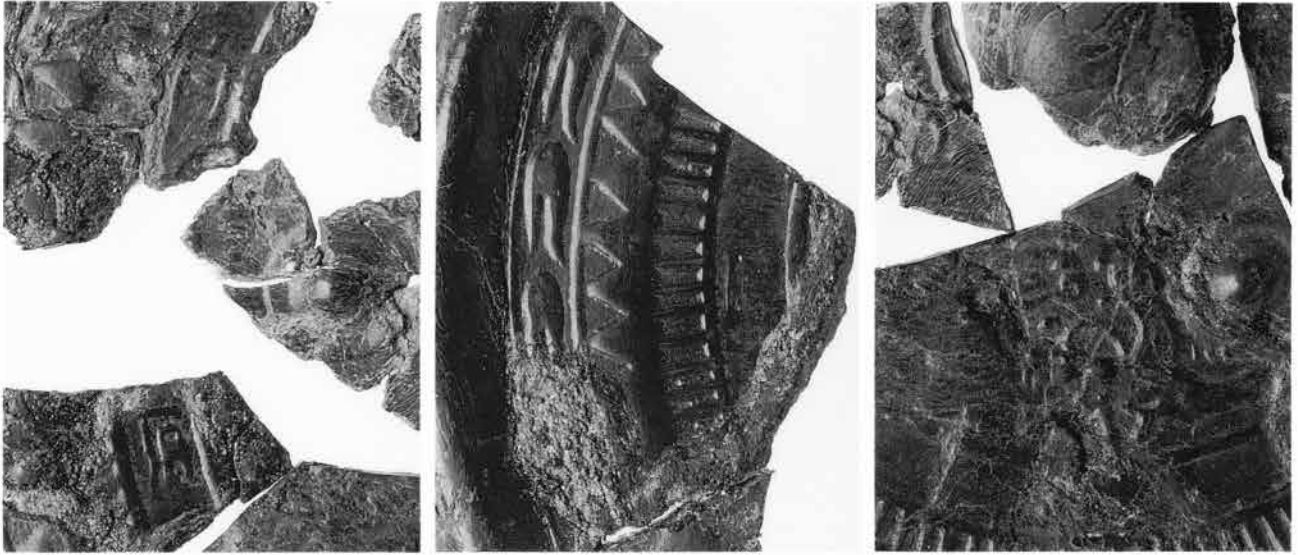
(1) 1号墳主体部断面
(北から)



(2) 3号墳主体部遺物出土状況
(南から)

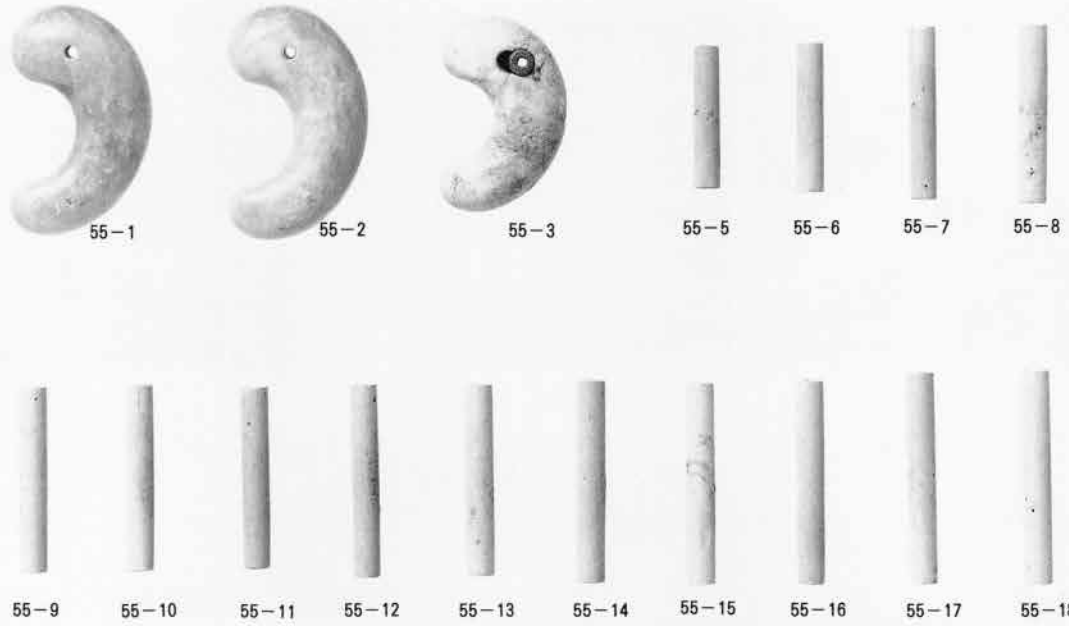


(3) 中世墓遺物出土状況
(左が北)



出土遺物(1) 1号墳四獣形鏡

図版第42 愛宕神社古墳群



出土遺物(2) 玉類 (上: 勾玉・管玉、下: ガラス小玉)



第51図



54-9



54-10



54-8



54-1



54-2



54-3



54-7



54-6



54-5



54-4



54-20



54-8



第51図



第53図



(1)調査地全景（北から）



(2)調査地全景（下が北）



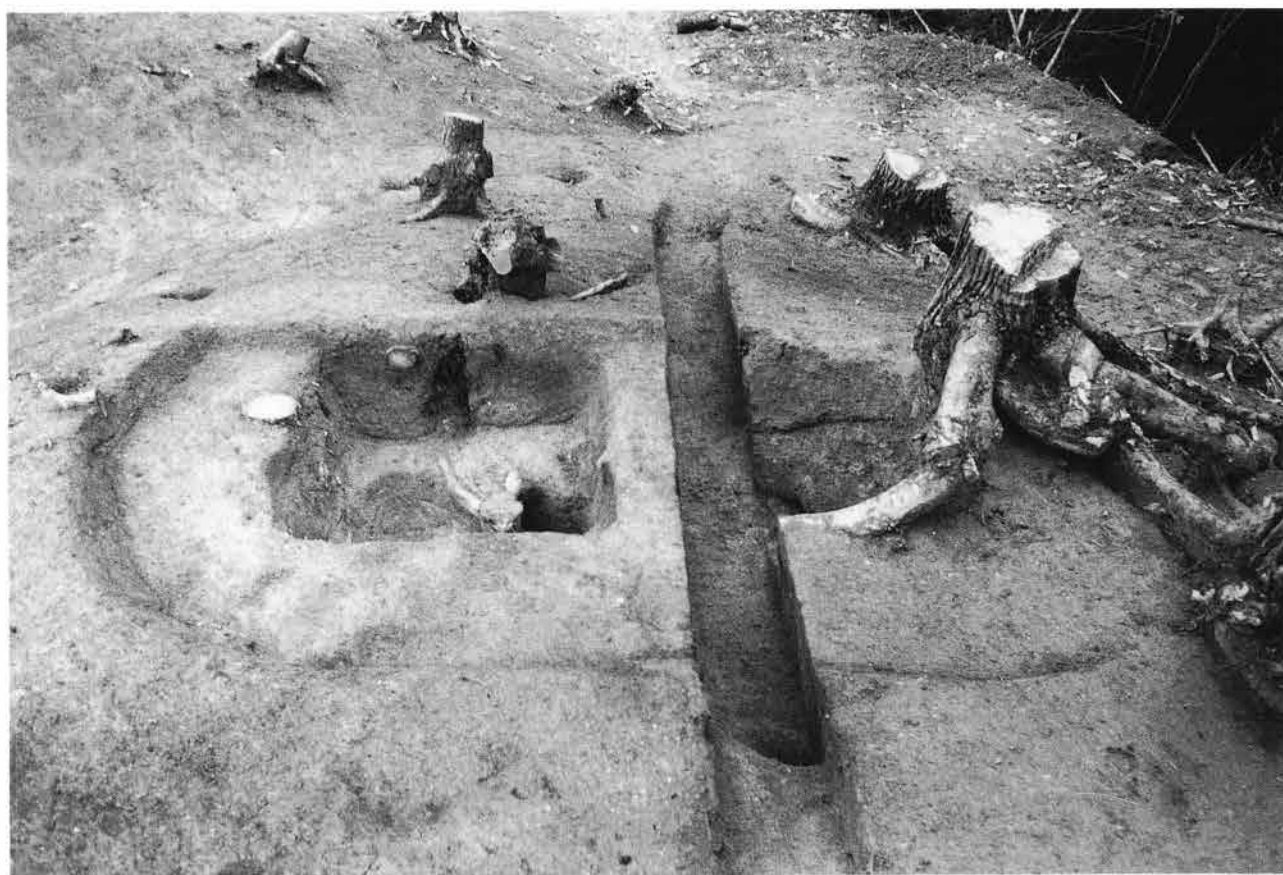
(1) 9・10号墳調査前（南から）



(2) 9号墳主体部（西から）



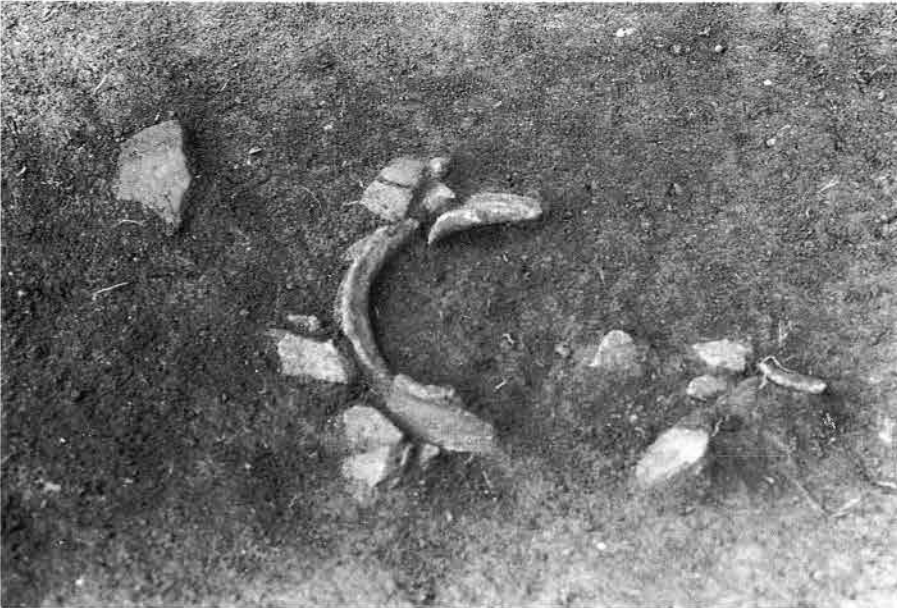
(1)10号墳主体部（東から）



(2)11号墳主体部（北から）



(1)中世墓（北から）

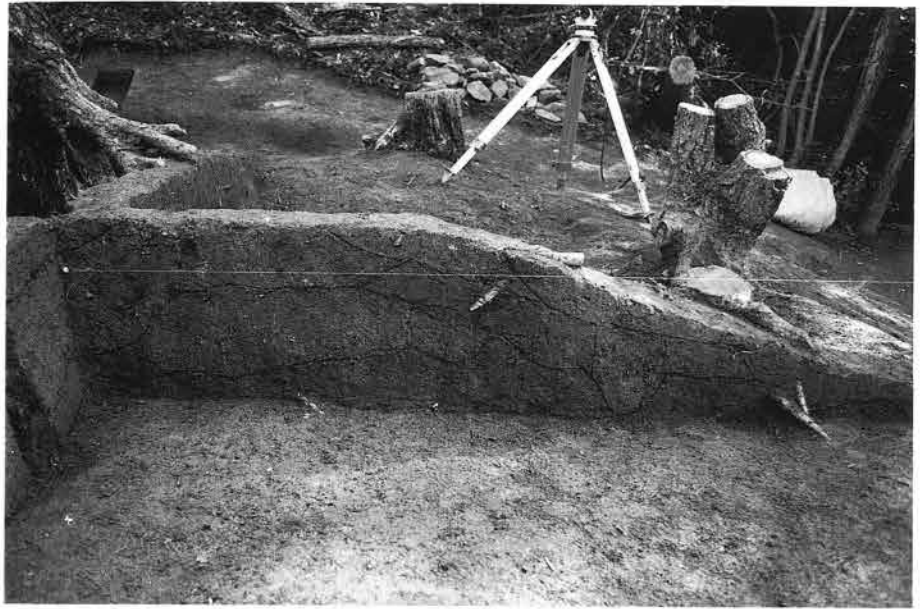


(2)10号墳溝内遺物出土状況
（下が北）



(3)11号墳溝内遺物出土状況
（下が北）

(1) 10号墳墳頂部西断面
(北から)



(2) 9・10号墳間溝断面
(西から)



(3) 9号墳南斜面断面
(西から)



図版第50 茶カス古墳群



(1)中世墓断面
(東から)



(2)9号墳東裾土坑断面
(南から)



(3)出土遺物
上：11号墳溝、
下：10号墳溝

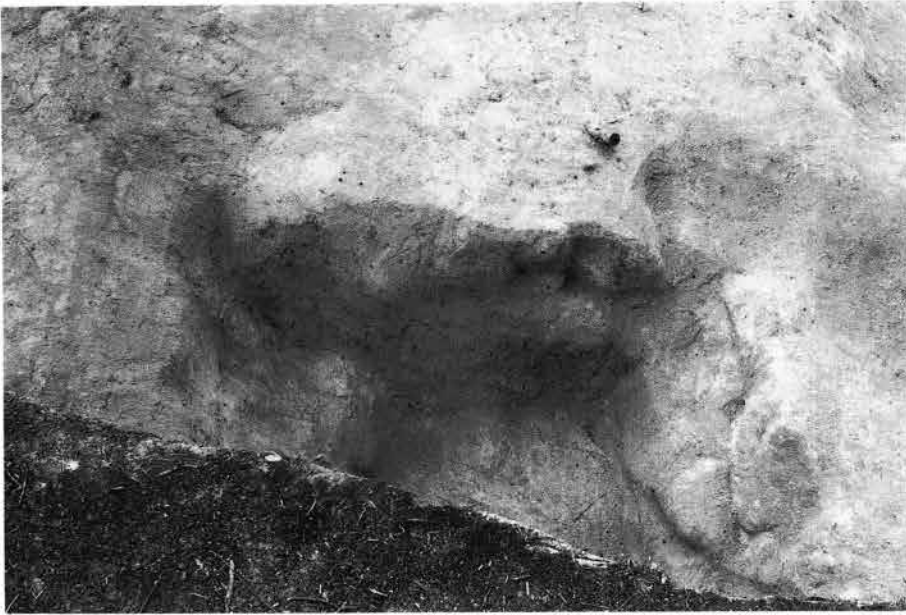


(1)調査地全景・調査前（北東から）



(2)調査地全景（北東から）

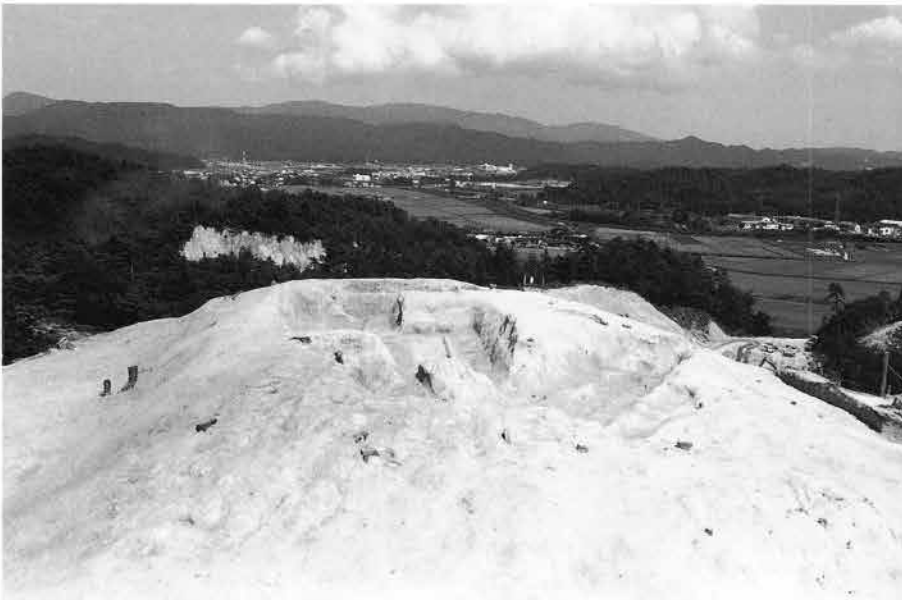
図版第52 苗代古墳群



(1) 1号墳主体部
(西から)



(2) 1号墳主体部
土層断面 (南から)



(3) 2号墳全景
(遠方に途中ヶ丘遺跡を望む、
西から)



(1) 2号墳第1主体部棺内完掘状況（東から）



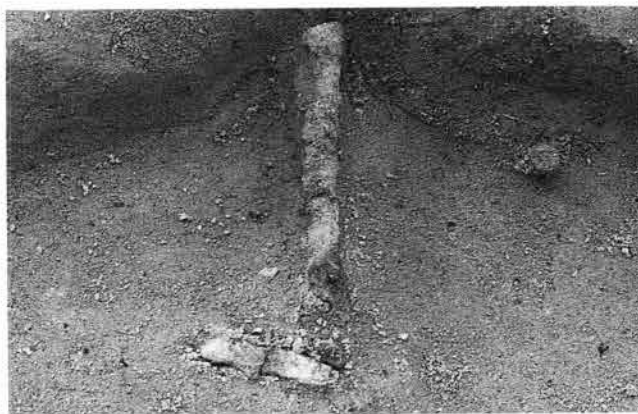
(2) 2号墳第1主体部完掘状況（東から）



(3) 棺掘形土層断面（西から）



(4) 勾玉出土状況（北から）



(5) 鉈出土状況（西小口、東から）



(6) 鉈出土状況（東小口、東から）

図版第54 苗代古墳群



(1) 2号墳第2主体部棺掘形
検出状況
(東から)



(2) 2号墳第2主体部完掘状況
(東から)



(3) 2号墳第2主体部棺掘形
土層断面
(東から)

(1) 2号墳
第3・第6主体部完掘状況
(東から)



(2) 2号墳
第3・第6主体部棺掘形
検出状況
(西から)



(3) 2号墳第3・第6主体部
土層断面
(東から)





(1) 2号墳第4主体部検出状況（西から）



(2) 2号墳第4主体部完掘状況（西から）



(3) 2号墳第5主体部棺掘形検出状況（南から）



(4) 2号墳第5主体部完掘状況（南から）

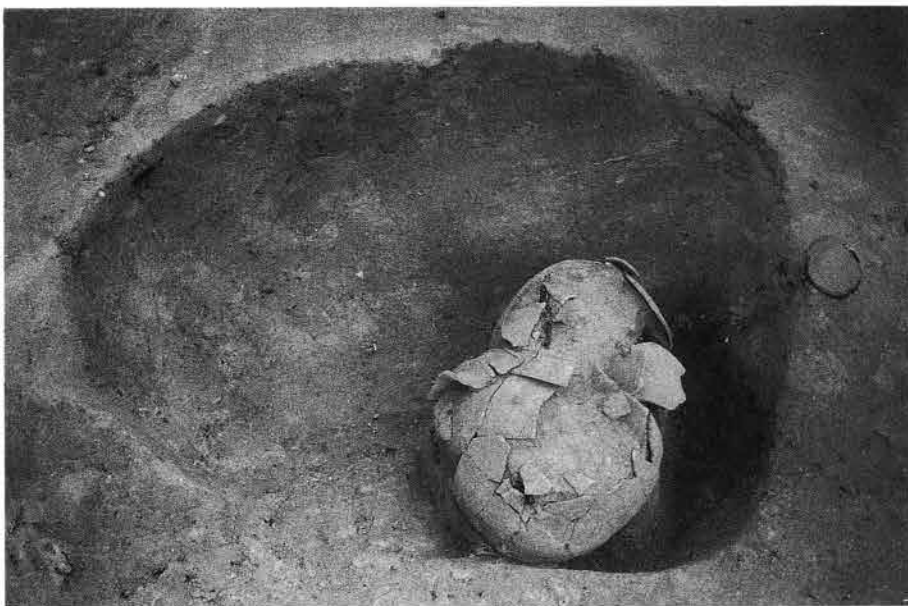
(1) 2号墳第7主体部検出状況
(南から)



(2) 2号墳第7主体部土層断面
(北から)



(3) 2号墳第7主体部完掘状況
(南から)





(1) 2号墳第8主体部壺棺
(南西から)



(2) 2号墳第8主体部壺棺内部
(北東から)



(3) 2号墳第8主体部完掘状況
(南西から)

(1) 2号墳第9主体部壺棺
(北から)



(2) 2号墳第9主体部壺棺内部
(北から)

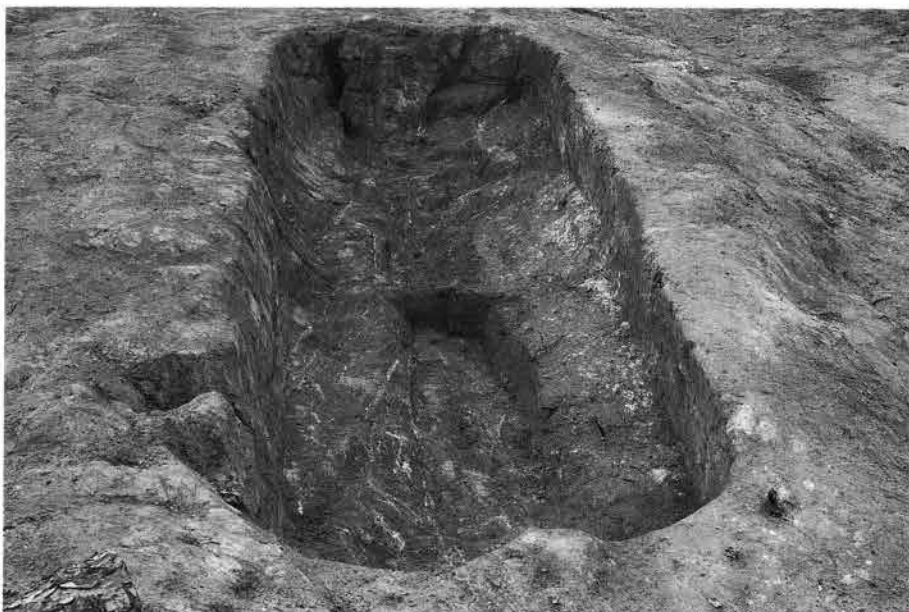


(3) 2号墳第9主体部完掘状況
(北東から)





(1) 3号墳主体部完掘状況
(北から)



(2) 4号墳主体部完掘状況
(南から)



(3) 5号墳主体部完掘状況
(南から)

(1) C・D地区試掘トレンチ全景
(北から)



(2) C・D地区試掘トレンチ近景
(南から)



(3) 6号墳主体部完掘状況
(南から)

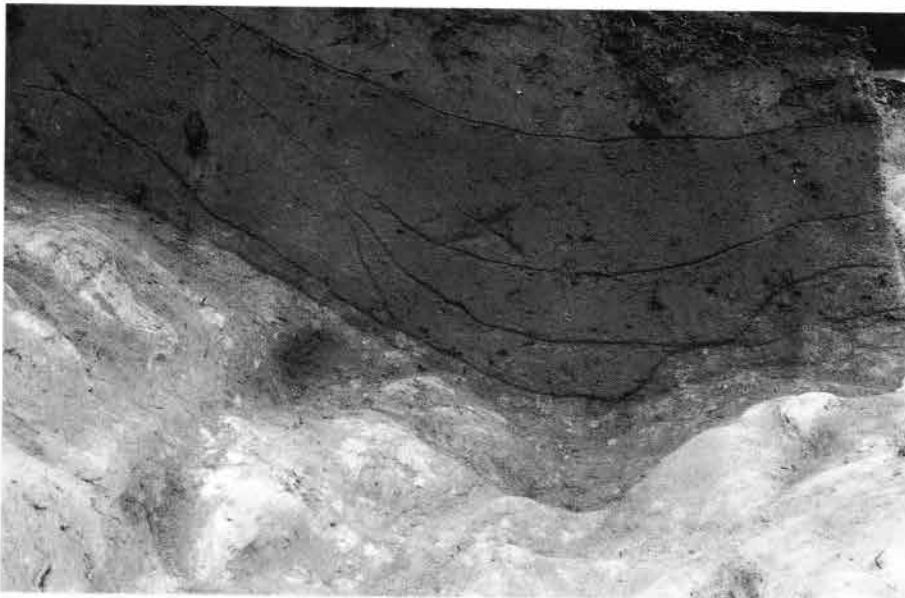




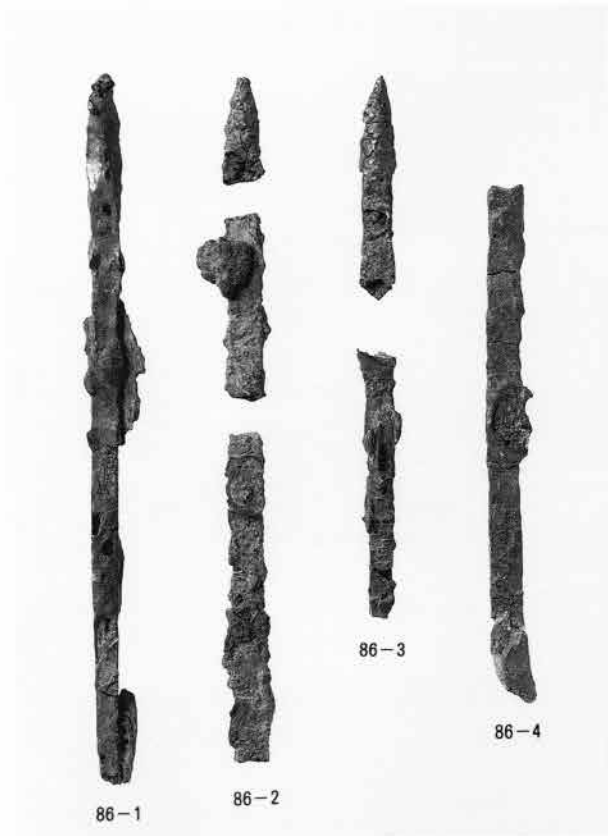
(1) S D01完掘状況
(南東から)



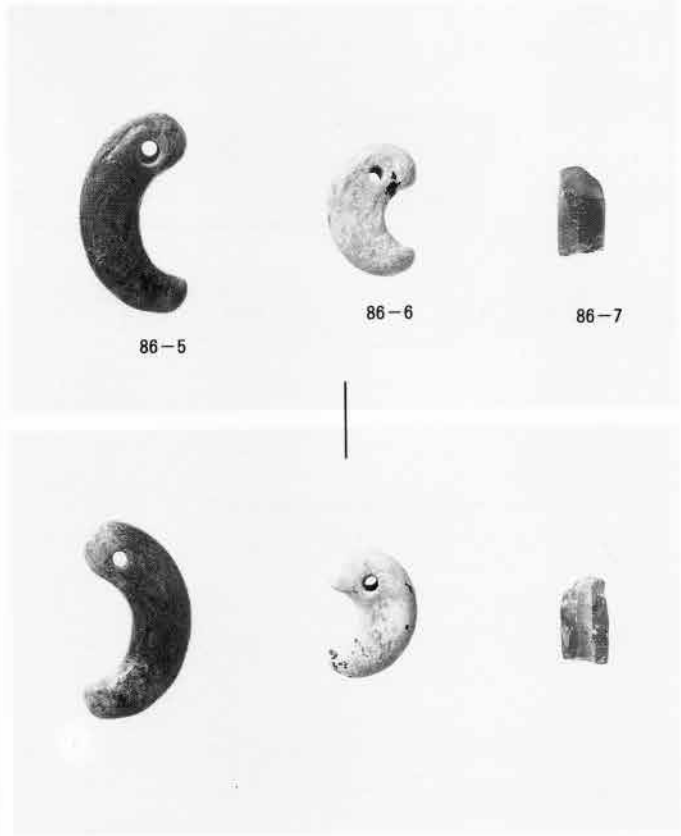
(2) S D01土層断面
(南東から)



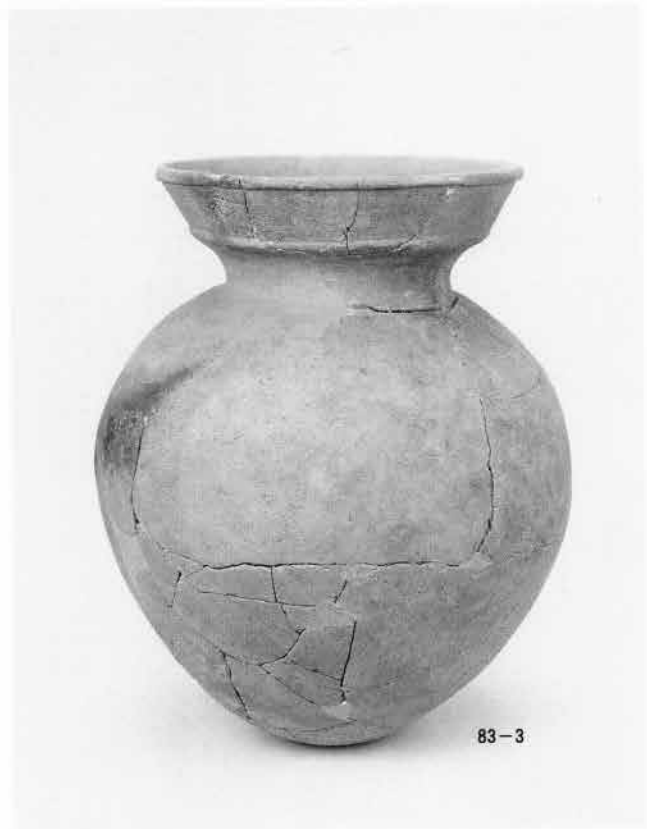
(3) S D02土層断面
(西から)



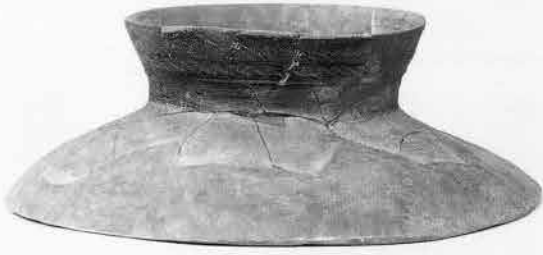
(1)鉄製鉞



(2)玉類



(3) 2号墳第7主体部壺棺
出土遺物(1)



85-9



85-8



84-4



84-6



84-5



84-7

出土遺物(2)

85-9. 5号墳

85-8. 4号墳

84-4・5. 2号墳第9主体部

84-6・7. 2号墳第8主体部

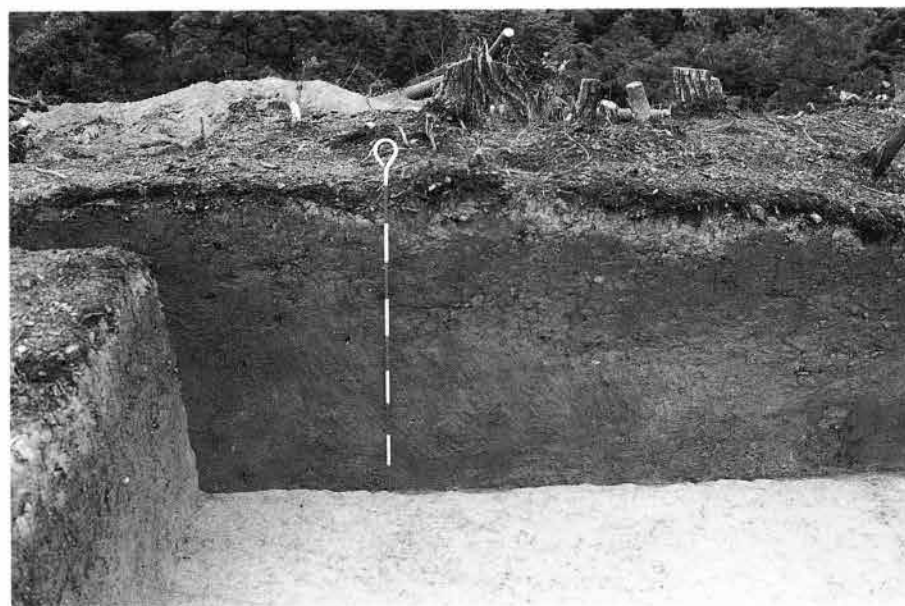
(1)調査前風景
(北西から)



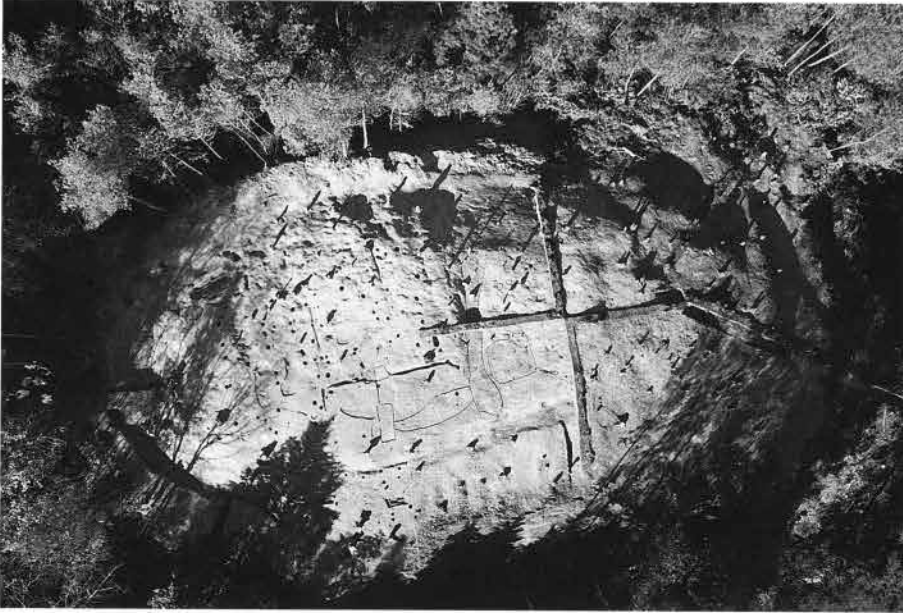
(2)トレンチ掘削状況
(北西から)



(3)トレンチ西壁断面
(北東から)



図版第66 菩提城跡（菩提東古墳）



(1)調査地全景（垂直、右が北）

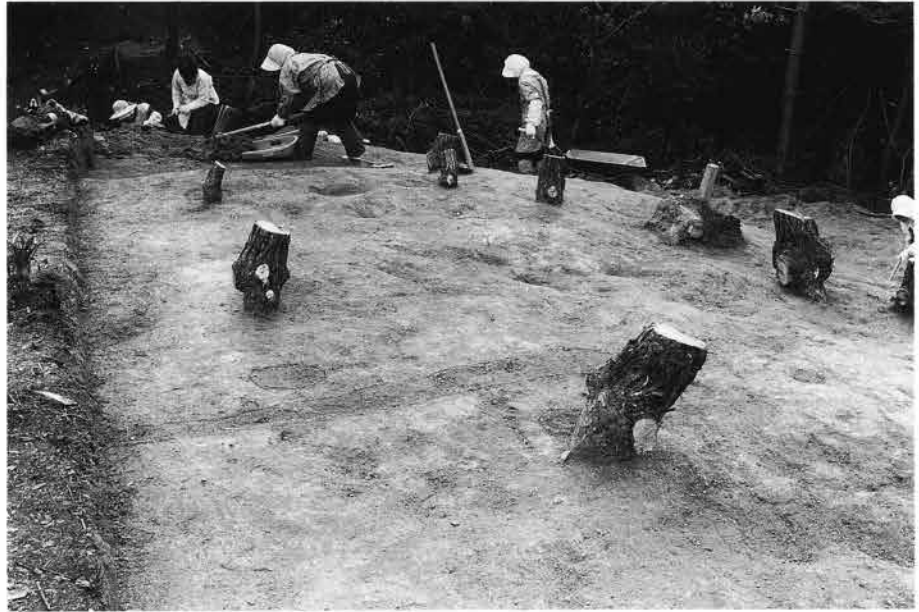


(2)調査前風景（南から）



(3)調査風景（南から）

(1)遺構検出作業風景
（北から）



(2)頂部平坦地全景
（南西から）



(3)菩提東古墳南西斜面
第1主体部調査風景
（北から）



図版第68 菩提城跡（菩提東古墳）



(1)菩提東古墳第1主体部
（南から）



(2)菩提東古墳第1主体部
（南から）



(3)菩提東古墳東側テラス
第2・第3主体部
（北東から）

(1) A地区調査前風景
(東から)



(2) A地区堀切溝
(東から)



(3) A地区埋葬主体部検出状況
(北東から)





(1) C地区調査前風景
(北西から)



(2) C地区トレンチ掘削状況
(北西から)



(3) B地区調査前風景
(北西から)

(1) A支群23号墳遠景
(北東から)



(2) A支群23号墳主体部近景
(東から)



(3) 小型炭窯近景
(東から)



図版第72 天王山古墳群



(1) A支群26・27号墳遠景
(東から)



(2) A支群26号墳周溝近景
(北から)



(3) 土器棺近景 (南から)



(1)A支群27号墳全景（南から）



(2)A支群27号墳主体部近景（北東から）



(1)B支群1・2号墳空中写真(南西から)



(2)B支群1号墳近景(南東から)



(1) B支群 1号墳主体部検出状況 (南南東から)



(2) B支群 1号墳第2主体部近景 (南東から)



(3) B支群 1号墳第1主体部近景 (南東から)



(1)B支群1号墳主体部全景（南東から）



(2)B支群1号墳主体部全景（南東から）

(1) B支群1号墳土器群近景
(南東から)



(2) B支群1号墳棺上遺物近景
(南東から)

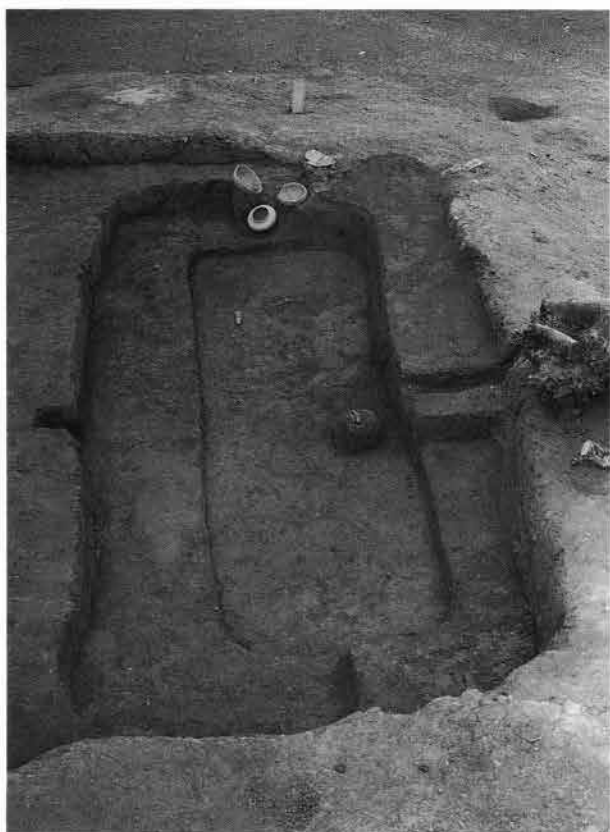


(3) B支群1号墳棺内遺物近景
(南西から)





(1)B支群2号墳全景(北西から)



(2)B支群2号墳主体部近景(北西から)



(3)B支群2号墳主体部内遺物出土状況(北東から)



(1)B支群1・2号墳遠景(南西から)



(2)B支群3・4号墳遠景(南西から)



(1)B支群3号墳主体部近景(北東から)



(2)B支群4号墳主体部近景(南から)



(1)B支群8・9・10号墳全景（北東から）



(2)B支群8号墳主体部近景（北西から）



調査地全景（西から）



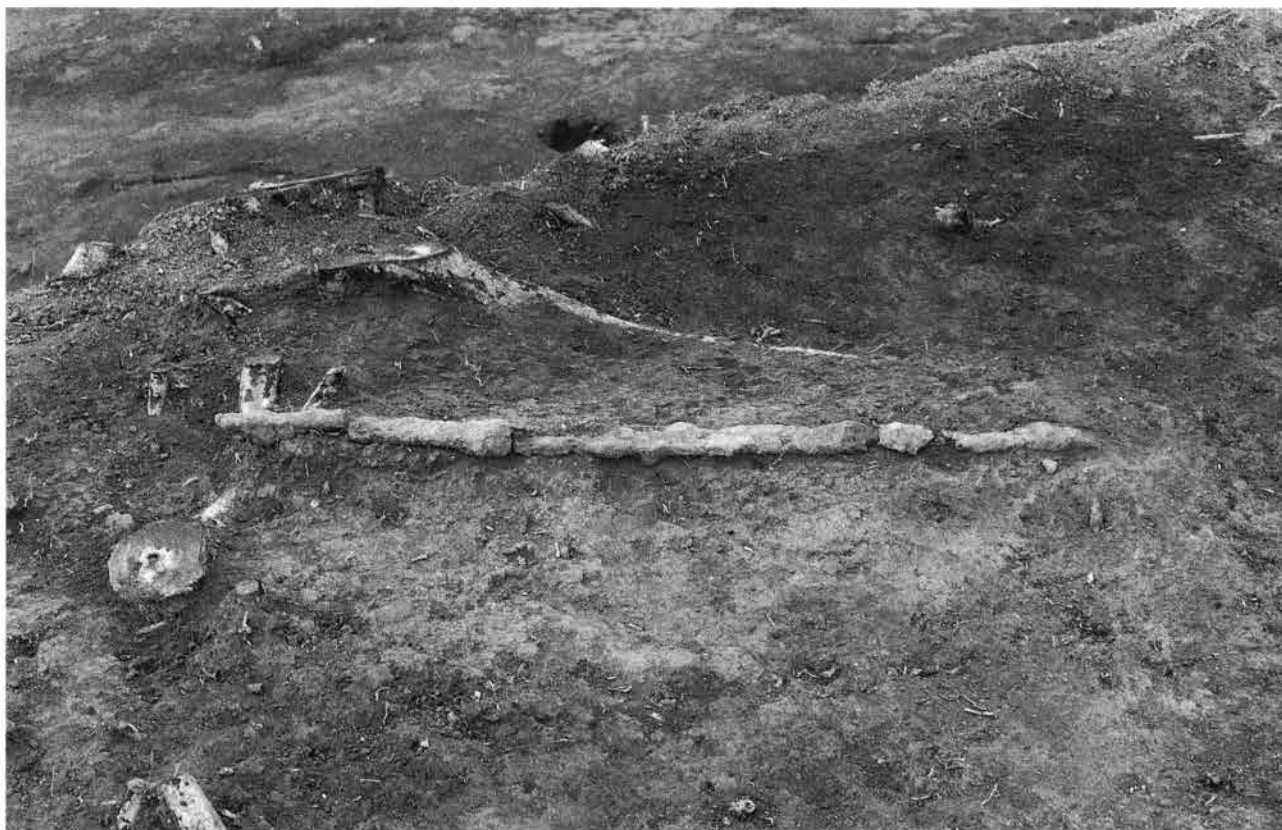
(1) 1・3号墳、竪穴式住居跡付近空中写真（真上から）



(2) 鍛冶工房跡付近空中写真（真上から）



(1) 1号墳全景（南西から）



(2) 1号墳遺物出土状況（北から）



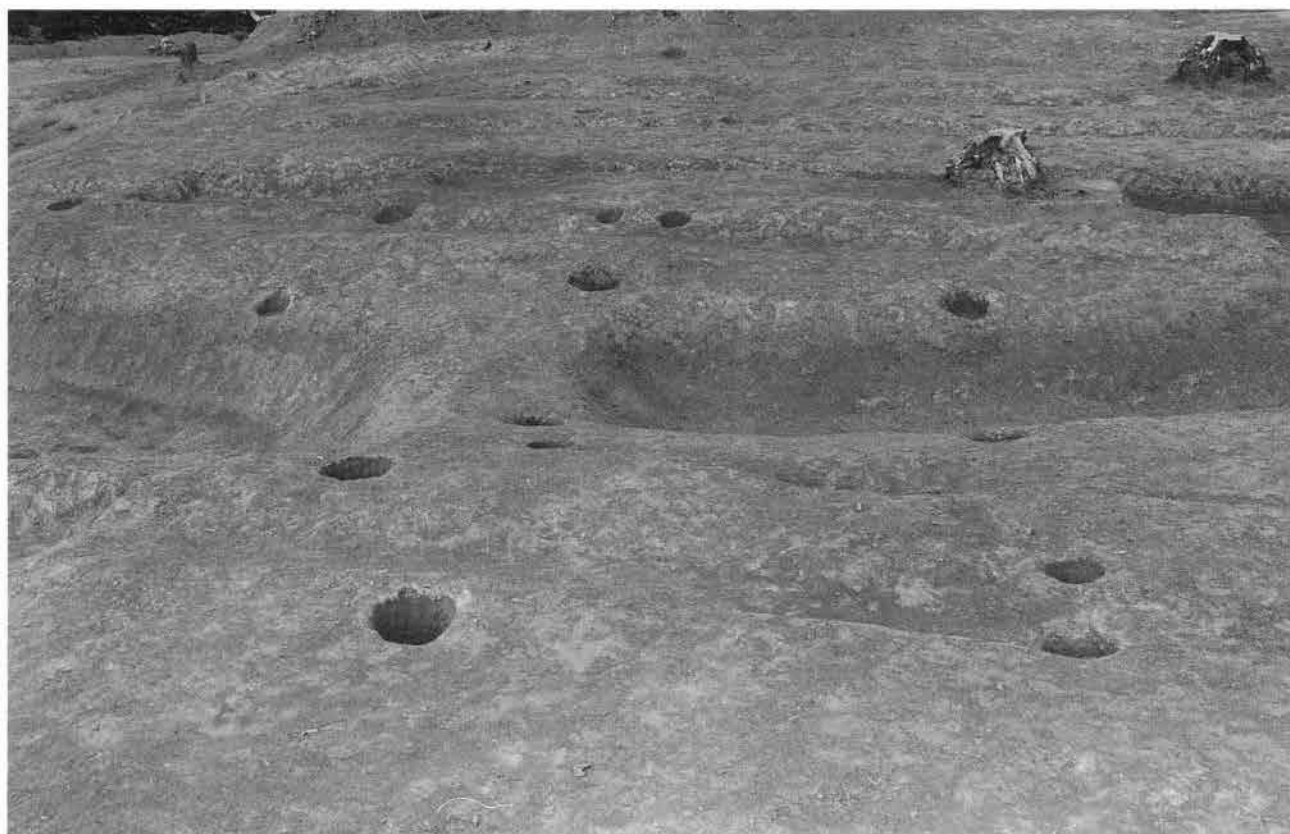
(1) 2号墳全景（北西から）



(2) 五輪塔出土状況（南南西から）



(1) 3号墳周溝近景（東から）



(2) 3号墳陸橋部及び掘立柱建物跡1近景（南から）



(1) 3号墳周溝内堆積状況（西から）



(2) 4号墳周溝近景（北東から）



(1) 竪穴式住居跡近景 (南西から)



(2) 竪穴式住居跡近景 (北から)



(1) 鍛冶工房跡全景（東から）



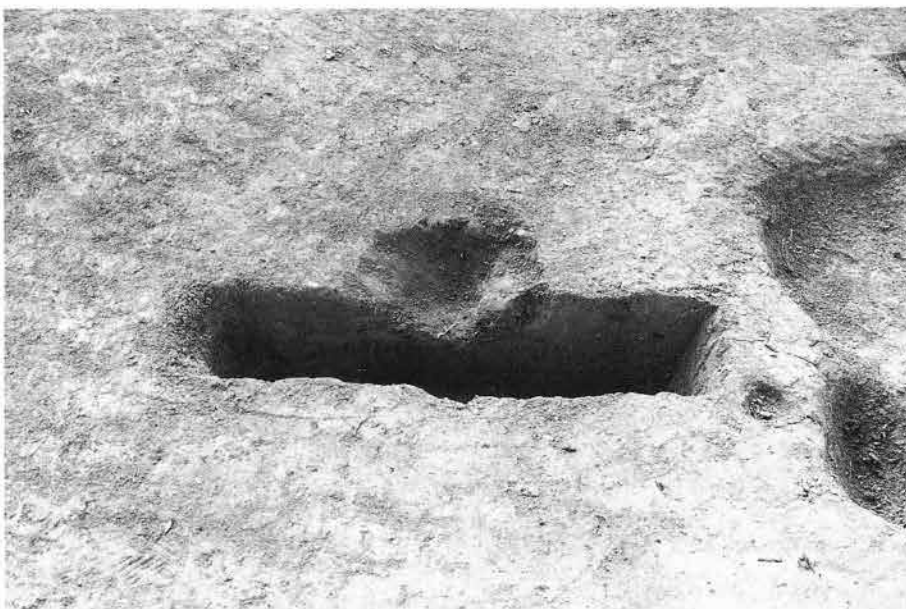
(2) 鍛冶工房跡全景（西から）



(1)鍛冶炉近景
(北から)



(2)鍛冶炉近景
(北から)



(3)鍛冶炉半掘状況
(北から)



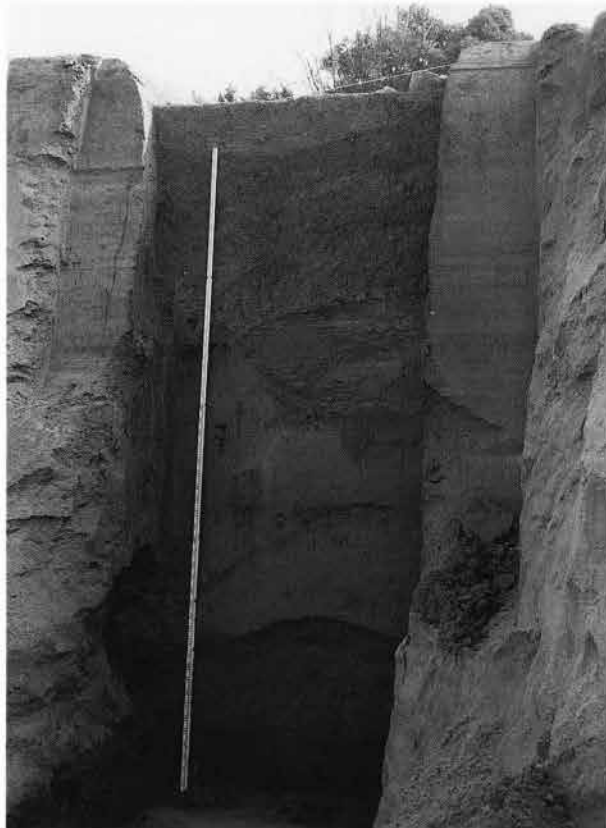
(1)鍛冶工房跡東側近景(北から)



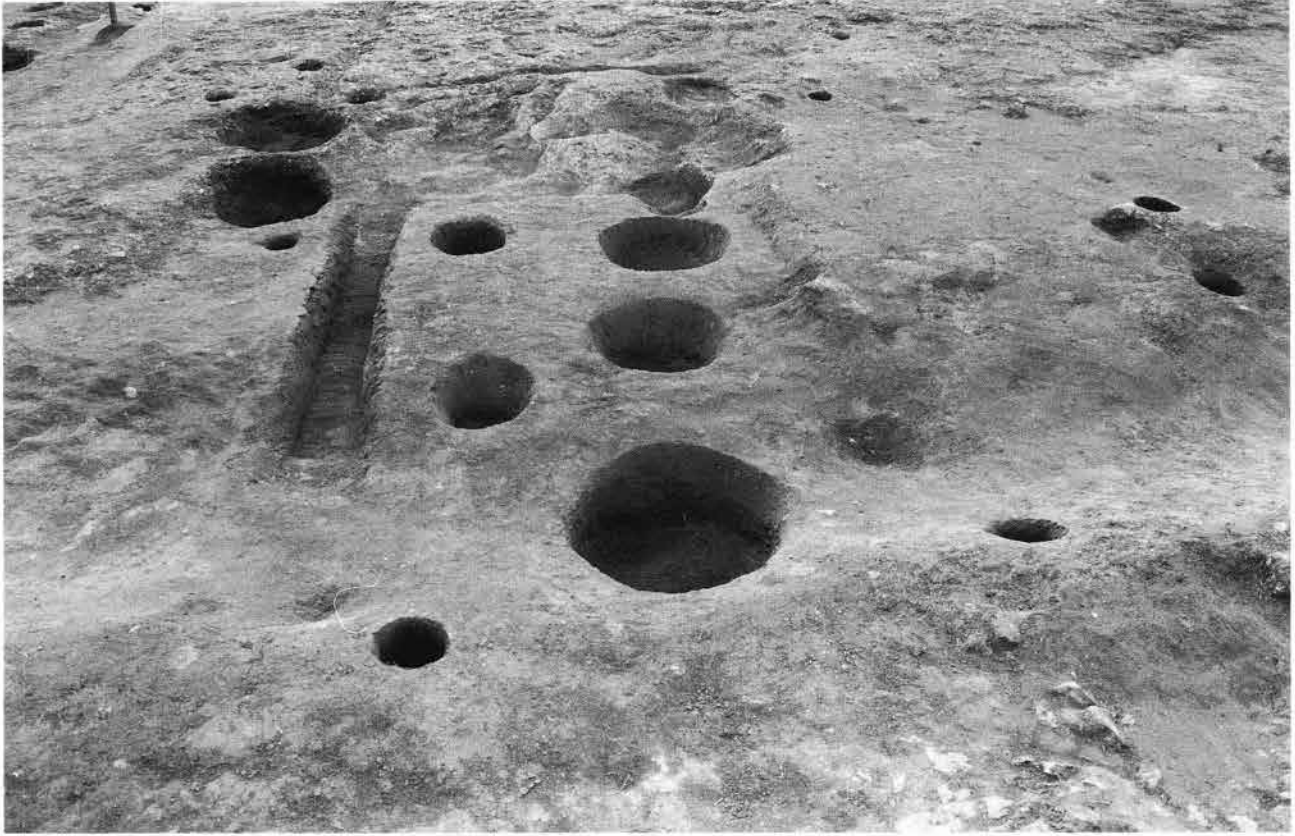
(2)井戸・溝1近景(北西から)



(1)井戸近景（北から）



(2)井戸内堆積状況（北から）



(1)掘立柱建物跡6 近景 (東から)



(2)掘立柱建物跡6 近景 (南から)

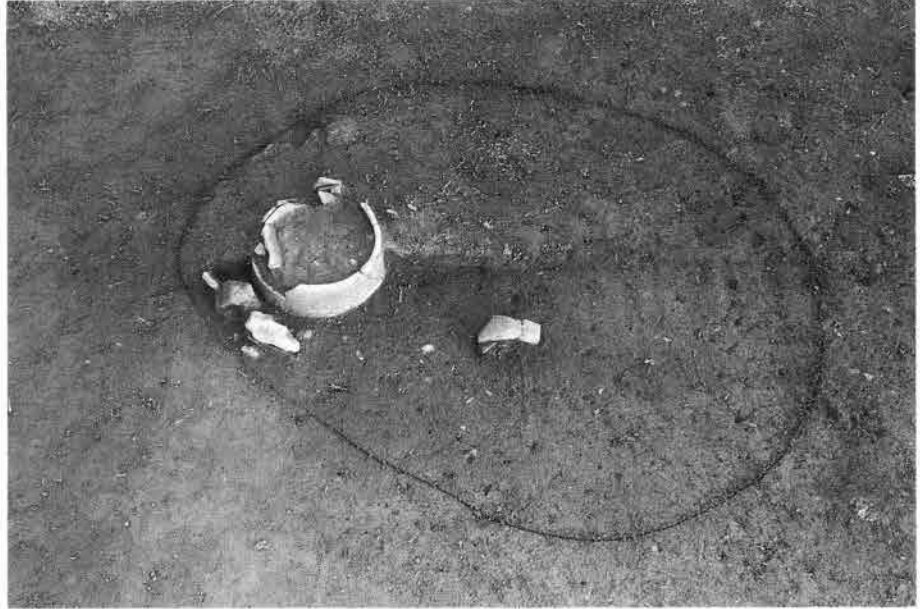


(1)掘立柱建物跡5 近景 (北から)



(2)掘立柱建物跡2・3 近景 (東から)

(1)火葬墓検出状況
(北西から)



(2)火葬墓半掘状況
(北西から)



(3)火葬墓完掘状況
(西から)

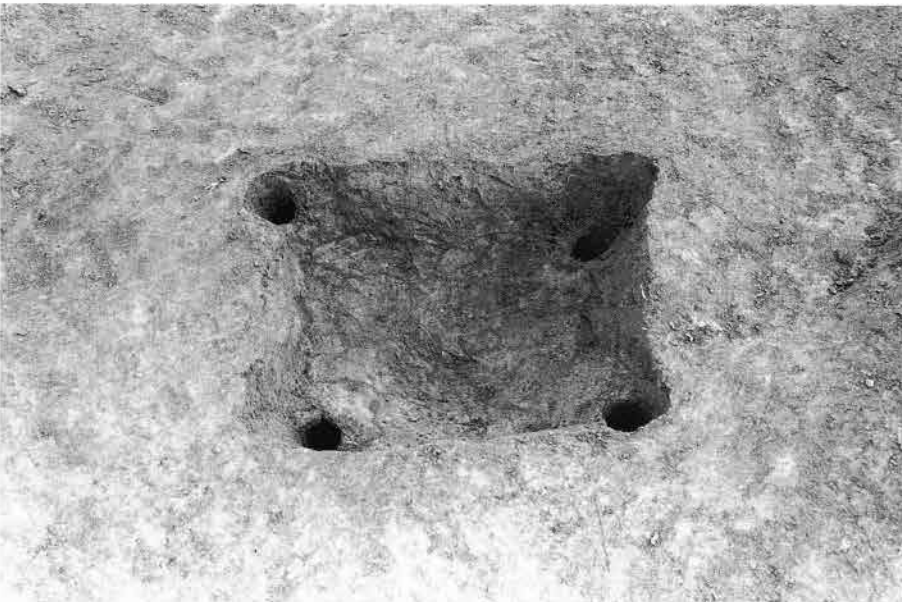




(1) 竪穴式住居跡内遺物出土状況
(西から)



(2) 鍛冶工房跡内遺物出土状況
(北から)



(3) 土坑1 近景
(南から)





8



14



9



108



13



106



24



26



27



25



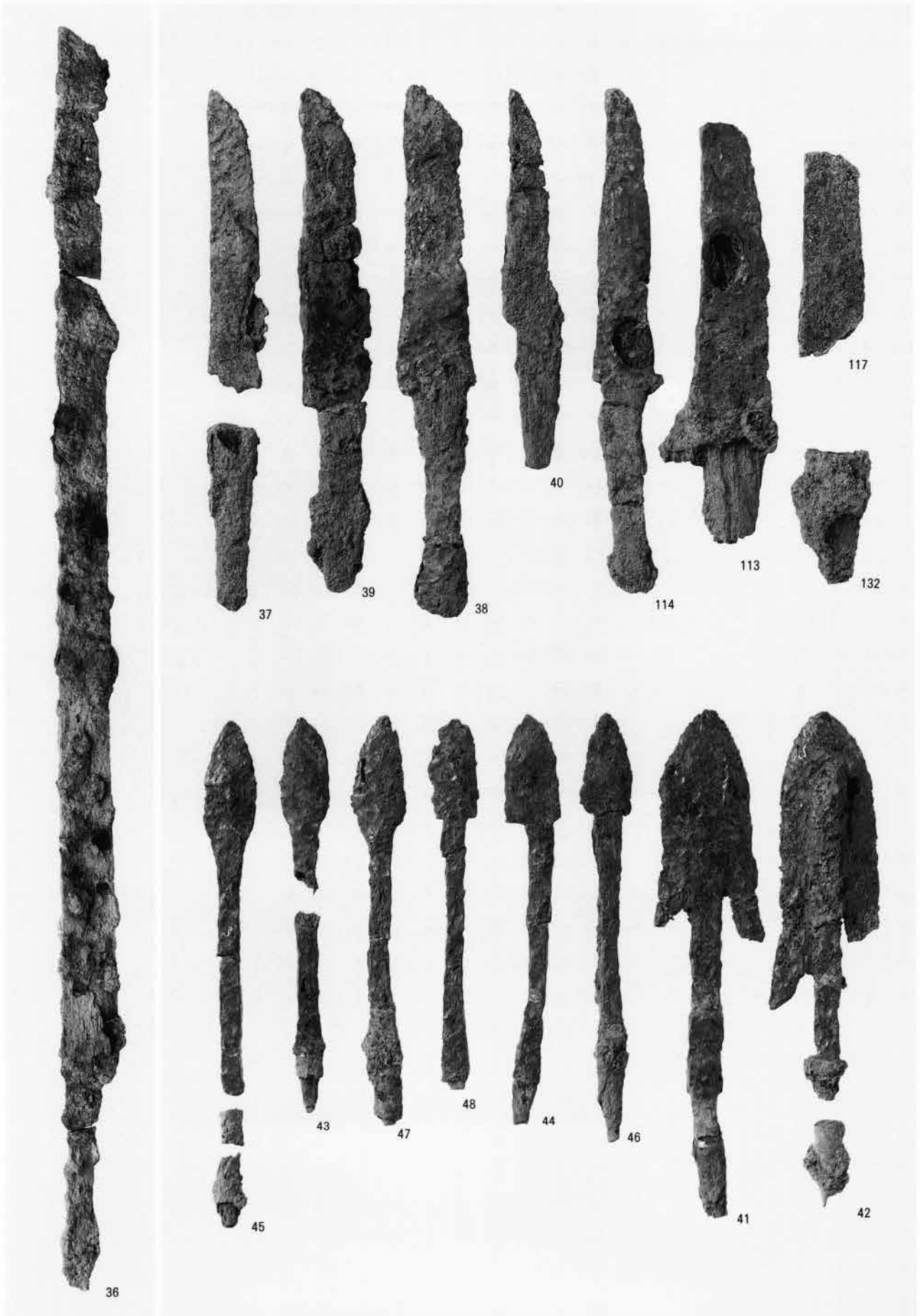
28



29



30



出土遺物(4)



115



119



118



121



120



124



53



52



116



127



128



122



123



129



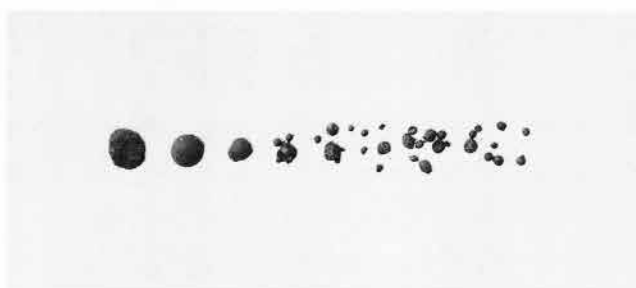
126



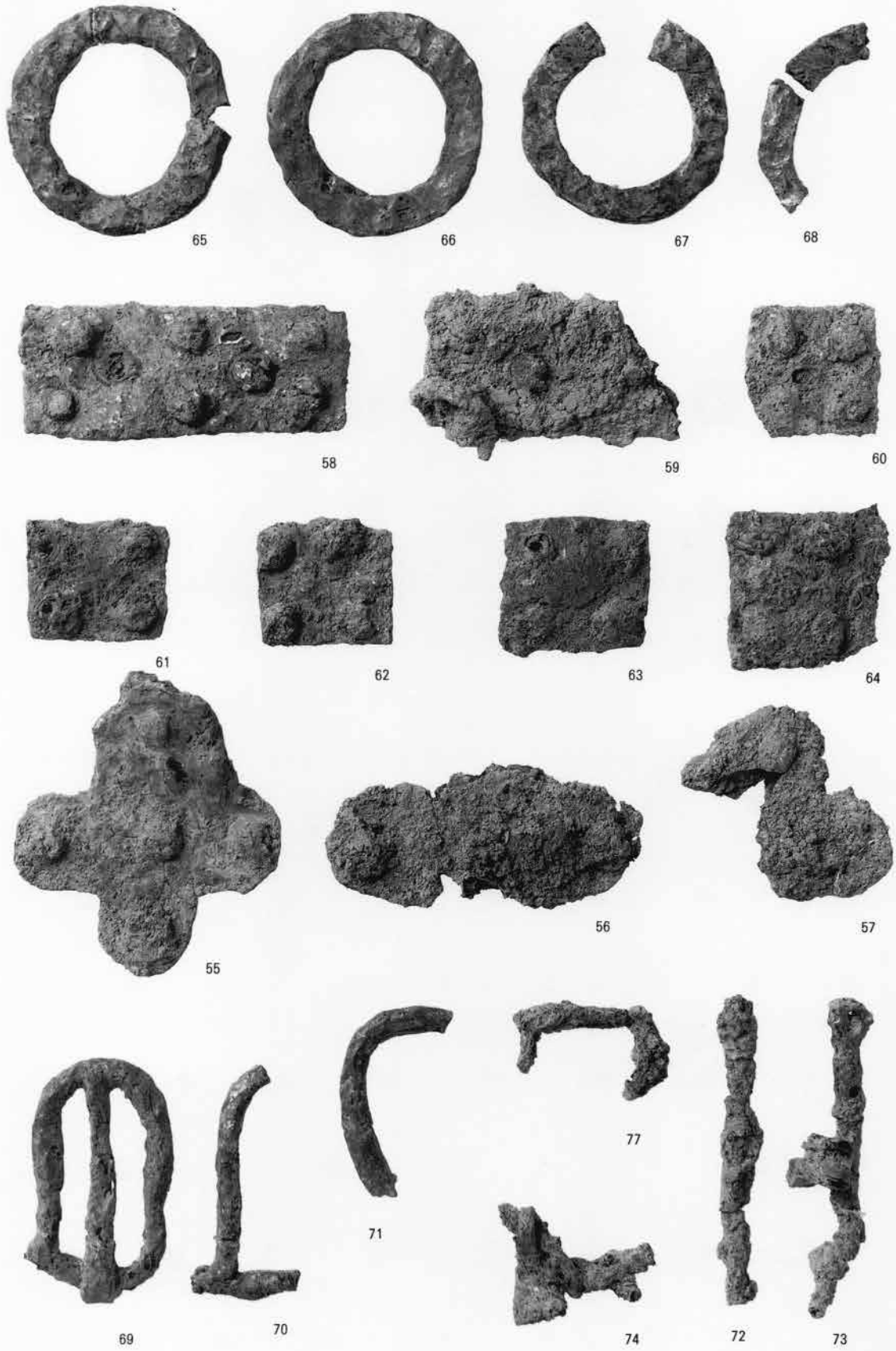
125

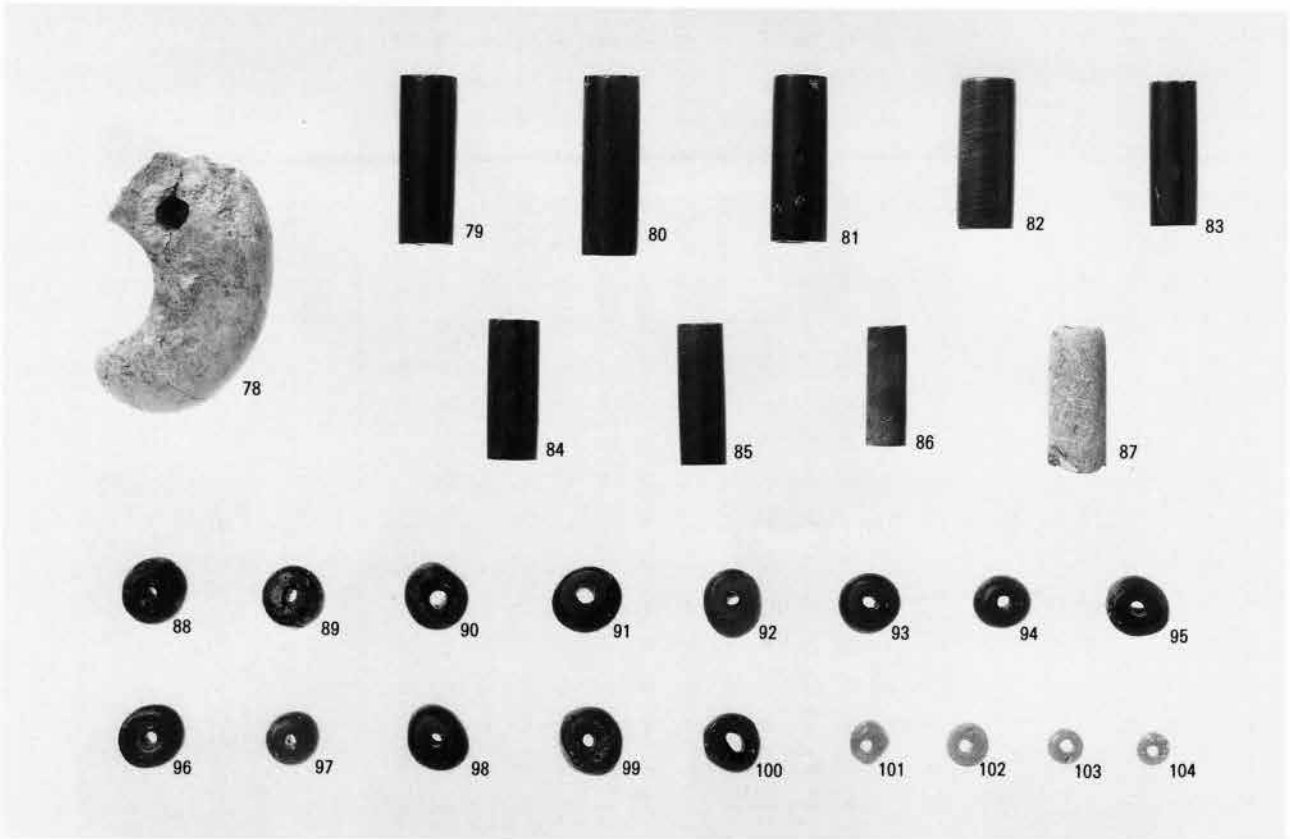


54

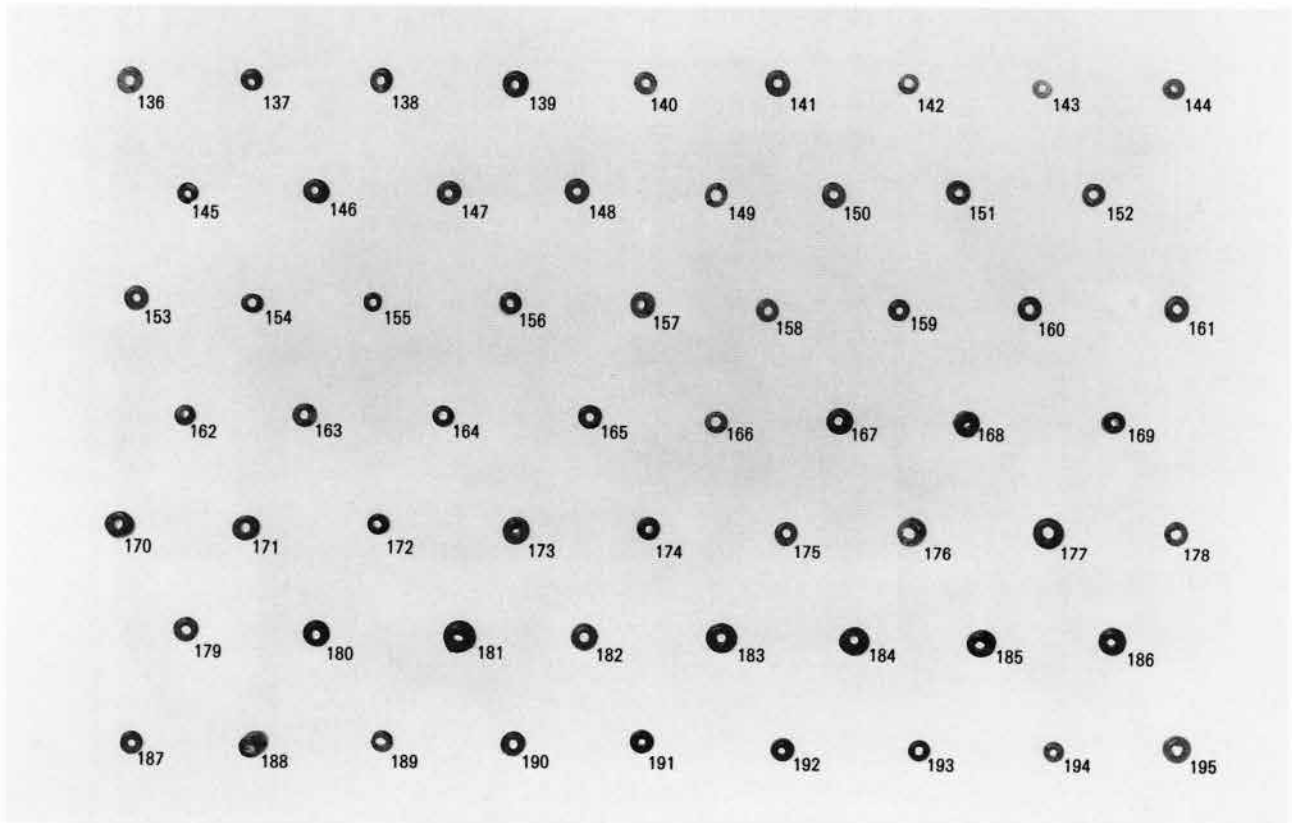


286





(1)出土遺物(8)



(2)出土遺物(9)



出土遺物(10)



214



218



220



221



224



229



249



240



241



242



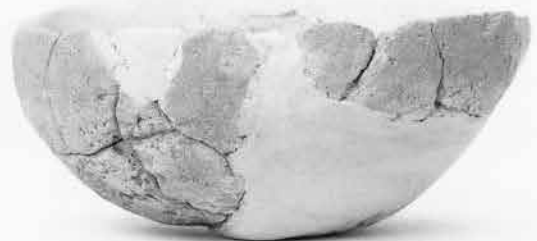
244



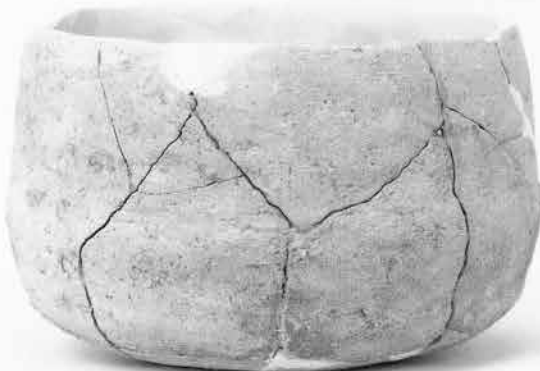
245



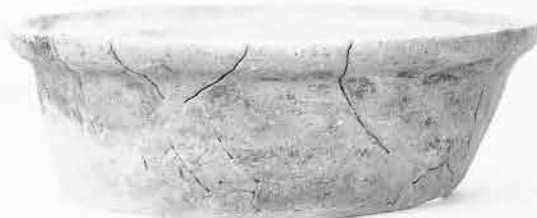
295



210



296



206



205



196



291



290



198



264



292



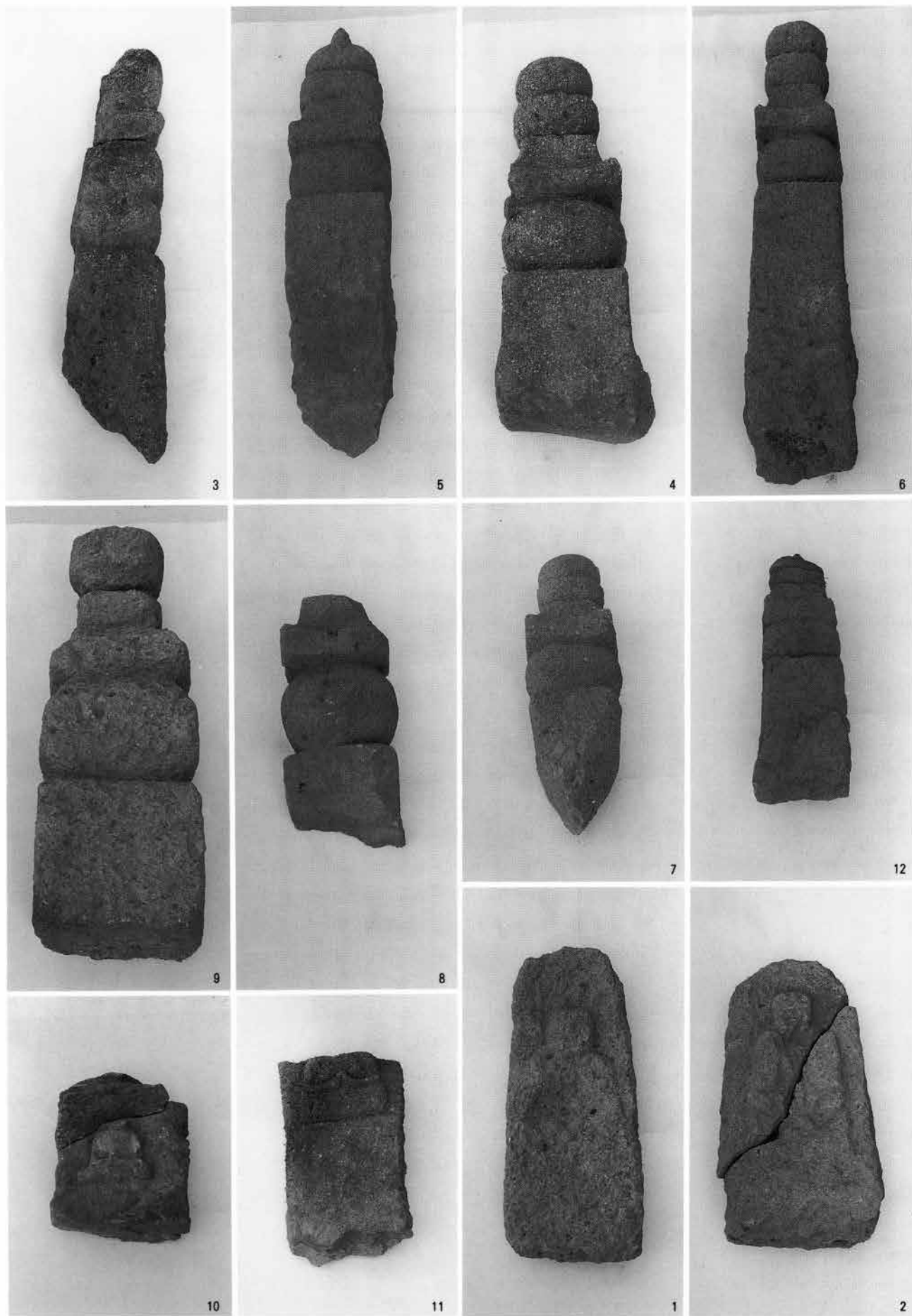
204



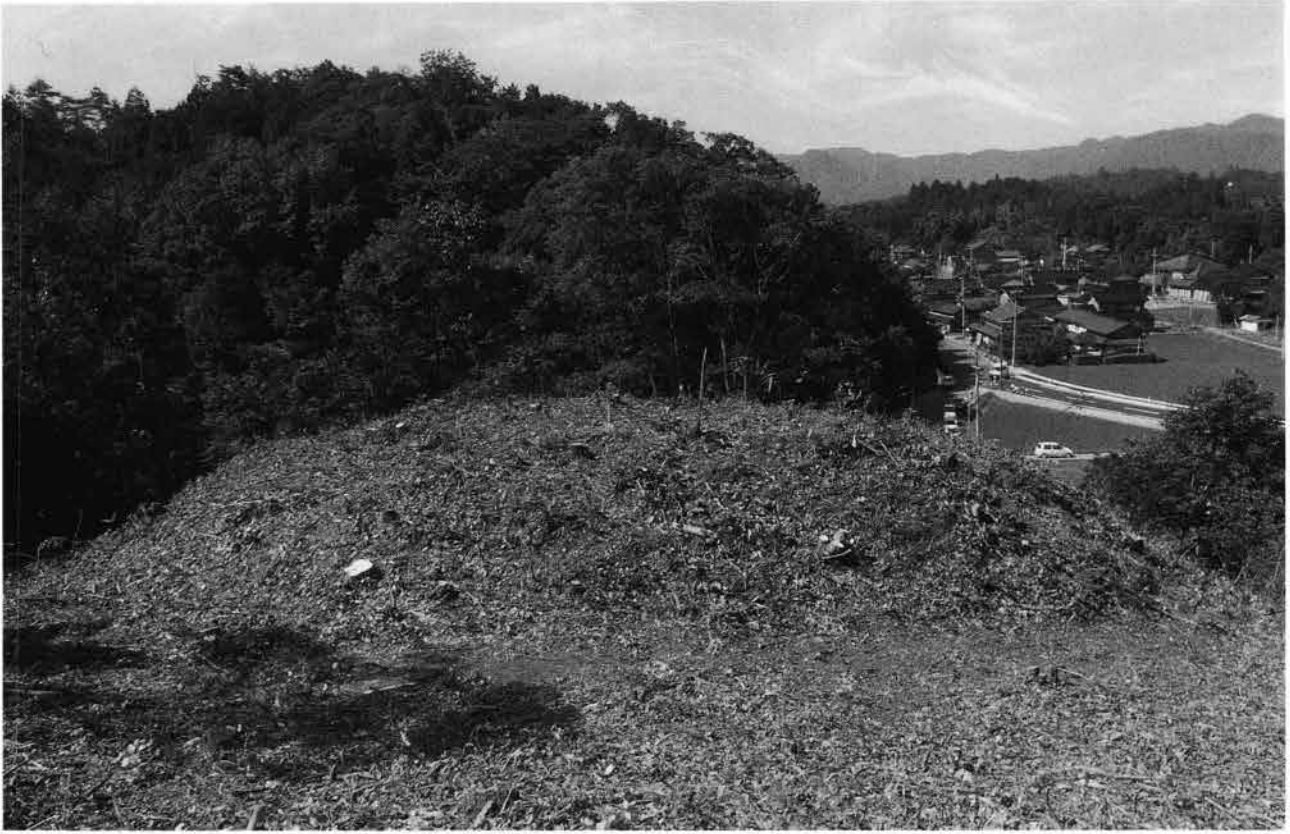
293



294



出土遺物(13)



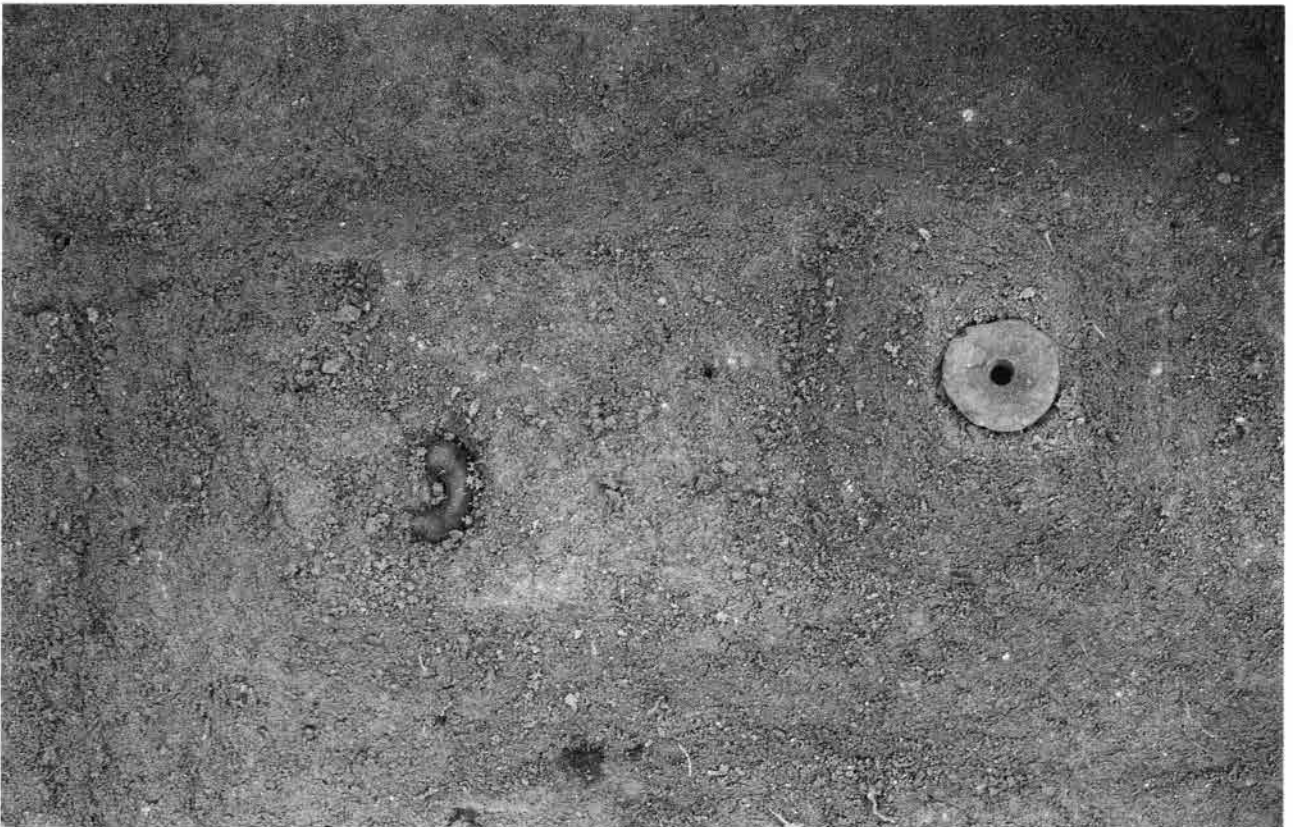
(1) 1号墳全景（北東から）



(2) 1号墳全景（北東から）



(1) 1号墳主体部近景 (南から)



(2) 1号墳主体部内遺物出土状況 (南から)

(1) 1号墳主体部上面土器出土状況
(西から)

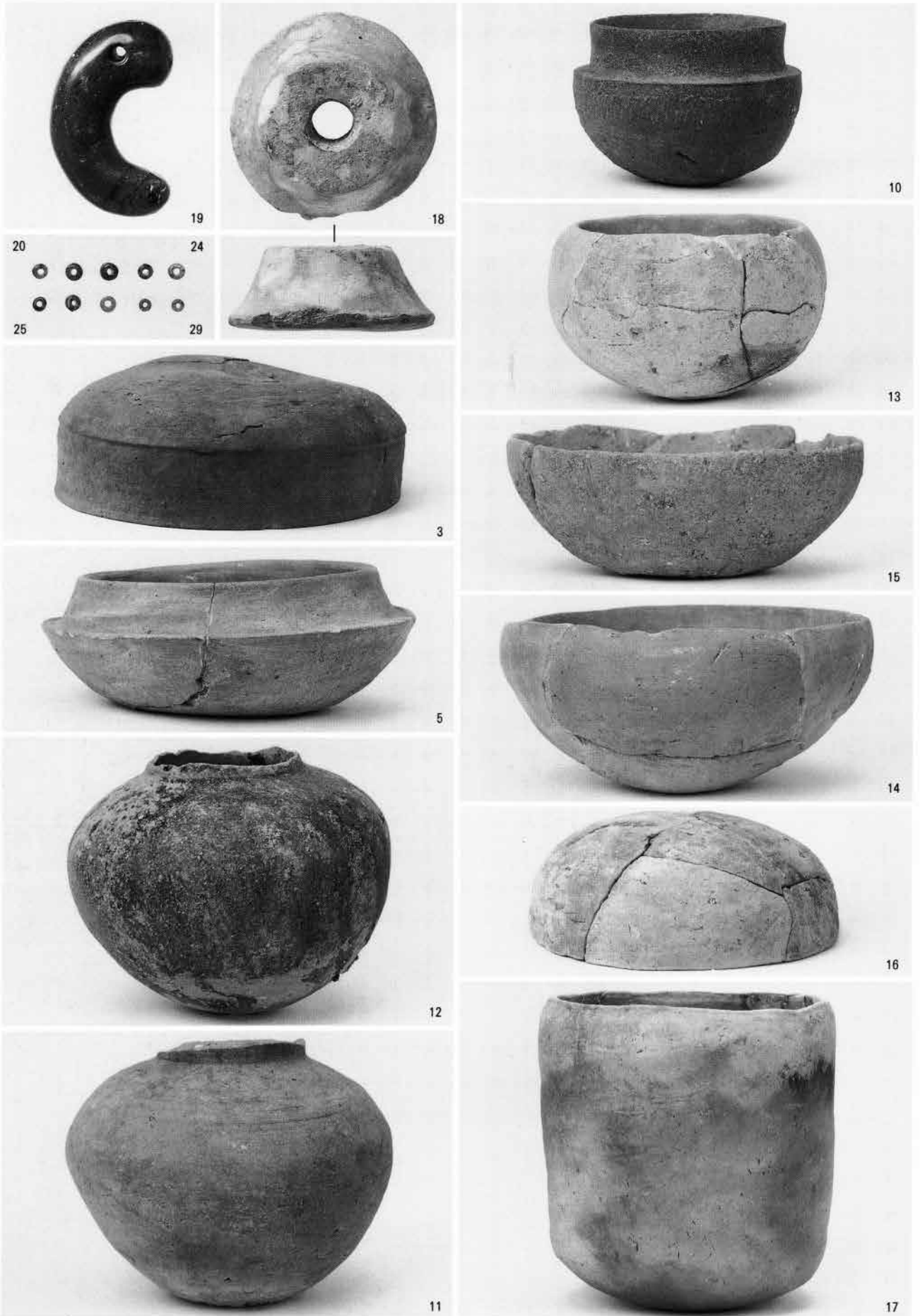


(2) 経塚検出状況
(北東から)



(3) 外容器埋納状況
(北東から)





出土遺物

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第83冊							
編著者名	村田和弘・竹原一彦・黒坪一樹・竹井治雄・松尾史子・石尾政信・増田孝彦・岡崎研一・伊野近富							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone	075(933)3877			
発行年月日	西暦 1998 年		3 月		26 日			
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すがまちこふんぐん スガ町古墳群	たけのぐんあみの ちょういくのうち 竹野郡網野町生野内	501	125	35° 38' 50"	135° 2' 22"	19970512 ～ 19971003	2,500	農地造成
いくのうち じょうあと 生野内城跡	たけのぐんあみの ちょういくのうち 竹野郡網野町生野内	501	3	35° 38' 56"	135° 2' 46"	19971105 ～ 19971217	180	農地造成
あさごだにみな みじょうあと・ あさごだにみな みふんぼ 浅後谷南城跡・浅後谷 南墳墓	たけのぐんあみの ちょうたかはし 竹野郡網野町高橋	501	153	35° 38' 56"	135° 2' 46"	19971002 ～ 19980226	350	農地造成
あさごだにみ なみいせき 浅後谷南遺跡	たけのぐんあみの ちょうくじょう 竹野郡網野町公庄	501	—	35° 39' 21"	135° 2' 21"	19971002 ～ 19980226	640	農地造成
いものじょう あと 芋野城跡	たけのぐんやさか ちょういもの 竹野郡弥栄町芋野	503	118	35° 38' 29"	135° 6' 13"	19970523 ～ 19970701	1,200	農地造成
あたごじんじゃ こふんぐん 愛宕神社古墳群	たけのぐんやさか ちょうつつみ 竹野郡弥栄町堤	503	—	35° 36' 17"	135° 6' 6"	19970416 ～ 19970806	2,200	農地造成
ちやかすこふ んぐん 茶カス古墳群	たけのぐんやさか ちょうよっさわ 竹野郡弥栄町吉沢	503	105	35° 38' 55"	135° 2' 15"	19970918 ～ 19971217	570	農地造成
なわしろこふ んぐん 苗代古墳群	なかぐんみねやま ちょうにか 中郡峰山町二箇	481	77	35° 36' 5"	135° 2' 30"	19970508 ～ 19970828	750	農地造成
あいのめこふ ん 相之目古墳	なかぐんみねやま ちょうにか 中郡峰山町二箇	481	—	35° 35' 58"	135° 2' 29"	19970508 ～ 19970619	70	農地造成
ほだいじょうあ と(ほだいひがし こふん) 菩提城跡(菩 提東古墳)	たけのぐんやさか ちょうよっさわ 竹野郡弥栄町吉沢	503	119	35° 38' 21"	135° 5' 56"	19971013 ～ 19980123	460	農地造成
よっさわじょ うあと 吉沢城跡	たけのぐんやさか ちょうよっさわ 竹野郡弥栄町吉沢	503	67	35° 38' 16"	135° 5' 44"	19971027 ～ 19980129	650	農地造成

てんのうざんこ ふんぐん・べつ そうこふんぐん べつそういせき	くまのぐんくみはま ちようかの					19970414 ～ 19971003 19970501 ～ 19971023	1,000 5,000	農地造成
天王山古墳 群・別荘古 墳群 別荘遺跡	熊野郡久美浜町鹿 野	521	165 166 233	35° 38' 30"	134° 50' 30"			
たにかきこふ んぐん 谷垣古墳群	くまのぐんくみはま ちようながとめ 熊野郡久美浜町永 留	521	27	35° 35' 40"	134° 57' 00"	19970704 ～ 19970826	500	農地造成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
スガ町古墳 群	古墳	古墳		埋葬施設、土坑		なし		
生野内城跡	山城	室町		炭窯				城遺構なし
浅後谷南城 跡(浅後谷 南墳墓)	墳墓 山城 墳墓	弥生 鎌倉 江戸		埋葬主体 掘立柱建物、柵 墳墓		弥生土器・玉類・鉄 製品 陶磁器 陶磁器		
浅後谷南遺 跡	集落	弥生 古墳 平安		掘立柱建物、柱穴痕 流路		弥生土器 土師器・須恵器 木製品		
芋野城跡	山城	室町		なし		—		
愛宕神社古 墳群	古墳	古墳		方墳、木棺直葬墳		銅鏡、鉄刀、玉類		
茶カス古墳 群	古墳	古墳		古墳、木棺直葬墳		土師器		主体部主軸 すべて東西
苗代古墳群	古墳	古墳		木棺直葬墳、壺棺墓		土師器、須恵器、玉 類		
相之目古墳	古墳状隆起	—		なし		なし		
菩提城跡	山城	平安末～鎌倉初		掘立柱建物、塀		須恵器、土師器、鉄 製鋤先		
菩提東古墳	古墳	古墳		木棺直葬墳、土坑		銅鏡、玉類		
吉沢城跡	古墳 山城	古墳 室町		土壇墓 堀切溝		土師器片		埋葬主体部
天王山古墳 群	古墳	古墳		古墳、炭窯		須恵器、土師器、鉄 器、玉類		
別荘古墳群	古墳 —	古墳 室町		古墳		鉄器、玉類 五輪塔、石仏		
別荘遺跡	集落 墳墓	古墳 鎌倉		竪穴住居 掘立柱建物、鍛冶工房、柱穴 井戸、溝 火葬墓		土師器 黒色土器、土師器、 土製品、石製品、鉄 製品、 人骨		
谷垣古墳群	古墳	古墳		木棺直葬墳		土師器、須恵器・玉 類		

京都府遺跡調査概報 第83冊

平成10年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)